

訪ね、見て、知る

「城を歩く会」20周年記念誌

城を歩く会

訪ね、見て、知る

「城を歩く会」20周年記念誌



1994~2015



姫路城（平成 26 年 = 20 周年記念旅行）



大坂城（平成 26 年 = 20 周年記念旅行）

春日城（平成 26 年 = 20 周年記念旅行）



竹田城（平成 26 年 = 20 周年記念旅行）



創立 20 周年祝賀会 (平成 27 年)



創立 20 周年祝賀会 (平成 27 年)



姫路城、京都御所、方広寺（平成 26 年）



20周年記念一泊旅行（平成26年）



春季、夏季研修会（平成 26 年）



新年のつどい（平成 26、25 年）



川越城、菓子屋横丁、第三台場（平成 26 年）



富岡製糸場、六義園、旧古河庭園（平成 26 年）



白河小峰城（平成 25 年）



会津若松城（平成 25 年）



小坪海岸、名越切り通し、皇居参観（平成 25 年）



高田城、春日山城（平成 24 年）



松本城、上田城（平成 24 年）



新井城、横浜大棧橋、山中城（平成 24 年）



箕輪城、金山城、安宅丸（平成 24 年）



小田原城、増上寺、唐沢山城（平成 23 年）



名古屋城、犬山城、丸岡城（平成 22 年）



彦根城、一乗谷朝倉館、安土城（平成 22 年）



10周年記念の会（平成16年）



15周年記念の会（平成21年）



創設期のころの記念写真（提供＝中川幸子）

訪ね、見て、知る

「城を歩く会」20周年記念誌

城を歩く会

目次

写真ページ 1

20周年記念旅行＝姫路城、大坂城、竹田城ほか（平成26年）
新年のつどい（平成26年、25年）
富岡製糸場、六義園、川越城、第三台場ほか（平成26年）
白河小峰城、会津若松城、名越切り通し、皇居参観ほか（平成25年）
松本城、上田城、箕輪城、金山城、新井城、山中城ほか（平成24年）
小田原城、増上寺、唐沢山城（平成23年）
彦根城、朝倉館、安土城、名古屋城、犬山城、丸岡城（平成22年）
10周年、15周年記念の会（平成16、21年）
創設期のころの記念写真

「城を歩く会」20周年記念祝賀会 25

創立20周年を迎えて＊大森拓二 26

25周年に向けて「訪ね、見て、知る」＊山岸弘明 27

役員名簿、会員名簿 29

現在役員、会員名簿
平成8年6月当時の会員名簿
平成11年12月当時の会員名簿
平成21年8月当時の会員名簿
平成24年3月当時の会員名簿

座談会 大森拓二初代会長を囲んで 34 城を歩き始めたころ

歩み－20年間の活動の記録 41

会史年表 最近5年間の歩み 42
「訪ね、見て、知る楽しさ」を实践
15周年までの歩み 71

城を歩いた私の60余年＊大森拓二 99

調べる－四つの研究レポート 103

「織豊期城郭」と石垣 ＊山岸弘明 104
「城を歩く会」が訪ねた織豊期石垣の考察

家康・江戸入城の理由(わけ) *保科隆夫 111
わが見聞録 *大出信好 119
利根川東遷と荒川西遷と施工者伊奈家について
小田原城攻防のいきさつ *石井 勇 126

回顧－創立 25 周年を迎えるために 137

城を歩く会を省みて *大森モト子 138
城を歩く会 20 周年を迎えるために *田辺泰夫、茂子 139
笑顔いっぱいのお手伝い *菅原満利子 141
大森先生のことなど *遠藤正彦 142
思いも掛けないご縁 *大高純子 143
参加できることを誇りとして *大室賀一 144
富岡製糸場の思い出したことども *八谷敦子 147
城を歩く会 20 周年誌に寄せて *近久芳彦 149
片目をつぶっても *佐藤源治 150
20 周年記念に寄せて *今村升二 151
城を歩く会と私 *中川幸子 152
私の城歩き *山崎桂子 153
創立 20 周年に寄せて、*平塚興子 154
歴史に想いを馳せることの喜び *平松邦子 155
私感 *伊藤澄子 156
「城を歩く会」に想うこと *杉本信次 158
司馬遼太郎『街道を行く』に魅せられて *細田眞司 159
リーダーの資質と責任の取り方 *徳政義方 162
城を歩く会創立 20 周年に寄せて *多村勝彦 164
小海線沿線の城跡 *細田篤志郎 165
出会い *吉田国良 168
私の住む町－練馬・石神井川 *松田光敏 169
<ちょっと一息> J R 山手線めぐり *梅木宗広 171
「城を歩く会」創立 20 周年記念に寄せて *松永卓生 176
「城を歩く会」に寄せて *桜庭昭夫 177
天守がなくてもお城 *友野彰二 178
城、歌舞伎、鎌倉・・・ *清水守 179
城の四季 *坂内八重子 184
「城を歩く会」創立 20 周年に寄せて *松本竹代 185

編集のあとで 187

ふたつの力*「20 周年記念誌」編集委員会

凡 例

- ◇ 回顧文の掲載は順不同とした。
- ◇ 寄稿文のタイトルは、類似のものが多かったため、編集者において改めさせていただいた場合もある。
- ◇ 用字・用語は、原則として寄稿者からいただいた原文の通りとした。編集者に任された場合は『記事スタイルブック』（時事通信社）に則り加筆した。単位や外国語の和訳表現などの表記についても同様とした。
- ◇ 年号、および、西暦年の使い分けは、原則として原文通りとした。また、必要に応じて（ ）内に年号、あるいは、西暦年を付記した。
- ◇ 数字は、算用数字・漢数字を併用した。数字の単位は、原則としてメートル法により、表記はつとめて記号を用いたが、他の表記によった場合もある。
- ◇ 参考資料については、引用の都度その出所を付記することを原則としたが、文献・資料名を文末にまとめて記載した場合もある。

「城を歩く会」20周年祝賀会

日時 平成27年1月17日（土曜日）12時00分

会場 銀座ライオンビル6階「銀座クラシックホール」
東京都中央区銀座7-9-20
電話=03-3573-5355

次第 集合記念写真
開会のことば
名誉会長、会長あいさつ
名誉会長への花束贈呈
乾杯
懇親、会食
閉会のことば

Ginza Classic Hall

昭和九年から変わらぬ
雰囲気の大宴会場
～「非日常的な空間」と「生ビール」の融合～

ライオン クラシックホール



銀座クラシックホール

〒100-0001 東京都中央区銀座7-9-20
銀座ライオンビル6F
TEL 03-3573-5355
FAX 03-3289-0955
http://r.gnavi.co.jp/g008212

6F

ライオン クラシックホール

着席10名・立食150名様までご利用いただける
クラシックな大宴会場です。

Buffe



Formal

同窓会や会社のご宴会にフォーマルなウエディングに最適な「着席スタイル」宴会。



Party

メロウは生楽人の生スクリーン・プロジェクター・DVD・ビュッゲ等様々な宴会に対応する付属品をご用意しております。又、生音楽ビュッゲや生楽人の「生演奏」も承っております。



創立20周年を迎えて

初代会長 大森拓二

結成から20年、多くの城を「はしご」した。

会員の現場での城を見る「目付き」、会員の語り合い。

ある会員は休憩時に友達にいていた。「この会にはホネがある」。

ある人は、「この会には哲学がある」と。

いま思い出してもジンとくる会員同士の話ぶりである。

城を歴史の上から見る。城を単に物見としてではなく見る目がついてきている。

数字だけを見ても、本会は創立満20年を迎えた。城の同好会として間違いなく日本一の長さである。20年間、毎年現場を10回から12回訪れ、たずねた数は200城を優に越える。会員は、東京だけでなく千葉、茨城、埼玉、神奈川などの90名前後で構成されている。

知り合いの和歌山県にある同好会の会長がこぼしていた。

「うちの会員は和歌山市からだけで、県内の郡や市の人ひとりもいない」と。

本会も当初は和歌山、都内、横浜、小田原、静岡などの同好会との連携があった。招かれて講演を行ってきたが、聴衆はいつも20名足らず。各会の会長さんは恐縮されていた。その同好会からの連絡も数年前に途絶えた。もしかしたら、廃会されてしまったのだろうか。

本会は大学付属の研究機関などではない。民間の、もっといえば「素人の同好会」である。そのなかで、繰り返すがこの会は「日本一の会」である。であるならば、会員の皆さん全員に「金メダル」を差し上げるべきであろう。

25周年に向けて「訪ね、見て、知る」

会長 山岸弘明

「城を歩く会」創立20周年おめでとうございます。

大森拓二初代会長が平成6年に本会を創立し、翌7年2月16日、記念すべき第1回「江戸城見学会」を開催以来、年輪を重ね、ここに20周年の節目の時を迎えました。本会では昨秋、20周年を記念した「一泊旅行」を大坂城、姫路城、竹田城の「ビッグ3城」で実施しました。貸し切りバスの補助席いっぱいには会員の皆さまのご参加をいただき、かつ多くの方々から「感動した」などの好感想をいただきました。そして今般、「20周年祝賀会」を「城を歩く会」にふさわしく、レトロな雰囲気漂う銀座ライオンビルの「クラシックホール」で開催することになりました。

創立者の大森先生はことし88歳の「米寿」を迎えられます。本誌「城を歩いた私の60余年」に「ひとすじの道『城を歩く会』の20年」とお寄せいただきました。手塩をかけた会の「成人式」に、思い出と感慨がこもっています。いつまでもお元気で「城を歩く会」を見守ってください。

そしてこの日が、25周年に向けてのスタートの日でもあります。本会のモットウである「訪ね、見て、知る」ことの楽しさと感動を追い求めて、さらなる前進をめざします。世の中の趨勢と同様、当会もまた高齢化の波を避けて通れません。健康で、溢れる知識欲が私たち世代、共通の願いです。5年後の「25周年記念の会」も現在会員の皆さんが揃って参加できますよう、互いにがんばりましょう。役員一同、節目の20周年をステップに、「城を歩く会」がいつまでも「楽しい仲間の会」であり続けるよう、一層の努力を続けます。会員皆さまのご支援とご協力をお願い致します。

座談会 大森拓二初代会長を囲んで
城を歩き始めたころ



出席（順不同・敬称略）／大森モト子・山岸弘明・若林富美子・中川幸子・
徳倉千恵・今村升二・平松邦子（誌上参加）

場所／大森初代会長ご自宅

日時／2014年11月9日

構成／保科隆夫

「城を歩く会」のきっかけは彦根藩？

山岸 「城を歩く会」は2015年1月の創立以来、満20年を迎えます。当会では20年記念誌を編集・発行することとしました。そこで大森初代会長を囲んで、当会発足のころの会員さんにご集っていただき、当時のことを振り返っ

ていただくこととしました。皆さま、よろしくお願ひいたします。

ところで、大森さんが城に興味を持たれたのはいつごろなんでしょうか。

大森 小学校5年生のころです。小学校に通う途中に古本屋さんがあって、城の本を見つけました。欲しくてたまらない。親に何回も交渉してやっと買ってもらいました。その本を手に入れてあと、城に夢中になったとていうことです。中学時代は戦時中でしたから、学徒動員で工場に狩り出され、城どころではない。戦後は、中学の社会科の教師をしながら、城跡の発掘もやりましたし、城の研究会に入ったり、講演をしたり、城郭研究の権威・西ヶ谷恭弘さんとも3年間一緒に活動しました。

山岸 この会のそもそもは、世田谷区と杉並区の区報からと聞いています。

大森 その通りです。ただ、その前段があります。世田谷は江戸時代、彦根藩の領地だったご縁から、20年ほど前、区が藩主の子孫の方をお招きして連続講座を開いたのです。最終日、講座が終わって何人かで会場近くの店でコーヒーを飲んでいたら、「城を見る会を作ろう。大森さんには会長として城見学の指導をしてもらって、庶務的なことは皆で分担して」ということになりました。その中に杉並区の人何人かおられて、世田谷・杉並両区の区報に会員募集の記事を載せてPRしようということになって、掲載を申し込みました。ところが、記事の掲載まで半年くらい待たされて、両区報が同じ日に記事を載せてくれたのが平成7年、1995年の2月1日です。第1回目の行事はこの月の江戸城でしたが、参加希望者が70人も集まったので、2月16日と23日の2回に分かれていただいて実施しました。

若林 私はその第1回目に参加しました。集合場所の桜田門駅の改札口に行くと、大森先生が「結成式をします」といわれたのを覚えています。

山岸 第1回目から参加されたというのは極めて貴重な存在で、今も会員さんとして続けておられるのは若林さんお一人だけですね。

若林 参加したのは、お城に関心があるからということではありませんでした。親の世話や子育ては一段落していましたが、当時、糖尿病を患ってまして、食生活に気をつけながら、歩くことに励まなければならない事情を抱えていたのです。自宅近くの砧公園を、毎日1万歩を目指して散歩したりして、歩くことにも慣れてきたときに、この会のことを知って、皆さんと一緒に長い距離を歩ければということに参加させていただいたのです。

「これが城なんですか」

大森 1回目の江戸城の次は同じ年の4月に片倉城と滝山城を訪ねました。城歩きの初歩は山城である、多摩地区で最も険しい滝山城を体験していただくと思ったのです。険しい坂道や深い空堀、かき揚げの土塁をいくつも越えてご案内したのですが、女性の参加者から「これが城なんですか」という声が上がりました。城には必ず天守や御殿などの建物があると思っておられたのでしょう。このときは50人が参加されたのですが、その次の例会は33名に激減しました。

中川 私は、その片倉城・滝山城が最初です。本誌の寄稿欄にも書かせていただきましたが、世田谷区の広報紙を読んで江戸城見学会に参加した古文書研究会のメンバーの「今まで何気なく目にしていた城というものが違って見えてきた」という言葉に6、7人の仲間が興味をもって片倉・滝山城に参加したのです。いずれも後北条時代の城ですが、その時代の特色がよく現れていると聞いて、「ならば、行って見てこなければ」と、やじ馬根性で参加したというのがほんとうのところ。山の中の城跡を目にして、美しく威厳のある姿を持つのが城であるというイメージは崩れ、荒々しく寂れた古城の跡に、これが乱世の城なのかと感慨を覚えたというのが実感でした。

今村 私、その次の小机城と榎下城からご一緒させていただきました。家内は私より前に参加させていただいていたのですが、皆さんのあとについて小机城の小高い岡の上の城跡に登り、会長の説明を聞きました。しかし、まったくチンプンカンプンで、理解に苦しみました。入会に前後して世話人の一人に推薦され、会報の発送や、後に出てくると思いますが、貸し切りバスの手配などを通して会の運営にお手伝いできたと自分なりに思っています。

山岸 今村さんには大変お世話になり、また、ご苦勞をおかけしました。小机城の次が9月の千葉城と飯野陣屋だったのですが、私はここから参加しました。

大森 山岸さんが講師として入会してくださり、当会にとってこの上なく大きな戦力を得たということになりました。それで、世話人会のメンバーにもなっていただきました。

今村 その飯野陣屋は、房総線の青堀駅から現地まで距離があって、大変

だったのを覚えています。何しろ長い道を歩きました。大森会長の「城は足で見るもの」という言葉が脳裏をかすめ、健脚でなければ、この会の会員としては真っ先に落第だと思わされましたね。

徳倉 私は少し間があって、結成の2年後、1997年2月の江戸城から参加しております。このときは60人近くが集まったのですが、他のお城の参加者は少ないのに、江戸城になると増えるのですね。この会の例会では江戸城に2014年11月の例会まで9回も訪ねているそうです。江戸城は東京の真ん中にあるという理由だけでなく、日本一の城で見せ場と魅力をたくさん持っているということなのではないかと考えています。

平松 この会に入らせていただいたのは、今、体調不良で休会されている杉田浩子さんのご紹介でした。私も97年でしたが、2月の江戸城が初めての参加で、雪のちらつく寒い日でした。「2月は空気が澄んでいて、お城がいちばん奇麗に見える」と大森先生のご説明があったことを記憶しております。お城の歴史上、最大の本丸御殿。絵図にある迷路のような御殿を当時の人々はどのように利用していたのだろうかと思ったものです。

その次は、御茶ノ水から本郷を訪ね、高林寺の跡や、加賀藩上屋敷跡の東大構内を見学したことなどを覚えています。3代将軍の家光が、神田山にあったころの高林寺を訪ねた折、境内の泉の水で入れたお茶を供されたことから、このあたりを「御茶の水」と呼ぶようになったとか、東大の構内で加賀藩時代の石垣の跡を見せていただいたこと、積雪で三四郎池までは行けなかったことなど思い出します。

山岸 よく覚えておられますね。このように発足した会ですが、その後、貸し切りバスを利用するようになって行動範囲が広がりましたね。

貸し切りバス利用と1泊見学会

大森 当初は中世における関東の城を知っていただくことを主眼にご案内して、電車や路線バスを利用していましたが、メンバーが入れかわりながらも固定化するにつれて、次第に「城の真意に迫る」、つまり、会の活動内容を深化することが必要だと思えるようになりました。そこで、バスを利用することによって見学の範囲を広げようと考えました。

山岸 最初は小田原駅からのマイクロバスでしたね。

大森 そうです。バスの場合は、参加者が定員に満たないと大赤字になって、会の存続の問題にもなりかねません。そこで、まず、マイクロバスを小田原駅でチャーターし箱根の早雲寺や後北条氏を訪ねてテストしたのです。結成2年目のことです。経済的には、まあまあの結果でしたが、ある年配の女性会員の方がいわれたのです。「お楽になりましたね」。私は考え込んでしまいました。バスとはレールのない場所へ行くもの、参加人員ついてヒヤヒヤするものであって、「お楽になる」ものとは考えていませんでした。しかし、このご婦人の言葉をきっかけに、これからは会員の高齢化への配慮も必要だと考えるようになったのです。幸い、熱心な会員さんが増えてきたので参加人員に対するヒヤヒヤは余り考えなくてもよくなっていきました。

今村 その後、1泊見学会も始めましたね。

大森 日帰りでは行けない遠距離の現場を訪ねて見聞を広げることを目的として始めました。第1回の1泊見学会はこの会が始まって4年目、1998年10月の松本城・諏訪高島城・花岡城でした。これには32名が参加。2回目は翌年10月、34名が参加して仙台城・若林城・山形城を訪ねました。このようにして、現在に通じる活動の原型ができあがっていったのです。

最大の危機

大森 このように会員の定着化が進み、会員さんの意識も向上してきた2006年から2007年ごろ、こうした動きに逆行する事態が次々に起こりました。きわめて残念なことでしたが、会の運営にとっては重大な障害になりかねません。一時は、会の解散も視野に入れながら苦汁の選択を迫られました。

いろいろ考えたあげく、だれも傷つけずに乗り切るには、組織を改めて会の刷新を図るしかないと決心しました。それまでの世話人制を廃して、新しく運営委員会と実行委員会を創設することにしました。08年4月には新しい委員の人選を行いました。会員さんの中には真相が分からない、何が起こったのかといぶかる向きもありました。

山岸 世話人以外の会員さんたちには理解できなかったでしょうね。

大森 しかし、この重大な危機は何のトラブルもなく、切り抜けられたと思っています。会の歴史にとって最大の事件でしたので、あえて、この誌上に残しておきたいと考えました。組織を改めたのを機に、会の旗も新しくし

ようと、題字を今村さんの達筆で書いていただき、モト子さんがそれを染め抜いて縫いつけてくれました。

「城を歩く会」の会員であり続けたい

山岸 そのような苦難もありましたが、それを乗り越えて、いま20周年を迎えたわけですが、この間、「城を歩く会」の会員であり続けた皆さんから、この会の印象や、心に残っていることなどをご披露ください。

平松 番外のことなので恐縮ですが、1泊見学会の現地集合・現地解散の際には前後にもう1泊するプランを立てて、城の旅の思い出を倍加することができました。富山・金沢を訪ねた折でしたが、金沢で解散した翌日、偶然、市内で山岸・保科両先生にお目にかかって、加賀藩主の前田家の墓地や、曹洞宗の名刹・大乘寺を案内していただきました。ほんとうに楽しい思い出です。

徳倉 私、江戸城でも、どこのお城でも、お城を訪ねるたびに石垣を手のひらで触ってくることにしているのです。すると石垣の石がなぜか温かく感じるのです。そのお城に住んでいた人たちの命の温もりが伝わってくるようで、何かほっとさせられるのです。こんなところに、お城に惹かれるわけがあるのかもしれませんがね。

中川 この会は発展しながら満20年を迎えました。当初、私どもやじ馬精神で参加させていただいた仲間も半数が住む世を異にしていきました。けれども、次々に多くの人たちと出会い、親しくさせていただいて、城の知識を増やしながら人生の知恵や暮らしのヒントなども学ばせていただきました。これからも、多くの方々にお目にかかれることでしょう。健康に気をつけて月例会に参加できるよう準備に励んで、ずっと会員であり続けたいと願っています。

今村 私も全く同感です。先ほど申し上げたように城のことはよく分かりませんが、20年間もよく続いたものだ、われながら感心しています。大勢の方々との交流を重ねながら、数えきれないほどの城を回りました。最近、体調も衰えて皆さまと同じ行動ができるか、心配ではありますが、もう少し頑張ってみることにいたしましょう。当会がいつまでも続いていくことをお祈りしています。運営委員の皆さまには常々お世話いただき、心から感謝し

ています。

若林 主人が病気を得て、私はその看病で3年ばかり例会をお休みさせていただいていたのですが、大森先生が体調を崩されてこの会の存続が危ないと聞かされました。それは大変ということで、主人の了解をもらって再び参加させていただきました。お休みしている間に会員の方が増えてびっくりしました。顔なじみの方々に励まされて、今日に至っているのですが、大森先生、モト子さん、山岸先生やお世話役の方々、いつもお世話になり、ほんとうにありがとうございます。

山岸 モト子夫人、一言お願いいたします。

モト子 私は何も分からないまま主人について歩いてただけです。毎回真剣に城のことを目に焼き付けていれば、今ごろはその道のオーソリティーになっていたかもしれません。だけど、私にはその才覚がないようです。これから主人と一緒に歩けなくなることを思うと、いささか寂しい気がいたします。例会の帰りに幾人かで一杯飲んで反省会、これも楽しみでした。

この会が、ここまで大きく立派な城の会になったのは、「旗持ち」の大室賀一さん、遠藤正彦さん、榎本達夫さんをはじめ役員さん方、会員の皆さまのご協力によるものです。心から感謝申し上げます。大森前会長と私は、20周年記念のお席でお別れします。長い間、皆々さま、まことにありがとうございました。

大森 私からも一言だけ申し上げさせてください。「城を歩く会」で、さまざまな方にお目にかかれてほんとうによかったと思っています。このことが、いちばんの喜びです。心から感謝しております。

山岸 大森さんには長らくにわたってご指導をいただきありがとうございました。いつまでもお元気で私たちの活動を見守っていただきたいと思えます。また、本日は発足当時の会員の皆さんにお集まりいただき貴重なお話しをお伺いしました。長時間ありがとうございました。

歩み

20年間の活動の記録

会史年表 最近5年の歩み

「訪ね、見て、知る楽しさ」を实践

平成 21 年 (2009)

この年表を、平成 21 年 8 月 虎ノ門電気ビル「レストラン立山」で開催した「創立 15 周年記念の会」から書き進める。

8 月 6 日 「城を歩く会 15 周年記念の会」(虎ノ門電気ビル内レストラン立山)

平成 7 年創立以来 15 周年を迎え、記念の会を開催した。次のステップである 20 周年に向けて会のますますの発展を祈念し、懇親を深めた。

① 記念講演 「15 周年を振り返って～『城を足でみる』から『自ら見出す』へ」 大森拓二

② 記念写真撮影

③ お祝いの宴 (宴会場)

司会あいさつ、会長あいさつ、乾杯、懇親、会食、閉会のことば

④ 「15 周年記念誌『堀と土塁、石垣を訪ね歩いた記録』」を発行

15 周年記念誌発行に際して＝大森拓二会長巻頭のことば

「15 年は『アツという間だ』と、『実は苦しく長かった』とが交錯しているのが、正直な私の実感である。「山あり谷あり」ではなく、「山なく谷あり」であった。しかし、会員の皆さまが苦情ひとついわずによく支えてくださったので、ここまで来られたと感謝でいっぱいである。しかし、そう喜んでばかりはいられない。長い年月は、同時に大変重い課題を背負い込んでしまう宿命をかかえている。

この会で今までに訪ねた城は、昨年京都で 200 城に及んでいる。数ばかりではなく、質の上でも城のルーツともいえる西日本の城もかなりの数を体験している。しかし、会の創設の時から会員は 100 名近い会員の中でわずかに 3 名だけである。亡くなった方は知らせてくださっただけで 4 名、退会を申し出てくれた方は 10 名、いつの間にか退会された方はなんと 70 名余りになる。

一方、会の 5 周年のころからは毎回のように新しい方をお迎えしている。(中略)このため体験の長い方と短い方が混在になっている。(中略)このため、行事の企画段階で見学対象の選定や、

「城を歩く会」15周年記念誌「堀と土塁、石垣を訪ね歩いた記録」



堀と土塁、石垣を訪ね歩いた記録
「城を歩く会」15周年記念誌

城を歩く会 15周年記念の会

日時 平成21年(2009)8月6日(本曜日)
【13時30分～15時30分】
会場 虎ノ門電気ビル内「レストラン立山」会議室および宴会場
虎ノ門2-8-1 電話:3562-8422



「記念の会」会場

「記念の会」次第

司会進行(山田弘明理事兼幹事)

- 1) 記念講演(会議室)
 - ① 主催者あいさつ(西園寺大理事兼幹事)
 - ② 記念講演「城を歩く会 15周年を振り返って」(大森拓二会長)
- 2) 記念写真撮影(会議室)
- 3) お祝いの宴(宴会場)
 - ① 会長あいさつ(大森会長)
 - ② 乾杯
 - ③ 懇親、会食
 - ④ 閉会のことば(櫻井隆夫理事兼幹事)



「お祝いの宴」会場(レストラン立山)

現場でのご案内の言葉遣いにいたるまで心を砕いている。城を観光ではなく「歴史の視点でみることに」には何日も考え込むことがしばしばである。この会は学者の研究発表の場ではない。すべての会員に喜んでいただく会でなくてはならない。

⑤会報第35号=はじめに

この会は平成6年にわずか5~6人の発起人で誕生しました。以来幾星霜、本年は15周年を迎えます。これまでも平成11年に5周年、平成16年には10周年をささやかながら祝ってまいりました。そこで本年は15周年を祝おうと、昨年8月以来委員会で検討と準備を重ねました。ことに記念講演の「15年を振り返って」や発行する記念誌の会員の皆さまからのご寄稿は、その後大きな働きを期待しています。初期のころからの積み重ねの長い方には「追憶の再確認」を、近年に入会なさった方々には初期のころを「追体験」していただく内容です。

9月11日 本佐倉城を歩く(京成電鉄大佐倉駅集合)

20周年に向けた第1回定例会は中世千葉氏の本拠本佐倉城から。京成電鉄の大佐倉駅から徒歩15分、一族菩提寺の勝胤寺から城内へ、東山虎口、要害、主郭、奥の山を回り、午後は路線バスを利用して近世佐倉藩主の堀田邸を見学した。

①本佐倉城=千葉氏は桓武平氏の末裔平良文を祖とし、大椎城、千葉猪鼻城に拠ったが、関東動乱の起こった文明年間、一族が争い勝った馬加千葉康胤方が宗家を継承して本佐倉城に移ったが、天正18年秀吉の小田原征伐で北条氏に加担して運命をともにした。

城址は保存状態もよく国指定史蹟として発掘調査、整備されている。比高20mほどの小高い山上に立地、堀切りと土塁で区切った郭を連続させて要害を再現している。たまたま地元教育委員会の調査結果報告会の直後で、主殿、会所、築山、庭池などの仮設「散策ガイド」や縄張りが表示され、分かりやすかった。

10月6日、7日 「名古屋方面一泊旅行」を中止

この日、名古屋方面のバス一泊旅行を計画したが、直前に東名高速道路の大規模な集中工事が行なわれることがわかり急遽中止、明年3月に再実施することとした。準備・情報不足を反省。

11月20日 「八王子城を訪ねる」(京王線・高尾駅集合)

高尾駅から西東京バスで霊園前下車、徒歩移動20分。大手道、曳き橋、虎口、御主殿、以下本隊は比高110mの山頂曲輪をめざす。

①八王子城=小田原北条氏最大の支城で、天正12年北条氏照が築城、同18年、前田利家、上杉景勝に攻められてわずか1日で落城した。氏照は安土城を意識した総石垣の山城をめざしたが

【はじめに】
この会は「城を歩く会」(事務局)の発起人5~6人の発起りで誕生しました。以来幾星霜、本年は15周年を迎えます。これまでも平成11年に5周年、平成16年には10周年をささやかながら祝ってまいりました。そこで本年は15周年を祝おうと、昨年8月以来委員会で検討と準備を重ねました。ことに記念講演の「15年を振り返って」や発行する記念誌の会員の皆さまからのご寄稿は、その後大きな働きを期待しています。初期のころからの積み重ねの長い方には「追憶の再確認」を、近年に入会なさった方々には初期のころを「追体験」していただく内容です。

定 期 日 毎月第3日曜日(祝) 午前10時30分~午後4時30分
場 所 本会館(東京都港区赤坂) 赤坂1-1-1 赤坂ビル 5F
開 催 者 城を歩く会(事務局) 事務局 03-5561-1110
内 容 ① 城址の見学 ② 散策ガイドの配布 ③ 記念講演
定 員 定員は定員は50名程度、定員に達しない場合は先着順です。
会 費 500円(当日現金) 当日現金の場合は先着順です。
お 礼 当日お礼としてお茶を飲みながらお話しをします。



八王子城

【はじめに】
この会は「城を歩く会」(事務局)の発起人5~6人の発起りで誕生しました。以来幾星霜、本年は15周年を迎えます。これまでも平成11年に5周年、平成16年には10周年をささやかながら祝ってまいりました。そこで本年は15周年を祝おうと、昨年8月以来委員会で検討と準備を重ねました。ことに記念講演の「15年を振り返って」や発行する記念誌の会員の皆さまからのご寄稿は、その後大きな働きを期待しています。初期のころからの積み重ねの長い方には「追憶の再確認」を、近年に入会なさった方々には初期のころを「追体験」していただく内容です。

〇名古屋方面旅行
期日 2010年3月17日(祝)~18日(祝)
集合場所 東京駅西口の丸の内線 7時30分
集合 三河宮城(犬伏城) 徳政の寺(徳政) 徳政寺(徳政) 徳政寺(徳政) 徳政寺(徳政)
解散 徳政寺(徳政) 徳政寺(徳政) 徳政寺(徳政) 徳政寺(徳政)
予約 ①申込・予約金納入(予約金は当日現金で納入いたします)
②予約金納入後2週間以内には連絡がつかない場合は当日の集合場所までお越しください。
③新幹線・バスなど交通費は各自負担です。
④上記②③の方で当日の集合場所には各自の都合で遅刻してはなりません。

〇2月の定例会 例会
〇1月 例会のご案内
日時 2010年1月20日(祝)
12時~14時
会場 赤坂1-1-1 赤坂ビル 5F
交通 ①地下鉄赤坂駅下車
徒歩1分 徒歩1分
②バス 赤坂駅下車徒歩3分
③バス 赤坂駅下車徒歩3分
④バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑤バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑥バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑦バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑧バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑨バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑩バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑪バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑫バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑬バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑭バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑮バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑯バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑰バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑱バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑲バス 赤坂駅下車徒歩3分
⑳バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉑バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉒バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉓バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉔バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉕バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉖バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉗バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉘バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉙バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉚バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉛バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉜バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉝バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉞バス 赤坂駅下車徒歩3分
㉟バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊱バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊲バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊳バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊴バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊵バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊶バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊷バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊸バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊹バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊺バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊻バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊼バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊽バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊾バス 赤坂駅下車徒歩3分
㊿バス 赤坂駅下車徒歩3分

未完成だった。国史跡で御主殿跡周辺が整備されている。落城時に婦女子が自刃し、次々に身を投じたとされる御主殿の滝は城山川を三日三晩赤く染まると伝えられている。山頂本丸へはほぼ全員が挑戦、実際の戦闘が行なわれた新道ルートを進む。馬蹄型台がひな壇状に並ぶ尾根道を金子丸、小宮曲輪、八王子神社のある中の曲輪から本丸へ。絶景のロケーションに疲れも吹き飛ばす。

11月20日 「会報第37号」発行

平成22年(2010)

1月20日 新年のつどい(がんこ銀座一丁目店=47名)

銀座一丁目の「がんこ」で新年のつどいを開催。新しい年へ向けて懇親を深めた。

2月18日 大江戸線で大江戸の遺跡を訪ねる(大江戸線・汐留駅集合)

大江戸線の史蹟めぐりシリーズの第1回。江戸城総構えの東海道側入り口にあたる芝口門跡、浜離宮庭園枅形からスタート、大江戸線で月島へ移動、佃島跡、門前仲町は江戸のにぎわい、八幡社と不動尊、昼食後両国、蔵前を回る。

3月17日、18日 「宿泊をとまなう定例会・名古屋方面」(新宿駅西口集合=42名)

昨年、高速道路工事のため延期した名古屋方面一泊バス旅行を再実施。

①三河吉田城(豊橋藩)=池田輝政が拡張整備した石垣の城。譜代大名が歴任、松平大河内7万石で明治維新。本丸公園に鉄櫓などを復興、地元の関心は薄い。本丸石垣や市役所横の土塁、空堀などは圧巻、見どころが多い。

②犬山城=国宝天守4城の1つ。中世文明元年守護代織田氏築城、江戸時代は徳川尾張家の付け家老・成瀬氏が城主となった。木曾川左岸の城山に本丸、二の丸を築き、山下に三の丸を置いた平山城で、明治維新後も天守は取り壊しを免れ近年まで成瀬氏個人所有の城になっていた。3重4階、地下2階、現存最古の望楼型で1階は大きく歪んだ台形、2階以上は矩形で望楼型の特徴をよく現している。

バスは城周りを一周、木曾川対岸から見上げた夕焼けの天守に感動、別称・白帝城を実感した。名古屋駅前のホテル・サンルートプラザ名古屋で一泊。

③伊勢一身田寺内町=一向一揆のころの形態を伝える町並み。二重の水濠と土塁、本丸に本寺の専修寺、二の丸に支院、周囲を町屋が囲む。台所門は角やぐらの構え。



吉田城



犬山城

- ④津城＝藤堂 5 万石藤堂家居城。築城の名人高虎の築城。石垣や水濠は現存だが、本丸にある三重櫓は残念ながら史実に基づかない。
- ⑤名古屋城＝織田信長最初の居城・那古野城跡で、尾張徳川家 47 万石の居城。関が原の合戦に勝利した徳川家康が大坂城の豊臣秀頼を牽制するため那古野の旧城地に巨大城郭を築いた。西国の諸大名 20 家が動員され、家康の 9 男・義直が配置された。台地先端に築かれた平城、輪郭式縄張り、金しゃち天守は層塔型で、小天守と橋台でむすぶ連結式。昭和 20 年戦災焼失、昭和 34 年外観復元された。本丸広場は將軍の御成り御殿跡で復元工事中、わずかな隙間から工事現場を覗き見した。平成 29 年完成予定。
- ⑥帰りバス車中でVTR「幕末知られざる決断 徳川慶勝公」を鑑賞、明治維新の戦いの中、東海道諸藩に勤皇恭順を説く元名古屋藩主と朝敵の汚名を背負って敗走する実弟の京都守護職・松平容保、知られざる幕末裏面史がバス旅行をより楽しませた。

3月29日 運営・実行合同委員会

4月16日 「海城新井城と三崎城を訪ねる」 天候不良のため中止

前日の天気予報不良のため急遽中止した。

5月11日 「川を握る関宿城を訪ねる」(東武野田線・川間駅集合＝23名)

川間駅から路線バスで関宿城跡へ。

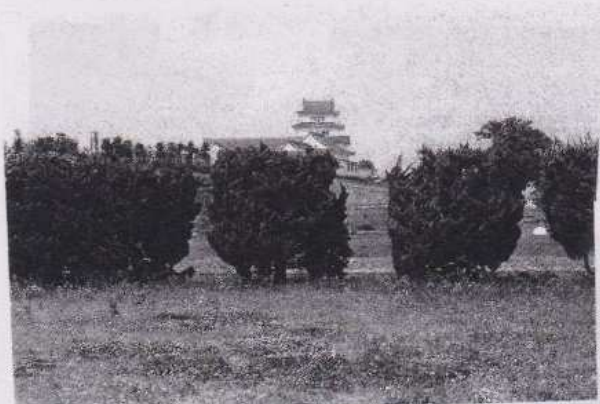
- ①関宿城＝戦国期の古河公方奉行人・梁田氏築城。近世は老中城で久世 5 万石が明治に及んだ。利根川と江戸川の分岐点に立地する川関の城で明治時代の河川工事の本丸の大半が消滅した。本丸跡、二の丸、三の丸跡に残る城史蹟を探り、移築本丸御殿のある実相寺、移築埋み門の民家、水関所跡などを回った。
- ②関宿城県立博物館＝スーパー堤防上に建てられた天守は史実に基づかない模擬天守で川運の博物館になっている。学芸員から概要説明を受け館内は自由見学。展望台から城地や利根川、江戸川の分流などを遠望した。

5月11日 「会報第38号」発行＝はじめに

「ここ三年ほどの間に会員の方々の城に対する理解や関心の度合いが急速に高まっていると、私は会のたびに感じております。『片目で見ると』や『両目を開いて見る』の実践の成果でしょうか。城を単なる観光材料として見るのではなく、歴史の存在として見る眼がでてきた、あるいはそれ以前にそのような資質が備わっている方が多く入会なさってこられたということでしょうか。主催する側にとってはそれにお応えしてこれまでより広く、より高く、より丁寧にご案内すべく、努力が欠かせないと強く感じています」。



名古屋城



関宿城

6月9日 「日帰りバス群馬県方面」(上野駅・公園口集合=47名)

上野駅公園口から、高速関越道などで群馬県の名城へ。

- ①安中城=戦国時代安中氏築城で、山内上杉、甲斐武田、小田原後北条氏による争奪の地となった。江戸時代は碓井峠と中山道を抑える江戸北方の守り。関東の城がほとんど土の城であったのに対し、ここでは河原石を積みあげた石垣の城構えである。大手門、東門、屋敷割りなどいたる所に石垣が現存するが高さはない。下級武士の家中長屋と郡代屋敷、戸長屋敷が現存公開、見ごたえがある。
- ②高崎城=慶長3年箕輪城主だった井伊直政が交通要衝のこの地を新拠点として築城した。後期は松平大河内10万石城下。元本丸の市役所屋上から平城全容を一望、本丸水濠、土塁が現存。出桁形横矢は熊笹土塁、明治に民家に取り込まれた乾櫓と三の丸東門を移築展示、しかし関東特有の「土塁の城」高崎城で石垣上に櫓が上げられていることに違和感もある。
- ③沼田城=秀吉の小田原征伐口実となった段丘上の急崖先端に立地する岡城。中世沼田氏が築城、のち上杉、武田、北条三強武将の争奪の地となった。武田氏滅亡後、真田氏と北条氏が対決、秀吉が仲介して利根川を領国境としたが、北条氏が利根川を渡って真田領を攻撃したことで秀吉の激怒を買った。眼下を流れる利根川を遠望、本丸跡の城址公園には土岐3万石城郭の地形がそのまま、真田氏時代の石垣が往時を偲ばせる。

7月16日 会議室の会(大田区立消費者センター=46名)

- ①忽然と誕生し幻のように消えた明治維新の城~菊間藩水野5万石の研究 山岸弘明
- ②司馬遼太郎の「城」を読む~歴史を俯瞰する楽しみ 保科隆夫
- ③城郭基礎用語~多くの方のご要望に応じて 大森拓二

9月18日 「虎の門、新橋、お台場に江戸を探る」(東京メトロ・虎ノ門駅集合=42名)

- ①虎ノ門駅文部科学省地下に残る江戸城の石垣=日向延岡内藤7万石上屋敷跡、文科省前3か所に江戸城外郭石垣一部と間知石を展示公開。詳しい解説表示が嬉しい。
- ②田村右京太夫邸跡=電車で1駅、御成門駅、田村町の一関田村3万石上屋敷跡へ。元禄14年江戸城内松の廊下で吉良上野介に刃傷、討ち果たせぬままに捕らえられた赤穂5万石浅野長矩切腹の地をめぐる。榎本達夫講師が一の関まで出向いて教育委員会から入手した屋敷図などで解説、途中立ち寄った「切腹最中屋」の主人も浪士陣羽織姿で熱弁をふるった。新橋駅周辺で昼食解散、ゆりかもめで台場へ。
- ③第三台場=幕末嘉永6年、ペリー来航後江戸湾防備のため品川出島と隅田川、越中島に出島形



高崎城



沼田城

式の砲台場3基と、海上砲台場11基の合計14基の砲台場築城工事を開始したが、七番台場の工事途中で打ち切りとなった。現存する第三台場をめぐり、第六台場を遠望した。

10月19日～20日 「福井・琵琶湖方面の城」(東京駅・新幹線指定席集合)

春に前年の積み残し分を再企画したためこの年二度目の一泊見学会となった。東京、米原間は新幹線、現地チャーターバス、温泉宿泊の三者パックで、福井県のあわら温泉に宿泊、安土城、彦根城と北陸の名城をめぐった。

- ①安土城＝天正4年織田信長が「天下統一」拠点の城として琵琶湖湖畔標高200mの安土山に築いた近世城郭の先駆となった幻の名城。黄金で飾られた5重7階の天守、都市計画にもとづいた城下町は以後の城作りに大きな影響を与えた。発掘整備された大手道は一直線に伸び、初めて登場した総石垣の主郭は高石垣時代の到来を告げた。山頂の天守跡から琵琶湖を遠望、「信長の館」で戦う城から見せる城へ、権威の象徴としての巨大モニュメントに思いをはせた。
- ②一乗谷朝倉館＝戦国大名朝倉氏の館と城下町。館跡は発掘調査結果にもとづいて建物や庭園を平面展示、復元された武家屋敷や町並みを巡り、参加者一同戦国時代にタイム・スリップした。
- ③福井城＝慶長6年徳川家康が自ら縄張りしたといわれる北陸抑えの城。家康次男松平秀康が入り、家門67万石城下として栄えた。本丸跡は福井県庁で、天守台、石垣、本丸水濠を回る。
- ④北の庄城＝天正3年柴田勝家築城、豊臣秀吉に攻め落とされた。新婚6か月で自害した薄幸の美女・信長姉の市の悲劇と、後に秀吉の側室淀となる茶々、徳川秀忠の妻江となる小督ら3姉妹の脱出の地は市街地になり、本丸跡の発掘遺構が当時を偲ばせる。
- ④丸岡城＝天正年間、柴田勝家の甥・勝豊が築城。元禄以降有馬5万石で維新におよんだ。明治5年廃城となり、天守も3両2分で売却されたが破壊を免れ、昭和4年国宝、戦後国重要文化財に指定された。現存12天守の1つで現存最古とされる。小高い丘上に立地、野面積みの天守台に2重3階の望楼型、石瓦、下見板張りの外観や出窓、破風など古風の姿を止めている。
- ⑤彦根城＝徳川四天王の井伊直政が計画、直継が遺志を継いだ。家康の支援を受けた天下普請で、佐和山など周囲の廃城から石材や櫓が転用された。入母屋破風、切妻破風、唐破風と多彩な様式を組み合わせた3重3階の天守は美しく調和、城郭国宝の第1号に指定された。廊下橋の左右に2重櫓を配した天秤櫓、下屋敷付属の回遊式庭園・玄宮園から見上げる天守はまさに圧巻であった。

10月19日 「会報第39号」発行＝はじめに

「城に関する新刊出版物の内容が、ここ数年大きく変化していると私は感じています。平成の初めころからの『眺める城』から『調べる城』への変化である。ひところは『写真集で売れる



安土城



丸岡城

のは城とヌード』という時代もあった。しかし最近各地で城の調査研究や増改築が盛んであり、反対に財政上の理由から城を売り出した市町村もかなりある。このような事態から私自身がそれに応じた対処をしなければと、いささか焦りを感じている。この会は世の一般の会の何倍か『調べる』会員が多い会である。会の仕事は世の何倍か水準の高い内容でなくてはならないからである」。

11月18日 「坂本龍馬の活躍の跡を訪ねる」(京浜急行線・立会川駅集合=35名)

この年の大河ドラマ「龍馬がゆく」に因んで立会川の関係史蹟をめぐる。駅近い児童公園の坂本龍馬像、旧東海道、土佐藩抱え屋敷・浜川砲台跡、午後は土佐藩下屋敷跡、山内容堂の墓、伊達藩下屋敷跡をへて品川宿、品川寺、妙国寺、本陣跡、品川神社などを見学して北品川駅前で解散した。

11月28日 運営・実行委員会

①冒頭、大森会長から自身の健康状態について説明、現地参加は困難であり第一線を退きたい旨の申し出があった。慰留意見も多かったが本人の辞意は堅くやむを得ないこととして、今後は後進の指導にあたっていただくこととなった。

②当面の体制は全役員が留任し、分担を下記のとおりとした。

名誉会長=大森拓二

会長代行=山岸弘明

会長代行補佐=保科隆夫

事務局長=田辺康夫

事務局=榎本達夫

運営委員=大森モト子、田辺茂子、菅原満利子

実行委員=遠藤正彦、大室賀一

平成23年(2011)

1月22日 新年のつどい(虎の門・レストラン立山=56名)

虎の門電気ビル地階の「レストラン立山」でこれまで最多の56名が参加して「新年のつどい」を開催した。席上大森会長が「健康上の理由により第一線を退きたい」と正式表明、山岸会長代行から新体制と今後の会運営について説明があった。会員一同、会長の多年にわたるご指導に感謝するとともに新しい年の会のますますの発展を誓いあった。



坂本龍馬像

1月28日 第1回運営委員会（大田区消費者センター）

2月16日 「小田原古城を訪ねる」（JR・小田原駅集合＝35名）

集合地の西口広場でいきなり北条早雲の騎馬像に遭遇、北条氏は小田原のシンボルでもある。路線バスで城山4丁目降車、北条氏が築いた大堀切りと周辺の壮大な総構え外郭を見学、徒歩移動で近世小田原城をめぐる。

- ①中世小田原城＝15世紀大森氏が築城、ついで北条氏居城。八幡山と呼ばれた現在小田原高校周辺が本丸で、北条氏が戦国大名として勢力を拡大することで城地を広げた。天正18年豊臣秀吉の小田原攻めに備えて「大外郭」を構築、関東最大の大城郭となった。

スタート点の城山4丁目バス停は外郭急ガケの最先端、眼下の早川越しに秀吉が一夜城を築いた石垣が望める。驚愕する北条勢が眼に浮かぶ。小峰御鐘の台大堀切りは堀幅25m、深さ12m、長さ250mが現存、堀底道を歩いてその迫りに息を呑む。

- ②近世小田原城＝北条氏の領国を継承した徳川家康は、城山の旧城を廃して山裾から平地にかけて新城を取り立て東海道筋江戸ののど元を抑える城とした。城主は大久保忠世、忠隣で江戸後期大久保10万石で明治維新におよんだ。

天守は3重4階の層塔型で昭和35年市制20周年記念に再建されたが復興、天守台、本丸石垣、濠などは現存、近年復元された常盤木門、銅門、平櫓を見学、駅近くの北条氏政の墓を巡って解散。

2月16日 「会報第40号」発行＝はじめに

「1月22日、虎ノ門「レストラン立山」で開催した新年のつどいにはこれまで最多の56名が参加して「城を歩く会」ますますの繁栄と発展を祈念しました。席上大森拓二会長から『健康上の理由により第一線を退きたい』との表明があり、名誉会長に就任されました。会員一同会長の17年間にわたる熱意に満ちたご教導に感謝申し上げますとともに、今後の変わらぬご指導をお願いしました」。

さよならとはいいません・大森名誉会長あいさつ

「対人の心臓も弱いうえに、体内の本当の心臓も不整脈、おまけに脳こうそくで言語障害、さらに老人性筋痛症とやらの手足の痛み、最近の10年間に7回も半月ずつの入院を繰り返して女房に苦勞をかけてきました。「事実、城を歩く」と旗を掲げたものの、前年9月のお台場以来、ご案内のお役に立てなくなっていました。続く10月の宿泊の福井方面では、コースの半分も歩けずベンチで待っている状態でした。その帰路の車中から考えました。『身を引くのは



小田原古城



小田原城

「城を歩く会」会報 第40号

【はじめに】

1月22日、虎ノ門「レストラン立山」で開催した新年のつどいにはこれまで最多の56名の会員が参加して「城を歩く会」ますますの繁栄と発展を祈念しました。席上、大森拓二会長から「健康上の理由により第一線を退きたい」との表明があり、名誉会長に就任されました。会員一同、会長の17年間にわたる熱意に満ちたご指導に感謝申し上げるとともに、今後の変わらぬご指導をお願いしました。本号は、大森前会長に退任のご感懐を寄せていただき、また、2頁には会長代行に就かれた山岸弘明さんから会員の皆さまへのお願いを掲載しました。

「さようなら」とは言いません

名誉会長 大森拓二

対人の心臓も弱いうえに、体内の本当の心臓も不整脈。おまけに脳こうそくで言語障害。さらに老人性筋高位とやらの手足の痛み。最近の10年間に7回も半月ずつの入院を繰り返して女房に苦勞をかけてきました。事実、「城を歩く」と旅を掲げたものの、昨年9月の「お台場」以来、私はご案内のお役に立たなくなっていました。続く10月の宿泊の福井方面では、コースの半分も歩かずベンチで待っている状態でした。その帰路の車中から考えました。「身を引くのは当然だ、残念だけれども」と。

その11月の運営・実行合同委員会の冒頭に私は会長の辞任を申し出ました。しかし結論は明確でなく、新年の会で皆の意見を聞いてからとなりました。新年の会の開会の挨拶で私は「新年おめでとう」は一斉に唱え、「今年もよろしく」とは私に言えない。断腸の思いで会長を辞任する、と申しました。職責に移って、「やめないで」「出られる条件の会には出て」と50名を超える出席者の全員から温かいお言葉をいただきました。私にとってこれまでの生涯にない「身に余るお言葉」です。いかに体が動かなくとも、この声に背くことは絶対にできないことです。

山城の坂道でなくとも、たとえ都内の史蹟でも、おそらくご一緒に歩くことはできないでしょう。夏の行事の「金盞堂の会」だけしかご協力できる会はないと思います。それは平成6年の本会の結成以来、私が言い続けたこと。「城は現場へ足を運んでこそ受け止められる」に反します。しかし、まさに「断腸の思い」で実行しようと思えます。会長でなく、一人の城の研究者として。



感謝の花束を

「城を歩く会」会報 第41号

【はじめに】

「地は裂け、地は激しく震い、地は静いどのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く」と旧約聖書にあります。こうした激しい揺れは首都圏に住む私たちも体感しました。東北の地は、加えて巨大な津波に襲われ、甚大な災禍を被りました。大惨事を報じるテレビ画面を、なすすべもなく眺めるだけの私たちが耳にしたのは、被災した人たちがさまざまなシーンで発する「ありがとう」という言葉でした。破壊と絶望のただ中にすら、こんなにも美しい日本語があることを改めて思い知りました。いま復興と再生のとき、被災地とこの国のため、同好の私たちに何ができるかを考えます。先人たちが何代にもわたり心血を注いで遺してくれた文化と歴史を、感謝の気持ちを抱いて引き継ぎ、次代に手渡すことが、そのひとつではないかという思いに至るのです。「ありがとう」と心にささやきながら城を訪ねると、これまでとはちがった感懐を覚えるかもしれません。

【事務局から】

○「伝達ネット」完成
運営委員会や事務局からの情報を会員の皆さまにお知らせする「伝達ネット」を作りました。緊急時の連絡だけでなく、通常のお知らせも発信させていただきます。ご関心ください。

○「例会参加・不参加の連絡先」の変更
先に『会報』40号でお知らせした田辺さん・榎本さんのメールアドレスに誤記がありました。申し訳ありません。

今後は、榎本達夫さんのみご連絡くださいますよう、お願いします。
enomotol943@com.home.ne.jp ☎ 042-484-2608 携帯 090-3517-0765

【入会しました。よろしくお願ひします】
2月入会 森 一郎さん(神奈川県川崎市)
松永卓生さん(千葉県袖ヶ浦市)

(右)大田区消費者生活センター地図



皆さまのご協力をお願いいたします

会長代行 山岸弘明

大森会長には多年にわたりご指導をいただき、厚くお礼申し上げます。今後も、近辺での定例会や夏期研修会などにおきまして「城への思い」をお聞かせいただくことができましたら、このうえなく幸いに存じます。当面、従来の役員が全員留任し、下記のような分担により事業を継続いたします。何分、不慣れないことゆえ至らないところも多々あるかと思いますが、会員の皆さまのご理解と、絶大なご支援ご協力をお願い申し上げます。

名誉会長	大森拓二	運営委員	大森トモ子
会長代行	山岸弘明		田辺茂子
会長代行補佐	保科達夫		菅原真利子
事務局長	田辺泰夫	実行委員	遠藤正彦
事務局	榎本達夫		大室寅一

事務局からのお願い

例会参加のご連絡は、実施日の7日前から3日前までの間に、さらに、緊急時も、田辺泰夫、または、榎本達夫へご連絡ください。

	《電話/FAX》	《携帯》	《メール》
田 辺	03-3729-0858 F145-0061	090-2754-0790 大田区石川町1-11-6	y-tanabe@rs.ne.jp
榎 本	042-484-2608 F182-0017	090-3517-0765 調布市深大寺元町1-18-6	enomotol943@com.home.jp

現在、事務局情報を会員の皆さまへお知らせするための伝達ネットを構築中です。完成次第、活用につきご相談させていただきます。

【入会しました。よろしくお願ひします】

- 1月入会 保科基夫さん 埼玉鳳川口市在住 (紹介者:保科達夫さん)
- 2月入会 梅木赤広さん 東京都練馬区在住 (紹介者:松田光敏さん)

【城・ひとこと】①

「私は地方都市の城へは、駅からタクシーに乗らず歩いて行くようにしている。城下町の情景はもちろん、町全体の空気や匂いまで城に関連づけて見たいからである。まして、中世の城の場合、山坂を登るうちに、細道を歩く中に城の性格が読めてくるからである」(大森拓二『福と土塁、石垣を訪ね歩いた記録』2009年3月)

【例会ご案内】(通常例会、参加費各1,000円)

- ◎7月27日(水)：「夏期研修会」13時15分開会
会 場 大田区消費者生活センター。昨年と同じ会場(1階に地図)
(京浜東北線・東急線「蒲田駅」東口から徒歩5分)
- 演 題 ☆山岸弘明「江～姫たちの戦国」ゆかりの城を歩く
☆保科達夫「北条早雲が戦国期の先駆けといわれる理由(わけ)」
☆大森拓二「全国700の城を歩いた私の心に残った城」
☆同日、10月バシ見学会参加希望者確認、ならびに予約金2000円を申し受けます。
- ◎8月 : 夏休み休会
- ◎9月9日(金)：「大河ドラマ『お江』ゆかりの芝増上寺周辺を歩く」
10時、増上寺三門(国道に面する正面の最大の門)集合。
→増上寺大堂→將軍家墓所→北御堂屋跡(東京プリンスH)→
南御堂屋跡(秀忠・お江墓所跡)。周辺で昼食→最勝院前→
大門→芝神明→浜松町駅(解散)
予備日、9月16日(金)
- ◎10月7日(金)：「下野の名城を日帰りバスで」。7時45分、上野駅公園口集合。
佐野城・唐沢山城ほか
- ◎11月25日(金)：「古都鎌倉を訪ねる」(仮題)。予備日、12月2日(金)。
- ◎12月 : 冬休み休会
- ◎2012年1月21日(土)昼：「新年のつどい」(会場交渉中)
- ◎2月18日(土)：「行徳周辺を歩く」(仮題)。予備日、2月25日(土)
- ◎3月 : (計画中)
- ◎4月 : 1泊見学会「信越の城を訪ねる」(仮題)貸し切りバス利用。

【城・ひとこと】②

総路城や松本城に代表される「日本の城の美」は、緑の水濠と白いっくい塀、そびえ立つ天守閣のコントラストにあるが、関東地方に展開する「土の城」にこそ意欲と歴史が秘められている。私にとっていちばんの名城は、ふるさとの城・高田城と春日山城につきる。雪解けの桜咲く土の香りは生涯忘れることはできない。(「城を歩く会」会長代行:山岸弘明)

当然だ、残念だけれども』と。

その 11 月の運営、実行委員会の冒頭に私は会長の辞任を申し出ました。また、新年の会で私は『新年おめでとう』は一斉に唱え、『今年もよろしくとは私はいえない。断腸の思いで会長を辞任する』と申し出ました。歓談に移って『やめないで』『出られる条件の会には出て』と 50 名をこえる参加者の皆様から温かいお言葉をいただきました。私にとってこれまでの生涯にない『身に余るお言葉です。いかに体が動かなくとも、この声にそむくことはできません。山城の山坂だけでなく都内の史蹟も一緒に歩くことはできないでしょう。夏の行事の「会議室の会」だけしかご協力できる会はないと思います。それでは平成 6 年の本会の結成以来、私が言い続けた『城は現場へ足を運んでこそ受け止められる』に反します。しかし、まさに断腸の思いで実行しようと思います。会長ではなく一人の城の研究者として」。

皆さまのご協力をお願いいたします＝山岸会長代行あいさつ

「大森会長には多年にわたりご指導をいただき、厚くお礼を申し上げます。ご健康の許す範囲で『城への思いを』をお聞かせいただくことができましたらこのうえなく幸せに存じます。なお、当面、従来役員が全員留任し、大森会長の事業を継続致します。なにぶん不慣れなことゆえ至らないところも多々あるかと思いますが。会員の皆様のご理解と絶大なご協力をお願い申し上げます」。

3月 11日 14時 46分 東日本大震災発生、東北地方に大津波襲来、福島第 1 原子力発電所水素爆発、放射能被害拡大。東北地方中心に被害甚大。

3月 17日 大江戸線で大江戸の遺跡を訪ねる、②春日から代々木方面 中止
かねて構築中であった「伝達ネット」、電話などで緊急連絡

4月 5日 会報「速報、計画変更のお知らせ」を発行

「伝達ネット」、郵送、手渡しなどで配布

①4月 20日 春の三浦半島／新井城と三崎城 中止

②5月 17日 二か領用水遊歩道散策から再開、集合時間を繰り下げ、解散時間を早める

③6月 3日 「下野の名城を日帰りバスで」を、3月に予定していた「大江戸線の遺跡を訪ねる」に変更

5月 24日 第 2 回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

6月 3日 「会報第 41 号」を発行＝はじめに

『地は裂け、地は激しく震い、地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く』と旧約聖書にあります。こうした激しい揺れは首都圏に住む私たちも体験しました。東北の地



大津波に被災した大船渡市

は、加えて巨大な津波に襲われ、甚大な災禍を被りました。大地震を報じるテレビ画面を、なすすべもなく眺めるだけ私たちが耳にしたのは、被災した人たちがさまざまなシーンで発する『ありがとう』という言葉でした。破壊と絶望のただ中にすら、こんなにも美しい日本語があることを改めて思い知りました。いま復興と再生のとき、被災地とこの国のため、同好の私たちに何ができのかを考えます。先人たちが何代にもわたり心血を注いで遺してくれた文化と歴史と感謝の気持ちを抱いて引き継ぎ、次代に手渡しをすることが、そのひとつではないかという思いに至るのです。『ありがとう』と心にささやきながら城を訪ねると、これまでとは違った感慨を覚えるかもしれません」

6月3日 「大江戸線で大江戸の遺跡を訪ねる（大江戸線・春日駅集合＝38名）
再開第1弾は「大江戸線シリーズ」の第2回。文京区役所の文京タワー展望台から後樂園周辺の武家屋敷跡を一望、2 駅移動神楽坂は牛込城を巡り周辺で昼食、牛込神楽坂駅から再び大江戸線乗車、都庁前駅で下車、都庁周辺の史跡を散策、新宿御苑前駅から新宿御苑、江戸岡から新宿の変貌を読み取る。

7月27日 夏季研修会（蒲田・消費者生活センター＝54名）

- ①「江～姫たちの戦国」ゆかりの城を歩く 山岸弘明
- ②北条早雲が戦国期の草分けといわれる理由（わけ） 保科隆夫
- ③全国700の城を歩いた私の心に強く残った城 大森拓二

9月9日 「大河ドラマ『お江』ゆかりの芝増上寺周辺を歩く」（浜松町・増上寺三門集合）

厳しい残暑の中、徳川将軍家菩提寺の増上寺を中心に回る。将軍家霊廟で2代将軍秀忠、お江夫妻以下、6代家宣、7代家継、9代家重、12代家慶、14代家茂、家茂の正室・皇女和宮の宝塔を拝観、重要文化財の黒門、台徳院霊廟総門、東照宮などの周辺史蹟を探る。

9月16日 第3回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

10月7日 「下野の名城を日帰りバスで」（上野駅公園口集合）

快晴の一日、バスで栃木県の名城を訪ねる。

- ①唐沢山城＝平安時代藤原秀郷築城とされる。鎌倉時代はじめ藤原氏の流れをくむ佐野氏が再興、戦国時代は小田原北条氏と越後上杉氏の戦乱に巻き込まれ、攻められた都度両軍に組み込まれた。後期は北条領で、小田原征伐のあと佐野氏の家名は残ったが、秀吉の腹心富田信吉が養子として送り込まれた。江戸時代はじめ、山城を廃して平地の佐野城に移った。断崖と深い谷地に囲まれた天然の要害、関東では珍しい石垣の城で、本丸周辺にみごとな高石垣が連なる。自



新宿御苑



唐沢山城

山石のあら割り石を活用、コーナーは発展途上の算木組、織豊石積みの影響がうかがえる。本丸跡で藤原秀郷を祀る唐沢山神社と天狗岩からの眺望は抜群、広く関東平野を一望した。

②佐野城＝慶長7年佐野信吉築城の連郭式平山城。東武線佐野駅と高架橋で連結した佐野城山公園として整備されている。慶長19年家康の勘気にふれて改易廃城、石垣や建造物は徹底的に破却され、現在は掘切り、土塁、2重犬走りなどにとどまっている。

③佐野薬師＝関東三大薬師で知られる。佐野城の移築城門がある。

④小山城＝中世小山氏の本拠で鎌倉時代から守護職を相伝した。戦国時代北条氏の軍門に下ったが小田原攻略後秀吉に没収された、江戸時代は古河藩領の陣屋が置かれた。思川河岸段丘に立地する連郭式縄張りで城址公園として整備されている。

⑤小山評定の場＝慶長5年会津上杉景勝攻略に向け進攻中の徳川家康が当地で石田三成の挙兵を知り、東軍諸将と軍議の上、関が原に向かった。

10月7日 「会報第42号」発行＝はじめに

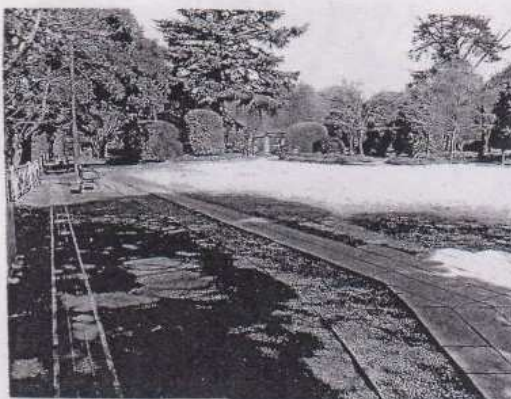
「あの3月11日以降、当会の運営はどうなるのだろうと不安を覚えたことはたしかです。その杞憂を吹き払うように、回を重ねるごとに参加される会員、新しく加盟され方が増え続け、いつになく厳しい暑さが続いたのにもかかわらず、7月の夏季研修会に54名、9月の芝増上寺には46名が参集されました。10月のバス見学会も最も大型のバスをチャーターしなければならないほどの大盛況です。こうした皆さまのご熱心さに対し、役員一同、十分にお応えしているという気持ちを引き締めています。今回運営・実行両委員会を一本化したこともその一環です。『新運営委員会』に倍旧のご支援をお願いいたします」。

11月25日 「古都鎌倉を歩く」(JR・北鎌倉駅集合)

北鎌倉に集合して鎌倉城外郭「七口」の一つ亀ヶ谷坂切り通しと古都鎌倉の名刹を歩いて鶴岡八幡宮で解散。鎌倉城はかまど状の小高い山に囲まれていた。鎌倉城へは虎口は切り通しと呼ばれる七つの道で、鎌倉時代と室町時代、敵の侵攻から鎌倉城を守るうえでもっとも重要な防御拠点。京都や全国の鎌倉道と結ぶ唯一の交通路でもあった。

外郭線は最後の守備ラインで山上に武者走りを設けて緊急時の兵の移動道とした。

東慶寺は女性を解放した駆け込み寺、建長寺は鎌倉五山の第1位で芝増上寺からの移築唐門が修理を終えてさん然と輝く。英勝寺は徳川家康側室お勝創建の水戸家の尼寺、鶴岡八幡宮は源氏の守護神で幕府のより所となった。



佐野城



亀ヶ谷城

1月14日 新年のつどい (内幸町・シーボニア メンズクラブ=50名)

内幸町中日ビルのシーボニア メンズクラブで「新年のつどい」を開催した。

1月14日 「会報第43号」発行=はじめに

「昨春、東日本を襲った大災害は、国中の人たちを震撼させ、加えて、これまで信じていた、あるいは、信じようと努めていた化学技術への不安をつのらせました。その半面、いや、だからこそ、というべきでしょうか、『つながり』『風土』『郷土文化』といった無形のものの大切さを、改めて見直そうという風潮が高まっています。『城を歩く会』も、古人が今に遺わしてくれた日本文化のもっとも貴重なシンボルのひとつといえる『城』を訪ね、見て、知る楽しさを、さらに追い求めていきたいと思えます。今年は研修勉強会をこれまでの夏だけでなく春にも開催し、また、行動の範囲を広げるため、バスによる日帰り見学会も春秋の2回実施することとしました」。

2月18日 「京王線で武蔵台に残る古城をめぐる」(京王電鉄高尾線・京王片倉駅集合=43名)

徒歩20分ほどで歩ける京王高尾線の片倉駅とJR横浜線の真ん中、小高い丘上に片倉城がある。午後は京王線で深大寺駅へ移動、路線バスで10分ほど、城は深大寺と神代植物園、水生公園に隣接している。

①片倉城=創建は不詳だが在地領主の長井氏築城とされる。戦国時代に北条氏照が大改修したが天正18年秀吉の小田原攻めで落城、廃城となった。舌状台地先端を掘切り分断した「かき上げの城」で天然の地形を最大限に利用した、単純構造の連郭式縄張り、片倉城址公園として整備、土塁、空堀、掘切り、物見、櫓台、虎口などが良好に保存されている。

②深大寺城=扇が谷上杉氏の家臣・難波氏築城とされる。ここも城址公園として整備、土塁、空堀、虎口などが現存する。

3月5日 春季研修会 (大森・入新井集会所=50名)

①大河ドラマ「平清盛」と、4月「一泊見学会」の見どころ 山岸弘明

②「城」が守ろうとしたもの 保科隆夫

③基礎城郭講座 大森拓二

3月23日 第5回運営委員会 (虎の門・北陸産業倶楽部)

2012年1月14日

「城を歩く会」会報 第43号

【はじめに】
昨春、東日本を襲った大災害は、国中の人たちを震撼させ、加えて、これまで信じていた、あるいは、信じようと努めていた化学技術への不安をつのらせました。その半面、いや、だからこそ、というべきでしょうか、『つながり』『風土』『郷土文化』といった無形のものの大切さを、改めて見直そうという風潮が高まっています。
「城を歩く会」も、古人が今に遺わしてくれた日本文化のもっとも貴重なシンボルのひとつといえる『城』を訪ね、見て、知る楽しさを、さらに追い求めていきたいと思えます。今年は、研修勉強会を、これまでの夏だけでなく春にも開催し、また、行動の範囲を広げるため、バスによる日帰り見学会も春秋の2回実施することとしました。皆でのご参加をお待ちしております。

【お知らせ】
○新会報のご連絡
編集連絡先をお願いします。
esometsu1945@com.horai.ne.jp ☎ 342-454-2500 携帯 999-907-9788

○次号『会報』
次の『会報』44号は、5月17日に発行予定です。

【入会しました、よろしくお祈りします】
11月入会 友野朝二さん、東京競馬地区主任 (編集者 藤辺次子さん)

【城・ひとこと】
今日はどんな話を聞かせていただけるのだろうかと出る気持ちで現地に着く。心算はいい等かかれた先生方の資料をいただき、熱く語る解説を聴くと、もう城ワールド。知らぬように、はぐれぬようにと気配ってくださる委員の皆さま。ありがとうございます。
生き残ったため、おの手、この手の城跡に初めて感心して以来1部の城跡が、最近行く先々の城主に思いを馳せ、摩訶不思議。そこで生き残った人々の生き残り、城跡たちは歴史の扉、放みかっ開く。こんなには面白くなるなんて、ずっと思っただけに歩いてみたい。(『城を歩く会』会長 山崎裕子)



片倉城

4月4、5日 一泊見学会「バスで信越の城を歩く」(池袋駅西口集合)

恒例の一泊旅行を春先の信越方面で開催。例年のない大雪で雪解けが遅れ、計画どおりのコース取りが危ぶまれた。地元の直近の情報で、飯山城は積雪が多く立ち入れない、春日山城もまだ残雪がある、とのことであった。初日に上田城、飯山城、2日目福島城、春日山城、高田城の当初予定を大幅変更してバスは池袋を出発、初日は晴天、しかし2日めは朝から小雨がぱらつく、あいにくの空模様となった。

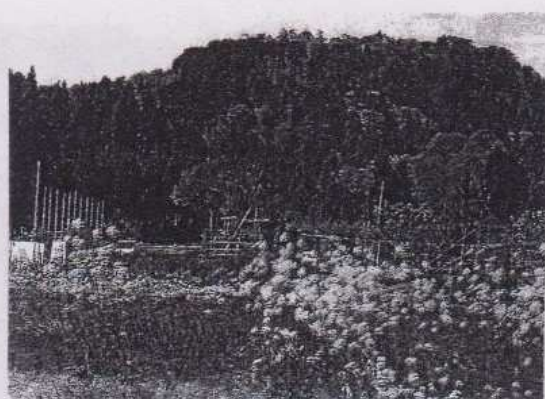
- ①上田城＝戦国後期の天正11年真田昌幸築城。天正 年、慶長5年徳川家康、秀忠との両度の戦いに勝利した歴史上の名城。関が原の戦い後、いったん破却されが元和8年仙石氏が再建、江戸後期は松平5万石で明治維新となった。本丸東口は高石垣、本丸水濠に囲まれた櫓門で、南櫓、北櫓、西櫓を現存または移築、復元、高さ15mの千曲川断崖は野面積みの鉢巻石垣になっている。
- ②高田城＝慶長19年徳川家康の六男松平忠輝居城として天下普請築城、江戸後期榊原15万石城下となる。関川の水路を変えて築いた3重堀で囲んだ総構え輪郭式縄張りの土の城。雪国らしいガンギ通りの続く城下を通り抜けて城址公園へ。「日本三大夜桜」で有名だが開花が遅れてようやくつぼみが膨らんだ。広い水濠と高い土塁、天守の代りにされた木造復元の御三階櫓は内部が博物館になっている。
- ③越後五智国分寺、親鸞聖人流罪上陸の地＝やや強風、怒涛のように白波を立てて押し寄せる日本海の荒波に声を失う。

この日は上越市大潟区の鶴の浜ニューホテルに宿泊、恒例のカラオケ宴会。二日目は小雨。

- ④越後福島城＝慶長11年上杉家を引き継いだ堀秀治が春日山城から直江津に城地を移すが3年後に改易、続く松平忠輝も高田城に城を移したので2家7年で廃城となった。
関川河口に立地する輪郭式平城で古城小学校が本丸跡地、現況は土塁、礎石など。傘を差しながら小学校の前庭に福島城碑と教育委員会の解説看板などに目をやる。
- ⑤春日山城＝戦国時代上杉謙信築城、景勝と2代、秀吉の国替えで入った堀氏が廃城とした。謙信を祀る春日山神社で降車、瞬間雨がやんで計画どおり千貫門ルートへ、倒木、ぬかるみなど道は荒れるが残雪は少ない。念のため世話人2人が先行、携帯で状況報告、本丸まで大丈夫の連絡にふるいたつ、千貫門の守り、直江屋敷、毘沙門堂、護摩堂をへて本丸へ。一瞬視界が広がって日本海や頸城連山が現れる、感動の一とき、足早に井戸曲輪、景勝屋敷、二の丸、三の丸へ。途中日陰の残雪斜面が行く手を阻む。一方は急ガケ、助けあって渡る。監物堀、春日山史蹟広場で昼食、春日山城を当会一番の思い出とする会員も多い。



高田城



春日山城

⑥松本城＝飯山城積雪中止にともなう代替え。松本城は3回目だが姫路城と人気を二分する国宝
天守、何度見ても楽しい。黒い下見板と白壁が調和、天守群の組み合わせはまさに絶妙のコン
トラストをみせる。午後7時半、予定どおり出発点の池袋に到着、解散。

5月17日 「名門三浦氏の海城、新井城と三崎城を訪ねる」(京浜急行・三崎口駅
集合)

前年雨天中止となった4月計画の仕切り直し。三崎口駅を10時出発、路線バスで「油壺」に
向かう。討ち死にした城兵の血汐が地名のおこりとする油壺を眼下に望む。平安以来の名門・
三浦氏最後の地新井城を見学、午後はバス移動、支城の三崎城を回る。

①新井城＝鎌倉後期、幕府創設に貢献、扇が谷上杉氏と相模守護職を勤めた三浦氏の築城。戦国
時代伊勢から進出した北条早雲に追われて新井城に籠城、3か年持ち堪えたが敗れて滅亡した。

「運すでに尽きぬる上は落ち行きたりとも微運のわれら、なにほどか逃げべき、犬死せんより
命の限り戦して弓矢の義をもっぱらにすべし、運の通塞も軍の吉凶もいうべきところにあらず、
一足も引くまじく」(北条記)、激戦の地を歩く。

②三崎城＝油壺と小網代港に挟まれた三浦水軍の本拠。三浦市役所周辺に残るゆかりの寺院や現
存する土塁、空堀などを回る。まぐろで有名な三崎港で解散。

5月17日 「会報第44号」発行＝はじめに

『私にとって一番の名城は、ふるさとの城、高田城と春日山城につきます。雪解けの桜咲く土
の匂いは生涯忘れることはできない』。本会報41号に山岸弘明会長代行が書いています。4月
4、5日は年一度の一泊見学会でした。平地の雪はすでに解けていましたが、サクラはつぼんだ
ままの信濃と越後を訪ねました。上田城、松本城、高田城、越後福島城、春日山城。天下の名
城ばかりですが、なかでも圧巻は春日山城でした。『何としても全員で春日山城の山頂まで登
っていただく』と山岸さんは計画段階からつよく主張されました。ぬかるんだ山道を辿り、
数々の郭や防御施設の間を縫って登ると本丸に達します。謙信が籠もって殺生を悔いたあたり
に詣で、大井戸の跡に武士たちの生きた証しを確かめたあと、山腹に設けられた二の丸、三の
丸をへて出発地点に帰り着きましたが、残雪の巨城を歩き通した40人の会員さんの満面に、
当会がめざしている「訪ね、見て、知る喜び」が溢れていました。積雪による飯山城往訪の断
念、出発前日の激烈な暴風雨という思いがけない出来事があっただけに、こうした会員さんた
ちの反応に山岸さんも安堵の表情でした。



油壺

2019年5月17日

「城を歩く会」会報 第44号

【はじめに】
「私にとって一番の名城は、ふるさとの城、高田城と春日山城につきます。雪解けの桜咲く土の匂いは生涯忘れることはできない」。本会報41号に山岸弘明会長代行が書いています。4月4、5日は年一度の一泊見学会でした。平地の雪はすでに解けていましたが、サクラはつぼんだままの信濃と越後を訪ねました。上田城、松本城、高田城、越後福島城、春日山城。天下の名城ばかりですが、なかでも圧巻は春日山城でした。『何としても全員で春日山城の山頂まで登っていただく』と山岸さんは計画段階からつよく主張されました。ぬかるんだ山道を辿り、数々の郭や防御施設の間を縫って登ると本丸に達します。謙信が籠もって殺生を悔いたあたりに詣で、大井戸の跡に武士たちの生きた証しを確かめたあと、山腹に設けられた二の丸、三の丸をへて出発地点に帰り着きましたが、残雪の巨城を歩き通した40人の会員さんの満面に、当会がめざしている「訪ね、見て、知る喜び」が溢れていました。積雪による飯山城往訪の断念、出発前日の激烈な暴風雨という思いがけない出来事があっただけに、こうした会員さんたちの反応に山岸さんも安堵の表情でした。

【所会のご案内】

◎5月17日(水) 日帰りバス見学会、「圓城の名城を歩く会」
参加費 5,000円(お弁当代込み)
集合・出発 8時0分 / 八木手線・原町駅北口「圓城」駅南口→東口(湯野側)を貸し切りバス(貸士急)で出発。時刻厳守してください。
行 程 アケライン経由、五井駅で手袋地域の参加者と合流。上野原分団中々大寺菩提院・蔵下町・経理城址→9在(おゆみ)城址。朝陽院前で下車参加の方、下車、解散。

◎7月11日(月) 「東野見学会」

参加費 1,000円
会場 「大田区・大野見会堂」(JR「大森駅」東口から徒歩3分)
開 会 10時15分開会。(受付開始：10時)
期 間 (講演開始後)
講演者 大野見二 「城址見学会 その2」
会報編集者 「城」が守ろうとしたもの―城址見学会の巻頭
会報編集者 「お城のはなし」

6月6日 日帰りバス見学会「房総の名城をバスでめぐる」(田町駅集合)

梅雨入り前の好天、東京湾アクアラインを經由、久しぶりに房総方面をバスで訪ねる。

- ①上総国分尼寺＝「更級日記」のふるさと、上総国分尼寺跡展示館で映像と復元回廊を回る。
- ②大多喜城＝中世上総武田氏居城。天正18年家康は安房に押し込めた里見氏奉制のため本多忠勝10万石を配し大改造させた。後期は中小譜代大名が守り、松平大河内3万石で明治維新に。天守建築は総南博物館で残念ながら史実によらない。薬医門や大井戸が現存、城下を散策した。
- ③鶴舞城＝明治維新の時、徳川宗家16代家達の駿府70万石転封にともない、元老中、浜松7万石井上正直が移され成立、明治4年の廃藩置県まで。
切り立つ断崖は天然の要害を感じさせる。本丸跡、藩庁舎跡、藩校跡、大手門跡、現存の本丸水濠、土塁などを巡る。
- ④小弓城、北小弓城、生実陣屋＝関東動乱のころ千葉氏一族の原氏が築城、下総、上総境めの城で戦国時代に激しい争奪戦を繰り広げた。天正18年豊臣秀吉の小田原攻めで開城、江戸時代は北小弓城の山麓に開いた生実陣屋が森川1万石となった。生実陣屋本丸跡で空堀、土塁、大手虎口、参勤交代の引き込み道などの遺構を探った。

7月23日 夏季研修会(大田区・入新井集会所)

- ①お城のお話し 榎本達夫
- ②城が守ろうとしたもの 保科隆夫
- ③城郭基礎講座その2 大森拓二

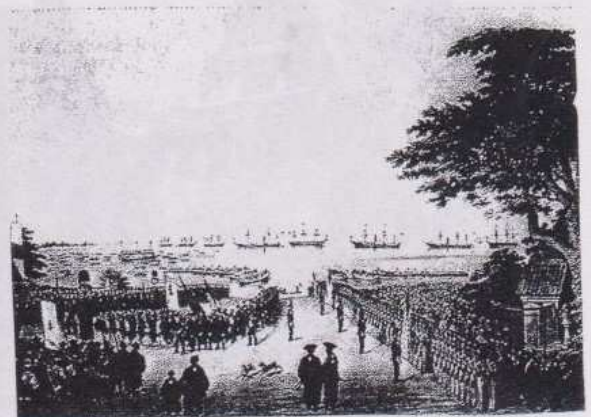
9月13日 「横浜に開港前後の史蹟を訪ねる」(JR京浜東北線・関内駅集合＝46名)

横浜は安政元年ペリーの2度目の来航で「日米和親条約」締結地となり5年後開港された。外国人居留地が作られ明治はじめ国際貿易港として発展する。この港を經由して西洋や欧米から人や物資、文化が流入し文明開化をもたらせた。開港直後から輸出が本格化、主に生糸貿易港として大商人を輩出した。彼らは多額の外貨を獲得し、日本はその外貨で近代化を成し遂げていくことになる。

朝から快晴。関内駅に集合、居留地入り口の吉田橋「関門」から馬車道へ。県立歴史博物館では地元ボランティアから2階「横浜開港と近代化」の説明を受ける。開港場・横浜のジオラマと文明開化、近代産業の発達などが興味深い。県博の建物は旧横浜正金銀行本店ビル、明治37年建築の復元、グリーンの巨大ドームネオ・ブロック建築で国の重要文化財に指定されている。



大多喜城



ペリー来航

赤いドームの旧横浜開港記念館はアールデコ様式、「横浜3塔」ジャックの塔を見上げる。重厚な神奈川県庁もキングの塔として親しまれている。ペリーと「日米和親条約」を結んだ開港広場と英国領事館周辺で昼食、午後は横浜港大棧橋へ、居合わせた2艘の豪華客船を眺めながら横浜の歴史文化を堪能した。

9月13日 「会報第45号」発行＝はじめに

「どんな城もそれぞれの歴史を背負っています。城を見ることは歴史を知ることである。といえかも知れません。歴史とは『History』ですが、2文字足りない『Story』という言葉の原義も『歴史』なのだそうです。『歴史』という本来の意味から『報告、説明、記事、事実に基づく話、物語』と変遷してきたのでありましょう。『必然性』『納得感を』。本号『城のひとつ』欄に会員の片桐明さんがこのような表現で当会の企画に対して要望しておられます。まさに『Story』という言葉が内包する意味内容そのものを望んでおられる、と受け止めさせていただきました。

会員の皆さまからお預かりする貴重な時間を大切に使用しなければならないという思いから、これまで効率本位のスケジュールに傾きすぎていたかもしれません。今後、『訪ね、見て、知る楽しさ』を皆さまに十分堪能していただけるよう、計画立案とご説明などに際し、倍旧の配慮をしてみたいです。

10月14日 「上野寛永寺・徳川将軍家霊廟を特別拝観」(上野駅公園口集合＝52名)

上野寛永寺が「東日本大震災復興支援活動」として実施した徳川将軍家第2霊廟の特別拝観、参加費の一部が寛永寺を通じて被災地に届けられた。

明治維新まで上野公園は寛永寺の敷地であった。根本中堂、本坊跡、重要文化財の鳥取池田藩上屋敷表門をめぐり、午後、寛永寺住職の案内で常憲院殿勅額門脇から普段は非公開の第2霊廟へ。花の元禄を謳歌した5代将軍綱吉、享保の改革をすすめた8代吉宗、ペリー来航後の混乱期、病弱の13代家定とその正室で大河ドラマにも登場した篤姫の墓碑が並ぶ。霊廟はかつて霊殿と廟所から成ったが現在は結界の宝塔だけが現存している。増上寺では味わえない将軍墓所の厳粛な雰囲気漂う。10代家治と11代家斉、12代家慶の眠る第1霊廟前、3代家光霊廟跡を回って鶯谷駅近くで解散、以後有志で上野公園、東照宮を見学した。

11月14日 日帰りバス見学会「伊豆、後北条氏の城と江川家の遺構」(新宿駅西口集合＝55名)

8時に新宿西口を出発、東名高速道で山中城と葦山城、葦山反射炉、政子の生誕地などを巡る。



横浜3塔の開港記念館



寛永寺

- ①山中城＝永禄年間北条氏康が東海道沿いの山脈を巧みに利用した箱根の要塞。天正 17 年秀吉の「小田原征伐」に備えて大改修したが一気攻めで落城した。土塁と空堀を回した、土の城だが城址公園として復元整備され、西の丸と西櫓間、岱崎出丸などに築かれた障子堀や、うね堀が圧巻、好天で富士山も姿をみせた。宗閑寺に松田康長など両軍戦死者が眠る。
- ②葦山城＝戦国延徳年間、伊豆全土を制圧した北条早雲が築城して自らの居城とした。70 年後の天正 18 年豊臣軍 4 万が包囲したが、氏規が抵抗して容易に落ちなかった。やせ尾根を巡らせた城地は意外と小規模にみえた。
- ③江川邸、葦山反射炉＝国重要文化財の葦山代官邸と江川英武が築いた大砲鑄造炉。
- ④蛭が島公園＝源頼朝の幽閉地とされる。頼朝に寄りそう政子像。

北条邸跡＝政子が生まれた北条氏発祥の地。政子うぶ湯の井戸や菩提寺をめぐる。

11 月 30 日 第 7 回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

12 月 8 日 「港北ニュータウンに横浜市歴史博物館、環濠部落と茅ヶ崎城跡を訪ねる」（横浜市営地下鉄・センター北駅集合＝38 名）

センター北駅から市歴史博物館と大塚、歳勝土遺跡公園を回り、遺跡公園工房をお借りして昼食、午後は徒歩移動して茅ヶ崎城を見学した。

- ①横浜市博物館＝「横浜に生きた人々の生活の歴史」をテーマに 2 万年にわたる町の歴史を紹介、円形の常設展示場は原始から近現代まで時代ごとに 6 つの部屋に区分、中世戦乱に生きるでは鎌倉海の玄関口の一つ六浦や、近世の東海道と宿場の繁栄が興味深かった。
- ②大塚、歳土遺跡公園＝博物館に隣接、弥生時代の竪穴住居、環濠、墓所を復元している。
- ③茅ヶ崎城＝永享年間上杉氏小机城支城として築城、後期は小田原北条氏に組み込まれ再興、主郭は真ん中の中郭で城主が居住、最高所の東郭は物見で古い形を残す。ほかに西郭、北郭などで構成、後北条式二重土塁、北郭虎口の守り、深い空堀などがよく復元整備されている。

平成 25 年（2013）

1 月 26 日 新年のつどい（シーボニア・メンズクラブ＝56 名）

内幸町のシーボニア・メンズクラブで恒例の新年のつどいを開催、新しい年を祝った。

1 月 26 日 「会報第 46 号」発行＝はじめに

「ご好評をいただいた昨年春の一泊見学会『バスで信越の城を歩く』に次いで、今年の見学地



山中城



港北ニュータウン

宿泊先をどこにするか、実は、運営委員のあいだでかなり議論が交わされたのです。かねての願いどおり震災後の東北を訪れたい、ならば、どの城を見るのか、交通手段は、宿泊の手当ては、費用は、下見は、などなどを斟酌した結果、『会津城を中心に戊辰戦争に敗れた城を訪ねる』と決めたのが、12月に入ってのことでした。

1月16日、NHKの大河ドラマ『八重の桜』の放送が始まりました。落城、敗戦にめげず、維新後の新時代をりりしく生きた会津武家出身の女性が主人公です。ひょっとしたら『今年の漢字』に『凜』が選ばれるかもしれないと予感させられるほどの順調な視聴率のようです。『会津ブーム』が到来するかもしれないとも予想され、急いでバスと宿泊先の予約を済ませました。

2月12日 日帰り見学会「練馬城と石神井城、堵島一族滅亡の城を歩く」(西武鉄道・豊島園駅集合=52名)

豊島園前に集合、遊園地の豊島園一帯は550年の昔、太田道灌に攻め落とされた豊島一族の城だった。中村橋駅まで徒歩移動15分、西武池袋線で石神井公園駅に移動、おぺんと広場で昼食、石神井城を見学して三宝池バス停で解散した。

豊島氏は桓武平氏秩父氏の出で、頼朝の挙兵に参加して石神川流域の豊島、足立、多摩、児玉、新座の5郡を所領した。関東の戦国時代が始まると古河公方に属して太田道灌と戦った。文明9年豊島泰明、泰経兄弟は平塚城で道灌に敗れ、追撃された練馬城、石神井城も相次いで落城、滅亡した。

- ①練馬城=石神井川南岸、舌状台地先端のガケ地と浸食谷に囲まれた自然地形を活用した要害の地、主郭は豊島園、周辺は住宅街に変わったが、東西の大空堀が現存、見る人を圧倒する。
- ②石神井城=武蔵台地の舌状台地先端に立地した豊島氏の本拠城、急ガケと三宝池を自然の要害とした。施錠された一の曲輪跡(本丸)を公園事務所の許可を得て立ち入る。土塁、空堀が明瞭に残る。落城の時、黄金の鞍を付けた馬にまたがり三宝池に入水したという泰経の娘の墓、照塚などを回る。

3月13日 春季研修会(大田区・入新井集会所=48名)

- ①松平容保と会津戦争~大河ドラマと秋の一泊見学会の舞台 山岸弘明
- ②城を守ろうとしたもの③ 保科隆夫
- ③家康の利根川東遷事業について 大出信好
- ④城構えの寺の100年 大森拓二

2019年1月16日

「城を歩く会」会報 第40号

【はじめに】
 ご覧いただいた昨年冬の一日見学会「バスで城跡の隅をめぐる」に続いて、今年の見学会「宿泊先をどこにするか、実は、運営委員のあいだでかなり議論が交わされたのです。かねての願いどおり震災後の東北を訪れたい、ならば、どの城を見るのか、交通手段は、宿泊の手当ては、費用は、下見は、などなどを斟酌した結果、『会津城を中心に戊辰戦争に敗れた城を訪ねる』と決めたのが、12月に入ってのことでした。

1月16日、NHKの大河ドラマ『八重の桜』の放送が始まりました。落城、敗戦にめげず、維新後の新時代をりりしく生きた会津武家出身の女性が主人公です。ひょっとしたら『今年の漢字』に『凜』が選ばれるかもしれないと予感させられるほどの順調な視聴率のようです。『会津ブーム』が到来するかもしれないとも予想され、急いでバスと宿泊先の予約を済ませました(1月9日-9日、会津磐梯館)。ご予約ください。

今年も「訪ね、見て、知るを楽しむ」を皆さまに感じていただけるよう、運営委員一貫、一般参加を兼ね、知事を出してまいります。ぜひ、会員の皆さまから当会の運営についてご意見、ご要望をお寄せください。お待ちしております。

【入会しました、よろしくお願ひします】

10月入会	奥内八重子さん	神奈川県鎌倉市(佐藤君 遠藤正彦さん)
	八重子さん	東京都 中野区(田 貴)
12月入会	吉田道子さん	同 文京区(田 奥内八重子さん)
	一ノ宮美津子さん	同 練馬区(奥 松野三郎さん)
	小林美津子さん	同 中野区(奥 大島純子さん)

【お知らせ・お願い】
 ◎今年から、且見り「一泊」とも「2日旅行」の予約をしたが、予約金をお預かりすることとしました。日帰り1,000円、一泊2万円(両泊泊7日以上の参加取りやめの場合は、ご返却いたします)。

◎会費などの納入、お銀不要のお手配をお願いします。

◎お申込などのご連絡 運営委員・坂本道夫へお願いします。
 www.city1911.com, tel. no. 39 ☎ 042-084-2000 携帯 090-3517-0755

◎『会報』次号発行 4月13日の発行会を予定しています。



石神井城

3月18日 第8回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

4月12日 日帰りバス見学会「上州の名城をめぐる」（池袋西口公園集合＝50名）

池袋から関越高速道を前橋インターで降りる。上野の中世、戦国史の中心となり井伊直政が大改築した箕輪城、関東では珍しい総石垣の山城、太田金山城を回る。

①箕輪城＝中世高崎地方を拠点に西上野を支配した長野氏の平山城であったが、永禄年間、西上野に進出した武田信玄に攻められて落城、以後、織田、後北条、徳川氏と変遷した。天正18年四天王の一人井伊直政12万石が入城して大改造するが慶長3年城を高崎に移して廃城となる。国指定史蹟として整備、大堀切、大空堀は圧巻、石垣、門跡、馬出しなどが復元されている。

②金山城＝金山は鎌倉幕府を倒した新田義貞の本拠だが館城跡は確認されていない。

文明元年新田氏の子孫岩松家純が築城、後期は重臣の由良氏が実権を握った。戦国時代は上杉、武田氏を撃退したが、後期は北条氏の支城、小田原の落城で廃城となった。

戦国期関東7名城の一つで、近年の調査復元で国史蹟に指定された。山頂の実城（本丸）を中心に三方のやせ根根に城地が延びる。西城を進むと石垣が連続して総石垣となる。石敷きの城道、土塁石垣などに見ごたえ、総石垣の大手虎口は3段で圧倒的な迫力があつた。

4月12日 「会報第47号」発行＝はじめに

『城内の婦女子はみな断髪した。髪を結う手間を惜しんでの処置であつた。城内の士気は少しもおとろえず、敵の砲弾が飛んでくると、女たちは便捷勇敢にはたらい、濡れむしろで包みとり、味方の砲弾に利用した』。歴史小説作家の海音寺潮五郎氏が『日本名城伝』で官軍に対する会津藩の戦いぶりをに書いておられる。

『しかしながら（1か月後）刀折れ、矢つき、降伏開城ということになり、大手の門に降旗を立てた。近世の城で実際に戦闘を経験しているのは大坂城、熊本城、会津若松城、五稜郭の四城しかないが、四城とも力攻めでは決しておちなかつたのだ。難攻不落の名城といつてよいであらう』とも。

5月23日 日帰り見学会「塩の寺の町行徳と、サッポロビール千葉工場見学」（東京メトロ東西線行徳駅集合＝50名）

行徳駅から旧行徳街道「塩と寺の町」を辿る。行徳の塩は家康以来幕府による本格的な整備を受けて発展した。元塩場所有の旧家、田中愛子さん宅を訪ねる。旧江戸川行徳河岸は塩輸送水路として江戸日本橋へ通じた。物、人の流通で町は栄えたが一方で台風による高潮に悩まされたりもした川の町の歴史を学ぶ。



箕輪城



金山城

妙典駅からチャーターバスで船橋のサッポロビール工場を見学した。

6月5日 日帰りバス見学会「名家・今川氏の居城、家康の隠居城、早雲出世の城を訪ねる」(新宿駅西口集合=56名)

新宿西口から東名高速道で沼津インターへ。中世早雲の興国寺城、家康ゆかりの駿府城などを見学した。

- ①興国寺城=戦国時代はじめ今川氏築城、文明年間同家の内紛解決に功績があった北条早雲に与えられた。早雲の出世城、のち伊豆の韭山城に本拠を移し、関東制覇への道をひらく。江戸時代はじめの慶長年間廃城。国史跡。本丸跡から高い土塁、大堀切りを半周、櫓台石垣、石山を通した巨大堀切りが旧態をとどめている。
- ②小島陣屋=江戸中期、若年寄松平滝脇信孝が加増され1万石の陣屋を築く。格式は陣屋だが高さ4mを越す石垣を回し、大手を櫓形とするなど城構えにみえる。
突然名乗り出た郷土史家の的はずれ解説と、蜂発生のため大手虎口一帯が「立ち入り禁止」で、残念ながら消化不良に終わる。
- ③駿府城=駿河国府の地で明治に静岡となった。室町時代は駿河守護職今川氏の館跡で詰め城が賤機山であった。今川氏の没落後、徳川家康が跡地に駿府城を築き、浜松から居城を移す。天正18年家康は関東に移されるが江戸幕府開設後天下普請で大改修を行ない自らの隠居城とした。縄張りは輪郭式平城。二の丸、三の丸堀と石垣が現存、平成に異櫓、二の丸東御門が復元された。

7月18日 夏季研修会(大田区・入新井集会所=53名)

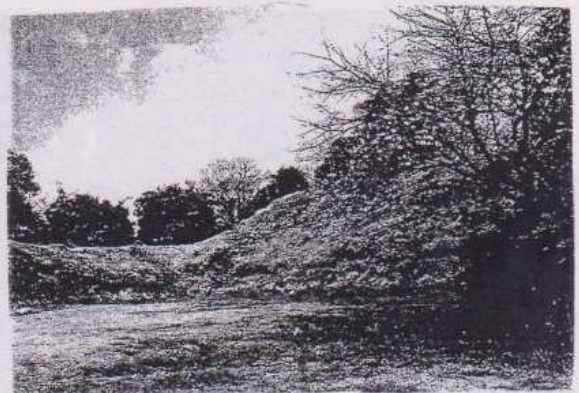
- ①会津白虎隊と二本松少年隊~秋の一泊旅行もう一つの見どころ 山岸弘明
- ②城が守ろうとしたもの④会津藩の場合 保科隆夫
- ③全国の城 名言・迷句集 大森拓二

7月18日 「会報第48号」発行=はじめに

『会津藩は砲煙のなかに官軍を迎え、少年、婦人さえ刀槍をとって戦い、しかし敗れた。明治元年9月22日午前、容保は麻上下を付け、草履を穿ち追手門をひらかせ、城下を歩き、甲賀町に設けられた式場へゆき、降伏した』。7月20日放送予定の大河ドラマの予告ではありません。司馬遼太郎の『王城の護衛者』の一節です。朝廷を守護するため藩論を押し切って上京し、そのあげく朝敵の汚名を着せられた容保以下会津藩の武士たちは、落城後、奥州斗南に閉じ込められます。司馬氏の淡々とした表現の裏に会津の怨念のうめきが聞こえてきそうです。



旧江戸川



興国寺城

東日本大震災のため延び延びとなっていた『東北の城をめぐる』企画が10月に実現できることになりました。会津藩とともに奥羽列藩同盟を組んだ白河、棚倉、二本松などの各城を訪ねます。この企画によって、日本の近代化のため通過しなければならなかったとされる会津戊辰戦争とは何であったかを感じられれば『訪ね、みて、知る楽しさ』を追い求める当会の目的の一端がかなえられることになります。

8月22日 第9回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

9月10日 日帰り見学会「芝離宮を訪ね、將軍の御座船『安宅丸』に乗る（JR・浜松町駅集合＝43名）

浜松町駅に集合、隣接する芝離宮庭園をめぐり、日の出棧橋から観光御座船「安宅丸」に乗船して、臨海副都心台場の青海まで30分ほどの船旅を楽しむ。午後は幕末の海防陣屋・第三台場へ移動、徒歩でレインボーブリッジを渡った。

①芝離宮庭園＝江戸時代初め大久保小田原藩作庭、紀伊徳川家、有栖川宮家をへて離宮となり関東大震災後東京市に下賜された。箱庭を思わすコンパクトな作り、池泉の回遊式で元は潮入りだった。

②安宅丸＝3代將軍家光が造った豪華絢爛の將軍専用御座船は大きすぎて航海できず権威の象徴として保留されたという。

③第三台場＝ペリー来航の翌嘉永7年竣工、石材は相模、伊豆、安房、土砂は品川御殿山などの台地を切り崩して運び、大砲は葦山の反射炉で造った。第六台場の間を観光船が通過、またレインボーブリッジから第三台場、第六台場を俯瞰、臨場感溢れた見学会となった。

10月8～9日 一泊バス見学会「戊辰戦争を戦った城をめぐる」（上野駅公園口集合＝53名）

午前8時上野駅を出発、一昨年東北大地震の被災地で、戊辰戦争の激戦地を回った。

①白河小峰城＝白河は古来みちのくの玄関で白河の関が設けられた。奥州藤原氏を滅ぼした頼朝が結城氏に与え、小峰城は庶流の小峰氏が築いた。寛永4年棚倉から丹羽長重が10万石で入封、幕命により近世城郭に大改修した。明治維新の戦いは奥羽越同盟に加わり、新政府軍とのあいだで壮烈な争奪戦を展開したが、火力にまさる政府軍に圧倒され、激闘ののち落城した。城地は現在小峰城公園で、急勾配の高石垣が現存、本丸3重櫓と南御門が復元されたが、平成23年の東北大地震で石垣の一部が倒壊、主郭部は立ち入り禁止であった。三の丸から遠望、石垣が崩れ土肌があらわな被害状況を目の当たりにした。

②棚倉城＝元和年間丹羽長秀が築城、以後城主は譜代中堅大名が目まぐるしく変遷した。明治元



白河小峰城



会津若松城

年の東北戦争は、新政府軍に攻められ城主の阿部正外が城を自焼した。土作りの輪郭式縄張り、本丸周辺は城址公園として保存、御殿があった本丸の土塁、水濠を回る。

- ③猪苗代城＝戦国時代猪苗代氏居城、天正18年秀吉の天下統一で会津の支城に位置付けられた。寛永年間保科正之が会津藩主となると城代が置かれた。猪苗代湖を見下ろす平山城で、戊辰の会津攻めで自焼した。亀が城公園として整備され、石垣や空堀が良好に現存している。
会津若松ワシントンホテルに宿泊、恒例の宴会後就寝

- ④会津若松城＝室町中期至徳年間芦名氏創建とされる。のち伊達政宗が攻め取り、蒲生氏郷、加藤明成が大改修して東北屈指の名城となった。江戸時代は2代將軍秀忠の4子保科正之23万石が入り3代のとき松平氏を称した。幕末維新の戦いで会津藩は新政府軍と戦い、1か月の籠城に耐えた。野面積みなどの石垣と水濠が現存、天守は明治はじめ取り壊されて昭和の再建。白虎隊ゆかりの飯盛山、滝沢本陣など市内の名所も回る。

- ⑥二本松城＝嘉吉年間畠山氏が白幡が峰に創建。加藤嘉明が大改修して、丹羽氏が3の丸御殿、箕輪門を作って城下を整備した。戊辰戦争は新政府軍の攻撃で落城、第一線守備隊の任についた二本松少年隊の悲劇があった。

10月8日 「会報第49号」発行＝はじめに

11月12日 日帰り見学会「あまり知られていない鎌倉の南部を歩く」(JR横須賀線・鎌倉駅西口集合＝51名)

鎌倉駅から緑が丘入口行きバス乗車、三浦に抜ける名越切り通しと鎌倉城の支城住吉城、周辺の名刹名勝・法性寺、和賀の浦、光明寺を歩いた。

- ①名越切り通し＝バス停前の急坂道を5分ほど登るといきなり大空とうへ。巨岩壁を掘り切った幅1mほどのすきまを通り抜ける。山頂に柵形虎口と平場、置石。平場は守備兵の集結地で、置石は敵兵人馬の進攻を防ぐ、切り通し頂上から外郭山並みに連なる武者走りを進む。攻め寄せる敵軍に対する最後の防御ラインで鎌倉城を取り囲んでいる。
- ②お猿島の大切り岸＝延々と連なる大切り岸、所々に矢倉がのぞく。かつて鎌倉城の外周すべてが切り岸で固められていた。
- ③住吉城＝鎌倉城の支城で弱点の西側海岸線を守る。戦国時代三浦義同が籠城、北条氏に攻められて落城した。小坪海岸から城跡と周辺切り岸絶壁を遠望する。
- ④光明寺＝浄土宗大本山で開基は4代執権北条経時。総門、山門、大殿、客殿、本坊など。巨大宝きょう印塔を連ねる日向延岡藩内藤家墓所では墓塔の質量に圧倒される。



二本松城



皇居

11月12日 「会報号外」を発行

12月6日 「警視庁見学と皇居参観」(有楽町線・桜田門駅集合=52名)

皇居桜田門に集合、桜田門と警視庁、午後は桔梗門前に再集合して皇居を参観した。途中桜田門、警視庁前でインドからお帰りの天皇、皇后陛下の車列をお迎えする。私たちの歓声に気付かれた両陛下が窓を開けられ手を振って応えられた。

①警視庁見学=警視庁参考室、通信司令センター、ふれあい広場教室などを見学。

②皇居参観=宮内庁職員の案内で宮殿、宮内庁庁舎、元枢密院庁舎、伏見櫓、富士見櫓、富士見多聞などを回った。

平成26年(2014)

1月18日 2014・新年のつどい(銀座ライオンクラシックホール=50名)

銀座7丁目銀座ライオンビル6階の銀座クラシックホールで恒例の「新年のつどい」を開催、新しい年を祝った。

1月18日 「会報第50号」を発行=はじめに

『十年ひとむかし』ということばがあります。物事は10年も経てば昔のことになってしまう。世の移り変わりはそれほど激しいのだという意味でありましょう。平成6年4月大森拓二会長を中心に5名の同好の士が語り合っ『城を歩く会』を立ち上げました。翌年1月、『杉並区広報』『世田谷区広報』紙上で第1回江戸城見学会を発表したところ、参加者があまりにも多かつたため、二日間に分けて実施したそうです。20年前のことです。

以来大森拓二会長はじめ講師の先生がたの熱心なご指導をいただき、城とその周辺について勉強を続けてきました。最近も例会は毎回のように参加者が50人を越え、まさに『20年ひとむかし』とは真逆の状況が続いています。20年という時間は、実に多くをなすことに加担してくれるものである、と実感させられるのです。そこで、創立20周年を迎えた本会は『記念のつどい』などを計画しています。会員皆さまのご理解とご賛同、ご協力をお願いする次第です。

2月20日 春季研修会(大田区入新井集会所=56名)

①太閤大坂城と徳川大坂城~創立20周年記念旅行の見どころ 山岸弘明

②戦国の籠城戦~小田原城の開城 石井勇

③城は何を守ろうとしたのか⑤番外編 保科隆夫

④城を歩いた私の60余年 大森拓二



天皇陛下のお車



新年のつどい

2月25日 第11回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

3月11日 日帰りバス見学会「中世の武蔵野・比企地方の3名城をめぐる」（池袋西口公園集合＝45名）

比企地方の3城を訪ねる。比企は武蔵の郡名で、現在は埼玉県荒川支流・市野川流域をいう。

- ①松山城＝応永年間在地豪族上田友直創建とされるが明確でない。元は扇が谷上杉氏の拠点城だが関東戦国時代、古河公方、上杉謙信と争奪戦を繰り返した。戦国後期は北条氏の支城で、天正18年の小田原の役では前田利家、上杉景勝の大軍に攻撃されて落城した。三方を市野川に囲まれた丘陵先端部に立地、本曲輪、二の丸、三の丸が一直線に並ぶ連郭式縄張り、急切り岸と規模の大きい空堀が取り巻いている。岩室観音堂裏の石ガケ空堀はみごと。吉見百穴で弁当を楽しむ。
- ②杉山城＝長享時代両上杉氏戦乱、争奪の城。鎌倉街道を見下ろす丘陵尾根に築かれた平山城。国指定史蹟として整備、大規模な横堀と屏風のように連続する折れ、樹形虎口など高度な築城技術が見られた。
- ③菅谷館＝鎌倉時代の有力御家人畠山重忠館跡と伝わる。国指定史蹟としてよくまとまり、嵐山史蹟の博物館が併設されている。都幾川を背にした平城で三の郭、二の郭、本郭と並ぶ連郭式、現存する土塁、空堀などの遺構は戦国時代のもので、関東大乱以降争奪の地でもあった。

3月11日 「会報号外」を発行

4月9日 日帰り見学会「川越城と蔵の町を訪ねる」（西武新宿線・本川越駅集合＝49名）

本川越駅から喜多院、川越城を回り、午後は蔵の町を散策、菓子屋横丁の「玉力製菓」で金太郎飴の製造工程を見学、蔵造り一番の「金笛」濃い口「並木醤油」でギャラリーとお醤油味の「おしるこ」を楽しんだ。

- ①喜多院＝天長年間創建される天台宗の古刹。天海が家康の保護を受けて復興、川越城の出城で、江戸城から移築した「家光誕生の間」、大奥「春日局居室」などを参観。
- ②川越城＝関東戦国時代はじめ、扇が谷上杉氏が家執の太田道真、道灌父子に命じて築かせた古河公方抑えの城。拠点にした道灌は古河足利氏を圧倒するが没後、山内上杉氏とも対立して戦乱の渦に巻き込まれた。後期は北条領で、天正18年秀吉勢の前田利家に攻められ落城、家康の関東入府後は江戸を守る北西の押さえ地として酒井忠勝ら幕府の要職にあった譜代大名が封じられた。明治維新後、跡地は次第に開発されて役所や学校、住宅地や公園になったが、本丸周辺が城址公園として保存されている。嘉永元年建立の本丸御殿、童謡「とうりゃんせ」の初



松山城



杉山城

雁神社などを回る。

5月15日 「江戸城を学ぶ～石積みを中心に」 雨天中止

5月26日 第12回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

6月6日 「上州の小幡陣屋・楽山園、世界文化遺産登録の富岡製糸場と前橋城へ」
（池袋駅西口公園集合＝57名）

バスで群馬県の小幡陣屋、前橋城と世界遺産登録決定直後の富岡製糸場を見学。朝からあいにくの雨、午後はかなり強雨となったが予定のコースを歩いた。

- ①小幡陣屋＝元和3年大和郡山藩主信雄の4男信良が甘楽郡など2万石を分知されて成立、寛永年間、雄川の河岸段丘に陣屋を築いた。明和4年松平奥平家2万石が入封、幕末に若年寄城主格となり小幡城を称した。武家屋敷町の広々とした中通り、武家屋敷石垣群は河原石を積み上げた落し込みで当時の姿をとどめている。大名庭園の楽山園も整備されたが雨足が強まってまばら散策となった。
- ②富岡製糸場＝明治の殖産興業政策による官営製糸場。明治5年フランスから製糸機300台を輸入、政府の雇われ人技師の指導で従業員は士族女子から選ばれた。東西二つのマユ倉庫と製糸場をコの字に並ぶ木骨煉瓦造り。世界遺産人気で熱気があふれていた。
- ③前橋（厩橋）城＝中世延徳年間箕輪城主長野一族の築城とされる。江戸時代は酒井氏が長く、中期以降松平15万石であったが、利根川の浸食で城の崩壊が進み、いったん居城を川越に移して幕末に戻った。城は利根川河岸段丘上の平城、現在本丸は群馬県庁で土塁、石垣、空堀を回った。

6月6日 「会報号外」を発行

7月25日 夏季研修会（大森・下入合集会所＝54名）

- ①織豊期石垣城の傑作竹田城～20周年記念旅行の見どころ 山岸弘明
- ②城は何を守ろうとしたのか～⑥姫路城の場合 保科隆夫
- ③一筋の道、城を歩く会20周年 大森拓二

7月25日 「会報号外」を発行

8月29日 第13回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

会長代行制を改め、運営委員会の担当を次の通りとした。

名誉会長＝大森拓二

会長＝山岸弘明



楽山園



富岡製糸場

会長補佐＝保科隆夫

運営委員＝大出信好(会計担当)、大森モト子、菅原満利子、遠藤正彦、大室賀一、
大高純子、八谷敦子、榎本達夫

相談役＝田辺康夫

9月16日 「六義園、旧古河庭園と平塚城を訪ねる」(JR・駒込駅集合＝52名)
JR山手線の駒込駅に集合、六義園などをめぐる。

- ①六義園＝5代将軍徳川綱吉の腹心・柳沢吉保邸の池泉回遊式江戸庭園。「万葉集」「古今集」にちなんだ88景が優雅な佇まいを伝えている。
- ②旧古河庭園＝元明治の元勲陸奥邸で古河財閥の迎賓館。コンドルのルネサンス石造洋館とバラ園のコントラストが映える。
- ③平塚城＝秩父平氏・豊島氏の拠点で、源義家ゆかりの地、頼朝の鎌倉幕府創設に大きく貢献した。

10月8、9日 「20周年記念一泊見学会」(新大阪駅集合＝58名)

創立20周年の記念一泊旅行。新大阪駅集合、貸し切りバスで「日本一の堅城」、夏の陣落城400年節目の年にあたる大坂城、「白鷺城」の異名をもつ国宝の姫路城、織豊期石垣の傑作・竹田城、いま最大人気の3城を巡り、京都市内で解散した。

- ①大坂城＝前身は石山本願寺、狙いをつけた織田信長と和睦して寺域を入手、遺志を継いだ秀吉が金箔5重8階の天守を持つ豊臣城を築き、この城を本拠に天下統一を果たす。しかし豊臣氏は「大坂の役」で滅亡、徳川家康を後継した秀忠が太閤色を一掃した徳川城を再建した。本丸周辺は大坂城公園で、昭和4年の再建天守が大阪市のシンボルとなっている。技術、高さとも日本一の内・外郭石垣や博物館の天守を回る。
- ②姫路城＝南北朝時代赤松氏が築城、小寺氏の重臣黒田孝高(官兵衛)が居城とし、織田信長の播磨進攻で秀吉に献じられた。秀吉が近世城郭へ改変、関が原合戦後、池田照政が完成させた。大天守を中心に三つの小天守を繋いだ連立式天守は現存最大、「白鷺城」と呼ばれ、富士山と並んで「日本の美」の象徴となっている。大修復工事を終えたが天守内への入城はまだ。屋根瓦の目地が一際白い城を強調している。
- ③竹田城＝室町中期太田垣氏が築城、天正年間赤松広秀が織豊期石垣城に大改修したが、関が原の戦いで西軍に与して改易された。最高所の本丸を中心に三方の尾根伝いに伸びる主郭全域にびっしりと石垣遺構が現存、自山の花崗岩を積み上げた打ち込みハギ「穴太積み」で、東西400mの高石垣が迫力満点だった。



大坂城



竹田城

「日本のマチュピチ」と喧伝されたため一般観光客が殺到し、石垣が崩れたり、見学者の危険対策で天守、本丸が立ち入り禁止とされたのが残念だった。

④京都御所参観＝鎌倉幕府が滅亡した「元弘の変」から明治維新までの皇居、現在の建物は安政2年建立、宮内庁職員の案内で平安時代の寝殿造りを伝える紫宸殿や建礼門などを参観。

⑤豊国神社＝豊臣秀吉を祀る神社で、伏見城の唐門を移築してある。

方広寺＝大坂冬の陣、豊臣家滅亡のきっかけとなった「国家安康」を刻んだ梵鐘を見学した。

11月15日 「江戸城を学ぶ～石積みを中心に」（東京メトロ東西線・竹橋駅集合＝47名）

雨天中止となった5月定例会の仕切り直し再開。平川門をスタート、午前はからめ手側本丸水濠をめぐる北はね橋から旧本丸跡の皇居東御苑へ、午後は二の丸側から本丸石垣を中心に見学、石材や石積み、算木組、そりなどを現地で確認した。

11月15日 「会報号外」を発行

12月4日 第14回運営委員会（虎の門・北陸産業倶楽部）

12月9日 鎌倉五山の古刹と切り通しを歩く（JR横須賀線・北鎌倉駅集合＝48名）

北鎌倉駅集合、「鎌倉五山」の円覚寺と浄智寺をへて、亀が谷坂、化粧坂切り通しを歩く。

①円覚寺＝鎌倉五山第2位の臨済宗円覚寺派本山。8代執権・北条時宗開基、国宝の洪鐘、舍利殿などを見学。

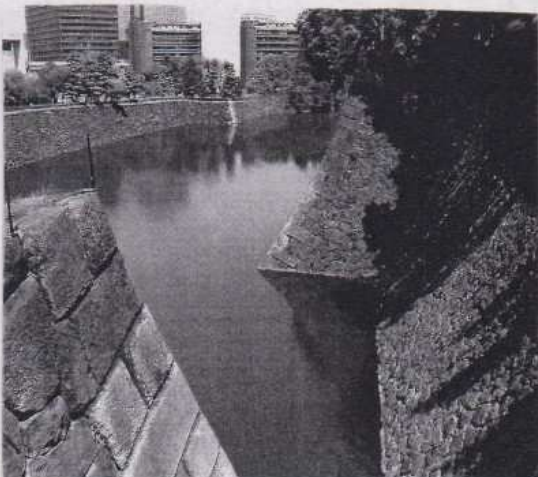
②浄智寺＝同第4位の古刹、甘露の井、唐風山門。

③亀が谷切り通し＝亀が登れなくて引き返したとされる切り通し。

④化粧坂切り通し＝要塞都市・鎌倉城の虎口、「七口」の一つ。元弘3年倒幕の兵を興した新田義貞は鎌倉街道を進撃して化粧坂を攻めるが、守将の金沢貞将は戦死者の死体を楯に戦う必死の抵抗で突破できない。やむなく稲村が崎に迂回、干潮時を待って鎌倉市街に突入することになる。鎌倉城攻防の最激戦地は往時を偲ばせる急坂のまま、その面影を伝えている。

⑤源氏山と葛原岡神社＝源頼朝像が立つ。周辺のハイキングコースは鎌倉城外郭の武者走り鎌倉城最後の守備ライン。化粧坂の横矢や櫓台などに注目。

⑥銭洗い弁天＝銭洗い水でお金を洗うと数倍に増えるというご利益がある。



江戸城北はね橋



化粧坂

1月17日 「会報第51号」を発行＝はじめに

20周年記念誌のタイトルにも使った「訪ね、見て、知る」という、当会のキャッチコピーのことです。ご記憶の方もおられると思いますが、この言葉を決めたのは東日本大地震が発生した翌年の1月、3年前のことです。大被害は国中の人々を震撼させ、加えて、それまで信じていた科学技術やモノ重視社会への疑問と不安をつのらせました。その反面、いやだからこそ、人同士のつながりや、先人たちが何代にもわたって遺してきたもの—これは文化といってもいいでしょう—の大切さを、改めて見直そうという考えが高まってきたのです。

私たちは、そうした風潮を先取りした形で、これまで20年間にわたり、日本文化のシンボルともいえる各地の各時代の城郭を巡ってきました。この貴重な体験を再確認し、共有し合おうと考えて言葉にしたのが、このコピーなのです。可能な限り、自らの足で現地へ赴き、自らの目で本物を眺め、自らの経験と感覚の上にさらに新しいことへの驚きを重ねていければ、ということです。これからも「城を歩く会」の会員の皆さまと一緒に「訪ね、見て、知る」ことの楽しさと感動を追い求めていきたいと思ひます。

「会報第51号」＝城・ひとこと (遠藤正彦)

私たちは、一瞬の時を通り過ぎてゆく。その中で、「城を歩く会」は、月に一度、永遠の予感のようなものを感じさせてくれる。城あとに立つとき、その一日は、私達を時空を超えた世界へといざなう。それは、日々の日常に生きざるを得ない私達への「城を歩く会」が贈る至福の夢ともいったものだ。

昨年の一泊旅行の2日間を思い出してみよう。大坂城、姫路城、竹田城を巡りながら、私達は、日常とは離れた異次元の世界を旅しているという感覚にとらわれたはずだ。そこに残された石垣の石一つひとつに感じる、やすらぎのようなもの。風に乗ってくる先生方のすぐれた講義は、さながらバッハのブロックをきくようだ。

また、たそがれが迫るころ、木曾川の対岸から眺望した犬山城の天守。まちがいなく、そのとき、時はとまっていた。

20年目を迎えた今、私達は「城を歩く会」に出会えたしあわせを改めて喜ぼうそして30年、40年目を祈ろう。たとえ私たちが、そこにはいないとしても。

1月17日 「城を歩く会20周年祝賀会」(銀座ライオンクラシックホール＝69名)

15周年までの歩み

平成6年(1994)

4月13日、会を結成。会名、規則に相当する要項その他を決定。

平成7年(1995)

- 1月 「杉並区広報」、「世田谷区広報」で参加者を募集。
- 2月16日 「江戸城見学会」(第1シフト=参加36名)
- 2月23日 「 ” ” 」(第2シフト=34名)
- 4月20日 「片倉城、滝山城見学会」(50名)
- 6月21日 「小机城、榎下城見学会」(33名)
- 9月6日 「千葉城、飯野陣屋見学会」(26名)
- 11月15日 「江戸城裏側見学会」(36名)

平成8年(1996)

- 1月17日 「世田谷城見学会」(32名)
- 3月6日 「平塚城、飛鳥山砦、滝野川城見学会」(28名)
- 4月3日 「世田谷城見学会」(番外=24名)
- 5月15日 「志村城、赤塚城見学会」(33名)
- 7月17日 「津久井城見学会」(26名)
「おたより(会報)」第1号発行。
- 9月24日 「八王子城見学会」(29名)
- 10月18日 「小田原城、石垣山一夜城、小田原古城ほか見学会」(マイクロバス=25名)
- 11月11日 「佐倉町と城下町見学会」(26名)
「会報」第2号発行。
- 12月10日 「天狗」馬事公苑店で「忘年会」。

平成9年(1997)

- 1月20日 「江戸城の外堀を歩き四つの見附と遺跡の展示コーナーを見学する会」(37名)
終了後、都合のつく会員で「新年のつどい」。
- 2月15日 「江戸城見学会」(番外=53名)
- 3月11日 「箕輪城、高崎城見学会」(28名)
- 4月15日 「甲斐路の三つの城を見学する会」(躑躅が崎城、甲府城、新府城=22名)
「会報」第3号発行。
- 5月12日 「片倉城、滝山城見学会」(25名)
- 7月16日 「武蔵野に鎌倉、室町期の動乱の跡を訪ねる」(高安寺城、谷保の城山=28名)
- 9月18日 「日比谷、有楽町に史跡を訪ねる」(33名)



小田原城



津久井城

(住基基本台帳) 7.1.1現在
世帯数 364,208世帯
人口総数 762,007人
●男371,443人 ●女390,564人
外国人登録者 13,752人
男7,164人 女6,588人

発行日 ●1995年(平成7年)2月1日(毎月1日、15日、25日発行)
編集 ●世田谷区区长室広野謙
〒154 東京都世田谷区世田谷4-21-27
区役所の代表電話は ☎5432-1111
交換手に課・係名等をお伝えください。

この誌は印刷用紙を使用しています

毎週土曜朝7時からテレビ東京(12チャンネル)で放送中



和田俊さん

事務局 見学会

や、紙がどのよう
少されているのか、
ませんか。

所集合 昼食持参

見学先
世田谷口ルセマ
谷アインテック製工
場

碓氷サウルセル、
大蔵リサイクル施設
東京湾埋立処分場

まで、封書
し、①希望コース
員の氏名(1グル
ブ) ②電話番号を
推推課へ 抽選

一・オリオン大星
生未満は保護者
際の中止は午後



◆ストレッチ、ダンスの無料体験
2月9日(木)、16日(木)、23日(木)午前
11時午後1時 鳥山区民センター
で(☎3330712928稲葉)

◆初心者デッサン画教室 2月4
月の毎月第2・4木曜午前10時
正午 桜丘区民センターで 材料
費/1回2千円(☎342916
488大木)

◆世界のヘルシー料理教室 2月
11日(祝)・北京料理、3月4日(土)・
トルコ料理、4月1日(土)・カリブ
海料理 いずれも午後1時半〜4
時 主に上馬地区会館で 参加費
/1回2千500円(☎341112
246夜間に 徳田)

◆歴史講演会「中世東国の鎗物師
と村」 2月14日(火)午前10時〜正
午 婦人会館で 参加費/500円
(桜ヶ丘歴史学習会 ☎33071
1522夜間に 森)

◆江戸城見学会 2月16日(火)午前
10時・桜田門駅皇居方面口改札前
集合 午後3時まで 参加費/500
円 昼食持参 [申]事前に(☎3
30317783大森)

◆寒さに負けない東洋医学講演会
「かせ・しもやけ・肩こり」2月

475鈴木) 先着40人

◆中学・高校団体対抗テニス大会
3月28日(火)〜30日(木)午前9時から
総合運動場テニスコートで 資格
/区内在住・在学チーム 参加
費/中学1チーム(単2・複1)
2千500円 高校1チーム(単3・
複2) 4千円 [申]2月19日まで
に、所定用紙と参加費で、区テニ
ス協会(用賀411312 ☎370
811778)へ 先着各28チーム

●●募集●●

◆歩行困難な方のための運転ボラ
ンティア・スタッフ、2月19日(日)
午前11時〜午後3時に行うバザー
の手伝いや品物作りに協力してく
ださる方 ※バザー用品の提供を
(たつなみ会 ☎37081248
4月〜金曜午前10時〜午後4時に

●●協力を●●

◆ボランティア資金として、書き
損じまたは未使用の年賀ハガキの
提供を(梅丘11819梅丘ボラ
ンティアビューロー内世田谷ボラ
ンティア友の会 ☎3420125
20)

江戸城見学会のご案内を
掲載した「せたがや」区報

お知らせとお願い

- 世話人が出揃いました……これまでの方、新しい方、合わせて4名の方です。役目の名前は理事や幹事ではなく、世話人とします。どうぞよろしく願いいたします。
若林昭男 高井和男 今村升二 大森モト子
さっそく6月11日に世話人会を開きました。以下はその結果です。
- 定例会は年間8回に……(毎月1回とご要望に答えて)9月からは原則として1・3・4・5・7・9・10・11の各月の年8回とします。
そのうち1月は年換からも早日の見学会とし、終了後希望者で新年のついでを行います
- 曜日は変動制に……(同じ曜日ではいつも出られないとの声に答えて)9月からは月火金など時によって違った曜日にします。
- 参加費は千円に……(五百円では申し訳ないという意見に答えて)特別な場合は千円にさせていただきます。ご了承をお願いいたします。
- 滞院3回欠席の方は……この状は本日欠席の方は新送します。しかし1月3月5月の3回ともお知らせもなく不参加の方には、今後ともお送りしないことにします。欠席の場合もそのむねお知らせ願っています。

9月の定例会

八王子城見学会

日時 9月24日(火) 9時20分～3時30分(雨天のときは10月1日)
雨天のときは当日朝8時30分に集っているか手帳で60%以上のとき(以下同く)

集合 午前9時20分 J.R. 京王高尾駅南口、西東京バス5番乗り場

行程 バスで八王子城址行き終点下車、徒歩15分
山麓の城址(登城道・アジガ曲輪・橋・門・御主殿跡など)見学
(御主殿の付近で昼食)
午後は山道を登って山頂の郭へ

解散 午後3時30分4時ころ高尾駅

参加費 千円(当日集合場所)

服装等 ハイエール・スカート不可。できるだけ帽子着用、傘持参

申込み 9月10日～20日に筆書か電話で下記へ。(以下毎回同く)
〒156 世田谷区保土水3-15-13 大森館二 ☎ 3363 7783

(参考) 八王子城

武田に備えて築城……滝山にいた北条氏照は元龜から天正のころ(1570-1578)、武田勢の来攻に備えてより険しい地形のこの地に築城。しかし快報は信玄の死後、秀吉の関東攻めで落城……天正18年(1590)氏照は数千の兵を連れて小田原に。そこへ秀吉の命で頼田利家・上杉景勝の2～3万の大軍により落城。まもなく廃城。

戦跡のあった城……一度も陥らなかつた城が多数の中で、山頂の曲輪近くまで戦跡があった。鉄砲の弾丸が多数出土して、山頂の曲輪近くまで戦跡があった。

戦跡の城らしい城……山頂に地形を巧みに利用した曲輪群。その奥にさらに詰めの城。また山道に矢竹や櫓輪など戦跡に備えて……

(右上に続く)

10月の定例会

小田原城・石塚山一攻城・小田原古城地 見学会

日時 10月18日(金) 10時～4時(雨天のときは10月25日)

集合 午前10時 JR・小田原駅 小田原駅前南口(湯方町古町の出口)

行程 (マイクのみ使用) 小田原城→石塚山一攻城(見学会地内で弁当)→小田原城外郭早川口(見学)→小田原古城(小幡山)(見学)→江戸期小田原城(バスこまで)→江戸期小幡山曲輪・二の丸・本丸石塚・金堂本門・本丸の天守外観 他 見学

解散 午後4時ころ 天守の前で解散(天守内部は資料館ですで見ている方も多いため) (ここから小田原城は徒歩7分)

参加費 千円(当日集合場所) バス代は下記予約制

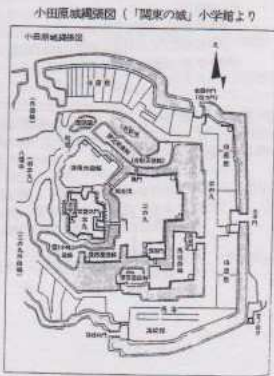
申込み 登城は石塚山曲輪内、水やWCはありませんがトイレはあります。傘持参

申込み 10月1日から10日までに、参加者名や電話を書いたメモにバス代1名分2千円を添えて現金書留で大森へ。(バス代のみ当日不参加でもお返しできません)

申込み 期間後半の6日以後は残席の有無を電話で確かめてから返す

(参考) このコースの見所

- 石塚山一攻城……「一夜で築城」は後世の伝説、事実は2か月余り。秀吉は周到に大軍を集めて一撃に築城し、攻めつけた。秀吉がここから家康と二人で小田原を展望しながら「関東は貴族に譲る」と言ったといわれる、作り話。
城内の木の手曲輪は独立した大きな曲輪、戦国の城は別々なく井戸を大切にしている。それにしてはこれほど巨大な井戸はまさに圧巻。
- 外郭の早川口……北条氏は城の外郭に町人街を形成し、総延長12kmに及ぶ土塁を巡らせた。このように城内に町人地があるのを惣領(行状) (総領とも書く)。これに対して城外の町人地は城下町。小田原城は一時、日本最大の城。そして大きな経済的背景を擁する城であった。外郭土塁は何か所か現在しているが、その内一つ。
- 小田原古城(小幡山)……
室町時代中期からの大森氏の5代80年と、伊豆から進出した北条氏5代100年の城。現在の城からは新幹線をはさんだ反対側の八幡山に本丸。その西方の小幡山に巨大な礎石が現存する。



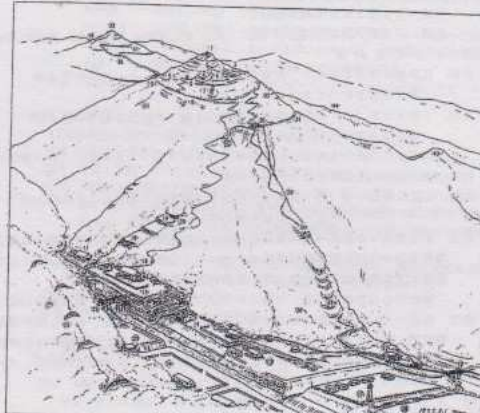
- 江戸時代の小田原城……関東の城には天守と石塚は例外。その意味では珍しい城。倒壊のあった二の丸。復元が進行中の馬出曲輪。関東大震災で崩れたままの石塚。復元された常盤木門。本丸の復興天守外観などを見る。なお見学会では北条時代の障子絵が出土したが、保存されていない。

近世の城への移行期か……戦国の城である一方では、大手門の形・寇木門があること・櫓形の石塚・主殿が山頂にあることなど、近世の城への移行行きといえるか。

山頂に井戸……標高450mにもなる高地に井戸。戦国の城はどこでも水の確保にはたいへん力を入れた。

江戸初期に倒面……戦国の城のほとんどは倒面が残されていない。この城の倒面は慶元元年(1648)が最初。廢城から半世紀も経たず江戸時代になってから、何のために倒面されたのかは不明。そのため倒面中にも不明な面は多い。(アジガ蔵とあるのはアジガ曲輪らしい。しかし字は不明。それにアジガアジガ不明)

八王子城復元図(「八王子城」福野社より)



- 図3 東面上からみた八王子城の復元図
- ①山頂曲輪(本丸) ②見木曲輪 ③小幡曲輪 ④中の曲輪 ⑤無名曲輪 ⑥伏井(井戸)
 - ⑦伏井の輪曲輪 ⑧馬出曲輪(常盤門) ⑨馬出石塚(馬出のり) ⑩登城道 ⑪山頂口
 - ⑫登城口(御主殿口) ⑬山下曲輪 ⑭アジガ曲輪 ⑮御主殿 ⑯堀の道 ⑰堀(堀跡?)
 - ⑱石塚門 ⑲御旗台石 ⑳石切丸等 ㉑砲丸見(?) ㉒御主殿跡 ㉓大手門 ㉔御旗広場
 - ㉕太田曲輪 ㉖御一領切り(御旗行) ㉗登城曲輪(?) ㉘空堀と馬出跡 ㉙山頂土台曲輪
 - ㉚御門 ㉛台舎 ㉜丸丸石塚跡 ㉝花ごり石塚跡 ㉞金子曲輪 ㉟段北曲輪 ㊱御旗山
 - ㊲太田跡石塚遺跡 ㊳御旗土石切跡 ㊴石塚の城(大天守) ㊵大馬出切(石切丸)
 - ㊶二本の水平道(常盤門) ㊷城址 ㊸見参り台 ㊹近世城址跡(門前跡石、井筒跡の石)

11月の定例会

佐倉城および同城下町 見学会

日時 11月11日(月) 10時～3時30分(雨天のときは18日)

集合 午前10時 京成佐倉駅(JR佐倉駅とは隣り合っている)

参考 京成上野線 9-04の特色色車体は京成佐倉線 9-99

行程 京成佐倉→徒歩15分 大手門跡(見学)→天神曲輪→三の丸→歩兵連隊跡 →二の丸→本丸(開城跡・南三階塔跡など見学)→馬出→堀ケ池(沼田)など(城内見学) (本丸広場または蓮堂の場所で見学)

午後は新廣善神社(城主が崇敬した古い神社)→沼崎(千葉氏建立による古い寺)→徳田家墓所(など午後は城下町散策)

解散 午後3時30分4時ころ京成佐倉駅

参加費 千円(当日集合場所)

服装等 傘持参

申込み 10月25日から11月5日まで

(参考) 佐倉城

- 関東の大きな城の代表……関東地方には小幡が多かった。その中で水戸・川越・古河・佐倉などは大藩。しかしこの城も石塚は土塁だけ。天守はなく代わりの小さな南三階塔。それも破風飾りのない、まことに質素なもの。尚徳院藩や関西の城とは大違い。
- 代々幕府の重臣の城……創築者といえる土井半平をはじめ、堀田氏・大久保氏・松平氏など、城主は入れ替わってはいるがいずれも大老や老中。江戸の東方の守備拠点として重視された。
- 中世風を多分に残す城……鹿島川と高崎川との合流点。鹿島川の先端部が新堀に面して立地。本丸を中心として二の丸・三の丸と櫓の本曲輪とをI型に配置。しかも巨大な馬出。日本一と思われる大きさは圧倒される。
- 歩兵連隊の跡地に型番……明治の廢城後、櫓の本曲輪に歩兵連隊。戦後は兵營の建物の保存運動もあつたり、映画「真実地帯」のロケにも。しかし取り壊されて昭和58年に国立歴史民俗博物館に。
- 本丸跡(石塚)跡……もと江戸時代の山頂曲輪(一般に吹上げ)の地。土井半平が家康から拝借して移築したという。明治廢城で解体。
- 本丸跡三階塔……天守に代わる櫓。破風飾りのない質素なもの。江戸後期の文化10年(1813)火災により焼失。以後再建されなかった。



パンフレット「城下町佐倉」より

城を歩く会報

第2号

お知らせ

- ① 去る10月29日に世話人会を行い1月から4月までの定例会を下記のように計画しました。ご都合のつくりご参加をお待ちしています。
- ② それとは別に番外として下記のように忘年会を行うことになりました。ご賛同の方は12月5日までに高井世話人(☎3429 8865)へ申し込んで下さい。
日時 12月10日午後5時から
場所 「天狗」馬事公園店(☎5477 0351) 総社212号 新幹線ビル 駄馬7号10号

1月の定例会

名称 江戸城の外堀を歩き4つの見附と道徳の展示コーナーを見学する会
(終了後都合のつく方で新年のつどい)
日時 1月20日(月)午後1時30分から4時(そのあと新年のつどい)
雨天のときは27日(月)
雨天とは当日朝6時30分に降っているか予報で60%以上(以下同じ)

行先 赤坂見附から浅草橋まで外堀を半周
集合 午後1時30分 地下鉄赤坂見附駅の赤坂見附交差点出口の階段を地上へ出たところ、交差の前の狭い広場に集合

順路 赤坂見附→井原橋→清水谷公園→食い違い見附→赤坂御所等道→外堀公園→四谷見附→市が谷駅の道徳展示コーナー(ここまで徒歩)(このあとJRで浅草橋駅まで移動)浅草見附見学 浅草橋駅で解散

都合のつく方はその近くで新年のつどい(会場「村役場」☎3863 1155)
参考 見附……中世初期の城では見つけるための望楼のこと、しかし江戸城では外堀の門。市が谷見附などは消滅、赤坂・四谷各見附などでは門垣の片断が残る。
展示コーナー……地下鉄の駅団が工事の際に発掘した物を常設展示している。
浅草橋門……江戸城も総構えであったことの好例。

3月の定例会(2月は休会)

名称 箕輪城・高崎城見学会
日時 3月11日(火)午前10時15分から午後4時(雨天のとき18日)
集合 10時15分 高崎駅西口ローカル線バス2番乗り場(10時35分発に乗る)
参考 高崎までのJR 快速7-10 上野 8:30 → 高崎 10:07
普通 上野 8:06 → 高崎 10:00
普通 池袋 7:49 → 高崎 9:53
上越新幹線 東京 8:48 → 高崎 9:41
同 同 9:08 → 同 10:05

列車の時刻は現行のものでそれまでに改定も考えられる(以下同じ)

行先 箕輪(あお)城 群馬県群馬郡箕輪(あお)町 高崎城 群馬県高崎市
順路 高崎駅前から群馬バスで約30分で箕輪城へ(見学の後 広場で弁当)
バスで約30分で高崎城へ(見学)

解散 午後4時ころ高崎城大手門付近で(そこから高崎駅は徒歩10分)
参考 箕輪城……室町末期に長野氏が創始したものの戦国さながら、武田氏にまた小田原北條氏と支配は替わり、北條氏滅亡と共に井伊直政が入って大改修。現在の遺構の多くはこのときのもの。低い丘城ながら巨大な空堀と関東には珍しい石垣は一見の価値がある。
高崎城……その井伊直政が固もなく在地領主の創始によるこの城を大拡張して入る。交通の要所に本拠を置く近世支配のためである。しかし関原の合戦後は大大名として多程城を築いたので、一代で3つの城を築いている。慶安の世とはいえず、頼元の血と源が見えるようである。江戸時代の高崎城はおちに松平氏が入って總奉行まで続く。明治以後は歩兵大隊が置かれたので、互のいう「中欠け型」の城である。

③ 4月の定例会
名称 甲斐路の3つの城を見学する会
日時 4月15日(火)午前10時から午後4時ころ
集合 10時 JR甲府駅北口階段降りあたり
参考 甲府への交通 JR 特急 新宿 8:00 → 甲府 9:28
普通 高尾 8:00 → 甲府 9:39
バス 新宿駅西口 7:45 → 甲府駅前 9:55
(JR利用の場合は乗車券は新宿まで買って甲府では途中下車するとよい)

行先 つつじが崎城・甲府城(どちらも甲府市)・新府城(韮崎市)
④ 順路 甲府駅北口からバスかタクシーで武田神社へ つつじが崎城見学

家へもどって駅ビルのレストランで昼食
甲府城見学→JR各停で新府へ→新府城見学 その後新府駅で解散

つつじが崎城……武田信玄の居城。神社としての改変が大きいが、馬出しや内柵形虎口・味噌曲輪や橋曲輪などが明確に残り、方形築の性格を備えた居城の代表といえる。

甲府城……武田氏滅亡後徳川氏の命により平岩親吉(ゆき)・浅野長政などにより、江戸初期の長期間にわたる工事で築かれた。今回の他の2城と違って幕末まで続く譜代大名または幕府直轄の城であったので、二重(ひだり)の石垣は見事。甲府駅にすぐ近いのは私のいう「半欠け型」だから。
新府城……北からの織田・徳川連合軍に備えて武田勝頼が築く。大手口は南側、珍しい「出構え」も北側にだけある。この城を奪とされて固もなく武田氏は滅亡する。

城を歩く会報

第3号

お知らせ

- ① 世話人に山岸さんへ
これまで世話人としてご苦労いただいていた若林さんは、勤務の都合で世話人を辞退されました。代わりに山岸弘明さんにお任せしました。
- ② 世話人の電話
これを機会に世話人全員の電話をお知らせします。
高井和男 今村升二 山岸弘明 大森もも子
- ③ 5月からの予定
3月19日に世話人会を行い5月以降の定例会を下記のように計画しました。ご都合のつくりご参加をお待ちします。
- ④ 「再実施」も加える
これまでは同じ場所を二度実施することなく、常に新しい見学先へ行ってました。それに対して当日にご都合のつかなかった方やその後入会なさった方から、再実施を望む声が強くなってきました。そこでとりあえず本会の初期の頃の見学先へ、再び行くことを加えることにしました。前回と同じ内容ですが新しい方はもちろん、一度行かれた方もどうぞご参加下さい。

5月の定例会「片倉城・滝山城見学会」

(再実施を望む声にこたえて)(次の再実施は日時未定。小川城・榎下城)
日時 5月12日(月) 雨天のとき19日(月) 午前9時45分から午後3時30分
雨天とは当日朝6時30分以降に降っているか予報で60%以上(以下同じ)
集合 京王線片倉駅 9時45分 駅前の狭い広場
明大前から特急の場合 明大前 8:45の特急→高崎駅まで各停に乗換→片倉 9:39
京上から発行的の場合 板上市 8:59の急行→北野で各停に乗換 →片倉 9:39
行程 午前中片倉城見学。JRで片倉から八王子へ移動。駅ビル(または道徳)で昼食。
午後八王子駅前から路線バスで滝山へ。滝山城見学。終了後バス停で解散
参加費 千円(以下同じ) 当日集合場所
申込み 5月1日から10日までに電話または来客で大森へ
☎56 副都心3-15-13 ☎3303 7783

参考 片倉城……創始は南北朝期の長井氏という。しかしやがて戦河から進出して小田原に本拠を置いた北条氏の支配下に入り、その支城になった。やがて1590年の小田原藩城によって滅亡。今は本丸と二の丸だけであるが、400年も経過しているのによく旧状が残っている。空堀・土塁・機矢がかり・物見台など、この時代の城が共通して備えている遺構が明確に見られるので、「中世の城の代表」といえる。
滝山城……1521年の大石氏の築城という。しかし固くなく北条氏が入って大拡張している。やがて武田信玄の小田原攻めに際して三の丸まで攻め込まれたので、正徳はより険しい八王子城を築いて移っている。バス停から緩やかな坂道を登ると、千畳敷や食い違いの虎口・馬出跡もある。やがてかつての二の丸の広場。その奥に今は固定の不備であるが、引橋または鉄ね橋の跡とそれを渡っての巒形虎口(針穴)を通って本丸に至る。

7月の定例会「武蔵野に鎌倉・室町期の動乱の跡を訪ねる」

日時 7月15日(水) 雨天のとき23日(水) 午前10時から午後4時
集合 京王線府中駅改札口付近 午前10時
行程 大國魂神社(古代の国府跡) → 徒歩で高安寺 → (中世の館または城) → 分倍原駅前
で昼食(飲食店または弁当) → (駅前) 古戦場跡、南武蔵で1駅の谷保へ移動 →
谷保天神社(湧水) → 三田氏跡(方形築) → 谷保駅で解散
申込み 7月1日から13日まで(以下同じ)
参考 国府跡……国府の所在地については諸説があった。しかし発掘調査の結果、大國魂神社の東隣からその跡の土地とほぼ確定的という。
高安寺……藤原秀郷(712)の館であったこともあり、足利尊氏の本拠でもあった。後に尊氏が高安寺を創始。いずれの時も鎌倉への道なので、高安寺城ともいうように城郭の色合いが強かった。地名の「府中」は鎌倉時代からといわれることから、この地を指すのかも。
古戦場……新田義貞の鎌倉攻めの合戦。多摩川の渡路が獲れ残しているので、位置はこの場所とはいえない。
三田氏跡……この名称を否定して谷保の城山とすべきとの説もある。鎌倉が室町期にこの地を開発して支配者となった豪族の方角館。

9月の定例会「日比谷・有楽町に史跡を訪ねる」

日時 9月18日(木) 雨天のとき25日(木) 午前10時から午後4時
集合 日比谷公園日比谷交差点口 午前10時
行程 江戸城日比谷護国寺 → 日比谷見附 → 伊達宗政稲田墓 → 成木本と昔かけ散骨 → 上杉道徳 → (昼食 弁当または近くで用意) → 第一生命GHQ記念堂 → 大正天皇御所 → サンジ橋 → 大塚重信邸 → 岩倉具視邸 → 丸の内大小路跡 → 福高正正邸 → 東京競合跡 → 旧都庁跡(建設技術園フォーラム)
(有楽町駅前) 南町奉行所跡 → カスリノ橋 → 赤司屋跡 → 教育局橋跡 → 「教育園橋ここにありき」の碑 → 山下門跡 → (日比谷映画館) アーニー・バイル劇場跡 → 帝國ホテル → 奥蔵館跡(ここで解散)
申込み 9月3日から15日まで(以下同じ)

10月の定例会「土浦城・水戸城見学会」

日時 10月14日(火) 雨天のとき21日(火) 午前9時30分～午後4時
集合 土浦駅前 午前9時30分
日程 (午前) 上野発特急 8:30 → 土浦 9:24 着
(午前) 土浦城および博物館見学 城内で弁当または駅前の店で昼食
(午後) JR各停で約50分 水戸駅へ移動 水戸城見学
午後4時ころ城内または駅前で解散

《この件 会報4号に再掲します》

お知らせ

会の旗を新調しました。とほまきも買ったのは伸縮式の平ズキ、会名を採めた市部を注文と書くので、あり合わせの布に切り絵プリントで手づくりです。ご期待下さい。

10月の定例会「土浦城・水戸城」(前号の再掲)

日時 10月14日(火) 雨天のとき21日(火) 午前9時30分～午後4時
集合 午前9時30分 土浦駅前
参考 特急 上野発 8:30 土浦着 9:24 乗車券は水戸まで買って土浦で
普通 8-11 9-15 途中下車するとい
普通 8-18 9-30

行程 駅→徒歩15分→土浦城(城および博物館見学90分) 昼食は城内で弁当または駅前の店
JR各線で土浦から50分の水戸へ 駅→10分→水戸城(見学90分)
見所 土浦城——本丸と二の丸が亀城(ひがし)公園。現存の門が二基。移築一基。梅は平成の皇
城。城内に市立博物館。
水戸城——徳川幕府の城でありながら石垣は少しもなく土塁だけ。天守もなく御三層
のみ。それは明治の廃城からも生き残ったが戦災で消失。現存建物は薬師門のみ。大手横
行近の巨大な空庭と御三層は見事。
解散 大手横または水戸駅 午後4時ころ
参加費 千円(当日集合場所) 以下特別な場合以外は毎回同じ
参加申込 葉書か電話で10月1日～10日に下記へ—— 申込先は以下毎回同じ
● 156 世田谷区役所上水 3-15-13 ● 3303 7783 大塚拓二

11月の定例会「忍城・花崎城」

日時 11月14日(金) 雨天のとき21日(金) 午前10時～午後4時30分
所在地 忍(ひ)城 埼玉県行田(ひ)市 花崎城 埼玉県加須(ひ)市
集合 午前10時 秩父鉄道行田市駅(JR秩父線)
参考 上野新幹線 東京 8:54 → 埼玉 9:20 秩父鉄道(男北)行き
快速7-11 上野 8:39 → 行 9:33 埼玉 9:45 → 行田市 9:52
普通 上野 8:30 → 行 9:29
普通 快速 8-11 → 行 9:22

行程 駅から徒歩10分 忍城(陣跡土塁・時の鐘・御三層(博物館)等見学)90分
→水城(7M)公園で 昼食 → 大手門跡 見学
秩父鉄道(羽生乗換) 東武鉄道で 花崎城へ 駅から徒歩5分の花崎城(見学90分)
見所 忍城——昭和終戦時までは諏訪神社と時の鐘のみ。平成初め御三層(内部は博物館)
と門・堀などを復元。水城公園はこの城が「水に浮かぶ城」であった名残。
花崎城——東武鉄道の線路そば。水城公園はこの城が「水に浮かぶ城」であった名残。
解散 午後4時30分ころ花崎駅で解散(東武線久喜(む)からJRで上野または池袋へ)
申込 11月1日～10日

お知らせ

—— 会報人を増員しました
世話人はこれまで高井和男・今村三二・山岸弘明・大森トモ子との4氏でしたが、このたび
会の運営の一層の充実を期して原 賢三(杉並)・渡井康雄(杉並)・高田史雄(世田谷)
のお三方もお願ひして、計7名となりました。

4月の定例会「市川国府台から奥又へ——古代から現代まで」

日時 4月8日(水) 雨天のとき15日(水) 午前10時～午後4時30分
雨天とは同日午前6時20分召集待っているか平年で60%以上のとき(以下毎回同じ)
集合 午前10時 JR市川駅北口
行程 市川駅→真間の橋→真間手元茶屋(註1)堂→弘法寺(註2)(砲兵の碑)→下総国府台
→和洋女子大学(旧砲兵連隊)→国府台病院(旧陸軍病院)→里見公園(昼食)
→国府台城→路線バスで下矢切へ→矢切の碑→野野の墓→矢切の渡し→實さん記念館→
奥又御茶屋 午後4時30分ころ京成東武駅で解散
見所 真間手元茶屋は万葉集に残る美女伝説。国府台は下総國の国府跡。古代が今に生きている
地。中世には国府台城を築いて藤原の領。『矢切』とは平和を願う農民の悲憤な叫び。さら
に明治から昭和20年までは野戦砲連4個連隊の所在地。その跡地は今も多くは大学や
高校。矢切の渡しを高脚橋に出て帝釈天や實さんに出会う。
参加費 千円 当日集合場所(以下特別な場合以外は毎回同じ)
参加申込 葉書か電話で3月25日～4月5日に下記へ
● 156-0045 世田谷区役所上水 3-15-13 ● 3303 7783 大塚拓二 (以下毎回同じ)

5月の定例会「川越城と蔵造りの街を歩く」

日時 5月16日(土) 雨天のとき23日(土) 午前10時～午後4時
集合 午前10時 西武新倉庫前川越駅
(JR川越駅から500m 京成東武川越市駅から200m)
行程 本川越駅→喜多院→川越城富士山→三芳野神社→川越城本丸御殿→(公園で昼食)→
市立博物館→時の鐘→蔵造りの街で解散(自由参加のため)
見所 五百羅漢で知られる喜多院を経て川越城へ。富士見櫓は関東の城の常として御三層櫓で
今は櫓のみ。三芳野神社は童話の「通りゃんせ」で「行きはよいよい、帰りはこわい」
とは何故か、回答は当日現地で。本丸御殿は大火で焼失後の移築の再建。しかし全国でも
二の丸御殿はいつかあるが、本丸御殿は貴重なもの。時の鐘は現在のものは明治の大火
以後の再建で、今も日に4回鐘音が聞かれる。このあと蔵造りの街、茶子屋敷などお好
みにゆづため、3時ころにこの地点で解散する。
参加申込 5月1日～10日 以下と同じ

7月の定例会「上野周辺の史跡を歩く」

日時 7月23日(水) 雨天のとき30日(水) 午前10時～午後4時
集合 JR日暮里駅(南口)集合
行程 駅→徳川慶喜墓→寛永寺→輪王寺→油田屋敷門→上野公園噴水(昼食)→清水観音堂
→彰徳館の墓→吾妻橋遺像→彰徳門→不忍の池(弁財天)→上野駅
解散 午後4時ころ上野駅(しのはす口)で解散
参加申込 7月10日～20日の間に

1月の定例会「本郷に江戸を訪ねる」

—— 見学校後「城を歩く会新年のついで」——
日時 10年1月10日(土) 雨天のとき17日(土)
見学 午後1時30分～4時 新年のついで 4時30分～6時
集合 午後1時30分 JRお茶の水駅(新宿寄りの口)駅前
行程 お茶の水駅→お茶の水旅地遊覧→皇徳→昌平公園→徳川御三層→地下鉄で1駅移動→
本郷三丁目→江戸時代からの「かぬやす」→東大赤門(加賀屋門跡)→(東大構内)
三西邸跡→本郷城跡→弥生土器発祥地→皇学館跡(見学校後)
(都合つく方は)皇学館前から路線バスで東京駅前へ移動 八重洲地下街で新年のついで
見所 お茶の水——徳川寛永がここの湧水のお茶を愛したという。江戸初期にすでに湧城。
昌平公園——幕府立の学校 今は国立大学
かぬやす——古川柳「本郷も かぬやすまでは 江戸の内」この店今も健在。
本郷城 ——中世には城があったとの伝承。名も不明。本郷城はその執筆者の命名。
土器 ——明治時代に別な形式の土器を本郷弥生町で見発見。
申込 12月20日から1月5日まで (見学のみか「ついで」もかもお知らせを。)

【臨時会】「江戸城の裏側を訪ねる会」

(世田谷区の広域で一般から募集して実施。希望者は会員でも参加可。)
日時 10年2月21日(土) 雨天のとき28日(土) 午前10時～午後3時
集合 午前10時 地下鉄または都バス半蔵門下車 半蔵門交差点の裏の小公園
行程 半蔵門およびその付近→特色ある堀と石垣→折りまたは橋又はよばれる防衛施設→
一番町(石へ曲がる)→従の名所丸が堀→昭和の防衛施設跡→近衛町同司令部跡→乾門
(丸丸)→北の丸公園(昼食)→北詰門跡(加賀川)→本丸(天守台・大奥跡・松の廊
下・富士見櫓)→梅林門→平河門
見所 江戸城の石垣や堀の内部と御三層門とは構造が大きい。相違と理由を追求する。
乾門は明治になっての移築の門。平河門には珍しい不淨門も見られる。
解散 午後3時ころ行儀付近で解散
申込 2月10日から(定員になり次第締切)

3月の定例会「古河城見学会」

日時 3月12日(水) 雨天のとき19日(水) 午前10時～午後4時
集合 午前10時 JR宇都宮駅 古河駅
参考 各駅池袋発 8:45 → 古河着 9:47 JRの時刻表が仮にあっても
各駅上野発 8:54 → 古河着 9:54 2～3分の違いが通例
行程 駅→高札場跡→有町→総合公園(こゝまで徒歩60分)
公園内で①古河公方館見学 ②公園散策(桃の名所)③昼食
公園内の遊歩道を歩く→消えた近世古河城天守跡を見る→古河城御成門跡
→陣跡土塁(水堀・土塁跡)および市立博物館見学→寺院など城下町の名残を見る。
見所 中世の古河公方館跡は総合公園内。近世古河城の中心部は今も河川敷。陣跡土塁が最も
よく往時の姿を窺す。市内には各所に城下町や御三層の名残が見られる。
解散 午後4時ころ古河駅で
申込 3月1日から10日まで

《 会報第5号は3月12日に発行の予定 》

9月の定例会「江戸城の日本橋・丸の内方面を歩く」

日時 9月12日(土) 雨天のとき19日(土) 午前10時～午後4時
集合 午前10時 東京駅八重洲北口 丸の内線観光会館の間の時計塔の前
行程 北町奉行所→石橋→金原路→常盤御門跡→神田御門跡→ツ橋蔵番邸→酒井権造
邸跡→平将門首塚→大手門跡→和田倉門噴水(昼食)→西の丸下→馬場門跡→林大学頭
邸跡→伝馬屋敷跡→評定所跡→道三堀→東京駅
見所 東京駅の敷地内やその近くに北町奉行所や本所以前の古長屋跡。金庫は今の日本銀行。
石橋には町人の往來の激しい場なので迷子。道三堀は江戸城造りに水堀に大きな役
割を果たしたが埋められてその跡だけ。大名邸は上記以外にも伊直政・榊原康政・松田
藤政・福川忠興・土井利興・柳沢吉保・田沼意次など近世史の主要人物の邸跡もズラリ。
解散 午後4時ころ 東京駅丸の内北口
参加申込 9月1日～9日

10月の定例会 —— 予告 ——

「国宝松本城および諏訪高島城を一日で訪ねる会」
日時 10月14日(水)～15日(木) 少雨決行 予備日なし
宿泊 厚生年金会館(「サンピア松本」(後継館跡)2食付付(夕食は会食)一人1万円)
—— 上記2日は決定。以下時刻等につき未定 ——
集合 (時刻未定) JR上諏訪駅集合 参考 新宿発 8:00 上諏訪着 10:11 または
(どちらか未定) 9:00 11:30
行程 上諏訪駅→徒歩15分→諏訪高島城→上諏訪駅からJR各線で約10分→筒倉駅で途中下車
徒歩600mの花隈城→筒倉駅からJR各線約5分→村井駅から近づくの上記へ宿泊
(翌日) 村井駅からJR各線約15分→松本駅→徒歩15分→松本城見学
城内で昼食。その後は自由行動(見学時間配分等未定)
見所 諏訪高島城——戦国末期に日野氏によって諏訪湖の水中に造られた浮き城。徳川の
代になって造られていた諏訪氏が復して近世城郭に改造。もう壊れはしないと思っ
て城の周囲を干拓して財政再建に努めたので、今は公園とも陸地。本丸は遺構がよく
残っていて、石垣の全部が現存。陣跡を兼ねた復元された天守は内部が博物館。
花隈城——鎌倉時代の承久入道(1219-22)から諏訪氏の一族である有賀氏がいたとされ
る。やがて天文17年(1548)の甲斐奥平氏の来攻に耐えられず城は放棄。後に武田信玄
が居城にしたが、間もなく織田・徳川連合軍に取られて城の使命を終る。現在は公園
であるがそれにしても遺構がよく残っている。
松本城——① 天守は全国で12しかない(一説には13)現存天守の一つで、その
中でも最も古く残る。国宝4か城の一つ。
② 本丸内に五層六階の天守のほかに三層の乾(丸)小天守、巽(丸)村陣(丸)
が重なる遺構複合式天守と呼ばれる珍しい形式である。
③ その天守は「東でかつ」に見える。関ヶ原合戦後大名は戦いに疲れてお
なく、徳川家からの「番付一ツ」で死命を削られた。それを回避するための改造
との見方もある。

—— この項は未定部分を含めて7月23日発行の「会報第6号」に掲載します——
しかし宿約の予約は6か月前までで参加見込みの方は3月25日までに下記へ
(参考 ご夫婦の方は二人一室とごとの。参加は会員以外でも可)
高井和男 154-0016 郵便番号 2-39-12 電話3429 6865

◎ 8月は休会、9月の定例会は前号で紹介済み

9月12日 10時東京駅八重洲北口集合「江戸城の日本橋・丸の内方面」

◎ 10月の定例会 —— 前号で予告したこと再掲 ——

「国宝松本城および諏訪高島城他を一泊で訪ねる会」

日時 10月14日(水)～15日(木) 小雨決行 予備日なし

集合 14日 午前11時50分 諏訪高島城の大手門跡

JRの方 下記列車で上諏訪駅改札口付近に集結 集合場所へ案内します

特急あずさ55号 新宿発 9:00 → 上諏訪着 11:30 (車中で食事をすませて)

注1 自由席に乗車の方はできるだけ1号車に

注2 特急等は上諏訪まで 乗車券は松本まで買って上諏訪・岡谷両駅では途中下車にした方がよい

車の方 上記の時刻と場所 (それまでに昼食をすませる車中にて徒歩)

日程 [第1日] 上諏訪駅→徒歩15分→諏訪高島城 (見学約120分) →上諏訪駅からJR各停で約10分→岡谷駅→徒歩600mの花岡城 (見学約30分) →岡谷駅からJR各停約20分→村井駅 徒歩15分→宿泊

宿舎「サンピア松本」(諏訪駅前985) ☎0263-86-2323

2食付き(夕食は会食) それをきめて一人1万円の見込み

[第2日] 村井駅からJR各停で約10分→松本駅→徒歩で史跡等を見学しながら→松本城

松本城見学(10時～6時) 午後は自由行動

【おすすめ】旧岡谷学校・旧制松本高等学校・司法博物館・葉の街・はかり資料館 等

3つの城の見所

諏訪高島城——戦国時代末期に日根野氏によって諏訪藩の水中に造営された浮き城。徳川の代になって消われていた諏訪氏が復して近世城郭に改造。もう戦いはないと思通して城の周囲を干拓して貯蔵両端に努めたので、今は四囲とも陸地。本丸は遺構がよく残っていて、石垣の全部が現存。隅櫓を兼ねた復元天守は内部が博物館。

花岡城——鎌倉時代の承久年間(1219-22)から諏訪氏の一族である有賀氏がいたとされる。やがて天文17年(1548)の甲斐武田氏の来攻に対たれて城は陥没。後に武田信業が別城にしたが、間もなく織田・徳川連合軍に敗れて城の使命を終る。現在は公園であるがそれにしても遺構がよく残っている。

松本城——①本丸内に五層六階の天守のほかに三層の乾(ぬい)小天守、巽(たけ)付櫓が連なる連絡複合式天守と呼ばれる珍しい形式である。

②天守は全国でわずか12基(一説には13)しかない現存天守の一つで、その中でも最も古い建造。国宝4か城の一つ。

③その天守は「軍でっかち」に見える。関ヶ原合戦後、大名は戦いによってではなく、徳川家からの「書状一つ」で死命を削せられた。それを回避するための改造との見方もある。



江戸城



矢切りの渡し

城を歩く会5周年記念行事の特集号

5周年記念行事は7月23日付けの会報第6号で予告したものと大筋は変わりません。しかし時刻や会場などの点で多少の変動がありますので、改めてご案内します。

1. 月日 11年1月23日(土) 小雨決行 予備日なし
2. 集合 午後1時30分 東急大井町線九品仏(9品)駅
(駅前は狭いので) 駅から15mの「九品仏神真寺」の石柱の前に集合

3. 日程

第一部「奥沢城見学会」 概ね1時30分～2時20分

場所 駅から徒歩5分の九品仏神真寺の寺域

内容 世田谷吉良氏の重臣大平氏の屋敷の奥沢城、戦国末期の鹿城であるが今も土塁が明確に残る。

注 城として室町時代に100年あり、鹿城後90年の空白の跡地に江戸時代になってから深川から移転してきたのが神真寺。

(終了後大井町線で2駅の等々力駅へ一同揃って移動)

第二部「記念講演会」 概ね2時40分～4時30分

場所 玉川区民会館 (上記等々力駅に隣接)

内容 記念講演「城郭史から見た5か年に訪ねた城」 講演者 大森拓二氏
※ 当日までにB5版80余ページの記念誌を用意する

(以上 参加費千円 記念誌代千円)

第三部「5周年を祝う会(兼新年のつどい)」 概ね4時40分から

場所「水貫路」〒247-3-1 ☎3705 8670 第二部会場から徒歩10分
会費 男性5千円 女性4千5百円

4. 備考

第一部と第二部とは一連のものなので続けてご参加いただけます。

第三部はご都合のつく方ではできるだけご参加願いたいものです。

5. 申し込み

1月10日までに下記へはがきか電話をお願いします。

その際、第一部・第二部だけが第三部までかを明らかにしてください。

- 「会報」第4号発行。
 10月14日 「土浦城、水戸城見学会」(21名)
 11月14日 「忍城、花崎城見学会」(27名)

平成10年(1998)

- 1月10日 「本郷に江戸を訪ねる」(29名)
 2月21日 「江戸城の裏側を訪ねる会」(47名)
 「会報」第5号発行。
 3月19日 「古河城見学会」(27名)
 4月8日 「市川国府台から柴又へ 古代から現代まで」(33名)
 5月16日 「川越城と蔵造りの街を歩く」(26名)
 7月26日 「上野周辺の史跡を歩く」(32名)
 「会報」第6号発行。
 9月12日 「江戸城の日本橋、丸の内方面を歩く」(33名)
 10月14日 「国宝松本城および諏訪高島城ほかを一泊で訪ねる会」(32名)
 11月20日 「鉢形城および武州松山城見学会」(25名)
 12月15日 「会報」第7号発行。

以上、初期5年間のあゆみは「5周年記念誌」に記載した。

平成11年(1999)

- 1月23日 「5周年記念行事」=奥沢城と記念講演(東急大井町線九品仏駅集合=50名)
 第1部=奥沢城見学会
 世田谷吉良氏の重臣大平氏の城。主郭の浄真寺に土塁などの遺構を探る。
 第2部=記念講演(世田谷区玉川区民会館)
 『城郭史からみた5か年に訪ねた城』(大森拓二会長)
 これまでに訪ねた城を振り返りながら関東の城郭史と背景などを解説。
 第3部=「5周年を祝う会」(世田谷、木曾路)
 「城を歩く会5周年記念誌、城郭史からみた5か年に訪ねた城」発行。
 「会報」第8号発行。
 3月23日 「NHK大河ドラマ『徳川慶喜』から『忠臣蔵』の時代へ」(JR両国駅集合=42名)
 午前は両国橋や吉良邸、回向院など忠臣蔵のゆかり地を歩き、午後は浜松町に移動して芝離宮庭園や増上寺、薩摩屋敷、泉岳寺などを回る。
 4月21日 「久留里城と木更津の町を歩く」(JR久留里線久留里駅集合=33名)
 ①久留里城=中世里見氏居城、江戸時代は土屋、黒田3万石など。中世山城が本丸、二の丸で山麓に三の丸を開いた。二重櫓を天守を称したともいう。浜松城を模した鉄筋コンクリート模擬天守、資料館、平地の三の丸跡をめぐり、夕闇の木更津で「お富さん」のゆかり地や「狸ばやし」の証誠寺など。
 5月20日 「佐野城、唐沢山城見学会」(JR佐野駅集合=33名)



5周年記念誌



増上寺

①唐沢山城＝中世佐野氏の戦国山城、何度も落城を経験した戦いの城として知られる。関東ではめずらしい石垣の堅城、戦国山城の縄張りを精度よく残す。

②佐野城＝唐沢山城主の佐野氏が家康の命で平城を構築して移る。在城12年、大久保長安事件に連座改易。のち堀田1万石陣屋に。遺構は土塁、堀切りなど、二の丸に博物館も建つ。町中にはよく往時を留める。

7月9日 「小石川、湯島に江戸を探る」(JR飯田橋駅集合＝32名)

牛込見附、神楽坂をめぐって小石川後樂園で見学と昼食、午後は伝通院、湯島天神に足をのばす。

「会報」第8号発行。

9月20日 「新井城および三崎城見学会」(京急三崎口駅集合＝29名)

①新井城＝三方を海に囲まれた断崖、景勝の地に立地した名門三浦氏の海城。北条早雲に攻められて落城、「油壺」の名は戦死者の血で海が油を布いたように染まったことから。地形や土塁、空堀、引橋跡、三浦氏の墓などを研修、主郭は東大観測所で残念だが外観だけ。

②三崎城＝新井城の支城でのち北条水軍の根拠地。城跡碑と解説板で概要解説、市役所と三崎中学校が主郭域で寺は出丸、道路は空堀跡。「城が島」は城前の島の意。

10月25日 「仙台城、若林城および山形城を一泊で訪ねる」(JR仙台駅集合＝34名)

①仙台城＝前身は奥州国分氏という。関が原のあと伊達政宗が築城、子孫が62万石を継承して明治維新におよんだ。広瀬川に向かってせり出した青葉山段丘上に立地した天然の要害で、山上に本丸、政宗の銅像の下で市内を一望しながら慧眼に思いをはせる。その後、三の丸、二の丸と上から下へと見学、現況は青葉城址公園として整備、復元の大手門と脇櫓、高石垣などはみごとなもの。仙台のシンボル青葉城の面影を伝えている。

②若林城＝政宗の隠居城として築く。単郭平城でいまは塀を巡らせた宮城刑務所。外周の空堀、水濠、土塁がよく保存されているが中には入れない。

③山形城＝室町はじめ斯波氏築城、近世は最上、鳥居などをへて奥平6万石。内部は公園で二の丸大手門などを復元、水濠や高石垣、多聞櫓が周辺の緑に映え、往時をしのぶに十分。

「サンピア仙台」宿泊。

11月17日 「新橋周辺の史跡と御台場を見学する会」(JR新橋駅集合＝35名)

「忠臣蔵」の田村右京太夫邸など新橋周辺の史跡をめぐって午後は「ゆりかもめ」で御台場へ。ペリー来航の翌嘉永7年構築した品川第三台場は海上に5～7m、一辺70mほどの方形石塁を築いた。石垣上の土塁に大砲を並べ、内部の平坦地は陣屋、弾薬庫跡など。石積みので武者返しや砲台、舟渡口を見学。第六台場を遠望。

12月8日 「大胡城および前橋城見学会」(JR両毛線前橋駅集合＝20名)

①大胡城＝中世大胡氏居城、武田勝頼に攻められて落城。徳川時代は一時牧野2万石となるが元和2年に廃城。荒砥川断崖に立地、升形、水の手門虎口、空堀、土塁などが残る。

②前橋(厩橋)城＝中世箕輪城支城、近世はじめ1km四方の大城郭に改造。後期は松平



仙台城

15万石居城。利根川を背にした輪郭式縄張りで、現在は群馬県庁舎などの官公庁やオフィス街、わずかに本丸付近の巨大石垣や三の丸跡の公園、外曲輪の車橋門石垣が往時をしをばせる。

平成12年(2000)

- 1月22日 「麻布、渋谷の史跡と渋谷城を訪ねる会」(地下鉄日比谷線広尾駅集合=36名)
有栖川宮公園は南部藩下屋敷の現存庭園、佐倉堀田藩下屋敷跡などを巡って渋谷城跡の金王神社へ。渋谷城は平安時代渋谷氏築城、舌状台地先端に立地、急崖と川に囲まれた要害だが北条氏に攻められて落城。遺構はほとんどない。
「会報」第10号発行。
都合のつく会員で「新年のつどい」を開催
- 2月12日 「江戸城見学会」(地下鉄有楽町線桜田門駅集合=47名)
世田谷区広報で募集した番外企画。桜田門、二重橋前、桔梗門をまわって大手門から皇居東御苑へ。江戸城本丸跡、松の大廊下、天守台を巡り、平川門外で解散。
- 3月14日 「関宿城と近くの史跡を訪ねる会」(東武野田線清水公園駅集合=43名)
①関宿城=中世古河公方支城、後北条をへて江戸時代は中期から久世5万石居城。江戸川と利根川の分岐点で川と低湿地の要害だが城域の半分近くを戦後の河川改修工事で削られた。模擬天守の県立博物館は本丸から離れ立つ。農地や小公園、牛舎などに変わった主郭跡や城下史跡をめぐる。
- 4月22日 「再び八王子城を訪ねる会」(JR高尾駅集合=22名)
①八王子城=中世大石氏築城、その名跡を北条氏照が継いだ。石垣で壘を固めた戦国の大城郭で信長の安土城を見習ったともされる。御主殿跡から段々状の曲輪を上りつめた頂上が主郭、天正の小田原攻略で総攻撃をくらって落城した。中世から近世への移行期の代表的な城、ことに山麓部の引橋から御主殿付近の構造は「この城を見ずに戦国の城を語れない」とされる。
- 5月11日 「掛川城ならびに浜松城見学会」(JR掛川駅集合=33名)
①掛川城=中世今川氏支城で徳川家康が攻略した。近世は中小譜代が目まぐるしく入れ代わり十三家目の太田7万石が明治維新に。二の丸御殿は書院造りで全国でも珍しい往時のままの現存、太鼓櫓も移築だが当時のもの、天守は平成木造復元の第1号。厳密な検証で再建された。
②浜松城=徳川家康躍進期の本拠、近世は十二家が変遷し井上6万石が締めくくった。濠は埋め立てられたが本丸石垣は現存、素朴で荒々しい。三重の天守は史実に基づかない模擬。裏側の作左曲輪は「お仙泣かすな」の本多作左衛門邸跡。
- 6月7日 「古都鎌倉を歩く」(JR鎌倉駅集合=34名)
バスで杉本寺、杉本城跡、鎌倉宮で昼食、頼朝の墓、大蔵御所跡、鶴岡八幡宮、若宮大路など頼朝ゆかりの地をめぐる。
- 7月14日 「小金城ほかを訪ねる会」(JR北小金駅集合=34名)
①小金城(大谷口城)=中世高城氏居城、北条氏に属して小田原攻略で廃城、一部が歴



関宿城



浜松城



鎌倉鶴岡八幡宮

史公園として残り、障子堀、畝堀を復元、午後はおじさい満開の本土寺に移動、家康側室で信吉の生母お都摩の方（下山の方）と実家秋山一族の墓などを参る。

「会報」第11号を発行。

9月19日 「太田道灌や豊島氏の出城跡を訪ねる会」（JR西日暮里駅集合＝45名）

西日暮里公園や道灌山を巡り、王子に移動して豊島氏出城飛鳥山公園、さらに赤羽に転じて稲付城跡へ。稲付は太田氏の城でいまは静勝寺になっている。

10月24日 「犬山城ほか名古屋北方の諸城を一泊で訪ねる会」（JR名古屋駅集合＝42名）

①犬山城＝全国わずか十二の現存天守、国宝。中世織田氏居城、一族間の抗争を経た小牧・長久手の戦いで落城、慶長期に近世城郭に大改修された。江戸時代を通じて尾張徳川家の付家老成瀬氏の城で、維新後民間に払い下げられたが取り壊しを免れた。木曾川を前景に断崖に建つ姿は李白の詩から「白帝城」ともいわれる絶景。

②岐阜城（稲葉山城）＝国盗り斉藤道三、天下布武の織田信長居城。道三が嫡男義竜に殺害されると娘婿の信長が弔い合戦、秀吉が間道伝いにかからめ手から潜入して火を放ったとする。信長が小牧山から本拠を移し岐阜城と改めた。ロープウェイで頂上近くまで上りやや進むと天守、史実と異なる模擬で内部は資料館、最上三重展望台からの眺望は雄大、長良川と岐阜市街が眼下に広がる。

織田信長館跡＝岐阜城に移った信長の居館跡。

③加納城＝中世美濃守護土岐氏の出城、いったん廃城となるが家康が対豊臣包囲網として再建、後期は永井3万石になった。いまは加納公園で本丸の水濠と石垣だけ。しかし過渡期の「天下普請」石垣に特徴がある。

④大垣城＝戦国時代は斉藤氏の支城でのちに信長、秀吉が支配下においた。関が原から10km、東海道、中仙道分岐の要衝で、関が原の合戦は石田三成の西軍本陣になった。江戸時代は戸田氏10万石、明治も存城で破却を免れたが昭和戦災で焼失、現在本丸周辺は大垣公園として整備され水濠と石垣が現存、珍しい四重四階天守と隅櫓二基が再建されている。展示の「おあむ物語」は必見。

⑤清洲城＝はじめ尾張守護職斯波氏で、信長が一族の主家織田家を攻めて尾張の主、この城から桶狭間に出陣した。のち次男信雄、福島正則、徳川義直に変わり廃城。城跡は五条川のほとりで、城のまん中を新幹線と東海道本線が縦断。本丸跡は石垣と清洲城址碑、天守は模擬。

⑥名古屋城＝中世今川氏的那古野城が前身、城主となった信長が城を清洲に移して廃城となるが、関が原の戦いに勝利した家康が九男義直の新城＝名古屋城を天下普請で再建した。北側低湿地を控えた平城梯郭式縄張り、ほぼ正方形の本丸は1万坪をはかる。諸大名がきそいあった巨石の先陣争いが知られる。天守、本丸御殿は昭和20年の昭和空襲で焼失、34年鉄筋コンクリートながら忠実に再建、屋根にシンボルの金のシャチがさん然と輝やく。

宿泊＝サンビア岐阜。

11月24日 「江戸城三つの見附と出城を歩く会」（JR四ツ谷駅集合＝30名）

四谷から外濠に沿って四谷見附、食い違い見附、赤坂見附を回り、江戸城の出城



犬山城



名古屋城

日枝神社、井伊彦根藩邸跡から桜田門で解散。

「会報」第12号発行。

12月14日 「大庭城ならびに遊行寺見学会」(小田急藤沢本町駅集合=37名)

①大庭城=中世大庭氏、太田道灌の城。北条早雲の進攻で落城、大改造したが、小田原攻めで廃城。主郭一帯は大庭城公園となり大規模な土塁、空堀が整備されている。遊行寺は鎌倉時代一遍上人開祖、時宗の古刹、天下の三黒門をくぐると壮大な本堂に出る。堀田家や酒井家の墓などを参拝。

平成13年(2001)

1月13日 「世田谷城見学会」ならびに「新年のつどい」(東急世田谷線上町集合=35名)

第1部=「世田谷城見学会」

①世田谷城=室町時代足利公方の重臣吉良氏居城。世田谷城址公園と豪徳寺周辺の城域を巡る。

第2部=「藍屋」オークラランド店で「新年のつどい」

2月19日 「道灌の山吹き伝説の地ほかを訪ねる」(地下鉄東西線早稲田駅集合=49名)

高田富士、高田の馬場跡をへて徳川清水家下屋敷の甘泉園公園で見学と昼食、午後は道灌山吹伝説の地、思影橋から新江戸川公園、関口芭蕉庵へ。

3月6日 「千葉県鶴舞城ほか見学会」(JR内房線五井駅集合=22名)

①鶴舞城=浜松井上6万石明治の転封地。築城二年目、完成前に廃藩置県。地形や水濠、土塁や堀切り、本丸藩庁舎、藩校跡などを回る。

②池和田城=中世里見氏の支城で多賀氏居城。北条氏政に攻められて落城、標識や土塁、虎口など。

4月21日 「箱根山中城ほか見学会」(JR東海道線三島駅集合=37名)

①山中城=北条氏政が秀吉の小田原攻略に備えて築城。7万の大軍の包囲であっけなく落城。自然の地形を取り入れた縄張りで障子堀、畝堀が復元されている。楽寿園は広大な自然林風庭園、明治中期から小松宮邸、戦後市公園、あいにく湧水で水のないカラ池、残念だった。

「会報」第13号発行。

5月24日 「駒込の寺町から六義園ほかを歩く」(地下鉄南北線本駒込駅集合=33名)

吉祥寺、駒込富士、六義園、本妙寺へ。吉祥寺は曹洞宗の旧学林。重厚な山門、大名墓が林立する。六義園は柳沢吉保の下屋敷だった回遊式築山山水庭園。

7月18日 「小山城、鷺城見学会」(JR小山駅集合=28名)

①小山城=鎌倉期の守護職小山氏、戦国後期は後北条に降り、小田原攻略で取り潰された。慶長5年の関が原合戦の第一舞台で、会津進攻中の家康がUターンする小山評定が有名、江戸時代は古河藩の陣屋でいまは城址公園、曲輪や土塁、空堀などの遺構が復元されている。

②鷺城=中世小山氏の支城。外郭は宅地化、内郭に中世の遺構が残る。

9月14日 「浅草、水上バス、浜離宮庭園」(浅草寺本堂横集合=48名)



世田谷城



山中城

浅草寺境内をめぐり水上バスで浜離宮へ。浜離宮は江戸城の出城で別荘、家宣、吉宗、家斉、慶喜ゆかり地として有名、維新後皇居の離宮とされた。お伝い橋、三百年の松、お上がり場、カモ場などを見学。

10月11日 「信濃路の古城を一泊で」（貸切りバス、渋谷出発＝45名）

①上田城＝天正年間に真田昌幸が築城、二度にわたり徳川軍の攻撃を凌いだ堅城で有名、関が原の後いったん破却されるが真田信之が再興、松平4万石で維新に。千曲川を見下ろす段丘上に立地、主郭部分は城址公園で北櫓、南櫓など三基は現存、東大手門は復元。本丸を巡る水濠と二の丸の空堀はみごと。

②真田の古城＝真田氏発祥の地、小県郡真田庄の埋もれた古城にルーツを探る。

③松代城＝川中島の戦いの時、武田信玄が築いた海津城の後身。江戸後期は真田8万石居城。千曲川を背にした梯郭式だが残念ながら工事中のため正面のみ、希望者は真田館を回る。

④小諸城＝中世大井氏、のち武田、後北条、徳川氏と支配が変遷し、江戸後期は牧野1万石に。浅間山麓、千曲川を眼下に見下ろす天険の要害。本丸に行くほど下がる穴城。三の門、天守台、堀などをめぐり、「雲白く遊子かなしむ」藤村句碑を見学。

「会報」第14号発行。

11月19日 「御殿山から品川宿へ」（JR品川駅集合＝33名）

品川駅から御殿山、品川台場、品川宿の名所を訪ねながら青物横丁まで足をのばす。

12月12日 「臼井城と成田山新勝寺見学会」（京成うすい駅集合＝32名）

①臼井城＝鎌倉時代からの千葉一族臼井氏本拠。印旛沼に面した千葉家水城群の1つで、船で本佐倉城に直結した。城址公園として本丸、二の丸を整備、虎口、土塁、空堀が復元。午後は成田に移動、新勝寺は真言宗智山派の別格本山で広く信仰を集めているが、今回は建築物や庭園の参観に重点。

平成14年(2002)

1月19日 「白金長者館見学会」および「新年のつどい」（JR目黒駅集合＝44名）

①白金長者は室町時代の土豪柳下上総介で、館跡は目黒の都立自然教育園と庭園美術館一帯とする。微高地を本丸とする丘城でL字型やU字型をした長土塁、水濠などが現存する。しかし戦時下の火薬庫時代に改変が多く、遺構そのままとはいえない。

「和民」目黒店で「新年のつどい」

「会報」第15号発行。

2月15日 「街全体が城ともいえる鎌倉を歩く」（JR藤沢駅集合＝45名）

江ノ電で稲村が崎へ。稲村が崎と極楽寺切り通しは新田義貞が大潮を利した鎌倉への突入コース、鎌倉は火の海となって幕府が滅亡した。大仏切り通し旧道は住宅区にも載らない秘境、そびえ立つ切り岸絶壁に感動、置き石、馬返し、切り通しに鎌倉城の厳しい守りを体感。

3月19日 「片倉城、かたくりの花、高幡不動、高幡城を見る」（京王線片倉駅集合＝38名）

①片倉城＝応永年間長井氏の平山城で戦国期は後北条支城。現況は片倉城址公園で城域



小諸城

が広く残存度もよい。土塁、空堀、物見、横矢が一見して分かりやすく残る。白いかたくりの花が一面に広がる。

②高幡城＝高幡不動に隣接する平山城。室町末期高幡氏築城の後北条支城、天正18年前田、毛利軍に攻められ開城。

4月28日 「石神井城と照姫まつり」(西武池袋線石神井駅集合＝40名)

①石神井城＝石神井川を中心に勢力を張った豊島氏の本拠。武蔵台地の舌状台地先端に立地、急崖と三宝池を自然の要害としたが太田道灌に攻められ落城。現在本丸は保存のためフェンス内に空堀と土塁のみ、許可を得て入る。殿塚、姫塚をめぐり、開催中の「照姫祭り」会場で解散、照姫は落城時に三宝池に身を投じたとするヒロインのお姫さま。銘々に祭りを楽しむ。

5月9日 「福島県方面の古城を一泊で訪ねる会」(貸し切りバス、渋谷出発＝44名)

①白河城(白河の関)＝古来みちのくの玄関、飛鳥時代大和政権が創設という。小丘を利用した国境守備隊基地といえる。

②白河小峰城＝中世白河結城氏、秀吉の奥州平定後は会津の支城。寛永4年丹羽家が入り幕府で大改修、江戸後期は阿部10万石。戊辰戦争に二本松藩預かりで落城した。阿武隈川の南側段丘に立地した梯郭式縄張りで、現在は小峰城公園。石垣は現存、天守代用の三重櫓と前御門は復元、平成木造復元なので旧状に忠実。

③二本松城＝中世畠山氏、天正以降は会津若松支城、寛永年間に白河から丹羽光重が移って近世城郭に改めた。維新まで丹羽10万石だが戊辰戦争で焼失した。霞が城公園で箕輪門は復元、急坂を登った本丸は総石垣で石積み見本市、年代ごとに野ヅラ、打ち込み、切り込みが揃う。さすが名手丹羽氏の城、高石垣に感動、戒銘石、落城家老の碑をみやり、玉砕した少年隊の奮戦レリーフにひとしお感動。

④会津若松城＝前身は黒川城で芦名氏、いったん伊達政宗が奪うが秀吉の奥州平定で蒲生氏と代わり、寛永から秀忠の落胤保科正之＝松平23万石で明治維新に。戊辰戦争は新政府軍の猛攻撃を受け開城を余儀なくされた。会津盆地中央丘陵を利用した梯郭式平山城で、本丸中央に天守、走り長屋で区分けされた南側に本丸御殿が置かれた。天守台は蒲生時代、層塔型五重五階の天守は外観復元で、南走り長屋、干飯櫓は復元したばかりで木の香も新鮮。続いて飯盛山に白虎隊の墓を参拝。

⑤猪苗代城＝中世芦名系猪苗代氏、江戸時代は会津若松の支城。石垣や土塁、堀跡がよく保存されている。雄大な磐梯山の山容を一望。

「会報」第16号発行。

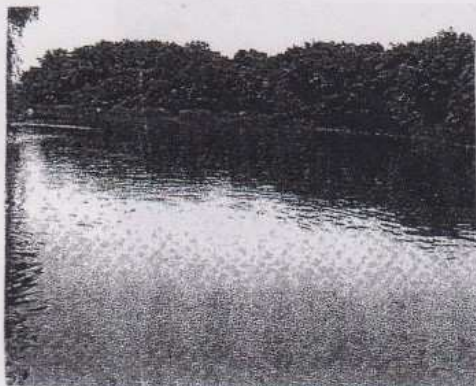
7月17日 「南千住の史跡と石浜城の跡を訪ねる」(JR南千住駅集合＝35名)

①石浜城＝平安時代末期江戸氏が隅田川河口の微高地に築城、本丸はガス会社のタンクあたりで石浜神社は城の守り神という。これといった遺構はない。このほか小塚原、千住回向院、汨橋などを回る。

9月19日 「深川に江戸を探る」(大江戸線森下駅集合＝32名)

深川碑、芭蕉庵展望公園、清澄庭園、深川江戸資料館、館内で解散。

10月29日 「新潟方面の古城を一泊で訪ねる会」(貸し切りバス、渋谷出発＝43名)



石神井城



白河小峰城



二本松城

①春日山城＝中世山城、戦国第一の要害とされた上杉謙信居城。慶長3年堀秀治が入封、次の松平忠輝が平城の福島城に移り廃城となった。山上の要害と山麓武家地を一体化させた巨大城郭で、現在は春日山城史跡公園、総構え堀と虎口、土塁、空堀、井戸跡、資料館などが整備されている。あいにく強い雨、傘を片手に本丸をめざす。粘土質の山道に足をとられ、日本海や森の都は見えない。謙信が眠る林泉寺へ。

②高田城＝慶長後期家康の子松平忠輝60万石築城、伊達政宗縄張り、天下普請の城。後期は榊原15万石で維新に。本丸周囲に三重の水濠を回した輪郭式土の城、石垣はない。現在主郭部分は高田公園となり、天守代用であった本丸三重櫓が復元された。満々と水をたたえた本丸周辺は「日本三大夜桜」としても有名だが引き続き雨で記念写真に傘も。

③椎谷陣屋＝江戸中期からの新参譜代堀1万石陣屋、日本海に面した岸壁の上に立地、中心部は60mほどの方形で藩邸、勤番所、馬場などが置かれた。いまは周囲の土塁だけ、史跡看板がある。近くの展望台から雨にむせぶ荒波を見下ろす。

④長岡城＝慶長年間堀氏築城、元和から牧野6万石。明治維新の時和平交渉が決裂、長岡戦争で落城した。JR長岡駅付近に本丸碑、厚生会館に二の丸碑が立つ、かつてこの地に水濠が廻り、本丸代用の御三階櫓も立ったが往時の景観はまったく見られない。城跡から離れた悠久山公園に建てられた郷土資料館に模擬天守が再建されていた。

11月22日 「生実と小弓 二つのおゆみ城」(JR内房線蘇我駅集合＝20名)

①小弓城＝中世下総、上総攻防の城。はじめ千葉一族の原氏、永正年間に足利義明(小弓公方)が攻め落とすが、国府台に敗死すると北条氏と組んだ原氏が復讐する。

現状は畑と墓地。広い城域削平地に空堀や土塁、虎口、土橋などの遺構が残る。

②生実陣屋＝寛永4年秀忠の側近、森川重俊が加増一万石で居所を築く。小弓城を移した中世北小弓城を詰め城に山麓に陣屋を置いた。周辺の都市化でほぼ壊滅、空堀、土塁を廻り、菩提寺重俊院の歴代藩主の墓を参詣。

12月16日 「武蔵府中に古代、中世を探る」(京王線府中駅集合＝41名)

「会報」第17号発行。

平成15年(2003)

1月15日 「太田道灌の遺跡や江古田古戦場、和田氏館跡を訪ねる」(西武新宿線沼袋駅集合＝36名)

道灌遺跡とされる氷川神社、古戦場碑の江古田公園、哲学堂公園を歩く。江古田古戦場は豊島氏が太田道灌に最後の戦いをいどんだ野戦場。敗れた豊島氏は石神井川城の落城で滅亡した。哲学堂公園は頼朝の重臣和田義盛館跡という。地形や空堀などに遺構を探る。

「藍屋」南長崎店で「新年のつどい」。

2月25日 「水戸城を見学し梅の偕楽園を訪ねる」(JR水戸駅集合＝23名)

①水戸城＝鎌倉はじめ馬場氏の馬場館を前身とする。戦国時代江戸氏をへて佐竹氏。しかし佐竹氏も関が原の合戦で移され、家康の子信吉、頼宣、頼房と変わる。以後將軍家を支える御三家二十五万石で明治まで続いた。那珂川と千波湖に挟まれた台地先端に立



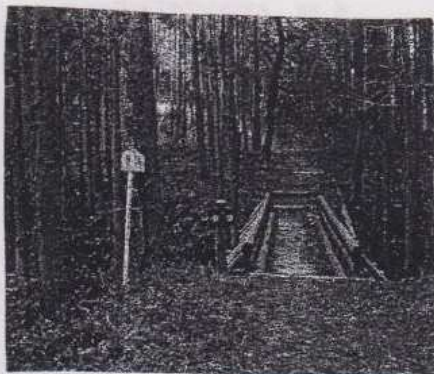
高田城



水戸城偕楽園

地、本丸、二の丸、三の丸、城下町が連なる総構え連郭式縄張りの土の城。二の丸を本城に御三階を置いた。現況は学校など。本丸堀切り、土塁、薬医門などの城遺構、天保年間の創建の藩校弘道館を見学、偕楽園を回る。水戸城の外郭で水戸黄門光圀作庭の下屋敷、日本三大庭園に満開の梅香を満喫した。

- 3月14日 「喜多見に次大夫堀と江戸氏のその後の地を訪ねる」(バス停次大夫堀公園集合=35名)
次大夫堀は江戸時代はじめ小泉次大夫が開発した用水路、喜多見氏は名門江戸氏の末裔で室町から江戸中期までの館と陣屋。後北条氏に与し、家康に名家として旗本に取り立てられ、重政の時、二万石に進むが刃傷事件で改易となる。須賀神社が跡地だが遺構はない。
- 4月4日 「芝公園周辺の名所や史跡を歩く」(JR浜松町駅集合=42名)
芝離宮庭園は小田原大久保家、紀伊徳川家下屋敷などをへて皇居の離宮になる。海水を取り入れた池泉回遊式江戸大名庭園。芝増上寺は徳川將軍靈廟に参拝、愛宕山、西久保城跡を回る。鎌倉時代伝熊谷直実の城、虎の門パストラル、ホテルニューオータニあたりの平山城とされるが遺構はない。
- 5月15日 「北関東古城を日帰りバスで訪ねる」(貸し切りバス、渋谷出発=41名)
①大田原城=中世天文年間太田原氏築城という。晴清が秀吉の小田原攻略に駆けつけ、子孫が一万石で明治維新に。蛇尾川の河岸段丘に立地する平山城で、本丸は真ん中南北に二の丸、三の丸を配した縄張りで、現在龍城公園、土塁、空堀がある。
②黒羽城(陣屋)=天正年間大関氏の城、北条攻め以降徳川氏に従い、関が原の戦い前哨戦で修築した。跡地は公園で土塁、水濠、空堀が現存、模擬望楼が建つ。
③喜連川陣屋=天正18年古河公方家の没落を惜しんだ秀吉が三千石で再興、喜連川を称した。一万石未満だが血筋から大名に準じた。城地は現在市役所など。遺構はなく、不釣り合いな石垣積み模擬渡り櫓大手門が建つ。
④烏山城=中世応永年間那須氏築城という。秀吉の小田原攻めで所領没収、以降中小大名家をへて享保から大久保二万石。城は俗に五城三郭という、主郭は平山城で中世山城の面影を止めている。石垣、土塁、空堀が、山麓の三の丸には部分石垣が現存している。「会報」第18号発行
- 6月9日 「都心の赤坂に今井城などの史跡を訪ねる」(東京メトロ千代田線赤坂駅集合=42名)
①今井城=木曾義仲四天王今井兼平の城という。中世は小田原支城で、近世には三次浅野家中屋敷跡、氷川神社、明治歩兵連隊、戦後米軍でいまTBSと変遷した。そのほか赤坂周辺の史跡を歩く。
- 9月19日 「元洲砲台と富津陣屋および飯野陣屋を訪ねる」(JR青堀駅集合=12名)
富津陣屋は江戸後期、江戸湾を守る海防陣屋、元洲砲台は明治はじめの砲台でいまも水濠や土塁が残る。飯野陣屋は保科二万石居所、「日本三大陣屋」の一つで水濠が廻る。大手門跡や御殿跡など城遺構を探る。
- 10月21日 「琵琶湖東岸に国宝彦根城や安土城ほかを一泊で訪ねる会」(JR彦根駅集合44名)
①彦根城=関が原合戦後、石田三成の旧領佐和山城は井伊直政に与えられ、子の直次が彦根山に移す。十二大名を動員した天下普請で豊臣包囲網という。井伊家は代々譜代筆



烏山城



彦根城

《はじめに》

1. この会は平成6年(1994)に創設されましたので、04年は10周年を迎えます。そこで1月の定例会は「新年のついで」も兼ねて「10周年記念の会」とします。
2. 試験的に実施した「日帰りバス」は好評でした。そこで04年は年間に2回とする予定です。従来はどちらかといえば鉄道利用を主としたもので、駅から遠い城はまだ実施していない所が少々ありますので。
3. 04年秋の一拍は多くのご希望が寄せられました。その中で最も要望の多い国宝・世界遺産の姫路城とその近くの城を予定し、検討中です。詳細は次号で明らかにします。

◎ 1月の定例会「城を歩く会10周年記念の会」

日時 平成16(04)年1月17日(土) 午後2時から5時30分まで
第1部 記念の会 午後2時~4時 第2部 記念祝宴 午後4時20分~5時30分

場所 青山クラブ

港区南青山6-12-15

☎ 03-466-9600

交通 渋谷駅東口(丸の内線)の8系統バス

「神谷町駅前新橋北口行き」

(新橋駅行きは地にもあり8系統に属する)

南青山6丁目下車(新橋駅7分/徒歩25分)

または地下鉄表参道駅下車B1出口徒歩10分

内容 第1部

- (1) 開会・挨拶
- (2) 記念講演(1) 山岸弘明
『徳川11代将軍家宣とその女たち』
- (3) 記念講演(2) 大森拓二
『城の天守——音があつた——音に消えた 昭和と平成で再建』

第2部 記念祝宴

付記(当日ご参加の方全員に 会から記念品を差し上げます)

会費——当日会場受付で

1部・2部通して(6千円) 1部のみ(2千円) 2部のみ(5千円)

申込——下記の①②③どちらからか

- (1) 12月3日に郵老名の定例会の昼食時
- (2) 1月6日~10日に電話・葉書などで
- (1部2部通してかどちらか一方かを明らかにして)



《はじめに》

1. 去る1月の10周年記念行事は会員の皆様のご協力により予想を超える盛会でした。改めて心からお礼を申し上げます。この上は新成以実2ケ年数になりますので、これまでよりも一層の内容の充実と努め、ご期待にこたえるよう世話人一同結束して努力いたします。
2. その一方で10年の歳月というものは、近隣の城へは行き尽くして見学地の選定に苦慮しています。打撲の運は3つ、
①新幹線の利用などで距離を伸ばす
②日帰りバスで駅から離れているので行き残している城へ
③金の初期の頃に実施した城へ再び
などを実施中です。より良い方法があればお知らせを拝望いたします。
3. 秋の宿泊は別項のように姫路城にします。2日目に大坂城との案もありましたが、行程上時間的に少し無理かと、電野城・赤穂城・明石城としました。それぞれ特色のある城です。費期持下さい。

◎ 5月の定例会(前号で既報のもの再掲 6月も同じ)

「歴史の里谷中とつづの根津神社を歩く」

日時 5月12日(水) (新橋19時) 午前10時~午後4時30分

集合 J.R.日暮里駅南口(山手線) 徒歩10分

付記 この昼食時に別項宿泊の会に本申込の方は予納金1万円を納めていただく。

◎ 6月の定例会「小田原城」

日時 6月4日(金) (新橋11時) 午前10時30分~午後4時30分

集合 小田原駅小田急線改札前(JR東横線)

付記 平成8年に石垣山城・小田原古城と小田原本城を実施した。今回は本城のみ。

その後幸平田口跡・大手門垣・馬出跡・銅門などが整備されたため。

(7月・8月は休会)

◎ 9月の定例会「大河ドラマ『新選組』ゆかりの地を歩く」

日時 9月15日(水) (新橋12時) 午前10時~午後4時

集合 JR中央線日野駅 改札前

経路 駅→宝泉寺→八坂神社→日野宿本陣跡→大宮ふりそと博物館(昼食)→

YUIO→大河ドラマ館→高橋不動尊(再実施)→京王線高橋不動尊(解散)

参加費 千円+有料3会場セット料金300円 計1,300円(集合時に)

申込 会長宅へ ☎ 156-0046 郵送は3-15-13 Tel & Fax 3303-7783

◎ 2月の定例会「江戸城の外郭を歩く」

日時 2月12日(木) (新橋19時) 午前10時~午後4時

集合 JR新橋駅(東横線)日比谷口を出て 横須賀前 午前10時

行程 駅→新橋横須賀の橋脚→芝口御門跡→水路部・国立がんセンター(解散)→

(昼食 16公園は 築地場外市場で海鮮丼(1200円) (各自) →築地本願寺→

入船・漁の地名(江戸船)→秋保町(船)→八丁堀(江戸船) 6時 地下鉄駅(解散)

参加費 千円 申込 会長宅へ (☎ Fax 3303 7783)

◎ 3月の定例会「飛鳥山寺・陣野川城他太田道灌・豊島氏の遺跡を歩く」

日時 3月12日(金) (新橋19時) 午前10時~午後4時

集合 JR上中里駅(東口) 午前10時

行程 駅→平塚神社→古代道灌の公園→西が原一里塚→飛鳥山公園(鳥居跡) (昼食)

→陣野川城(豊島氏) →川の特ネル→轟れ川の跡→紅葉亭(中世城郭跡) →

J.R王子駅(解散)

参加費 千円 申込 会長宅へ

◎ 4月の定例会「久能山東照宮・久能城と駿府城を日帰りバスで歩く」

日時 4月15日(木) (新橋 19時)

集合 7時45分 渋谷 東急イン 駅前 徒歩15分

行程 渋谷→東名道→日本平→0-701→東照宮・久能城→0-701→日本平(昼食)

(徒歩15分) →駿府城→浅間神社・(園遊園) 宝台院→東名道→渋谷(解散)

補足①久能城は武田氏の山城 慶徳後家康まつる東照宮に 社殿群は国の重文指定

②駿府城は慶徳後家康の地 鶴輪は昭和末期の復元第一号ともいえる必見の城

③浅間神社の社殿は国の重文 富士は川俣氏の山城 慶徳後改めた静岡の由来

費用 7千円程度 0-701-1000 0-701-1166 (☎ Fax 3729 0858)

申込 3月の定例会の昼食時に予納金5千円をそえて 郵送は3月12日

または田辺世話人に(☎145-0061 丸の内線1-116)

◎ 5月の定例会「歴史の里谷中とつづの根津神社を歩く」

日時 5月12日(水) (新橋19時) 午前10時~午後4時30分

集合 JR日暮里駅南口(山手線) 徒歩10分

行程 駅→善性寺→羽二重だんごと芋坂→太田道灌像と道灌物見台→藤王寺→

夕焼けだんだん→圓谷天心公園(昼食) →全生庵→瑞輪寺→大名時計博物館(昼)

根津神社(解散) (最寄駅は地下鉄南北線根津駅)

補足①羽二重だんご・芋坂・藤王寺は彰徳義隆上野戦争のゆかり

②日暮里と太田道灌は駿河川家ゆかり 瑞輪寺・全生庵は

③根津神社と善性寺は徳川家ゆかり 瑞王寺・家宣の元禄建築がまばゆい

参加費 千円 申込 会長宅へ

◎ 6月の定例会「小田原城」

日時 6月4日(金) (新橋11時) 午前10時30分~午後4時30分

集合 小田原駅小田急線改札前(JR東横線) 午前10時30分

行程 駅→幸平田口跡→馬出跡→大手門跡→二の丸→復興瑞輪寺→馬出曲輪(昼食)

→銅(1200円) 曲輪→常盤木門→本丸(復元天守外観) 歴史見聞館と天守内部は各自

◎ 10月の定例会「国宝・世界遺産の姫路城と近くの3つの城を一拍で訪ねる会」

日時 10月6日(水) ~7日(木) 19時

集合 JR姫路駅みどりの窓口前 午前11時30分

(少し早いので昼食を済ませ要すれば乗物を預けて)

行程(第1日)

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

駅→159→姫路城大手口(10時) →(朝 83.5時) →

姫路への交通
新幹線 (0493028)
東京 7:35→姫路 11:14
15210R
夜行バス
新宿 22:30→姫路 7:45
9450R
姫路駅 0493028

頭として幕閣中枢に位置した。城は明治維新後も生き残り現存。佐和口から城内へ、復元表御殿の彦根城博物館、重文の天秤櫓、国宝天守、玄宮園庭園を回る。天守は大津城から移築した三重三階、金箔シャチ、三重の廻縁高欄など、唐、千鳥、比翼切り妻破風に多彩な金具飾りが輝く。城は戦いから権力、威厳へと変わる。

②安土城=天正4年天下布武を進める織田信長の城。縄張り丹羽長秀の天下普請で、戦国色残る山城だが近世城郭の草わけでもある。山上の主郭は総石垣、天守は五重六階、地下一階、三重入母屋造りに二重の望楼を乗せた古式望楼型天守で、中腹に豊臣秀吉、徳川家康らの重臣邸を連ねた。築城6年、天王寺の変で信長の跡を追うように焼失した。一直線に伸びる大手道を息を切りながら登る。本丸はみごとな高石垣で天守跡に礎石配列が並ぶ。信長の息づかいが聞こえる。

③長浜城=天正2年豊臣秀吉が築城、元和元年廃城。琵琶湖に浮かぶ島状の地形を利用した湖城であった。天守は模擬で歴史博物館になっている。

ほかに石田三成ゆかりで井伊家の菩提寺でもある龍潭寺、長浜城の移築門大通寺、鉄砲の里国友、姉川の古戦場などを巡った。

11月18日 「鎌倉街道の関戸城と関所、古戦場および聖跡記念館ほかを見る」(京王線聖跡桜丘駅集合=38名)

①関戸城=多摩の交通要衝、鎌倉街道を見下ろす平山城。霞の関を守備した佐伯氏の館。土塁や空堀などがわずかに痕跡を止める。

分倍川原は鎌倉幕府に反旗を翻した新田義貞が鎌倉軍と戦った古戦場、駅ロータリー義貞騎馬像も。聖跡公園は明治天皇の行幸地で、うさぎ狩りやアユ漁を楽しまれたという。記念館で事跡などの展示品を見学。

12月3日 「早川城と相模国分寺跡を訪ねる」(小田急海老名駅集合=44名)

①早川城=中世早川氏居城で渋谷城の元城、相模川支流目久尻川に接した舌状台地先端に立地した平山城。現況は早川公園、れんげの里として有名。土塁、堀切、物見などがある。バスで移動、駅近くの相模国分寺跡を見学。

「会報」第19号発行。

12月17日 「特別企画 江戸城見学会」(江戸城大手門前集合=27名)

最近入会者を対象にした江戸城見学会。大手門、三門、二の丸庭園、本丸御殿跡、松の大廊下、天守台などを回った。

平成16年(2004)

1月17日 「10周年記念の会」(青山クラブ=54名)

第1部=「挨拶と記念講演」

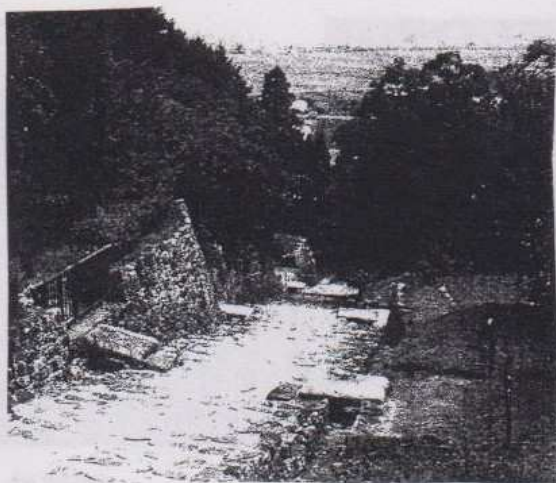
①『徳川11代将軍家斉とその女たち』(山岸弘明講師)

②『城の天守 一斉にあがった、一斉に消えた』(大森拓二会長)

第2部=「記念祝宴」

2月12日 「江戸城の外郭を歩く」(JR新橋駅集合=35名)

午前是新橋銀座の柳碑、芝口御門碑、海軍発祥の地を巡り築地市場周辺で自由昼食、



安土城



10周年記念の会

午後は築地本願寺、鉄砲洲を廻り八丁堀地下鉄駅で解散。

3月12日 「飛鳥山砦、滝野川城ほか見学会」(JR上中里駅集合=32名)

①飛鳥山砦=お花見の飛鳥山公園が太田道灌の砦跡。

②滝野川城=豊島一族滝野川氏の城。古河公方に与し太田道灌と戦って滅亡。3方を石神井川に囲まれた舌状台地先端に立地、金剛寺が伝主郭跡、道路や地形から縄張りを検証し、あわせて上中里、王子周辺の史跡を巡る。

4月15日 「久能山東照宮、久能城と駿府城ほかを日帰りバスで歩く」(渋谷出発=45名)

①久能山城(東照宮)=駿河に進攻した武田氏が築いた天然要害の山城。廃城後家康の葬地になる。家康は元和2年鷹狩りの田中城で倒れ、駿府城で逝去。遺言で久能山に埋葬、東照宮が建立された。黄金に輝く壮麗な社殿、家康の墓を参拝。

②駿府城=前身は室町時代の守護職今川氏の居館、没落後家康が駿府城を築き、天下普請で拡大した。家康の二元政治地で、その子頼宣(後の紀伊徳川家)、秀忠二男忠長が封じられたこともあった。江戸中後期は幕府直轄城で、維新の時徳川宗家を継承した家達が七十万石で封じられ、慶喜もこの地で謹慎した。ほぼ方形の輪郭式平城で二の丸堀と石垣が現存、東御門、翼橋が復元され家康の天下城を体感する。

浅間神社に移動、裏山は今川氏の山城、静岡地名の由来。

「会報」第20号発行。

5月12日 「歴史の里、谷中とつつじの根津神社を歩く」(JR日暮里駅集合=43名)

駅東口の芋坂、太田道灌像からスタート。夕焼けだんだん、岡倉天心公園、築地塀、大名時計博物館など、谷中の人気ゾーンからつつじの根津神社へ。

6月4日 「小田原城見学会」(JR小田原駅集合=38名)

①小田原城=鎌倉時代土肥氏が築城、大森氏をへた北条氏の居城だが、天正18年天下統一をめざす秀吉軍二十万に包囲され滅亡。江戸時代は大久保家十萬石で跡地は城址公園。天守台、本丸石垣、水濠、空堀などが現存、外観復元された三重天守、常盤木門、銅門、資料館や天守、銅門などを見る。

9月15日 「大河ドラマ「新選組」ゆかり地を歩く」(JR中央線日野駅集合=40名)

シャトルバスで日野宿本陣、大昌寺、高幡不動尊など新選組ゆかり地と「大河ドラマ館」などを回る。

「会報」第21号発行。

10月6日 「国宝、世界遺産の姫路城と近くの三つの城を一泊で訪ねる会」(JR姫路駅集合、2日目貸し切りバス=54名)

①姫路城=国宝4城、現存十二天守の一つで日本最初の世界遺産、現存城の中でもっとも旧状を残した日本一華麗な城として有名。天正年間秀吉の城で、江戸はじめ池田輝政が大改修、酒井十五萬石で明治維新を迎えた。現在主要部は姫路城公園、後期望楼型五重六階地下一階の大天守を中心に西、乾、東の小天守が巡る連立天守群は圧巻、大手門入ってすぐ、天守を一望する公園広場でまずは記念写真。ついで千姫の西の丸へ、百間廊下は守り固い女の館、千姫橋は脂粉の香り漂う。ハニの門、水の門などを経て大天守最上階をめざす。急階段を注意深く登る。通し柱や天井、梁、石落とし、窓の構造や釘



駿府城



小田原城



姫路城

隠しにも目が離せない。備前丸の広場に再集合、改めて見上げる。高石垣上にそびえる連立天守の威容、白い壁、豊富な飾り破風や窓、石落とし、さながら「白サギ」が天にも登る美しさに感動しきり。

②竜野城＝播磨の土豪赤松氏にはじまり江戸後期は脇坂五万石。はじめ鶏籠山に築いた山城だが、近世は詰めの城で山麓に三の丸御殿や役所などを置いた。石垣は一部現存、本丸御殿、櫓門、二重櫓、土塀などが再建されたが根拠は乏しい。

③赤穂城＝古くは加利屋城で江戸中期は浅野五万石「忠臣蔵」の城。元禄14年内匠頭刃傷で改易、翌15年暮れめでたく本懐をとげることになる。城は昭和後期から整備復元工事が進行中、大手門や隅櫓、本丸庭園、御殿跡、天守台などがまばゆい。

見どころの大石神社、花岳寺、息継ぎの井戸も回る。

④明石城＝元和年間秀忠の命で小笠原氏築城、一國一城令で廃城となった近くの城の解体資材を利用したという。大久保、本多氏をへた松平六万石居城。東海道と太平洋を見下ろす丘陵に立地した平山城で、城地は現在明石公園、本丸巽櫓、ひつじさる櫓、石垣、土塁、中堀などが現存。

「サンピア姫路ゆめさき」宿泊。

11月12日 「江戸城外堀を歩き発掘展示と牛込城をみる」（JR浅草橋駅集合＝29名）

浅草御門から電車で飯田橋へ移動、飯田橋御門と橋、牛込城、外堀発掘遺跡展示場、四谷御門を巡る。

12月16日 「横浜の小机城と茅ヶ崎城を訪ねる」（JR横浜線小机駅集合＝36名）

①小机城＝築城不詳、中世山内上杉管領家の支城で太田道灌が落とし、北条氏の時、秀吉の小田原攻略で廃城に。遺構は第三京浜国道に分断されたがよく残り、小机城市民の森公園として整備されている。

②横浜茅ヶ崎城＝中世扇谷上杉支城でのち後北条氏支城、早淵川に張り出す舌状台地に立地、台地のくびれが堀切、後北条流二重土塁、切岸、虎口、土橋など。

平成17年（2005）

1月12日 「杉並区の善福寺川畔に古代、中世を訪ねる」（大宮神社前集合＝32名）

伝八幡太郎義家居館跡の八幡社から和田義盛屋敷跡ともいわれる和田堀公園、成宗城跡推定地などを回る。

杉並区役所前の店で「新年のつどい」。

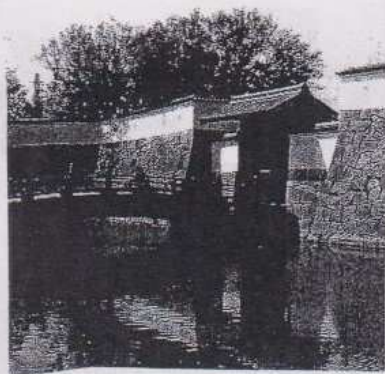
2月22日 「旧岩崎邸と隣祥院、湯島天神を訪ねる」（JR上野駅公園口集合＝47名）

上野公園の史跡をみながら高田榊原藩上屋敷跡の岩崎邸へ。旧三菱財閥当主の屋敷、明治の洋館で重要文化財、午後は春日局ゆかり地、湯島天神の白梅を見学。

3月17日 「千葉城および四街道市の鹿渡城」（JR内房線本千葉駅集合＝26名）

①鹿渡城＝中世千葉一族鹿渡氏とされるが明確でない。跡地は郷土の森公園として整備、曲輪、土塁、空堀、虎口などの遺構が精度よく復元されている。

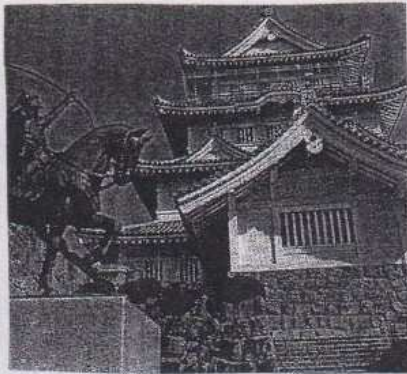
②千葉城＝中世千葉氏の居城、古河公方の享徳の乱で関東は戦国時代に突入、千葉氏は二派で争い落城した。いまは千葉城址公園として整備、四重五階の天守が市立郷土博物



赤穂城



小机城



千葉城

- 館として再建されているが史実ではない。雨の中、土塁、空堀などを回る。
「会報」第22号発行。
- 4月14日 「江戸城の裏側を歩き北の丸公園を巡る」(有楽町線桜田門集合=33名)
桜田門を出発、清正の井、三宅坂、内堀と鉢巻き石垣、近衛師団司令部から北の丸公園、田安門、九段坂へ。
「会報」第23号発行。
- 5月11日 「日帰りバスでアクアライン経由佐貫城、岡本城、館山などを見学」(品川出発=43名)
①佐貫城=中世、上総武田、里見氏支城で近世後期は阿部一万石居城。城址公園として整備、大手口の部分石垣、見張台、土塁、空堀、虎口などが現存する。
②岡本城=中世里見氏20年間の本拠。天正18年秀吉の小田原攻略で参戦が遅れ、かつ、私戦に走ったとして岡本の本城を没収され館山に移った。城地は天険の要害、里見水軍海賊城としての縄張りをみる。
③小久保陣屋=明治の田沼一万石居所。
④館山城=房総の戦国大名里見氏最後の居城。慶長後期、大久保忠隣事件に連座して改易。遺構はほとんどない。「南総里見八犬伝」を展示する模擬天守=市立博物館を見学、望楼から東京湾を一望。
- 6月10日 「両国界限に時代を追い亀戸天神の藤棚をくぐる」(JR両国駅集合=39名)
武蔵、下総国境だった隅田川からスタート、「忠臣蔵」と「相撲」の町両国からバス移動、亀戸天神で見ごろの藤を楽しむ。
- 9月13日 「お鷹の道と武蔵国分寺を歩く」(JR中央線国分寺駅集合=40名)
殿ヶ谷戸庭園からお鷹の道を真姿の池、武蔵国分寺へ歩く。
「会報」第24号発行。
- 10月4日 「富山城、金沢城などを一泊で訪ねる会」(宿泊、JR北陸線富山駅集合=53名)
①富山城=中世佐々成政の居城で滅亡後、前田利家領、寛永年間利常の二男が分知して富山前田家が維新まで続いた。城址公園に石垣や水濠が一部現存、模擬天守も建てられたが著しく違う。あいにくの豪雨、傘を差しながら見学。
②金沢城=翌日は快晴。外郭でもある兼六園庭園からスタート、ことじ灯籠に見とれる。石川門はからめ手辨形門で現存、高麗門と櫓門、隅櫓がセット、打ち込みハギ高石垣上の二重櫓唐破風出窓、なまこ壁が伝統美を演出している。本丸東面の復元櫓群、橋爪門、続櫓、五十間長屋、菱櫓などに見とれ、寺内町名残の香林坊、武家屋敷街を散策して現地解散。
「ウェルディ金沢(石川厚生年金会館)」宿泊。
- 11月22日 「江戸城外郭の数寄屋橋御門から築地、月島へ」(JR有楽町駅集合=45名)
南町奉行所跡、「数寄屋橋ここにありき」碑から銀座へ、築地市場自由昼食後、幕府海軍、帝国海軍跡地、かちどき橋から月島へ。
- 12月12日 「大河ドラマ『義経』腰越状の地と江ノ島を歩く」(小田急藤沢駅集=28名)
江ノ電で腰駅に移動、「腰越状」の満福寺、日蓮法難の龍口寺、昼食後バス移動して江ノ島の史跡を巡る。



江戸城桜田濠



館山城



金沢城

②結城城＝前身は室町期の下野守護職結城氏、家康の子秀康を養子に迎え十万石になるが松平越前家を名乗ったので絶家。元禄時代に水野一万石陣屋として再建された。城址公園に土塁と空堀がわずかな痕跡をとどめている。

③関城＝南北朝争乱期に北畠氏と戦った結城氏支城、本丸の長堀と土塁などが残る。関、結城氏の墓などをみる。

④逆井城＝前身は逆井古城で後北条氏が大改造した。かつて飯沼を望む舌状台地に立地したが江戸時代に埋め立てられたので沼はない。北条氏の北関東の最前線、境目の城で佐竹氏らに対抗した。天正期に廃城、いま城址公園で大手門と橋、物見櫓、井楼矢倉が復元、主殿は模擬、発掘調査を手伝った大森会長からエピソードも紹介された。

9月15日

「佃島から佃大橋を渡って明石町を歩く」(東京メトロ有楽町線月島駅集合＝35名)
午前は佃島、舟だまりと渡舟場、住吉神社などを見て墨田川のみえる佃島公園で昼食、午後は佃大橋を渡って聖路加ガーデン展望台、浅野内匠頭屋敷跡へ。

10月5日

「信濃路の名城、古城を一泊で訪ねる会」(貸し切りバス、新宿出発＝45名)

①松本城＝国宝四城の一つで二度目。はじめ深志城で小笠原、武田氏、天正時代に家康の臣石川氏が一新した。全国唯一の連結複合式天守、通称「う城」と呼ばれた黒い城。大天守は層塔型五重六階の外観下見板張り、右に乾小天守、左に辰巳付櫓と月見櫓を従えた構成は複雑かつ巧妙、美しさに思わず足が止まる。乾小天守横の入り口から狭い急階段を登って最上階へ。後世幕府への遠慮から廻り縁と高欄を室内に囲み込んだとされる。月見櫓は厚い土壁がなく周囲は高欄と舞江戸、風流な造りを併せ持ったアンバランスさもまたこの城の魅力の一つ。

②松代城＝永禄年間、武田信玄が上杉謙信との川中島決戦に備えた海津城の後身で元和から真田十万石居城。復元工事が終わったばかりの大手升形がまぶしい。はじめ千曲川を背負った梯郭式縄張りだったが相次ぐ洪水被害に困った藩が川を迂回させた。本丸石垣と水濠、太鼓門、北不明門、天守台、埋門などが復元され、城容が一新。川中島決戦の上杉本陣妻女山を見上げ武家屋敷地を一巡、予定した長国寺と藩校は残念ながら時間切れとなった。

③竜岡城＝幕末文久年間に三河奥殿一万石の松平氏が居所を移して成立、正式には陣屋。五つの稜堡を持つフランス式城郭で函館と「二つの五稜郭」という。石垣と水水濠は現存整備、移築台所も本物。虎口升形や砲台石垣、御台所内部、石垣の亀甲亀甲積みや天端はね出しも興味深かった。地元ボランティアに特産お新香と茶の接待を、城跡の小学校には御台所特別公開の便を図っていただいた。感謝。

④小諸城＝二度目。大手から本丸に行くほど下がる穴城。三の門から懐古園に入り、天守台などの石垣、田切り地形を利用した自然の堀などを見学。

2日目は台風接近で午後から雨。帰路、官営富岡製糸場を見学して帰路に。

「会報」第27号発行。

11月22日

「渋谷方面の史跡を歩きながら再び渋谷城址を訪ねる」(小田急線代々木八幡駅集合＝45名)

代々木八幡社で古代住居跡、「春の小川」碑など、代々木公園で昼食、NHK施設、陸軍



逆井城



松代城



松本城

平成18年(2006)

- 1月13日 「新宿と新年のつどい」東京メトロ丸ノ内線新宿御苑前駅集合=48名)
大木戸門跡、水道碑、太宗寺、甲州街道追分、上水場跡などを見学。寒さ厳しく午後の新年会が待ち遠しい。
住友ビル「住友クラブ」で「新年のつどい」開催。
- 2月14日 「埼玉県の四つの城を日帰りバスで訪ねる」(池袋出発=40名)
①岡城=南北朝時代、南朝方最後の拠点。三方を大宝沼に囲まれた要害だが足利勢の前に落城。土塁や空堀、貴重な金堀り攻め坑道、船付き場などを見学。
②滝の城=はじめ山内上杉系大石氏でのち後北条支城、天正18年小田原攻略で前田軍に攻められて落城。柳瀬川河岸段丘に立地、本丸は現在城山神社、土塁、空堀、櫓台、井戸跡などがある。
③菅谷館=鎌倉街道の交通要衝に立地、前身は畠山氏でのち後北条、名称は館だが造りは城、土塁、空堀、出升形、沼田堀を現存整備し、木橋などを復元、珍しいシトミ土塁、畠山重忠の像に見入る。
④岩付(岩槻)城=中世太田道灌築城、のち北条氏に代わり、江戸時代は中堅譜代が続いて最後が大岡二万石となった。荒川とその低湿地を背後にした台地上に立地した平山城。外曲輪を城址公園として整備、土塁、空堀などが復元整備されている。将軍家御成御殿のあった本丸跡はやや離れたガソリンスタンドの奥まった地に。史跡看板が1枚、昔日の面影はない。
- 3月22日 「北への初宿、北千住を歩く」(JR北千住駅を歩く=40名)
ほねつぎの名倉医院、荒川土手、伝馬屋敷、高札場跡、本陣跡、やっちゃ場跡など千住宿の史跡を歩く。
「会報」第25号発行。
- 4月11日 「佐倉城の桜とからめ手を歩く」(京成線佐倉駅集合=28名)
①佐倉城=前身は中世千葉支城の鹿島城で未完とされる。元和3年改めて土井利勝が築城、代々の老中城で最後は堀田十一万石。印旛沼に続く低湿地を要害にした平山城で、土の城だが大規模な土塁、空堀や角馬出しは圧巻、今回はとくにからめ手の水濠と守りを重点的に見る。
②堀田家菩提寺の甚大寺、総構え城下町、桜満開の城址公園も楽しむ。
- 5月18日 「江戸四宿のうち板橋宿とその近くの史跡を歩く」(JR埼京線板橋駅集合=25名)
新選組近藤勇の墓、旧中山道、宇喜多秀家の墓のある東光寺、加賀藩下屋敷跡、板橋、本陣跡などを見学。
「会報」第26号発行。
- 6月14日 「茨城県の四城を日帰りバスで訪ねる」(上野出発=46名)
①土浦城=戦国時代後北条方小田氏の支城だが小田原攻めで滅亡、家康の関東入国で中堅譜代、後期は土屋六万石となった。霞ヶ浦の支流を水濠水源に五重の堀を回した水城で、城下を総構えて囲んでいる。現在本丸周辺は亀城公園として整備され、本丸の太鼓櫓門が現存、西櫓は再建、水濠や土塁が現存している。



岩槻城



佐倉城

刑務所跡、道玄坂をへて渋谷城址の金王八幡宮へ。

12月15日 「市川城と船橋宿を歩く」(JR市川駅集合=39名)

駅から市川、小岩の渡し場跡、手児奈伝説の地、市川城跡の弘法寺、午後は京成線線で大神宮下へ移動、船橋大神宮、東照宮、船橋御殿跡など船橋宿を巡る。

市川城=弘法寺説を現地にて検証。

平成19年(2007)

1月20日 「新年の会」(青山クラブ=50名)この年から独立した新年会として開催。

2月21日 「静岡県で行き残した城を日帰りバスで訪ねる」(渋谷出発=45名)

①遠州横須賀城=天正年間家康が武田氏の高天神城攻略のため大須賀氏に築かせた。当初は遠州灘の海岸段丘に立地したが宝永の大地震で海岸線が後退、当時を想像することはできない。現在は城址公園として整備、石垣は川原石を積み上げた野ヅラ積みがひととき興味を引いた。

②興国寺城=中世今川、北条、武田攻防の城で知られる。いまは本丸と三方の高い土塁、櫓台石垣と空堀が現存、暗闇迫る中足元を一步一步踏みしめながら本丸へ。このほか横須賀城主大須賀家菩提寺の撰要寺、島田宿大井川川越し遺跡を見学、最後に予定した沼津城は時間切れで次回に譲ることになった。

「会報」第28号発行。

3月13日 「深川に江戸を探る」(地下鉄大江戸線門前仲町駅集合=38名)

富岡八幡宮、永代寺、古石場親水公園、仙台堀川、小名木川などをめぐる。

4月19日 「鎌倉の六浦路と釈迦堂口を歩く」(JR鎌倉駅集合=40名)

太刀洗、千葉広常屋敷跡、鎌倉公方邸跡を回り旧華頂宮邸庭園で昼食、午後は壮大な釈迦堂口を見上げる。

5月17日 「甲州および南信州の城を一泊で訪ねる」(新宿出発=45名)

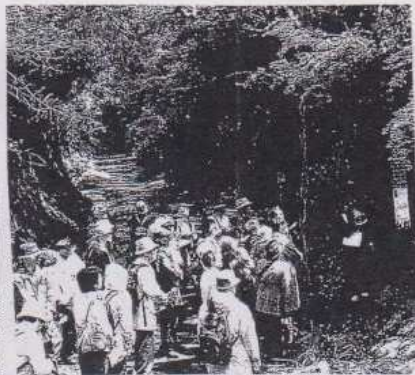
①躑躅が崎館(城)=甲斐の雄、武田信虎、信玄、勝頼3代の本拠、「人は石垣、人は城」で知られる。武田家滅亡後、織豊系の平岩氏などが入り、甲府城が築城される慶長まで続いた。武田神社が主郭跡、正面が水濠、背後を空堀が囲む。大手虎口土橋は自然石の野ヅラ積みで北西隅には後作の天守台が現存。大手前に丸馬出し、北と南虎口は土橋と升形が認められた。北奥土塁を一巡、要害山城を遠望、詰めの城だが機能することはなかった。

②甲府城=天正ころ起工、工事は歴代躑躅が崎城主が引き継いで完成は慶長とみられる。城主は将軍一門が続き甲府家二十五万石の家宣が六代将軍に迎えられた。後期は幕府直轄城で旗本が詰めた。甲府盆地の中央に位置する一条小山の頂上に本丸を置き、一段下げて二の丸を作った。現在舞鶴公園で天守台や本丸石垣などが現存、大手門や稲荷櫓が復元された。内堀からのぞむヒフミ段、時代の変遷を示す石積み変化も見どころ。

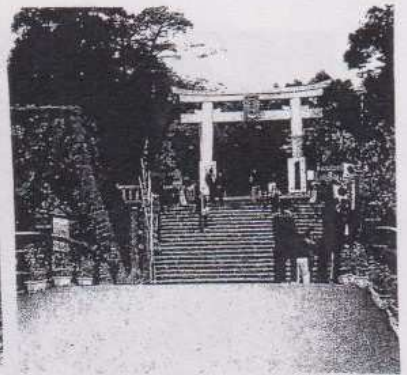
③新府城=天正年間武田勝頼が織田、徳川軍を迎え打つため築城、縄張りには真田昌幸。両側を断崖に囲まれた天然の要害およそ二万坪。本丸と二の丸の間に「シトミの構え」、背後からの攻撃に備えた大規模な空堀、東西に「出構え」が注目。総攻撃目前に移住、



横須賀城



鎌倉六浦路



躑躅が崎城

しかし勝頼は押し寄せた大軍を前に城に火を放って退散、途中家臣にも見限られ田野山中の露と消える。

③諏訪高島城＝二度目。天守台石垣のそり曲線は何度見ても美しい。

④高遠城＝武田信玄の城で山本勘助縄張りという。江戸時代は内藤三万石など、大奥女中の絵島が幽閉された。三峰川と藤沢川合流点を見下ろす段丘、舌状台地先端に位置する平山城だが、台地はほとんど高低差がなく深く幅広い空堀と土塁を巡らせている。現在城址公園として整備、春は桜の名所で周辺の交通がマヒする。現存藩校の進徳館、移築の本丸御門、空堀、太鼓楼、囲み屋敷などを見学、帰路に。

「ホテル富士見」宿泊。

6月13日 「江戸城五つの門、三つの櫓と重臣屋敷」（大手門前集合＝40名）

大手門、辰巳櫓、桔梗門、坂下門、伏見櫓、二重橋、外桜田門と江戸城の櫓と門を巡り日比谷公園で昼食、午後は法務省赤レンガ庁舎内の資料室、日比谷、霞が関の大名屋敷街跡など。

「会報」第29号発行。

9月19日 「神田方面に江戸を探る」（JR浅草橋駅集合＝41名）

浅草橋御門から万世橋、湯島聖堂、神田明神、御茶の水、ニコライ堂、大久保彦左衛門屋敷跡などを回り神保町で解散。

10月19日 「足利、宇都宮方面に日帰りバスで城と古跡を訪ねる」（貸し切りバス、上野出発＝42名）

①足利館（ぼんな寺）＝足利氏の祖義康館にはじまる。義兼が居館に持仏堂を建立したのがぼんな寺の創建で、寺域は方形館の名残、大規模な土塁と水濠が囲んでいる。南面の渡良瀬川が自然の外堀、両崖山を詰めの城とする。典型的な鎌倉武士館を伝えているといえる。

②宇都宮城＝名門宇都宮氏の居城で慶長年間所領を没収されて滅亡。江戸時代はじめ將軍家の日光東照宮参詣御成り御殿として譜代重臣を配備、本多正純は俗に「宇都宮釣り天井事件」で改易された。後期は戸田七万石、明治維新の戦いは旧幕脱走軍の攻撃で落城。現在本丸部分が公園、コンクリート土塁と水濠、櫓が復元された。

「会報」第30号発行。会を刷新。

11月14日 「石垣山一夜城および早川石切り丁場群を訪ねる」（JR早川駅集合＝41名）

①石垣山城＝天正18年豊臣秀吉後北条攻略の陣城。関東最大の織豊系城郭で通称一夜城。徒歩あるいはタクシーに分乗して城内へ。登りつめた所に半ば崩落した石垣が残る。その上が本丸、小田原市街のほぼ中央に小田原城天守が浮かび上る。最大の見どころは井戸曲輪、初期算木組隅石や割り石野ヅラ積みなどを興味深く観察。

②早川石切り丁場＝江戸城石材の石切り場と加工場、石垣山の石垣も近くの山々から切り出された。加工前の石、加工途中の半製品、完成製品、失敗品、くず石などさまざまな巨石が累々と横たわる脇を通って下山。



諏訪高島城



宇都宮城



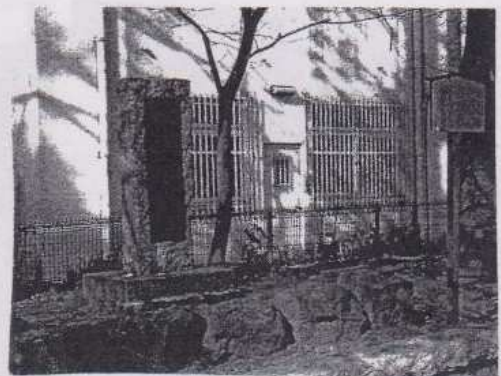
石垣山城

平成20年(2008)

- 1月19日 「新年のつどい」(旗の台タワーレストラン昭和=45名)。年賀を交換し、会の発展を祝う。
- 2月15日 「江戸城の大手門から平川門への東御苑コース」(大手門横広場集合=50名)
大手門、大手二の門、百人番所、本丸御殿跡、富士見櫓、松の大廊下跡、天守台、北の丸公園で昼食。二の丸庭園、平川門を巡る。
「会報」第31号発行。
- 3月12日 「世田谷城および代官屋敷を訪ねる」(東急世田谷線上町駅集合=43名)
午前は代官屋敷、午後は世田谷城と井伊家墓所のある豪徳寺を見学。
- 4月15日 「牛込方面に古城を探る」(JR飯田橋駅集合=46名)
①筑土城=戦国時代上杉氏砦という。筑土神社が跡地とされるが遺構はない。
②牛込城=天文年間大胡氏の城。北条氏により上野から転封、天正18年廃城、光照寺周辺が本丸と伝わる。虎口などが残る。昼食の赤城神社はその外郭といえる。
午後は尾張徳川藩戸山下屋敷跡に移動、十三万坪の敷地に池泉や築山箱根山を見る。
「会報」第32号発行。
- 5月16日 「田中城、掛川城、沼津城を日帰りバスで訪ねる」(貸し切りバス、新宿出発=45名)
①田中城=前身は中世今川氏の徳一色城、武田信玄が攻略して田中城と改称、のち家康の支配下になる。元和2年駿府城で大御所政治を進めていた家康が鷹狩りの途次ここで鯛の天ぷらを食べて倒れた。江戸中後期は本多四万石。湿田の中の低い丘陵を本丸に二の丸、三の丸を同心円で囲んだ円郭式、本丸御亭を移築した下屋敷、小学校の本丸跡、二の丸堀などを見学。丸い城を実感。
②掛川城=二度目。維新後水濠は埋められ学校や市街地に。現存二の丸御殿、移築の大鼓櫓と山上に聳える復元天守に登る。飾りの廻り縁高欄ごしに城下を一望。
③沼津城=昨年企画の仕切り直し。戦国時代三枚橋城の後身で江戸中期の安永7年側御用人水野忠友が加増入封、駿河湾河口の狩野川を利用した三重水濠を回し、三重、二重四基の櫓を建てた。維新の徳川静岡領、御殿は沼津兵学校となるが、明治以降大火や戦災、道路拡張で破壊された。消えた城の本丸跡公園や兵学校跡に当時の面影を探る。
「沼津に城があったなんて」という声も多かった。
「会報」第33号発行。
- 7月9日 「会議室での会」(世田谷区宮坂区民会館=45名)
①『天下普請石垣 織豊から徳川時代へ、その変遷と見方』(山岸弘明講師)
②『家康が江戸を選んだ理由(わけ)』(保科隆夫講師)
③『七百の城を歩いた その心の軌跡』(大森拓二会長)
はじめての教室形式研修会、①は石垣の歴史を、②は入府当時の江戸と家康の狙い、③は大森会長の城への思いを語る。三者三様、内容もバラエティに富んだ。
- 9月17日 「本郷に江戸を訪ねる」(東京メトロ丸ノ内線本郷三丁目駅集合=40名)
かねやす、東大赤門、加賀藩邸跡、三四郎池、農学部、本郷追分、福山藩藩校誠之館跡などを歩く。



掛川城



沼津城

10月14日 「京都宿泊で二条城、お土居、篠山城、福知山城、園部城」(往復新幹線、2日目・京都府内貸し切りバス=49名)

①二条城=将軍家直轄城。慶長6年家康が将軍宣下祝賀儀式のため築城、寛永3年家光の上洛と後水尾天皇行幸に備えて改修し、慶応3年十五代将軍慶喜はこの城で大政を奉還して幕府の終焉を宣言した。徳川家の節目節目に登場する歴史上の城として有名。あいくの豪雨、宿泊先の京都全日空ホテルで概要説明の後現地へ。東大手門は正門の巨大な櫓門、金色に輝く彫刻と飾り金具に埋めつくされた唐門をくぐると玄関車寄せと遠侍の大入母屋が威圧するように迫る。大広間、黒、白書院と雁行型に建物が並ぶ二の丸御殿群はすべて現存で国宝、大広間一の間上段の間、二の間では将軍対面の場を再現している。二重折り上げ格天井、違い棚、帳台構え、欄間彫刻や障壁画が目を見奪う。さすが将軍家にふさわしい豪華絢爛さに圧倒される。この後本丸虎口櫓門、本丸御殿跡、天守台を回って東大手門へ。

②お土居=全長20km、秀吉が築いた京都の城壁で聚落第の総構えでもあった。遺構がよく残る北野天満宮境内で西辺お土居と堀川を学習。

③園部城(陣屋)=元和5年小出氏築城二万石、明治維新まで。園部川を迂回させた外堀に囲まれた総曲輪平山城で、背後に詰城、天守代用の御三階櫓を築いたという。現況は本丸が園部高校、二の丸は模擬天守の郷土資料館、民家など、陣屋大名だが城郭の構え。明治維新の時、万一に備えた天皇の避難行在所として整備されたという。許可を得て校門に入る。現存の櫓門、翼櫓、番所、石垣を見学、橋廊下も興味深い。

④篠山城=青山五万石居城。関が原に勝った家康が慶長14年、豊臣家包圍網として天下普請で築城、藤堂高虎縄張りの単純明快な方形輪郭式平山城で現況は篠山城史跡公園、国指定史跡になっている。本丸四周に巡らせた急勾配の高石垣は壮観、反りはない。特徴的な角馬出し、犬走りをみて主郭へ。大書院は復元、二の丸御殿も区画復元表示、上物はなかったという天守台から鉄壁の防御態勢を一望。

⑤福知山城=前身は中世横山城、天下布武をめざす信長の先鋒明智光秀が丹波を平定して築城。由良川に突き出た台地上の平山城で変形梯郭式縄張り。江戸後期は譜代中堅の朽木三万石で現況は城址公園、昭和後期流行の外観復元、鉄筋コンクリート三重四階の望楼型天守、光秀時代とする。多量の宝篋印塔や五輪塔剥き出しの荒あらしい野ヅラ積み石垣と下見板張り天守が圧巻だった。

「会報」第34号発行。

11月21日 「千葉県富津方面に砲台跡や大名陣屋の跡を見る」(JR内房線青堀駅集合=29名)

①富津陣屋=幕末の江戸湾海防陣屋。二度目の往訪

元洲砲台=明治の堡壘砲台。二度目

②飯野陣屋=ここは三度目。慶安2年保科氏が築いた一万石陣屋。城郭に劣らぬ四万坪におよぶ広大な敷地が本丸、二の丸、三の丸に区分けされている。見どころは幅5mほどの水濠と土塁。大手門跡と中心部の飯野神社で概要解説、陣屋に取り込まれた三条塚古墳も興味深かった。周辺は内裏塚古墳群で大小四十基が確認されたという。帰りに南関東最大、国指定史跡の内裏塚古墳にも登る。盛りだくさんの内容で帰り電車で遅刻、



二条城



福知山城



飯野陣屋

多くはアクアライン高速バスなどに変更した。

平成21年(2009)

1月17日 「新年のつどい」(銀座スターホール=49名)

「会報」第35号発行。

2月19日 「江戸城山の手側と北の丸を歩く」(東京メトロ有楽町線桜田門駅集合=39名)

桜田門、半蔵門、代官町、外堀、近衛師団司令部跡、連隊碑、清水門を巡る。

3月18日 「国府台城の跡をみて矢切りの渡して渡る」(JR市川駅集合=36名)

①国府台城=中世太田氏の支城か。関東の覇権をかけた後北条氏と小弓公方、里見氏激戦の地。江戸川の河岸段丘に立地する平山城で梯郭式三郭の縄張り。城址は里見公園で土塁、空堀、物見などが現存。サクラの名所だが、つぼみはまだ硬い。

②路線バスで下矢切に移動、矢切りの渡して葛飾柴又に渡り解散、帝釈天参道など寅さんゆかり地を散策して帰途へ。

4月17日 「飛鳥山・王子方面の三城を歩く」(JR京浜東北線上中里駅集合=32名)

上中里駅近くの下平塚神社は鎌倉時代、豊島一族の居城平塚城跡で、太田道灌に敗れて滅亡した。王子駅近くの王子神社はその支城滝野川城で、飛鳥山は砦。石神井川畔の金剛寺周辺は源氏再興の兵を挙げた頼朝の「松島布陣の地」と伝承されている。

5月19日 「南関東の三城を日帰りバスで訪ねる」(貸し切りバス、上野出発=50名)

①忍城=中世山内上杉家の重臣成田氏築城。のち後北条に属し小田原攻めで石田三成の水攻めに抵抗して持ちこたえた。江戸時代は中堅譜代大名が交代し老中も多く出た。最後は松平家十万石で明治維新。城地は広大な沼地と島を利用した。三重天守風郷土博物館を異なる地に復興、本来御三階で史実に基づいていない。土塁、水濠の一部が現存、外堀の沼地が水城公園になっている。

②飛山城=鎌倉末期芳賀氏、宇都宮城支城。天正の小田原攻めで廃城。鬼怒川の河岸段丘を利用した平山城で、飛山城史跡公園として整備、土塁、空堀、櫓台のほか門や橋などが復元された。国指定史跡。とびやま歴史体験館では歴史や特徴、遺物などが映像入りで紹介された。

③逆井城=三年前に次ぐ二度目。後北条支城、城址公園として整備、大手門や櫓などが復元された。飛山とあわせ中世城郭のすばらしさを実感。

8月6日 「城を歩く会15周年記念の会」(レストラン立山)

平成6年「城を歩く会」創設以来年輪を重ね15周年となったことを記念して祝賀の会を開催。

第1部=記念講演

『15年を振り返って、城を「足でみる」から「自ら見いだす」へ』大森拓二会長。

第2部=祝宴

「15周年記念誌 堀と土塁、石垣を訪ね歩いた記録」を発行。



新年のつどい



忍城

城を歩く会会報

第 34 号

【はじめに】

今回の京都府治は本会の宿泊行事としては12回目になります。これまでに宿泊を伴うだけで東は仙台城や山形城、西は彦根城や姫路城まで足を伸ばしました。この範囲に入る地域の主要な城は、ほとんど踏破したといえるでしょう。今後は中・四国や九州への要望は強くあります。また北海道への声もあります。しかし距離が遠くなればなるほど、会としての実施には困難があります。一例をあげれば現地集合の時刻を飛行機に合わせるか、夜行列車・新幹線に合わせるかなど、全員の都合に答えることは不可能です。また時間や交通費が多くなる割りに、見学対象が少ないことも避けられないことです。

一方本会の城を訪ねる趣旨は設立当初から、城を机の上ではなく「現地を歩いて」に置いて進めてきました。さらに昨年から城を単なる観光施設としてではなく、「歴史として見る」ことに重点を移行しつつあります。

他方全国の城の調査研究や復元事業の動向は、平成の初期からは昭和末期とは断片的な進捗で進んでいます。したがって例えば天守の木造三層建ての本格的復元など新しい動きとして見ると、上記の範囲の地域にも、今後の見学対象は求められると考えます。

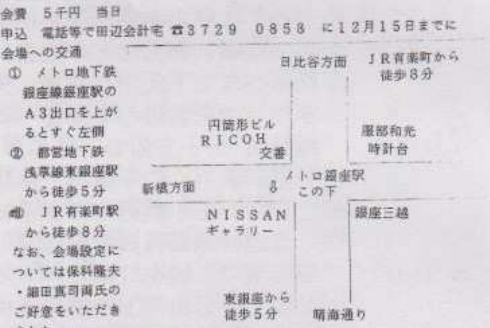
◎ 11月の定例会 (会報33号に掲載するもの再掲)

千葉県富津方面に迫る跡や大名陣屋の跡を見る
 日時 11月21日(金) 雨天のとき28日 午後10時～午後4時30分
 集合 JR内房線青砥駅
 交通 (JR内房線へは)
 千葉駅(3・4番線) 8時58発に、または蘇我駅(5・6番線) 9時06分(どちらも最前車両がよい) 青砥駅 9時58分着
 (東京方面から千葉駅への便利な電車)
 東京駅丸の内側地下駅の総武快速線
 7時55分発 千葉駅 8時37分 上記に乗換
 東京駅京葉線地下駅
 8時11分発 蘇我駅 8時55分 上記に乗換
 (新宿・お茶の水・秋葉原等各駅からの総武線各駅停車もあり)
 秋葉原・千葉間およそ50分
 行程 青砥駅 ⇨ 路線バス富津公園行き ⇨ 藤行前下車
 ①富津陣屋跡 ⇨ 富津公園で昼食(途中でコンビニも店もない) ⇨
 ②元洲砲台跡 ⇨ バス10分 JR青木町下車徒歩20分 ⇨
 ③飯野陣屋 ⇨ ④三条塚古墳 ⑤内裏塚古墳 ⇨ 青砥駅解散

【左下から読ん】

見が 津陣屋 幕末の江戸海防陣屋
 元洲砲台 明治の保皇砲台 はび現存の展望台から東京湾を一望
 飯野陣屋 大坂の陣で功を上げた保科氏が1万7千石でこの地に立藩、さらに加増されて2万石で建藩を迎えた。県内に多い大名陣屋の中でも遺構がよく残っている

参加費 千円 申込 会長宅 3303 7783
 ◎12月の定例会 休会とします
 ◎09年 1月 新年のついで
 日時 09年 1月17日(土) 12時
 会場 銀座スターホール(☎3571 5512)
 場所 銀座4丁目交差点一階は日産ギャラリー(自動車の展示場)のビルの9階
 展示場の新橋側 銀座通りを西にエレベーターあり9階へ
 地下に銀座三越・和光・三愛を見下ろす眺望绝佳。
 会費 5千円 当日
 申込 電話等で申込先計宅 ☎3729 0858 に12月15日までに会場への交通



◎ 2月の定例会 江戸城山の手廻りと北の丸を歩く
 注 従来の江戸城裏側に同じで裏側の跡は蓋し障りあるかと言いつた
 日時 09年2月19日(水) 午前10時～午後4時
 集合 メトロ地下鉄有楽町線桜田門駅皇居南口改札前(地下部分)
 順路 駅⇨桜田門⇨井伊邸跡(遠望)⇨半蔵門⇨外堀と土堀⇨代官町⇨高杉樹園砲台跡⇨近衛町田司令部跡⇨北の丸公園池のベンチ(昼食)⇨近衛一連隊跡⇨近衛二連隊跡⇨吉田茂邸⇨清水門⇨竹塹と堀中の帯曲輪 毎日新聞社で解散
 参加費 千円 申込 会長宅

城を歩く会 会報

2009年 2月19日

第 35 号

【はじめに】

この会は1994(平成6)年にわずか5~6人の発起人で誕生しました。以来趣意者、本年は15周年を迎えます。これまでも99(平成11)年に5周年を、04(平成16)年には10周年をささやかながら祝ってまいりました。そこで本年は15周年を祝おうと、昨年8月以来委員会で検討と準備を重ね、下記のように予定しています。ことに記念講演の「15年を振り返って」や、発行する記念誌の委員の皆様からのご寄稿は、その後大きな働きを期待しています。初期の頃の積み重ねの長い方には「追憶の再確認」を、近年に入会なさった方々は初期の頃の「追体験」していただく内容です。ご都合もありませんが当日はできるだけ全員のの方にご参加いただけるよう、今からご予定をお願いいたします。

なおどうしてご都合の付かない方は、あらかじめ委員の誰かに託して当日販売(千円の見込み)する記念誌だけは購入していただきます。それによってその後の定例会では会員として承け方も最近ご入会の方も、ご同様が文字通り「同じ列に立って」受講していただけるよう期待しております。

記
 日時 09年2月6日(木) 午後1時30分~4時30分
 場所 虎ノ門電気ビル(港区虎ノ門2-8-1)の会議室(ならびに同ビル内のレストラン「立山」☎3502 0418)
 内容 ①挨拶と日程説明 ②記念講演 ③お祝い
 会費 当日の会費は5千円の見込み、ほかに記念誌千円の見込みですが予約とし、5月19日の日帰りバスの帰路に受付と予納金3千円をお願いいたします。なおその日に欠席の方は委員の誰かに託してお願いたします。

会場への交通と地図
 メトロ地下鉄銀座線 虎ノ門駅下車 2番出口から地上へ出て桜田通りを東京タワーの方向へ300歩歩くと右側に第11森ビルそのビルに沿って右へ50歩で左側に「虎ノ門電気ビル」



『城を歩く会15周年記念誌(原稿)』に原稿をお寄せください。

城の見学記、印象記、思い出、ご研究の成果などを、たとえばエッセイ風に、あるいは、友人に手紙を出すような気分でご自由にお書きください。皆様のご寄稿です。できるだけ多くの方からのご寄稿をお待ちしています。
 ◎見学記・思い出など 縦長300字以内
 ◎ご研究文 縦長1万5千文字以内
 ◎手書き・ワープロフロッピー・メール いずれでも結構です
 ◎タイトル・用字・用語など、編集担当者が調整させていただくことがあります。
 ◎原稿締め切り 4月末日
 ◎原稿提出・お問い合わせ先 保科隆夫 F143 0015 大田区大森4-15-9
 電話 03 3762 1687(FAXも) 携帯 090 9976 8496
 メール tkck12011@crocus.ocn.ne.jp

◎3月の定例会 市川国府台と国府台城・矢切り史跡・矢切の渡しと紫又へ
 日時 3月18日(水) 雨天のとき25日午前10時～午後4時30分
 集合 JR市川駅 改札付近
 行程 駅⇨路線バスで国立病院前⇨国府台⇨総兵連隊跡⇨国立病院は除軍病院跡⇨里見公園⇨国府台城(昼食は城地・公園で各自弁当または店) 昼休みに5月の日帰りバスの予納金3千円受付します。従前の例では一日でバス定員の満席に。当日欠席の方は委員の誰かに託して。午後は路線バスで下矢切⇨矢切陣や野菊文学碑をみながら1400歩歩いて⇨矢切の渡しと葛粉屋紫又へ 解散。寄釈天・寅さん記念館など各自
 参加費 千円 申込 会長宅 ☎3303 7783

◎ 4月の定例会 飛鳥山・王子方面の三城を歩く
 日時 4月17日(金) 雨天のとき24日 午前10時～午後4時30分
 集合 JR上野駅 田端方向の出口の広場
 行程 駅⇨平塚社社の平塚⇨国立印刷工場(外観のみ)⇨飛鳥山登(昼食)⇨野川川(王子神社)⇨赤川は親水公園に⇨珍しい川のトンネル⇨紅葉の寺(伝頼朝遺跡) 王子駅で解散
 参加費 千円 申込 会長宅

◎ 5月の定例会 南関東の三城を日帰りバスで訪ねる
 日時 5月19日(火) 小雨決行 予備日なし
 集合 JR上野駅公園口 観光バス乗場 午前8時0分発車
 行程 上野⇨東北道 ⇨葛山城 ⇨車中前込井田⇨行田(ぎょうだ)吉の忍城(おしじょう)⇨飯東市の鹿井(きさい)城(三城の順序は当日の交通状況による)⇨東北道⇨首都圏⇨上野解散
 申込 この日の申し込みは3月の国府台で申込済みの方のみ(予納)日帰りバスの帰路車中で5月の15周年の予納金3千円をお願いいたします。欠席するからと託された方もお預かりします。

城を歩いた私の 60 余年

名誉会長 大森拓二

1) 敗戦直後は暗い世の中

まだ学生であった私は「国敗れて山河あり」の言葉や「城の石垣崩れさりて」の歌が流行っていたいへん「暗い世の中」と感じていた。おまけに食料は遅配、欠配がふつう。買出しに行くにも汽車は「窓から乗るもの」であった。

東京で近くの城といえば江戸城であろうが、日本人立ち入り禁止であった。このように城とはまったく遠い世の中であった。

2) 私の「城第1号」は小諸城

長野県出身の友人が食糧難を聞いて、都合をつけてくれるという。私はよろこんで大型のリュックを持って汽車に乗った。まず小諸城、友人は幼児の頃からというが、私は「城の第一号」、荒々しい石積みの門、迷路のようなくるわの配置、そして城地のもっとも奥の不明（あかず）の門の構造、本格的に調べてみたらおもしろいぞ、と感じた。しかし「生涯続く」とは当時は考えなかった。

3) それから間もなく学校を卒業して職業に就く

職業生活はだれでもそうであろうが、趣味などに時間をさく余裕はない。まず都内 23 区の城の多い区から始めようと、世田谷区の中央図書館と新宿の都庁の図書館へ通った。どちらも蔵書が豊富で、何から手をつけるかに迷った。

4) 世田谷区と北区に多い

平成元年に出版された『関東の城』所載の東京都の城址一覧には、都内 23 区だけで 53 か城、その内の世田谷区には 7 か城で、最多の港区は 11 か城となっているが、すでに消滅した品川台場が全部算入されているので、実質は 6 である。次は北区と世田谷区がともに 7 か城なので、この両区が 23 区の中で最多の区といえる。

5) 昭和 62 年 60 歳の定年を迎えた

第二就職も勧められたが、自由こそ待ち望んでいた道と選んだ。時まさに戦後の破綻した経済を抜け出して「高度成長」に突き進もうというころ。城は観光の中心になろうとしていた。

出版界では写真入りの分厚いハードカバーが出はじめた。報道関係では NHK は青山に、朝日は新宿の高層ビル内に、読売は自社ビル内か？ 城のカルチャー合戦がはじまった。私はこの 3 社へ一日ずつ偵察に行った。どこも立派な暗幕に多くのスライド、だが一社を除いては歴史がない。歴史のない城の語りは「わさびのないまぐろ」と私は朝日カルチャーを選んだ。

朝日では城を建造物としては工具、工法から、動きとしては原典の書簡から、普通には入手できない原典をコピーしてくべてくれる。私は三人の同好の人と、ともに同じ講師の横浜の講座まで「おっかけ」をした。

6) 発掘調査に泊り込みで手伝った

やがてその講師からの依頼で、発掘調査を手伝うことになった。東京、横浜2名ずつ、日本城郭資料館調査員の肩書きだが無給、現場はいずれも小さな町なので公民館の板の間に貸し布団、食事は近所の農家から差し入れ、断続的に4年近く、茨城、栃木、福島の3県所在の20か城を掘った。苦しい作業だが苦しいほど勉強になった。

私は柱穴をかなり掘った

柱穴(ちゅうこつ)とは建造物の柱を直接に掘って立て柱にした跡、土中の部分は腐食して黒味がかかった土と化している。直径10~15cmくらいが多い。柱は一個はありえない。住居、倉庫、橋、櫓など必ず4個以上ある。その間隔が重要で、とくに住居の場合は6尺一間か7尺一間かによってその建物が小田原支配下か水戸支配や結城系かの判断材料ともなる。歴史観が変わった。

7) 世田谷区の「区民に郷土愛を」に現地案内や文書発送をした

①世田谷城

この城の大半はいまは豪徳寺の寺地であって、どうみても城らしくない城跡である。隣地の某電気産業の大会社の敷地で近年、後北条時代の二重土塁の発掘調査が行われたが今も公開していない。寺の山門からまっすぐに進むと本堂がある。城造りなら何回も屈曲した道。寺だから防備もまったくくない。

②奥沢城

東急大井町線九品仏駅近い浄真寺で今も寺地の周囲の全部ではないが、往時の土塁がめぐる寺である。江戸深川にあったこの寺は、明暦の大火の復興の関係で広い寺地を幕府に願った。こちらは土塁だけとはいえ、城跡らしい寺である。

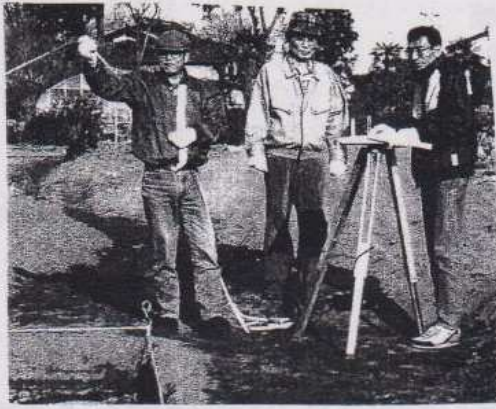
③喜多見城

区内でももっとも神奈川県に近い喜多見には城跡といっても寺の門にわずかに残るだけである。戦国時代末期に、いまの隅田川は江戸川とよばれ、江戸氏が水運を握っていた。やがて徳川氏が江戸へ入ると、姓は江戸をはばかって喜多見とし、川をはなれたこの地を領した。一説に慶元寺の山門はこの城の遺構ともいうが否定論も強い。先の4項では世田谷区内に7城と述べたが、これ以外の4城は遺構がまったくなく、単に伝承だけの「まぼろしの城」と思われる。

8) 再び発掘調査に関連して

①軍手をはめて園芸用シャベルをもって静かに土をはがす

遺物かと心ときめかすと石ころ。遺物らしい物があつたら「でた」とつまんではいけない。回りの土とともに資料になる。あつた状態で調査員に知らせる。調査員は図面に記録する。



西ヶ谷恭弘先生（左）と



茨城県水海城の発掘現場で
平成4年



思い出多い逆井城



②土塁の断面をとった

かきあげか判築か、富士山と浅間山の噴火をみる。自然堆積は1年1mmとされる。

③虎口の二階門

外から門内はみえない。しかし内からは丸見え。

④この時代まだ、のこぎりやかんなはまだあまり発達していなかった。

9) 平成6年「城を歩く会」を結成

ひとすじの道、「城を歩く会」の20年

①その間事業として毎年おおむね12回、うち現場は10回を繰り返してきたので既習の城は200城に達した。

②会員数はおおむね90名前後、東京のほか千葉、神奈川、埼玉の各県から集まっている。

③民間の「城」同好グループとしては「最大規模の会」といえる。

10) 700の城を歩いて心につよく残った城

①15周年の記念講演で話した心に残った城

北海道函館のチャシ(アイヌの城)、弘前城、盛岡城、竹中氏の館、三重県一身田の寺内町、京都秀吉のお土居、鳥取城、伊予松山城、九州竹田城、熊本城

②あらたに追加する心に残る10の城

- *久保田城=関が原不戦で左遷された佐竹氏の城。土の城で代理天守は小さな御出書院櫓。敵対したわけでもないのに「敗将や哀れ」。
- *涌谷要害(宮城県) = 「一国一城令」でも仙台藩は例外、隅櫓のある要害。
- *白河小峰城=維新の動乱で消失、石垣だけのとき訪ねたが、菊人形で石垣がみえず閉口、まもなく3階櫓が木造復元第1号となる。
- *逆井城=2か年発掘調査を手伝った思い出の城。屋外は「城郭博物館」、この城を見ずに城の愛好者とはいえない。
- *江戸城=全国の諸大名を動員、「天下普請」で築いた徳川將軍家の居城。大坂城とともに最高水準の築城技術を駆使、これまで10回以上も訪ねた。
- *苗木城=急坂を登ると、こんな城もあるのかとびっくり。大手門の巨石は背丈を越える。どうやって運んだことやら。
- *越後長岡城=県庁が新潟に決まり「平民にとられた」と悔しがった。ならば鉄道を。城の本丸、2の丸を駅舎に提供して城は消えた。「本丸跡碑」だけが寂しげに建つ。
- *金沢城=元は一向宗の「半寺半城」、本丸に領主の富樫氏を自害させた尾山御坊本堂の礎石といわれる石も。
- *瀬田城=「いそがば回れ瀬戸の大橋」、本に「城址が料亭に」とあった。ついでに寄って立派な造りに気おくれ、「いらっしやいませ」といわれそうであわてて逃げた。
- *姫路城=合戦にも戦災にもあわず旧状がよく残る。堅固で外観も内部も「武と美」かね備える。西の丸「百間廊下」は「守りは堅し女の館」廊下全体が波打った横矢で、外側には石落しもある。戦いへの備えも厳重だ。

11) 「城の会」のますますの発展を祈る

10年くらい前から体調が悪く入退院を繰り返した。5年前に会長を辞任し、以後、会議室での「講義」に専念したが、今年の夏はそれもかなわなかった。これまでの皆さまのご協力に感謝し、「城を歩く会」のますますの発展を祈念します。

調べる

四つの研究レポート

「織豊期城郭」と石垣

「城を歩く会」が訪ねた織豊期石垣の考察

会長 山岸 弘明

はじめに～織豊期とその時代

「織豊時代」「織豊期」といえばだれもが織田信長と豊臣秀吉を思い浮かべるが、歴史教科書の時代区分は「安土・桃山時代」という。安土はともかく桃山を答えられる人は少ないだろう。『広辞苑』を開くと「京都伏見の地名。伏見の中心街の南東にあたり、伏見城の廃墟に桃が多く植えられたためこの称が起こったという」。また「桃山時代」を「16世紀後半、豊臣秀吉が政権を握っていた約20年間の時期。美術史上は安土・桃山時代をさし、中世から近世への過渡期として重要、とくに豪壮な城郭、殿邸、社寺の造営やその内部を飾る障壁画が発達した」とする。要は豊臣時代に発達した建築、絵画、工芸技術といった文化をさしている、伏見城は秀吉が晩年居城したとはいえ豊臣家の本拠はあくまでも大坂城であり、徳川時代はともかく、明治以降150年をへた現在なお「安土・大坂時代」と呼ばないことになんとも違和感を感じるのは私だけだろうか。

「織豊期城郭」はまさにこの時代の城、織田、豊臣時代に建造された城郭をいう。天正元年(1573)、織田信長が自ら据えた足利15代将軍義昭を追放、「天下布武」への第一歩を踏み出してから徳川家康が江戸に幕府を開いた慶長8年(1603)までの30年間のことで、この間、信長は志なかげで本能寺に倒れ、後継した秀吉が「天下統一」を果たすが2代秀頼の代に徳川家康によって討ち取られた。「織豊時代」はまさに激動の時代であり、「天下泰平」徳川300年への移行期でもあった。

このころ「城郭」もまた一大変革の時代を迎えていた。天正5年京都を制して「天下統一」をすすめた信長がその本拠を山深い岐阜城から琵琶湖東岸に突き出た標高100mほどの安土城に移す。信長の安土城はこれまでの城造りの常識を打ち破った豪壮、華麗さで人々の目を奪った。大手口から一直線に伸びる大手道、高石垣を連ねた総石垣、五重七階の高層天守とまばゆいばかりの御殿群が城下を見下ろした。人知を超越した壮大さは諸大名を服従させ、実質「天下人」をアピールするに十分であった。

安土城出現で、全国の城郭はこれまでの中世「戦う山城」から領内統治と権勢誇示を目的とした天守、石垣の「見せる城」へと一斉に変革する、近世城郭の誕生であった。この時の城を「織豊期城郭」または「織豊系城郭」という。東海、近畿、中国など関西地区を中心にその数全国およそ300程度と考えられるが明確でない。全国の主な「織豊期城郭」を拾うと、

天下人の城＝安土城*、豊臣大坂城*、京都聚楽第*、伏見城、淀城

東海地方の城、岐阜城*、犬山城*、清洲城*、駿府城*、掛川城*、浜松城*、小牧山城、

久野城、二股城、伊勢神戸城、郡山城

近畿地方の城＝八満山城、山崎城、周山城、但馬竹田城*、姫路城*、感状山城、

宇陀松山城

甲信越地方の城＝甲府城*、上田城*、小諸城*、松本城*、松代城*、要害山城、

躑躅が崎館*

北陸地方の城＝北の庄城*、七尾城、鳥越城、越後福島城*

関東地方の城＝石垣山一夜城*、小田原古城*、唐沢山城*、金山城*、

真壁城、笠間城、箕輪城*、沼田城*、宇都宮城*、館山城*、山中城*、八王子城*

東北地方の城＝若松城*、二本松城*、猪苗代城*、白石城*、神指城*

中国地方の城＝月山富田城、岩国城、亀井城、櫛崎城

四国、九州地方の城＝肥前名護屋城、名島城、宇土城、徳島城、高松城、丸亀城、大高

坂山城、浦戸城 *印＝当会が案内した城

などとなる。

織豊期城郭の内、江戸時代に引き継がれた城の多くは関が原の合戦後の築城ラッシュ時に大改修が加えられた。姫路城や甲府城などが織豊期と近世城郭との複合遺跡となった。しかし同じ近世城郭への生まれ変わりでも大坂城の場合は豊臣時代の遺構は徳川氏によって土中に埋められ、現在の大坂城公園の表面には一握りの土砂も一個の石かけらも現存していない。しっかりと土中遺跡として保存されたともいえる。

一方、江戸時代はじめ関が原の合戦や「元和えん武」「一国一城令」などで廃城となった城の中には当時の遺構をそっくり伝えている城跡もある。本能寺の変後の混乱の中で焼失した安土城、小田原の役後活用されずに廃城となった小田原一夜城、朝鮮出兵の本営跡の肥前名護屋城、関が原の合戦で改易廃城となった竹田城、などがこれにあたる。

近世石垣城郭の嚆矢・安土城と累々と連なる高石垣の竹田城

本会では創立以来 20 年、多くの織豊期城郭に接してきた。本稿ではこれまでに歩いたそれぞれの城を通じて「織豊期城郭」石垣の特徴とその魅力にスポットをあてる。

①安土城（天正 4 年築城＝織田信長、縄張り丹羽長秀）

織田信長の拠点城。わが国最初の本格的な高石垣で近世城郭の始祖となる。

『信長公記』には「観音寺山、長命寺山、長光寺山、伊場山所々の大石をもって千、二千、三千ずつにて安土山へ上げられ候。（中略）昼夜、山も動くばかりに候」と石材採取地と輸送の様態を記している。

石垣工事は穴太、真淵、岩崎石工が担当。当時城に石垣が積まれることはまれで、石積み技術は村や有力寺院にあった。信長は近畿圏内の石積み技術者を総動員した。後に石工職人の代名詞となる「穴太衆」が始めて登場する。比叡山麓・穴太の里、かつて古墳建築にかかわった技術集団で、一説に朝鮮渡来人の末裔といわれている。

石積み箇所は大手道正面と両側、道の階段状に配置された重臣邸、黒金門に始まる総石垣の主郭部、天守曲輪石垣など、高さはおおむね 5 m から 10 m くらいである。

担当部所などで石材や石積み方法もバラバラ、研究者は「一つとして特定の法則で同じように積み上げた石垣はない」というが、現地看板はあえて「穴太衆、穴太積み」とする。石材は大きめのあら割り石で矢穴はない。積み方は素朴な野面積みで、始めに両端に大きめの石を配し、中央部は大小を取り混ぜバランスよく積んでいる。水抜きのための裏込め石がある。コーナー部は角ばった石材を算木風に積むが未発達である。石垣勾配はおおよそ 60 度、ほぼ直線で反りはない。主郭部の総石垣は圧巻、外樹形石垣の黒金門は信長の本拠らしい何者をも寄せ付けぬ重厚な構えとなっている。

②豊臣大坂城（天正11年＝豊臣秀吉、縄張り黒田孝高、総普請役加藤嘉明）

信長が将来の居城として着手、没後秀吉が30大名の天下普請で完成、豊臣政権の本拠とする。

石材の採取と運搬は前野長泰が担当、「河内路まかり通り、里々山々、石取り人足、奉行人など数千人数知らず」（兼見卿記）、「大坂普請に諸国より人夫来たりて石を曳く事々敷造作なり」（多聞院日記）。石材の輸送は淀川の水利を使い、人足は盛時10万人、石吊り船は日に200から3000を数えた。石積みは岩倉と穴太衆が担当した。

豊臣大坂城の遺構は地中深く埋没され、近年発掘調査で存在が明らかになったが再び土中に埋め戻された。発掘写真やドーンセンターの屋外展示によると自然石に近い大きめのあら割り石、ほぼ大きさの揃った石材を横方向に並べ間石を使った野面の布積みで、コーナー出角部はとくに大き目の石材を素朴な算木風になっている。

現存する「豊臣大坂城絵図」によると本丸石垣が上中下の三段に分けられている。水濠に接する下の段は15m、中の段は10mほどの高石垣で段ごとに帯曲輪（武者走り）があり、中の段の上に詰めの丸石垣と天守台が築かれた。現存する内堀と外堀は徳川時代のものだが豊臣時代にもほぼ同様の水濠と石垣が存在し、文禄3年に構築された惣構え堀では東西、南北およそ2km四方の大城郭になった。

③豊臣姫路城（天正8年ころ＝豊臣秀吉改修）

秀吉が天正12年大坂城へ移るまでの出世城。

「白鷺城」の別称で知られる姫路城天守は日本城郭最大の名城として「世界遺産」にも登録されている。壮大な近世城郭がこれほど整備され、旧状をよく残しているところは外にない。現在の連立式天守、複雑巧妙な城縄張りは江戸時代始めに入った池田輝政が築いたものである。秀吉が入ったころ、黒田孝高の姫路城は土の城で、秀吉はこれを水濠、石垣、天守三点セットの「近世城郭」に変身させた。主郭部石垣は野面積みと打ち込みハギが混在するが野面部分は秀吉が作り、打ち込みハギは池田輝政が築いた。簡単そうなこの区別がなかなか難しい。「ろ」の門から「ぬ」の門までの本丸石垣、三国堀石垣の接続部などが分かりやすい。

④北の庄城（天正3年＝柴田勝家）

天正3年織田信長から越前49万石を与えられた柴田勝家が9重の天守を持つ北の庄城を築いた。信長の死後秀吉に攻められた勝家は茶々ら3姉妹を脱出させ、妻で信長の姉である市とともに自害した。江戸時代は松平越前家の福井城に組み込まれたが、平成5年の発掘調査で本丸石垣、天守台などを発見、城址公園として整備された。

⑤竹田城（天正13年ころ改修＝赤松広秀＋豊臣秀吉）

城に関心のない人でも「日本のマチュピチ」「雲上の城」のキャッチコピーでいま人気沸騰中だ。一般観光客が殺到し石垣の一部が崩壊、けが人が発生するなどの事態になった。昨秋の一泊旅行で肝心の本丸や天守台が立ち入り禁止だったのは残念だった。中世太田垣氏の山城を豊臣大名の赤松氏が織豊期石垣城に大改修した。大坂防衛を意識した軍事的な配慮から山城を継続、近世城郭の中では特異の城となった。関が原の戦いは赤松氏が西軍に属し、家康から切腹を命じられて廃城となるが石垣は「城わり」を免れ、400年以上をへた今日に現存した。

主郭は本丸を頂点に三方に広がる尾根上に立地し、南北400m、東西100mの「人文

『石の声を聞き、石の心を
知り、石の心を己が心として
永久に居心地よく居座るよう
一つ一つを大事にして据付け
る』

「昔先代にたたき込まれた
言葉は一言一句、忘れるはず
もないが、それでも栗田純司
(67)は時々、部屋の額に目を
やる。「穴太積み」と呼ばれ
る技法を唯一、現代に受け継
ぐ石工集団「穴太衆」の「第
13代石匠」だった父、万喜三
が書き残した家訓だ。第
14代を継ぐ純司が、若手の
職人に繰り返し聞かせる言葉
でもある。

「まち語り」の語り

純司は大学で土木工学を学
び、「石工」では食っていき
んと卒業後に滋賀県庁の就
職試験をこっそり受けた。万
喜三は自宅に届いた合格通知
を純司の目の前で破り捨て、
激しいけんまくで言い放っ
た。
「4年間も無駄飯食ってき
たんやから、これ以上の無駄
はいらん。30になってからで
は、積み方は覚えられん」
「食っていきけるかどうかよ
り、後世に伝える仕事ができ
るかや」
大小の天然石の配置を決め
る独特の感覚を習得するに

津市坂本、家々を囲うのは、
深緑のユケに覆われた石垣
だ。町の隅々まで張り巡らさ
れたさまは、大木の根のよう
でもある。石を加工せず、そ
のまま組み合わせる穴太積み
は、単純に積み上げられた石
の壁のようでありながら、絶
妙なバランスで、数百年間、
石一つ抜け落ちずにその姿を
保つてくも珍しくない。

「崩れそうでも崩れないの
が、穴太の石積み。200年
もたすつもりで作ってますか
ら」。穏やかに笑う純司の目
には職人としての矜持が宿
る。
純司は大学で土木工学を学
び、「石工」では食っていき
んと卒業後に滋賀県庁の就
職試験をこっそり受けた。万
喜三は自宅に届いた合格通知
を純司の目の前で破り捨て、
激しいけんまくで言い放っ
た。

石と対話 育む技術

いわれている。
しかし、コンクリートの普
及などに押され、石工も一
人、また一人と減少していっ
た。それだけに、技術継承に
かける万喜三の執念は壮絶な
ものだった。

「石の声を聞け。石の行き
たいところへ持っていけ」。
万喜三の教えに、純司はとま
どった。それまで学んだ土木
工学の世界とは正反対に、職
人の世界ではマニュアルはも
とより、図面すらほとんどな
い。ひたすら万喜三の石積み
を見て、技術を盗むしかなか
った。

弟子入りして1年ほどたっ
たころ。純司が苦少して積み
上げた石垣を見た万喜三は、
突然、手にしたボールで石を
崩し始めた。純司は思わず叫
んでいた。「どこがあかんの
や。石がしゃべるわけやな
し、説明してくれな、分から
へんがな」

「石だっけ子供と同じで、
地味なものもあれば、やんち
々なものもある」。以来、工事
現場で万喜三の石積みを見て

「石だっけ子供と同じで、
地味なものもあれば、やんち
々なものもある」。以来、工事
現場で万喜三の石積みを見て

「石だっけ子供と同じで、
地味なものもあれば、やんち
々なものもある」。以来、工事
現場で万喜三の石積みを見て

近年は、財政難で自治体の
文化財予算が削られるなど、
石工にとっては厳しい状況が
続くが、伝統の技術を見直す
動きもある。4年ほど前に
は、コンクリートに匹敵する
強度が実験で証明され、第一
名神高速道路脇の歩道の壁に
穴太積みが採用された。「こ
れだけの技術が昔から受け継
がれていたとは」。実験を担
当した京都大学大学院教授、
大西有三(62)は、圧力を分散

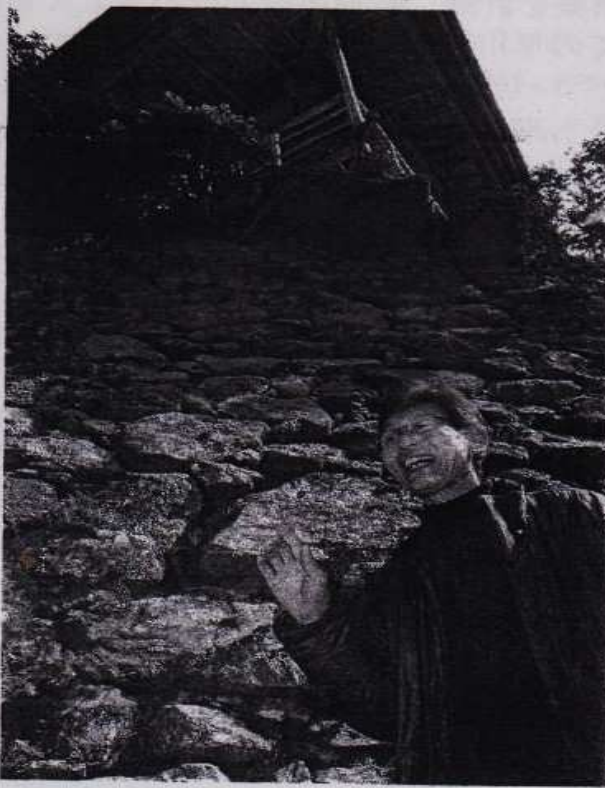
「穴太積みは柔らかく
たたくやから」
比叡山の副執行、小林祖承(59)が感
じるのは、人々を見守り続け
る石垣のあたたかさ。だから
こそ、これからも変わらない
でいてほしいと願う。

おとし、中学卒業後から
万喜三について修業していた
長男の純徳(39)が第15代を名
乗り始めた。一線は退いた
が、純司は今も講演などを忙
しくこなす。気付けば「技術
を残したい」という思いは、
あの父親以上に強くなって
いた。講演では必ずこうしめ
くめる。「いっぺん、坂本に
来てね」

させる穴太積み独特の技術の
高さに舌を巻いた。
「その日は若い衆と乾杯し
たよ」。純司も喜びを隠さな
い。

比叡山の厳しい自然が穴太
積みの技術を培ったように、
比叡山やその麓の坂本地区に
とつても穴太積みの石垣はな
くはならない風景だ。「本
来の石垣は人を隔てる境界だ
けど、穴太積みは柔らかく
たたくやから」
比叡山の副執行、小林祖承(59)が感
じるのは、人々を見守り続け
る石垣のあたたかさ。だから
こそ、これからも変わらない
でいてほしいと願う。

おとし、中学卒業後から
万喜三について修業していた
長男の純徳(39)が第15代を名
乗り始めた。一線は退いた
が、純司は今も講演などを忙
しくこなす。気付けば「技術
を残したい」という思いは、
あの父親以上に強くなって
いた。講演では必ずこうしめ
くめる。「いっぺん、坂本に
来てね」



派手なものはないが、それ
こそ自分たち職人のような飾
らないまじり。その静かな魅力
を分かってもらえたら。それ
が穴太積みと自分を育ててく
れたまちへの、改めてできる
恩返し。そう思いを込めて。

文 滝口亜希
写真 頼光和弘

穴太積み

栗田純司さんの日課は、古い石垣を眺めながら散歩する。と。先人の仕事にヒントを得ることも多い

天津市坂本

「まち語り」の語り
り」は毎週日曜日に掲
載します。

字」を形成する。石垣は高さ5～10m、天守を中心に三角形の急ガケ上におよそ400m連なり、強固な塁線を引いて圧倒的な迫力がある。石材は全山石山、花崗岩の自前であり、硬いが割りやすい。石積みは「穴太衆による穴太積み」、素朴な野面積みで、奥へ進むほど積み方が丁寧になる。築城過程での技術面での進歩がうかがえる。石塁と虎口を連続、石垣上の櫓や塀からの強烈な横矢が特徴で、立ち入り禁止の本丸、天守を迂回しながら見上げた。

⑥石垣山一夜城（天正18年＝豊臣秀吉）

秀吉が小田原の役にあって築いた対の城で、天守を備えた関東最大の本格的「織豊期城郭」。榊原康政は加藤清正への手紙に「十丈あまりの石垣を築いた城の大きさは聚楽第や大坂城にも劣らない」と書いた。北条方は「長期戦に持ち込めば退却する」という基本戦略であったが、石垣山の出現で秀吉の覚悟を知り実力の違いを痛感させられた。小田原落城後に廃城となるが、石垣は撤去されることなくそのまま残った。関東大震災は震源地に近く、南曲輪など一部が崩壊したが、ほぼ当時のまま現存している。圧巻は井戸曲輪、螺旋形輪取りに築かれた井戸底から周囲を見渡すと石積み技術の圧倒的な迫力を体感する。

秀吉は戦い前から高石垣の巨大陣城構築を計画、戦闘要員のほか数万人規模の石垣作業員を動員していた。石は自山と近くの早川石切り場などから調達、石工は穴太と岩倉が担当した。あら割り石で形状はバラバラ、野面の割り石積みでつめ石と裏込め石を入れている。主郭は総石垣造りで最も高い西面は途中で武者走りが入る。石垣勾配はきつく直線、反りはない。算木組は未完で素朴な味わいを残している。

⑦金沢城（天正11年＝前田利家）

豊臣政権中枢「五大老」加賀前田家の居城。大坂に詰めた利家に代わり嫡子利長が築城した。

金沢城は元一向宗の金沢御坊跡で、佐久間盛政が攻め落として中世平山の尾山城としていた。いつ一揆が起こってもおかしくない、天正11年入城した利家は土塁部分のことごとく石垣に改め、5重の天守を上げて権威の象徴とした。石積みは利家が信長の死後、配下に従っていた安土城の穴太衆が担当した。関が原の合戦後金沢城は加賀100石城下として整備されるが、城の東面から南面にかけての野面積みが「織豊期」当時の姿を今日に伝えている。

⑧甲府城（文禄3年＝浅野長政）

武田氏滅亡後、徳川家康が起工したが関東に移され、豊臣時代に浅野長政が完成した。江戸時代は甲斐の要衝として血筋の有力者が配置された。石垣の多くは古い野面積みだが時代は明確でないという。天守台は長政時代で高さ13m、あら割り石の平面を表面に向けた野面積み、コーナーの算木組や勾配などが良好な姿をとどめている。黒門は堅積みの巨石が興味深い。

⑨上田城（天正11年＝真田昌幸）

千曲川分流尼が淵断崖上に立地する真田氏の城。関が原の戦いで秀忠軍を翻弄するが現在の遺構はすべて元和以降のものである。織豊期の城は家康によって一掃された。

⑩松本城（天正18年＝石川数正）

甲斐から進攻した武田信玄が信濃支配の拠点として築城した深志城を前身とする。

天正 18 年家康の関東入封にともない豊臣系の石川数正が入って石垣、天守を持つ織豊期城郭に変えた。現存する全国唯一の複合連結式・国宝天守は姫路城と並んで「日本の城」の代名詞的存在になっている。石材はわり石、天守群の石垣は大天守と乾小天守が古い野面積みで、辰巳付け櫓と月見櫓は江戸時代初めの打ち込みハギと微妙に違う。大天守の勾配は穏やかで反りはない。発展途上の算木組み、穴蔵の天守礎石が見逃せない。

⑪小諸城（天正 18 年＝仙石秀久）

天文年間武田氏の築城で、天正 18 年に豊臣系の仙石秀久が近世城郭に改修した。城は千曲川を見下ろす断崖上にある。大手からだんだん下がる変わった縄張りで、本丸隅に織豊期の特色を伝える天守台がある。隅角部の算木組と重力分散のための「わ取り」が見もの。また本丸石垣も古く角の広い算木組もめずらしい。

⑫唐沢山城（文禄ころ＝佐野信吉）

佐野氏は元下野の名族、小田原の役後返り咲きにあたって秀吉は家康の北方牽制のため側近富田信吉を養子に送り込んだ。信吉は唐沢山城を石垣の城に大改造するが、江戸幕府が成立すると佐野城に移され間もなく改易された。本丸などに関東で珍しい高石垣が連なる。

⑬箕輪城（天正 18 年＝井伊直政）

元は北条氏の支城。家康の関東入府で井伊直政が封じられた。直政は石垣城に大改修するが、慶長 3 年に高崎城を築いて移った。

石垣山一夜城に石材を運んだ早川石切り丁場跡

平成 19 年の会で小田原一夜城を見学した後、隣接する早川石切り丁場群を案内した。天正 18 年、豊臣秀吉の「小田原攻め」で対の城「一夜城」を築いた石垣山は自山のほか早川石切り丁場など周辺の石山から供給した。

早川石切り丁場はのちの江戸時代「伊豆東海岸石切り丁場群」のひとつとなる。江戸城の石材調達を命じられた諸大名は伊豆半島にそれぞれの石切り場を築き、最近の研究で総数 55 か所が確認された。石切り場の最盛期は 3 代将軍家光の代で、大名たちは命令次第いつでも工事が再開できるよう、「丁場預かり」をおいて管理した。また丁場近くの海岸岩場に港を築き、石船に石材とぐり石を積んで江戸に向かった。

見学会当時、農道敷設のため早川石切り丁場が工事中であった。工事現場と並行する遊歩道を進む。秀吉の一夜城石引き道とも言われる。途中工事のため安山岩が露呈した丁場跡に降りる。ほぼ製品に近いもの、石切り途中のもの、矢穴途中のもの、手付かずのもの、失敗したものなどさまざま、一千個はあろうか、巨石が無造作に放置されていた。石垣研究に「石切り丁場遺跡」は欠かせない。伊豆海岸、小豆島などに多数現存しており、いずれテーマを定めてご案内することにしたい。

「織豊期城郭」の特徴は高石垣にある～まとめ

戦う山城から統治と権勢のための「みせる城」へと変革した「織豊期石垣」の最大の特徴は壮大な「高石垣」の登場とっていいだろう。

一城で数百万個ともいわれる膨大な石材は、「天下普請」として諸大名に賦役を課した

秀吉の大坂城を除くすべてが自山で、せいぜい直近の石山からの採取にとどまっている。所領の壁と経費、一大名としての限界がみえる。

石材の採取は自然石か、原石を石目にそってくさびを打ち込む「割り石」で、慶長はじめ「矢穴」をあけて矢（くさび）を打ち込む「切り石」が登場するが、本格的な普及は江戸時代になる。

近江の穴太、真渕、岩崎などから始まった石工集団は秀吉のころ穴太出身者が中枢になる。穴太駿河、穴太三河、穴太出雲らが秀吉の伏見城、聚楽第、郡山城を築き、諸大名の築城を手がけるようになる。関が原の合戦後の「慶長の築城ラッシュ」時で大名たちに高禄をもって迎え入れられ、やがて石工や石積み工事すべてが「穴太」と総称されるようになる。

いま安土城や竹田城が称している「穴太積み」は、自然石やあら割り石で積んだ「野面」の「古来積み」で、のち「打ち込みハギ」が生まれ、切り石の「切り込みハギ」へと進化することになる。また、高石垣への技術的課題であったコーナー部が、角石を交互に積み上げる算木組の発明で解消、裏込め石やそり、わどりなどの技術開発と相まって、これまで考えられなかった、横長、高石垣が誕生することになった。

石垣技術の進化はまた高層建築を可能にした。巨大な天守、櫓が上げられ、水濠とセットとなった高石垣ラインは、複雑な折れを持って、多重に折り重なった。これらの技術は秀吉、そして家康の「天下普請」に引き継がれ、共用された石垣技術はあっという間に全国に伝播していった。

慶長5年、関が原の合戦に勝利した家康は、ライバル豊臣氏滅亡のため「天下普請」で「大坂城包囲網」を築くと、呼応して諸大名も次々と巨大城郭を構築した。いわゆる「慶長の築城ラッシュ」で、城郭史上の頂点となった。

元和元年、「大坂冬、夏の陣」で豊臣家を滅亡させた家康、秀忠父子は、「一国一城令」と「武家諸法度」を制定、諸大名の居城を制限して、新たな築城を禁止した。そして徳川幕府崩壊後の明治6年、明治新政府による「存廃令」で、大半の城郭が姿を消すこととなった。

織田信長の安土城に始まった「織豊期城郭」は、戦う「山城」から領内統治と権勢誇示のための「見せる城」へと大変革を遂げた。そして石垣技術の発展をベースに進化し続けた、「織豊期城郭」を牽引力にした、「桃山文化」が開花する。

城の最盛期は江戸時代はじめの慶長期にあることは誰もが認めるところだが、「織豊期」の延長で、その遺産といえなくもない、むしろ徳川時代の城は「退化」の一途を辿ったとさえいえよう。「城を歩く会」20年が訪ねた「織豊期石垣」は、わが国「中近世史」そのものでもあった。「訪ね、見て、知る」、「城を歩く会」の楽しさを創立25周年に向かって進めます。

家康・江戸入城の理由（わけ）

講師 保科 隆夫

はじめに

天正18年(1590) 8月1日、徳川家康は江戸城に入城しました。

毎月1日（ついたち）を陰暦では朔日（さくじつ）といい、8月1日は八朔といわれました。八朔を祝う風習は中国から伝来したと伝えられ、古来、日本でも新穀を贈答して祝う民間行事があったそうです。この日、農家が初めて新穀を穫り入れ、その初物を田の神や、一緒に働いてくれた人々に分かって豊作を祈った習慣から始まった行事ですが、室町時代にはこうした伝統的風習が武家や公家の年中行事にまで発展していました。

家康は八朔の日に江戸城に入りました。同月5日には江戸の住人たちに米をわかち与え、新しい支配者としての恩恵を施しています。後年、徳川幕府はこの故事にならってこの日を式日と決め、大名や旗本たちが登城して賀詞を述べ、将軍に太刀を献上するのが年中行事となったと伝わります。

逆にいえば、家康はこうした伝統的な祝日を、わざわざ選んで江戸入りしなけりなかつたのでしょゆ。後日、家康の江戸入城は「江戸御打入り」とも呼ばれていませゆ。覚悟めいた悲壮さを感じされられる言葉ではないでせゆか。家康の入府にはどのような背景があつたのでせゆ。

この小レポートは、1590年、豊臣秀吉が小田原北条氏を降して徳川家康に関東の地を与えたあと、慶長3年(1598)に秀吉が没し、関が原の役を経て同8年(1603)、家康が江戸幕府を開くまでの13年間、江戸が一大名の城下町からこの国の首都になるまでの間の跡をなぞっていきます。慶長8年(1603)から慶応3年(1867)まで264年の間、江戸期日本の政治の中心地でありつづけ、その後は、東京として1200万の人口を擁するまで「成長」した大都会の基石となつたのが、この13年間であつたのではないだろゆかと考えるからでせゆ。

1. 「関八州を治めるには城を江戸に置くがいい」

天正18年(1590) 7月、豊臣秀吉は小田原城を開城させて、目の上のタンコブであつた北条氏を壊滅、天下をほぼ掌中に収めました。陥落させた小田原城に入つた秀吉は、7月17日、小田原征伐の論功行賞を発表します。徳川家康は最もすぐれた戦功を挙げたとして、伊豆・相模・武蔵・上総・下総・上野・下野の一部におよぶ広大な北条氏の旧領を与えられました。これに賄料として、近江・伊勢に与えられた10万石を加えると、家康の所領は優に240万石を越えることになつたのです。かわりに、それまで家康が領有していた駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5カ国は没収されました。

ところで、関東に移るとして、240万石の大名の居城をどこに定めるか、家康は決断しなければなりません。京都や大坂にも劣らない繁栄ぶりをみせていた小田原に自らの居城を置くのか、伝統的に武家政治とのかかわりが深い鎌倉を選ぶか。それとも、第三の地は存在するのか。

『落穂集』という記録があります。大道寺友山という軍学者が享保12年（1727）に書いた、家康一代記ともいえるものですが、その書物に、「江戸への入城は秀吉が家康に勧めたものである」とあります。

小田原攻めの最中、家康が石垣山（一夜城）を訪れ、秀吉に陣中見舞いのあいさつを行ったそうです。その折、秀吉が「この先に小田原城中を見下ろせる場所がある、と家康を誘った。現在の展望台のあたりだったかもしれません。家康に同道してきた織田信雄（のぶかつ。信長の次男）が家康のそばをなかなか離れません。秀吉は、その見通しのよいところに立つと、「小袖の裳をかきまくり給ひ」ながら、「むかしより破家（やぶれや）のつれ小便と申し候、大納言殿（家康）これへ」と家康を誘いました。信雄がようやく離れてあちこち徘徊しているうちに秀吉は家康に耳打ちします。「小田原城を（貴殿に）今のまま引き渡すとしたら、それを居城に使うつもりか」。この言葉は関東を家康に与えるという内示のつもりだったのかもしれませんが。これに対し家康が、「将来はとにかく、当分はここに在城するよりほかないと思う」と応じると、秀吉が「それは見当違いだ。小田原は信頼できる部下に預け、ここから20里（80キロ）ほど先の江戸が将来性のある土地だから、そこを居城の地とするがよい」と推奨したというのです。

秀吉の家康に対する親切心による江戸選択の勧めといえるエピソードです。

余談ですが、このとき一夜城に家康と同道した織田信雄は、小田原征伐の際、葦山城攻略の武功により、戦後の行賞で家康の有していた東海地区の旧領を与えると公表されました。大出世です。ところが、信雄は自領の尾張清洲に固執し、関白命令を拒んで秀吉の逆鱗にふれ、下野（栃木県）烏山に流罪となってしまいます。後に、家康の仲介により赦免され、大名に復するのですが、東海移封を固辞した理由は行賞に対する遠慮だったとする説もあります。しかし、実際のところは不明です。

2. “秀吉陰謀説”も

秀吉の親切心による江戸推奨説の一方、陰謀説もあるのです。

江戸幕府が編纂した正史『徳川実紀』（1809年から1849年にかけて幕府が編纂。初代・家康から10代・家治まで歴代の将軍の治績を編年体で詳述）によりますと、「（秀吉の指示による転封は）秀吉が家康に広大な北条の旧領を与えたのは、たいそう気前よくみえるが、内心は、家康から徳川家に心服している駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5国を奪い、長く北条氏の治下にあった関東地域に家康を移せば、必ず新領主に対する一揆が起きるだろうから、それを機に徳川を料理しようと秀吉はたくらんだのだ」と評しています。

日本史研究の村井益男氏（日本大学名誉教授）は、「（この説の論拠は）転封の本質が、領主を土地から引き抜き、領土に根を張らない『鉢植えの木』に仕立てることであり、（このことが）もっとも重要な大名統制策であった点からみれば、考えられることである」と述べておられます（講談社学術文庫『江戸城将軍家の生活』2008年）。

実際、家康関東移封の2年前に、「鉢植えの木」の手本のような出来事が起きているのです。

佐々成政（さっさ・なりまさ）は、戦国時代から安土桃山期にかけて大活躍した武将です。信長の部下として数々の武功を立て、1582年、越中国を領しますが、小牧・長篠の戦いで秀吉と戦い敗れて降伏。妻子とともに大坂に移住させられ、以後、御伽衆（おとぎしゅう）として秀吉に仕えます。1587年には、「羽柴」の名字を与えられているのです。

その成政が、さらに同年、秀吉による九州征伐で功をあげたことにより肥後1国を与えられます。まさに、他国から降りてきた「落下傘」領主でした。秀吉は性急な領国改革を慎むよう成政に指示したと伝えられていますが、病を得ていたといわれる成政は、早々に太閤検地を進めようと急いでしまいました。こうした政策に反発した国人（「こくにん」とも。在地領主・地侍）たちが一斉蜂起して、成政はこれを自力で鎮めることができずして、この事変を「肥後国人一揆」といいますが、佐々成政は失政の責任をとられ、1588年、摂津国で切腹させられました。

成政ほどの実力者にしてこのような事態に陥るのだから、家康も二の舞を演ずるのではないかと豊臣方が期待しているのではないかという、徳川方の観測です。

徳川側からすれば、関東移封は、秀吉の「徳川家の実力の大きさに対する恐れや警戒心」から出たものであると受け止め、家康を江戸という遠隔地に遠ざけ、あるいは、家康失政を期待するという姑息な思惑を、正史に残したかったのかもしれませんが、しかしながら、江戸移封後200年以上も経た時期に書かれた史書に、「鉢植えの木」説が載せられたとしても、徳川家の自画自賛的な実力自慢にはなるものの、それ以上の現実的・歴史の意味は見いだせないように思うのですが、いかがなものでしょう。

3. 「江戸移封」の真意

しからば、関東移封について、秀吉と家康本人たちの真意はどこにあったのでしょうか。「天下人としての秀吉の立場からすれば」といわれるのは、作家の綱淵謙錠氏です。氏は率直な洞察力で、次のように推論されます。「自分の最も頼りとする蒲生氏郷を会津に封じて伊達政宗を押さえ、家康を関東に封じて旧北条勢力の蠢動（しゅんどう）を鎮圧するというのは、全国統一の当然の措置である」。

次いで、その論拠を次のように続けておられます。

「秀吉は小田原攻略ののち、奥州仕置きに向かう途中、江戸に立ち寄って江戸城を実見し、『この城は四方無障、天下無双』と絶賛している。秀吉は小田原攻めの前から江戸の地理的条件（地政学的条件といってもよいだろう）に強い関心をもち、関西における大坂に匹敵するものとして、北条氏の本拠だった小田原や頼朝ゆかりの鎌倉などより、

江戸という土地に将来の発展の可能性を見抜いていたのである。それは、秀吉の先見の明であり、それを家康にすすめたのは天下人としての好意的な配慮からであったろう。家康もそれはすぐに理解できたはずである」と（ちくま学芸文庫『江戸・東京を造った人々 1』）。

一方の家康は、この転封をどのように受け止めたのでしょうか。

まず、関東への転封のことですが、転封が発表されるに先立って家康の奥州への移封が噂されました。当然のことながら、重臣の本多・榊原・井伊たちは不服を唱えます。「三河以来の地から離れたくない」。こうした家臣たちの異論に対し家康は反論しました。「百万石の増封があるなら奥州でもよいではないか。人数を多く召し抱え、3万人を国に残し、5万人を率いて上方に攻めのぼれば、天下に恐れるものはない」。関東転封に期するところがあったようなのです。「忍耐」や「服従」をモットーとして生きてきた家康ではありましたが、自らの立場の変わり目を関東転封に見いだしたのかもしれない。「家康はすでに関東転封を知っていたらうから、この新天地に新しい将来性をみとめ、同時に土着性の強い譜代の三河武士を、近代的家臣につくりあげていく絶好の機会として、関東転封を利用しようと考えていたのかもしれない」とは村井益男教授の観察です（前掲書）。

機を見るに敏な家康が、このころから次なる飛躍を予感し、あるいは、自らの将来に期待を見だし始めたのかもしれないことを想像させる観測です。

さらに、家康が江戸に居城を定めた理由について、城自体の客観的役割が変化してきていることを考えなければなりません。

中世の城は、敵軍の攻撃に対し「守る」ことを第一の目的としました。このため、険峻な山のうえに築いた山城が重要視されました。ところが、関東平野には山がありません。このため、城は比較的小高い丘陵のうえに築く平山城が中心です。太田道灌の築いた江戸城も平山城でした。「しかし」と村井教授はいわれます。「しかし、戦国時代末期から安土桃山時代にかけて城の持つ役割が大きく変化した。軍事的な目的もさることながら、一国ないし数カ国におよぶ広大な大名領国の経営の中心として、政治上、経済上の押さえとなる地を選定し、城に接して城下町を建設する必要に迫られた」。

そうであるとすれば、小田原や鎌倉は、240万石を領する大領主の城下町の候補地から除外しなければなりません。両地とも太平洋に直接面し、人工の大港湾を構築することがきわめてむずかしいのです。これに対し、江戸は波静かな江戸湾内の最奥部に位置し、かなり海上交通に好都合です。加えて、関東の内陸各地に通じる陸路・河川路も江戸近辺に集中しています。こうした地勢上の好条件は、その後の発展の可能性を大いに示すものでした。

「江戸をあらたに関東経営の根拠地と定めたことが、秀吉、家康いずれの発意であったにせよ、小田原や鎌倉にとらわれずに決定したことは、結果的には時勢に合致した賢明な処置だった」と村井益男教授は結論づけます。また、「家康の新しい時代に対する

見通しのよさを感じることができる」とも断じておられます。

4. いよいよ江戸に入城したが

天正18年(1590) 8月1日、家康軍は江戸城に入城しました。関東移封が決定されてから2週間も経っていません。このとき以降、4世紀半の間、江戸氏・太田氏・上杉氏・北条氏と引き継がれてきた江戸城は、まったく同じ場所に位置しながらも、中世豪族の城館から近世大名の城へと転換を遂げるのです。下野の一部や常陸の「なびかない勢力」に対さなければならぬ家康の緊張感に加えて、240万石の大大名の城を経営しなければならぬ責務の重さは、無量のものがあつたにちがいません。

『慶長見聞(けんもん)集』という仮名草子(仮名交じり文の物語・小説・教訓書・地誌などの総称)形式の陪筆が残されています。三浦茂正という人(1565~1644、北条家の家臣で小田原落城を体験した後、江戸で商人になり、晩年は天海僧正に帰依、法名は浄心)が記したものです。

同書によると、「其の頃は遠山の居城にて、いかにも龜相(そそう)、町屋なども茅ぶきの家、百ばかりも有るかなしの体、城もかたちばかりにて、城の様にもこれなく」という状態でした。

江戸城は、北条家家臣の遠山氏が城代として守っていましたが、外回りには石垣もなく、芝の土手で囲まれ、城内にはあちこちに遠山氏時代の家臣たちの家が残っていて徳川家の者たちの宿泊には間に合ったものの、屋根は雨漏りし、畳や敷物までが腐っていた。玄関の上がり段には使い古した船板の幅の広いのを二段に重ね、板敷きもなくすべてが土間だったそうです。

さらに、先に紹介した大道寺友山の書いた『落穂集』に見える逸話ですが、城のあまりのみすぼらしさを見かねた家康の家臣・本多正信が「他国の使者などもやってくることですから、せめて玄関回りだけでも普請(建築・修理)したらいかがでしょう」と言上すると、「その方はいらざる立派だてをいう」をいうと家康が笑って普請を許さなかったとあります。

5. 急がなければならなかったこと

城の玄関を普請するより先に家康が急がなければならなかったことは、転封に伴う新領土の整備でした。それにはまず家臣団の知行割りが重要でした。

知行割りとは、家臣たちの配置を決め、俸給としてその土地の支配権を彼らに与えることです。外部に対しては防備の固めとなり、内部に対しては家臣たちの統制の基礎となるものでした。

そして、その知行高を示すため、従来の貫高や俵高を廃止して石高を採用することとし、そのためには新領土の検地(年貢高・諸役など、いわゆる租税を算定するため、農民の田畑などを測量・調査すること。部分的には戦国時代にも行われ、秀吉により全国的実施されたとされるが、未調査の土地も残されていた)を行う必要がありました。

まず知行割りにについては、江戸を取り囲む重要な支城のある領土に有力な重臣を配置しました。

たとえば、上野の箕輪は井伊直政（12万石）に、館林は榊原康政（10万石）に、下総の結城は結城秀康（10.1万石）に、上総大多喜は本多忠勝（10万石）に、相模小田原は大久保忠世（4.5万石）に与えられました。

また、100万石余といわれる徳川家の直轄領には、大久保長安・伊奈忠次・長谷川長綱・彦坂元正・向井正綱・成瀬正一・日下部定好といった有能な家臣を代官（直轄領の行政を管掌する地方官。勘定奉行に属し、年貢収納や民政一般をつかさどった）などとして起用することにより、関東政権の安定を図ったのです。

次いで検地は、家康の江戸入城の年である天正18年（1590）、早速、伊豆で実施したのを手始めに、翌19年、武蔵・相模などに広げていったこの検地は、まだ兵農分離が進んでいなかった関東農村に近世的秩序を打ち立てるうえで、大きな役割を果たしました。

6. 江戸城内部では

ここで留意しなければならないのは、この時点、家康は秀吉配下の一大名に過ぎなかったということです。秀吉がでんと睨みをきかせています。度を過ぎた振る舞いは、大名の命取りになりかねません。賢明な家康はそのことを十分心得ていたことでしょう。

このようなことから、知行割りと検地の次に家康が行ったのが城の修復ですが、それはまことに小規模なものでした。まず行ったのは、本丸と二の丸の間にある幅10間（約18メートル）ほどの大きな空堀を埋め立てることです。これは道灌以来の江戸城内部の区画を取り払い、本丸の面積を拡張するための工事でした。

本丸工事に次いで、西の丸建設の準備が進められました。しかしながら、入府直後の天正18、19年とも、まだ秀吉の奥州征伐の余波が残っており、一揆や反乱が続いていたため、家康もいつ出陣を指示されるか分からない状況でした。従って城も本格的な工事には至らなかったようです。

江戸入り3年目になると天下も落ち着いてきたため、家康は西の丸の工事に取り掛かりました。西の丸の場所は、まだ江戸城の郭外にあたる野山で、「所々に田畑などもあり、春は桃・桜・梅・つつじなども咲き、江戸中の貴賤の遊山所にいたし」と『落穂集』にあります。工事はこの遊樂地を江戸城に取り込む作業でした。西の丸は当時「御隠居御城」あるいは「新城」と呼ばれましたが、こうした江戸城の工事も同年、文禄元年（1592）から秀吉の朝鮮出兵が始まり、翌3年には伏見城の工事分担が徳川氏に課せられたため、江戸城の拡張作業は一応中止になりました。

7. インフラ工事に注力

順序は逆になるかもしれませんが、家康は荒廃した江戸城内の修復工事に着手する前に、江戸市内のインフラ工事に力を注いでいます。ここに、家康の政治家としての姿を

見ることができます。

まず、江戸城東側真下を流れる平川の河口から江戸城に通じる道三堀と呼ばれる舟入堀の掘削に着手しました。現在の呉服橋から大手町にいたる道路の北側に掘った堀で、これによって舟積みした物資を直接江戸まで運び入れることができるようになります。現在の和田倉門の辺りに陸揚げした荷物を納める蔵(和田倉)も設けられました。

後に、道三堀の両岸には江戸城下町最初の町人町が生まれます。建設資材の材木を取り扱う材木町や、舟問屋の集まる舟町、四の日に市の立つ四日市町、遊女屋が並んだ柳町などです。続いて行われたのが、本庁の町割りで、ここには町年寄役所や金座などが置かれました。1ブロックを京間60間(1間一約1.97メートル)四方として、中央の20間四方の土地を会所(幕府の統制下に置かれた集会所)という空地にしました。

また、文禄元年(1592)には先述の西の丸築造工事に伴う堀の揚げ土で日比谷入り江の埋め立てが行われ、そこに開削された堀割りにできた八代洲(やえす)河岸沿いに町屋が開かれました。

このような市街地の開発とは別に、家康の江戸入り以前から集落のあった大手門前・浅草・麴町・赤坂一ツ木・牛込・芝なども、町屋としての発展を見せていきました。

一方、飲料水の確保のために家康は大久保忠行に命じて上水道を聞かせました。これが神田上水の基礎となり、また、赤坂溜池の水も上水に利用されました。

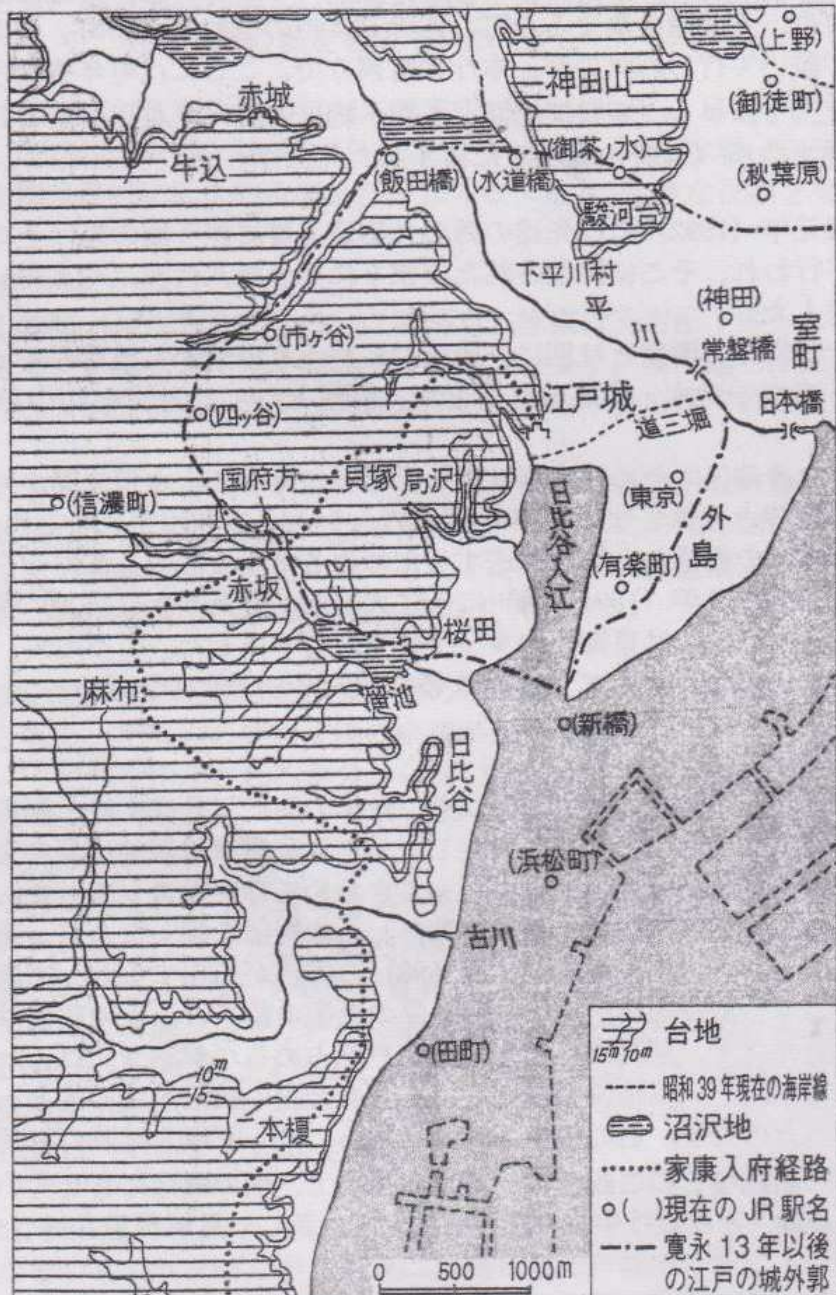
さらに、製塩地の行徳から塩を運送するため小名木川を開削。江戸を中心とした交通路も整備され、文禄3年(1594)荒川に千住大橋を、慶長5年(1600)多摩川に六郷橋を架橋して、その翌年には東海道のルート変更を行いました。こうして、江戸は豊臣政権の最大の大名の城下町としての体裁を漸次整えていったのです。

結 び

天正18年(1590)、家康の江戸入国以来、数年の間に年号は文禄・慶長とかわり、その間、再度の朝鮮出兵という大事が発生しました。家康軍は現地出兵を免れ、財力の消耗を避けることができたのは、家康にとってきわめて幸いなことでした。家康は着実に領国経営を進めながら、そして、「天下取り」への野望を隠しながら、秀吉傘下の一大名の身に甘んじていました。慶長3年(1598)、秀吉が死亡すると、家康の政界での重みは急速に増して、慶長5年(1600)関が原の合戦の結果、天下の政権は豊臣氏から家康に手渡されたのです。同時に、江戸城と江戸が占めるポジションは、一大名・徳川氏の居城とその城下町という地位を脱皮して、日本全国の政治的中心地とへ躍進しなければならなくなったのです。この変身ぶりや、あるいは、家康入城時の江戸の「さびれ具合」についての新説などのご説明は、紙数の都合上、別の機会にさせていただくことといたします。最近、とりわけ中世の江戸に関して、新しい見解が示されつつあるのです。

<主要参考文献>

- 『江戸城 将軍家の生活』村井益男・講談社学術文庫 2008年
 『江戸・東京を造った人々 1』網淵謙錠ほか・ちくま学芸文庫 2003年
 『大江戸開府 四百年事情』石川英輔・講談社文庫 2006年
 『家康はなぜ江戸を選んだか』岡野友彦・教育出版 1999年
 『東京都の歴史』竹内誠ほか・山川出版社 1997年



徳川家康入国前後の江戸近辺推定図

わが見聞録—利根川東遷と荒川西遷と 施工者伊奈家について

講師 大出 信好

1. 某月某日

平成 25 年 3 月の研修会において、私はおろかにも「家康の利根川東遷事業について」発表しました。その後「荒川西遷」がおちている、「江戸城の内堀、外堀のそのまた外堀の役目をもっと強調すべき」などご指摘をいただきました。

その折にも書きましたが、東武鉄道日光線の走るいわゆる関東低湿地帯（中川低地とも）においては関東平野の後背山地からの水は容易に集積することはわが体験上からも理解できるが、西部の荒川（入間川を含む荒川低地）についてはあまり関心がなかったというのが本音でした。しかし、JR 高崎線や宇都宮線に乗ってみれば東武線のそれとは明らかに景色がちがうのがわかります。そう、古の東山道（中山道）さらに現在の高崎線は標高 15～30m の大宮台地を縦断するように走っている、一方奥州街道（日光街道）や東武鉄道は千住～草加～越谷～春日部～栗橋までは標高 1～11m であり、往古においては雨季には水溜となり往来も定住もままならぬ地であつたらうと想像できます。

曰く、むさし（武蔵）の「む」は水であり、「さし」は二重三重に層状に折り重なった状態を指す、その中心は「忍」のあたりと。即ち利根川、荒川は互いに乱流していたと。

かかる状況は既に承知であつたらう家康は天正 18 年（1590）8 月 1 日江戸入府、江戸城北部防衛の要として、重臣を配し川越藩（酒井重忠、1 万石）、岩槻藩（高力清長、2 万石）、忍藩（松平家忠、1 万石→1592 年家康 4 男松平忠吉、10 万石）をいち早く立藩しました。

文禄 3 年（1594）には水を治め水を利する策の実践者として伊奈忠次（ただつぐ）に命じ会の川の締切に着手…鳥の目、虫の目、魚の目をもって大望を実現せんと着々と手を打ちだしたのです。

既に 400 年を経た現在、すっかり現状肯定の目しかもてない私は近視に乱視おまけに白内障を忘れて、ま近に確認してみなければと現地を往訪したのでその珍道中記を報告します。

2. 小室陣屋（藩）（現埼玉県伊奈町小室）

伊奈忠次（1550～1610 年）は 1590 年（以下主として西暦で表示）長谷川長綱（相模浦賀、1604 年病死）、彦坂元正（相模岡津—現横浜泉区、1605 年失脚）、大久保長安（武蔵横山—八王子）とともに関東代官頭に任じられ、翌 1591 年小室に 1 万 3 千石（1 万石とも）を賜り小室陣屋を設けます。

この小室陣屋を拠点に忠次の神出鬼没、縦横無尽の活躍がはじまるのです。

1594年 利根川東遷の発端となる会の川締切（後出）、そして千住大橋の架橋。

1604年 備前堀の開削（利根川右岸、現本庄市～熊谷市 20km 超）

1609年 木曾川堤（御囲堤）の築堤（左岸－尾張側 3尺高いと、犬山～弥富 48km）
（忠次はすでに死に瀕していたはずだが）

1610年 水戸備前堀の開削

忠次は 1610年（慶長 15年）没、嫡男忠政（1585～1618年）が後継、忠政は大阪の陣で戦功をあげたが 34歳で没、その子忠勝継ぐも翌年 9歳で夭折。小室藩廃藩。

（幕府は家康時代の功臣の家柄断絶を惜しみ、忠勝の弟忠隆に 1186石を与え旗本として存続させたといえます。）

私がかねて茨城県伊奈町（現つくばみらい市）と埼玉県伊奈町との関係や如何？のおもいでいました。茨城伊奈は何度もいっているが（筑波 CC 周辺）、埼玉伊奈は未だ電車の中から想像するばかり、ついにいたたまれず大宮から埼玉新都市交通ニューシャトルに乗り伊奈町小室をめざしでかけてみました。

ここは日本橋より 40km ほど、大宮台地の北。沼地に囲まれた雑木林の中にあり、北に利根川、東に古利根川、元荒川、綾瀬川、太日川、西に和田吉野川（現荒川）、まさに水対策現場事務所というべき地点と納得できました。しかし、それ以上の見方を知らない私はただそぞろ歩くばかり、埼玉県の「史跡指定」の看板とそのすぐ近くには「指定反対」の看板とがゆったりとした農家の佇まいと好対照をなしていました。

3. 会の川締切（羽生市川俣～上新郷）

家康は江戸入府早々忍藩を立藩、1592年には 4男忠吉（1580～1607年）を 10万石で送りこむ。藩の大きな使命は、利根川をはじめとする諸河川の治水、新田開発、東北諸藩に対する備えなどであるが、まだ 11歳の藩主にとっては伊奈忠次の存在は絶大であったろうと思います。

1594年 忠次は利根川の治水こそ江戸城を安んずる要と会の川の締切りにとりかかります。しかし、締切るとは堤防を築くことで溢水を少し東に逃がす程度であって、新たな河道を開削するには至っていませんでした。利根川の流れを変える（瀬替え）のは次男忠治（ただはる）に引き継がれます。

私は国道 122号は幾度か通っているが、羽生、加須付近を探訪したことはありませんでした。締切りの現場さがしのため、まず「道の駅はにゅう」にて尋ねると店長氏が案内しましょうと…なんとその敷地内に「川俣締切址」碑が鎮座しているではないか。300mほど下流より移転してきたといえます。北に男体山、赤城山を遠望してまさに絶景！さらに、この国道は利根川をこえると館林、太田を経て足尾銅山へ通じる銅（あかがね）街道なのです。

国道西側の堤防上には「川俣関所址」碑もある、1610年に設置されたが今は利根川の中に沈んでしまい特定するのは困難といわれます。

4. 赤山陣屋（川口市赤山）と 荒川西遷

忠次の次男伊奈忠治（1592～1653年）は1606年には800石を賜って勘定方に仕出。忠次の死後、1618年関東代官職を継承、赤山の地に7,000石を拝領。1629年（寛永6年）赤山陣屋を構える。総面積70万㎡（21万坪）と広大なもので、本丸、二の丸だけでも11万㎡（3万3千坪）あったと伝わります。

この間忠治は父忠次の意をよく体し、

1621年 新川通りの開削、利根川と渡良瀬川が合流。赤堀川開削（第1期）

（1623年家光3代将軍となる、1651年没）

1628年 中山道付替え、大宮宿設ける。

1629年 元荒川締切り、入間川へ付替え（荒川西遷）。見沼溜井の造成。

忠治は大宮台地東側（中川低地）へ集中していた荒川、利根川の水を分散させるため、熊谷近くの久下にて元荒川を締切り堤防を築き、荒川の流路を和田吉野川～入間川へと繋ぎかえたので「荒川の西遷」とよばれる由縁です。

この西遷工事は 水害を防ぐ、新田開発の促進、中山道整備、江戸への物資輸送路の確保など利根川東遷と相俟って関東平野を変貌させていったといっているでしょう。

1635年 江戸川開削着工（1641竣工）。

1654年 赤堀川拡幅（第3期）幅23m（13間）、利根川が常時銚子方向へ流れるようになり、忠治は前年1653年に没したが、ここに60年を要してようやく利根川東遷がなりました。

ある日、私は赤山陣屋を訪ねんとポンコツ車を駆って外環道を走りました。ナビがなくともすぐわかると思っていたが迷った。ようやく辿りついてみると植木や雑木林に囲まれて「赤山城址」碑がぽつんと。城??とはおもいながらも、まあいいや、と追求するのはやめました。だめですね。

忠次や忠治は小室、赤山を拠点に下総、武蔵の広大な湿地帯をどう移動していたのでしょうか。そんな思いにかられながらさらに元荒川締切り地点をさがして熊谷市久下を目指して移動。彷徨っているうち「国土交通省荒川上流河川事務所熊谷出張所」なる看板にであい、一瞬ほっとし、すかさずとびこみました。留守番?の女性とさかんにキーボードをたたく若者、元荒川締切り地点を尋ねると、さて???最終的にはPCからとりだした資料にて「これ読んでください」と。元荒川の清流に棲むという天然記念物「ムサシトミヨ」研究所から100m上流地点が源流と。堤防へのぼると河口より75kmの標識、遙かにかすむ秩父連山をのぞみ感無量でした。

いま私は「慶長3年太閤検地石高表」と「元禄郷帳石高表」をながめている。その数字にはいろいろと異論もあるようですが、一部を抜粋して比較してみます。

	1598年(慶長3年)石高 (太閤検地)	1697年(元禄10年)石高 (元禄郷帳石高)	(伸び率)	
上野	496千石	592千石	(119%)	
武蔵	667	1,168	* (175)	この伸び率をみると利根、
下総	393	568	* (144)	荒川の瀬替えの効果と理
上総	379	391	(103)	解したい。
相模	194	258	(133)	
伊豆	70	84	(120)	
江戸転封時 (6ヶ国)計	2,199千石	3,061千石	(139%)	
三河	291	383	(132)	
遠江	255	329	(129)	
駿河	150	191	(127)	
甲斐	228	253	(111)	
*信濃	408	616	(151)	南北に分けられず1国で
徳川旧領計	1,332千石	1,772千石	(133%)	表示
山城	225	224	(100)	
摂津	356	393	(110)	
和泉	142	162	(114)	
河内	242	276	(114)	
大和	449	500	(111)	
5畿計	1,414千石	1,555千石	(110%)	
全国合計	18,509千石	25,876千石	(140%)	

5. むすび

「城を歩く会」会員7年生となるが、大森前会長の仰られた「城は両目でみよ、時には片目でみよ」との言葉を常に脳裏に刻んでいるつもりなれど、その場に臨んではなかなか生かされなく忸怩たるものがあります。ただ今回小室陣屋、赤山陣屋へでかけ、また利根川や荒川の締切り現場を訪ねようとの行動は当会に入れてもらった影響だとも思います。

せつかくよき仲間ともめぐりあえたことでもあり、いま少し体力、気力を充実させなければと思っているところです。

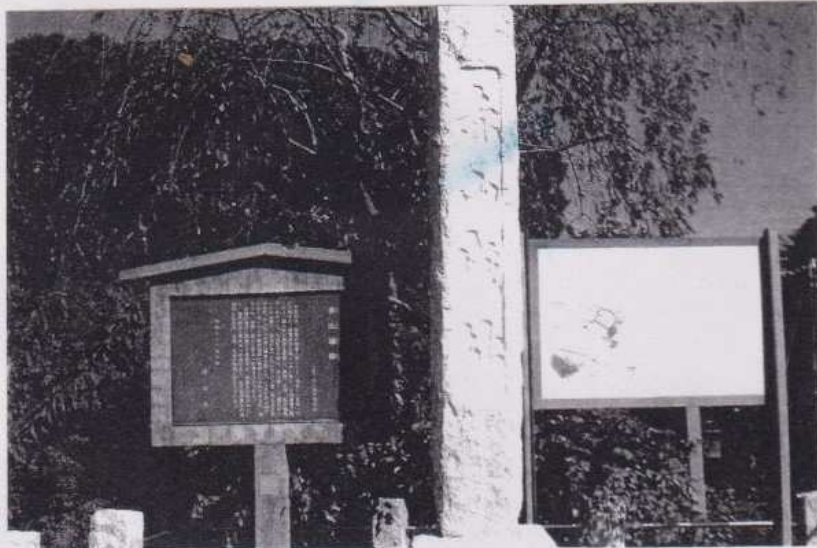


1594年、会の川へ流入
していた利根川はこの
あたりで締切られた。

R122(昭和橋)を渡ると
群馬県館林市。



1610年川俣關所開設
日光脇往還として賑わ
っていたが、
現在關所跡は利根川
に没す。



伊奈忠次の次男忠治の
赤山陣屋址。
雑木林や植木に囲まれている。



現荒川河口より75km
地点。

1629年このあたりで
元荒川を締切り。

和田吉野川から入間川
へ流路変更。



この地点より100m上流
が元荒川源流といふ。



入間川・荒川合流点。
(川越市古谷本郷地先)

小田原城攻防のいきさつ

講師 石井 勇

はじめに

「小田原の北条氏は、初代の北条早雲にはじまり、2代氏綱、3代氏康を経て、4代氏政のころには関東のほぼ全域を支配し、“関八州国家”などと称される独立した世界を作りあげていた。しかし、それは、天下統一をねらう豊臣秀吉との対決が不可避であることも意味した。関白となった秀吉が北条氏政・氏直父子にも上洛し、秀吉に臣従の礼をとることを求めてきたからである」（小和田哲男『名城と合戦の日本史』。「臣従」とは秀吉の軍門に降り、臣下として従属することであった。

織田信長の後継者として天下統一を目指した豊臣秀吉。天正15年（1587）、薩摩の島津義久を降伏させて九州を平定したあとになすべきは、最後の難関といる関東の北条氏を制圧することであった。秀吉は天正12年（1584）、すでに徳川家康と和睦して服従させ、翌13年に関白に任官して国政を総覧する地位に就いていた。「関白」とは、「天下の万機を関り白す（あずかりもうす）」権限を有するとの意である。関東に覇を唱える小田原の北条氏を、何としても秀吉になびかさなければならない。

「小田原の戦役」を簡単に表現すると、北条氏第4代の北条氏政が秀吉からの上洛命令にやっとなじようとしていた矢先の天正17年（1589）10月、北条氏の家臣・猪俣邦憲が真田昌幸の名胡桃城を奪取してしまう。秀吉は自ら発した「惣無事令」に北条氏が違反したとして、諸大名に出陣を命じたというのがきっかけである。

そこで、北条氏の堅城・小田原城攻略に際して秀吉がみせた硬軟取り混ぜた戦略・戦術ぶり、対する北条側はなぜ豊臣側の大军に抵抗して自陣の防衛に固執し続けたのか。本稿は、小田原城攻防のいきさつを概観することとする。

1. 関東惣無事令と宣戦布告

天正10年（1582）3月、織田信長軍に追い詰められて武田氏が滅び、同年6月には本能寺の変でその信長が横死すると、武田家の遺領をめぐる争いが始まった。武田氏の家臣だった真田昌幸や、徳川家康、北条氏政・氏直父子は甲斐・信濃・上野で対陣した。同年9月、いったんは和議が成立し、その後、天正13年（1585）には甲斐・佐久・諏訪は徳川領、上州は北条領であると分割策が実施されることとなった

ところが、真田側に対して家康が上州沼田領を北条側に明け渡すよう命じたところ、昌幸は「沼田領はわが父祖伝来の土地であり、徳川の指示は受けない」と明け渡しを拒否して家康と対立、同年7月、上杉景勝側に走った。家康は7000人を動員して真田の信州・上田城を攻略した。

こうした動きに対し秀吉は関東の大名に向かって天正14年(1586)、「関東惣無事令」を発令した。「惣無事令」とは、関白としての秀吉が、大名同士による領土拡張のための戦いは私戦であるとして、それをやめさせる「私戦停止令」のことである。

しかし、その後も真田氏は北条氏と沼田城をめぐって激しく対立した。そこで秀吉は「裁定」を発し、天正17年(1589)、北条氏政の上洛の条件として沼田城を含む沼田領の三分の二が北条氏の領土、沼田城の支城・名胡桃(なぐるみ)城を含む三分の一が真田氏の領土であると命じた。同年7月、北条氏はしぶしぶながらこの裁定を受諾し、領土の引き渡しが行われた。ところが同じ年の10月、北条氏の沼田城城代・猪俣邦憲が、利根川対岸の名胡桃城に侵攻するという事件が勃発したのだ。

その報をけた秀吉は、惣無事令違反を糾明するための使者を派遣し、小田原第5代の氏直あてに五カ条の朱印状を差し出した。朱印状とは、戦国大名や、江戸時代の将軍が朱印を押して発行した公式文書のことである。その第一条に「北条のこと、近年公儀を蔑り」上洛せず、関東で勝手に狼藉を働いていたとあり、第四条までは裁定から執行、名胡桃城奪取と、それを弁明する北条の使者を助命するまでを記している。第五条は以下のものであった。

「予、すでに登龍揚鷹(とうりゅうようよう)の誉れを上げ、塩梅則闕(大政大臣の意)の臣となり、万機の政に関する。しかるところに、氏直、天道の正理に背き、帝都に対し奸謀を企つ。何ぞ天罰を蒙らざらんや。古譬(こげん)に曰く、功詐(こうさ)は拙誠にしかずと。所詮、普天の下、勅命に逆う輩は、早く誅伐を加えざるべからず。来歳は、必ず節旗(本来、将軍の旗)を携え、進発せしめ、氏直の首を刎ぬべきこと、踵をめぐらすべからざるものなり」。

天皇から政治を任された関白・秀吉は、天下の道理に背いた北条氏に誅伐を下すとして、来年出兵し、惣無事令に背いた氏直の首を刎ねると宣言したのである。北条家に対する宣戦布告であった。怒りを爆発させた秀吉は、配下の諸大名に翌年春の小田原への出兵準備を命じた。

2. 北条氏の立場

「北条氏にとってみれば、必ずしも秀吉との和平を追求する意思がまったくなかったわけではない」と述べるのは日本中世史家の池上裕子氏である。

当初は、秀吉の再三にわたる上洛命令にもかかわらず、北条側はこれに応じようとしなかった。秀吉が業を煮やしているのを見た徳川家康は、しばしば小田原に向かって使者を立て、上洛を勧めた。家康の次女・督姫は氏直に嫁いでおり、徳川・北条両家は姻戚関係にあった。家康の忠告もあって、氏政は自らの上洛についての条件を交渉するため天正16年(1588)8月、弟の氏規を上洛させ、さらに前述の秀吉の「裁定」を承諾する際、同17年7月、年末には上洛することを誓っていた。ところが、10月に名胡桃城奪取事件が勃発したのである。

ところで、三代・氏康のころ北条家は最盛期を迎えていた。

氏康は四代・氏政をはじめ8人の男子と5人の娘に恵まれ、和睦策のためいずれも関東土着の有力武士のもとに送り込まれていた。三男の氏照は大石氏へ(のちに北条氏照)、四男・氏邦は秩父氏へ(北条氏邦)、五男・氏規は館林、葦山城主へ、六男・氏忠は佐野氏へ(北条氏忠)、七男・氏堯は小机城主となり、八男・氏秀は武田信玄の養子に出たあと、上杉謙信の養子となり、上杉景虎となる。

女子は、長女が北条氏繁の夫人、次女は千葉親胤の夫人、三女は今川氏眞の富士、四女は太田氏資の夫人、五女は貞烈で知られる武田勝頼の夫人である。

このような婚姻政策によって北条氏は戦わずして手中に収めた領地も多かったようである。

小田原の戦役のころ、氏政はすでに隠居し、家督は子の5代氏直が継いでいたが、本来、氏政は「俄か天下」の秀吉に臣従することを潔しとしなかった。氏政には、もし秀吉と開戦し、豊臣軍が小田原城に押し寄せてきても、撃退できるという自信を持っていた(中世史家・小和田哲男氏)。

氏政のこの自信は、永禄4年(1561)、上杉謙信率いる10万の兵に小田原城を囲まれながら氏政の父・氏綱がこれをなすところなく敗走させたこと。また、同12年(1569年)にも武田信玄勢3万の攻撃を、城兵1000余による三カ月間の籠城戦の結果、退けた経験を見ていたことからきていた。小田原城は戦国時代を代表する名将、上杉謙信・武田信玄に攻められてもびくともしない堅固な城であったのだ。

氏政は、秀吉との間で条件折衝を続ける一方で、対決した場合の態勢を固めていた。豊臣軍が進軍してくると予想される東海道を押さえるため、箱根路に山中城を築き、足柄峠の足柄城を修築、その2城と伊豆葦山城を結んで防衛線を設けた。同時に、小田原に大外郭と呼ばれる惣構えの土塁と堀を築いた。総延長9キロ、城下町をすっぽり囲いこんだ大工事だった。深さ5メートル・高さ5メートルもの大堀切りが現在も残されている。小田原城は、前年落成したばかりの大坂城にも匹敵するほどの屈強な城になっていた。

また、主力の武器である鉄砲や兵糧、軍勢の補強も怠らなかった。本城と領内の支城の人員の動員数は5万6000ともいわれる。仮に秀吉との戦になっても、小田原城に籠城して戦えば、謙信や信玄のときと同様、秀吉軍はすごすごと兵を退くという思いがあったようだと言及する小和田哲男氏は推測する。

さらに、やはり中世史専門の小和田泰経氏は、「北条氏は同盟を結んでいた伊達政宗や、氏直の岳父にあたる徳川家康からの後詰め(後ろからの攻撃)が得られれば、北条軍にも勝機があるかもしれないと期待していたのではないかと指摘しておられる。しかし、この戦の中で政宗は秀吉に臣従してしまい、また、家康はすでに秀吉から離反することはあり得ない状況にあった。

3. 秀吉軍の戦略と戦術

秀吉軍側では、秀吉から小田原攻めの先鋒を申し渡されて徳川家康は、早くも天正18年(1590)1月21日、家臣を駿府城に集めて軍議を開いて作戦を講じた。2月20日には3万の大軍を率いて沼津に到着し、京から下ってくる秀吉本隊を待った。3月1日、聚楽第を出陣した秀吉は27日、沼津三枚橋城で家康と落ち合い、北条側の前衛城・山中城と葦山城攻略対策の詰めを行った。

箱根方面の総責任者は家康、山中城攻めの総大将には秀吉の甥・秀次があたることになった。家康軍は早速、箱根山中の鷹の巣城攻撃に向かい、一方、29日に行われる山中城攻めは、わずか2時間で決着がついてしまった。山中城が半日ならずして落城してしまったことは氏政・氏直にとってまったくの誤算であった。

秀吉の本隊は4月1日、箱根山に陣を張り、翌2日、箱根湯本に至り、先手隊は3日には小田原まで進軍した。秀吉も3月30日に箱根湯本に到着し、北条家第1代の早雲の菩提寺である早雲寺を本陣に決めた。

山中城があまりにも短時間に落城するに及んで、小田原城は完全に城に籠もらざるを得なくなった。各口を4万5000の兵によって守備させ、城内には氏政・氏直以下1万が籠城した。

当初、秀吉軍が数回にわたり攻城を仕掛けたが、城はびくともしなかった。秀吉は小田原城が20万を超える大軍で攻めても簡単に落とせる城でないことを察知した。長期戦になることを想定して「対の城」を構えることとし、4月6日ころには早川の対岸に位置する笠懸山(石垣山)に家臣を登らせた。ここに城を築き、本陣を移すためであった。通称「一夜城」の名が冠されているが、築城には最低80日間を要したといわれる。

「対の城」とは、敵の城を攻撃する場合、その城に対する陣城を構築して敵城に対した城のことで、「向城」ともいう。

「笠懸山城は、スギの木を材料とし、白亜の櫓が要所要所に建てられ、塁はすべて石垣をもって固められて、本丸の一角には五層の天守もそびえた。この城の完成を機に、小田原城側の森林を伐りたおした。初めて目にした一大城郭の出現に、城内ではただ、あ然とするばかりであったという」(西ヶ谷恭弘氏)。

一夜城の完成が、小田原城内の兵士たちの戦意を失わせる効果はきわめて大きいものがあった。

5月2日、秀吉は石垣山城に各将の妻や側室を呼び寄せることを許し、自らも大坂から側室淀君を呼んだ。また、能役者を招いて能を演じさせたり、陣中で茶の湯、酒宴を繰り返し、城のかたわらには遊女街も設け、ただ時間の経過を待つ姿勢を保ち続けた。城内の兵糧が尽きるのを待ったのだ。

水陸あわせて21万と22万ともいわれる兵を率いた秀吉軍の陣構えは付表のとおりであった。徳川家康をはじめ、織田信雄・蒲生氏郷・羽柴秀勝・羽柴秀次・宇喜多秀家・

織田信包・細川忠興・池田輝政・堀秀政・長谷川秀一・丹羽氏重・長宗我部元親・九鬼嘉隆・毛利輝元ら堂々たる勇将・知将が名を連ねている。しかしながら、秀吉は小田原城を力攻めにしようとは思わなかった。無理やり攻撃すれば、かなりの流血をみなければならぬ。代わりに、各地の小田原城の支城を順次落城させる作戦をとった。



小田原城の大外郭土塁と秀吉の包囲網

4. 支城における攻防

小田原城内外でのにらみ合いと平行して、各地に配置されていた北条氏の支城では熾烈な攻防が展開された。その状況を、小和田泰経氏がまとめられた『戦国合戦史事典』により天正18年(1590)3月末から7月中旬までの時間にしながら眺めてみよう。この4ヵ月の間に、小田原の支城ことごとくが秀吉勢によって開城あるいは落城させられた。

松井田城(3月28日~4月20日) 群馬県安中市

3月28日、前田利家・上杉景勝らが率いる豊臣勢3万5000余が上野松井田城を包囲した。同城は信濃と上野の境にある碓氷峠を支配する要衝の地にある。松井田城を守っていたのは北条氏の重臣・大道寺政繁。降伏勧告を拒み抗戦を続けたが、周囲の北条方の城が落とされるに及び、4月20日、政繁は長男・直重を人質に出して降伏開城した。

山中城(3月29日) 静岡県三島市山中新田

3月29日、羽柴秀次(秀吉の甥)を総大将とする中村一氏・田中吉政・山内一豊・堀尾吉晴・一柳直末ら6万8000余の豊臣勢は、箱根を守る山中城を攻略した。山中城には城番・松田康長のほか相模玉縄城主・北条氏勝らが入り、4000の兵で守っていた。北条方はこの城で豊臣方を阻止しようとしていたが、わずか2時間ほどの戦闘で落城。康長以下2000余が討ち取られ、城を脱した氏勝は玉縄城に逃げ帰った。

葦山城（3月29日～6月24日） 静岡県伊豆の国市葦山

山中城の戦が行われていた3月29日、織田信雄を中心とする細川忠興・蒲生氏郷・蜂須賀家政・福島正則ら4万4000余の軍勢は伊豆葦山城を包囲する。籠城していたのは、北条氏政の弟・氏則が率いる3600余の兵であった。氏則は3ヵ月近く城を守り抜いたが、家康の斡旋により、6月24日、ついに落城した。秀吉は葦山城を新庄直頼・石川貞清に守らせると、主力を小田原城に向かわせた。

下田城（4月1日～23日） 静岡県下田市

豊臣水軍の脇坂安治・長宗我部元親・加藤嘉明・九鬼嘉隆らは2月26日、駿河の清水湊に寄港したあと、伊豆下田沖に向かい、4月1日、伊豆半島における北条水軍最大の拠点である下田城を攻撃した。城を守っていた伊豆衆筆頭の清水康英は、城兵600とともに豊臣水軍1万4000余の攻撃をしのいだ。4月23日、開城する。降伏した康英は一命を助けられ、下田城を退去した。

国峰城（4月17日） 群馬県甘楽郡甘楽町国峰

前田利家・上杉景勝の主力が、上野松井田城を包囲している一方、上杉氏の先鋒を勤める藤田信吉は、上野国峰城に向かう。小幡氏は元来、上野守護・上杉氏に従っていたが、その後、武田氏・織田氏に従い、このころは北条氏に臣従していた。当主の小幡信定は小田原城に籠城しており、留守の城を子の信氏が統括していた。4月17日、信氏は前田利家・金森長近に説得されて開城したという。

西牧（さいもく）城（4月中旬） 群馬県甘楽郡下仁田町南野牧

前田利家・上杉景勝の主力が、上野松井田城を包囲しているなかで、信濃小諸城主・松平康国は軍勢を率いて上野西牧城攻略に向かう。この城は、信濃と上野の国境に位置する内山峠を押さえる要衝で、北条氏の家臣・多米周防守・大谷帯刀左衛門らが400余の城兵とともに守備していた。松井田城の開城に従って西牧城も開城、多米周防守・大谷帯刀左衛門も自刃させられた。

玉縄城（4月21日） 神奈川県鎌倉市城廻

山中城の戦いに敗れた北条氏勝は居城の相模玉縄城に戻っていた。氏勝は北条綱成の孫にあたる。玉縄城に籠城して抗戦する構えを見せていたが、城を包囲した徳川家康は氏勝を味方につけようとする。そのため、玉縄城では戦闘らしい戦闘は行われなかったらしい。4月21日、氏勝は降伏して豊臣勢は氏勝に案内され武蔵・下総の平定に向かった。

江戸城（4月22日） 東京都千代田区千代田

玉縄城を攻略した徳川家康は秀吉の命により武蔵・下総の平定に向かった。4月22日には北条氏の関東支配の拠点・江戸城を包囲する。城代・遠山景政が小田原城に籠城したため、弟の川村秀重が城を守っていた。秀重は勧告を容れて降伏し、戸田忠次が城を受け取る。北条氏の滅亡後、その遺領を与えられた家康は、8月1日、「八朔」の日に江

戸城に入った。

箕輪城（4月24日） 群馬県高崎市箕輪町西明屋

上野松井田城を落城させた前田利家・上杉景勝・真田昌幸らは、西牧城・国峰城・厩橋城を落として上野箕輪城に向かう。城を守っていたのは武蔵鉢形城主北条氏邦の家臣・垺和（はが）信濃守であった。氏邦は豊臣勢の襲来を予期して箕輪城を改修補強させていたが、城兵は一戦も交えず、4月24日、降伏開城した。信濃高遠の保科正直が城を受け取り、前田利家に引き渡した。

石倉城（4月26日） 群馬県前橋市石倉町

西牧城を攻略した松平康国（家康の家臣）は上野石倉城の攻略に向かった。康国は石倉城を守っていた倉賀野淡路守を降伏させることに成功するが、降伏したはずの淡路守に殺されてしまう。家康は、康国のあとを弟の康真（やすざね）に継がせた。

臼井城（5月18日） 千葉県佐倉市臼井田

秀吉の命により江戸城を攻略したあと、家康は下総を平定するために臼井城に向かう。下総は小田原北条氏に従う千葉氏の勢力下にあったが、戦国時代には千葉氏の勢威は衰え、同氏の筆頭家老である臼井城の原氏が実権を握っていた。このときの城主は4歳の吉丸。同族の原邦房が指揮をとっていた。家康はこの臼井城を攻略すると、家老・酒井家次に城の接收を命じている。

鉢形城（5月19日～6月14日） 埼玉県大里郡寄居町鉢形

5月19日、前田利家・利長父子と上杉景勝は、3万5000余の軍勢で武蔵鉢形城を包囲した。城主の北条氏邦は、小田原城で籠城している北条氏政の弟であった。氏邦は1ヵ月近く籠城を続けたものの、岩付城を落とした浅野長政率いる軍勢も合流したこともあって抗戦の不利を悟って降伏開城する。自刃するため寺に入った氏邦は、利家によって一命を助けられ、のち利家とともに加賀金沢に移った。

岩付城（5月20日～22日） 埼玉県さいたま市岩槻区太田

秀吉から武蔵平定を命じられた浅野長政は、山崎片家・岡本良勝らとともに岩付城に着陣すると、20日から総攻撃をかける。城主・太田氏房は小田原城に籠城していたため伊達房実、妹尾兼延ら2000余が城を守っていた。包囲する豊臣勢は2万余、抗戦の不利を悟った房実・兼延らは降伏する。城を受け取った長政らは、利家・景勝らに加勢するために鉢形城に向かった。

八王子城（6月22日～23日） 東京都八王子市元八王子

6月22日、鉢形城を攻略した利家・景勝らは、武蔵八王子城を包囲する。八王子城の城主は北条氏政の弟・氏照であったが、氏照が小田原城に籠城していたため、城代の横地吉信のほか、狩野一庵・中山家範・近藤綱秀ら1000余で守っていた。翌23日、早朝から総攻撃をかけられた八王子城では、吉信が城から脱出して落城する。氏照の正室を

はじめ女性たちは城内の滝川に身を投げたと伝わる。

忍 城（おしじょう）（6月5日～7月16日） 埼玉県行田市本丸

上野館林城を攻略した石田三成・浅野長吉・真田昌幸らは、常陸の佐竹義宣や下野の宇都宮国綱（くにとも）とともに2万3000の軍勢で武蔵忍城の攻撃に向かった。忍城の城主・成田氏は、関東管領山内上杉家に属していたが、河越城の戦いで山内上杉憲政が北条氏綱に敗れて以来、北条に従っていた。このとき、当主の成田氏長の弟の泰親らとともに小田原城に籠城していたため、城代として氏長の従弟・成田長親が2000余の氏とともに守っていた。

豊臣勢は6月5日から攻勢を始めるが、忍城は周囲を沼や深田で囲まれ、「忍の浮き城」と称された天然の要害である。三成は豊臣秀吉の指示に従って、忍城を水攻めすることとした。丸墓山に本陣を置いた三成は城の周囲に堤を築き、利根川と荒川の水を引く。しかし、大雨による氾濫で堤が崩壊し、寄せ手の豊臣勢270余人が溺死したという。三成による水攻めは失敗に終わった。

7月5日、本城の小田原城が開城したあとも、忍城では籠城が続けられたが、7月16日、当主・氏長の説得に応じて長親は開城する。氏長は一命を助けられ、蒲生氏郷に預けられたあと、下野鳥山城3万7000石を与えられた。

5. 小田原城の開城と戦国時代の終焉

各地にある小田原側の支城ほとんどが陥落したのを待って、機をみるに敏な秀吉は黒田孝高（よししたか。官兵衛）を使者として小田原城内に派遣し、講和交渉にあたらせた。

「降参すれば、武蔵・相模の2カ国を安堵しよう」と孝高は具体的な提案をした。これに対し氏政は、「これまで数カ国を領していた者が、わずか2カ国に減らされるくらいなら、城を枕に討ち死にする」とまったく取り合わなかったという。

孝高は諦めることなく、何度も城内に足を運び、また、城中に酒と肴を贈ったり、自ら無刀・片衣袴（かたぎぬばかま。武士の正装）のいでたちで氏政・氏直と直談判におよび、講和の件を承諾させたといわれる。その折、北条父子から官兵衛孝高に対し、日本刀と鎌倉幕府の史書『吾妻鏡』が贈られたと資料に残っている。

こうして北条氏は最期を迎えた。北条軍の将・氏政に欠けていたのは、戦の仕方の変化に対する認識であったと小和田哲男氏は次のように述べておられる。

「北条氏は、滅亡の段階まで兵農分離は進んでおらず、兵農未分離であった。氏政がかつて籠城戦法によって撃退した上杉謙信や武田信玄の軍勢も兵農未分離で、敵地での長期の滞陣は不可能だったため、城攻め半ばで兵を引いたわけであるが、秀吉はちがっていた。兵農分離がすすみ、何カ月にもわたっても滞陣が可能だったわけである」。

「秀吉軍は21万とも22万ともいわれる大軍で、しかも農繁期になったからといっても兵をもどす必要がない軍勢であった。氏政には、そうした変化がみえていなかったも

のと思われる」。

氏直は7月5日、降伏した。翌6日、家康の家臣・榊原康政と、秀吉側から脇坂安治および片桐直盛の両名が小田原城に入って城を受け取り、城兵は城を出た。

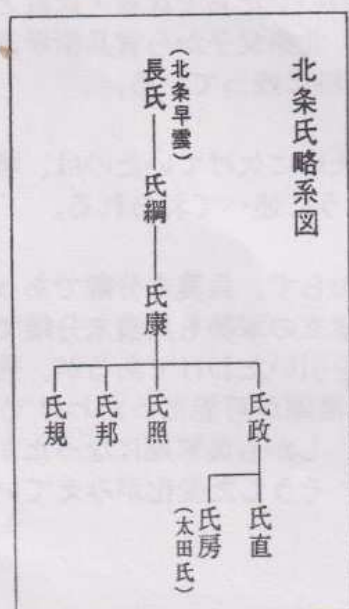
氏直は一身に罪を背負い、死を覚悟していた。しかし、氏直は家康の婿という理由で助命され、高野山に追放されたが、翌年当地で病死した。責任は父の氏政、叔父の氏照と老臣の大道寺政繁・松田憲秀に負わされ、4名は切腹を命じられた。首は京都に送られ、一条房橋にさらされた。

秀吉は旧北条領を家康に与えて江戸に移封し、家康の旧領、駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の5カ国を収公した。それから10年余、家康は天下人として江戸に幕府を開くことになる。

こうして、5代100年にわたって関東諸家の領地を切り取り、同地を治めてきた戦国大名・北条氏は滅亡した。戦国大名という権力が、この世から姿を消した瞬間でもあった。小田原城開城の歴史上の意味はきわめて大きい。

〈参 考〉

『関東の名城』	西ヶ谷恭弘	秋田書店	1973年
『日本の歴史 15 織豊政権と江戸幕府』	池上裕子	講談社	2002年
『県史 14 神奈川県』	神崎彰利ほか	山川出版社	1996年
『県史 10 群馬県』	西垣晴次ほか	山川出版社	1997年
『県史 13 東京都』	竹内 誠ほか	山川出版社	2003年
『戦争の日本史 15 秀吉の天下統一戦争』	小和田哲男	吉川弘文館	2006年
『名城と合戦の日本史』	小和田哲男	新潮社	2007年
『戦国合戦史事典』	小和田泰経	新紀元社	2010年



北条氏直 氏政の長男。家康の二女督姫を妻とし、その縁で小田原落城後助命されたが、まもなく死去。

城を歩く会を省みて

大森 モト子

もうはや20周年を迎えてしまったのかと私自身感慨無量でございます。

そもそも大森拓二元会長が定年を機に若い時から研究をし、自分の趣味でもあった城の会を平成6年に立ち上げました。もちろん私も何も分からないままついて歩きました。歩いた回数は200回を超えていることでしょう。1回1回真剣に歩き、目に心に焼き付けていけば、今ごろ城の大家になっていることでしょうに、残念ながら私にはその才覚がないようです。今思えば、ただ物見遊山気分で歩いていた気がします。今になって後悔先に立たずというところです。これからはもう歩けないかと思えばちょっと寂しい気がします。

しかし、お友だちはたくさんできました。最初のころからの方々も今も幾人かいらっしやるようです。城の会の帰りに幾人かで一杯飲んで反省会をする、これもまた楽しいことでした。旗持ちさんの大室賀一さん、遠藤正彦さん、その他の役員さんたち、みなさんのご協力により、あのような大きな立派な城の会になったことと思います。心から感謝申し上げます。さらに、山岸弘明さん、保科隆夫さん、ともに素晴らしい後継者に恵まれ、大森元会長も思い残すことはないと思います。かえって、大森拓二の集大成として20年記念出版誌のこの本に残しておきたいと思います。このたび「20年記念誌」にスペースをいただけるとのこと、誠に光栄に存じます。厚くお礼申し上げます。

大森元会長と私は、この20年記念式典で皆様とお別れでございます。長い間皆々さま本当にありがとうございました。そして城の会のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

城を歩く会 20周年を迎えるにあたり

田辺 泰夫・茂子

「城を歩く会」は創立 20 周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。

私たちが入会したのは、九品仏駅北側の浄真寺参道で「5周年記念誌」を配布している時でもう 15 年前になり、時は早く過ぎ去るものです。

各地の城址に案内され、講師の説明を受けますと一層深く理解できるし、また澄んだ空気を吸って気分転換できて、今まで全く経験したことのない新鮮なものを感じました。このようにして、私たちはほぼ毎回参加しました。

しかし、会計や雑用のほとんどをされていた方が急に病気に倒れ、病院に見舞いに行きましたら「ピンチヒッターでやってくれ」といわれ、短期間のお手伝いだと早合点して「いいですよ」の二つ返事で受けたが最後、それからは呑気に月例会に参加できなくなったと、遅まきながら気が付きました。それからもう 10 年近くが過ぎたのですから、まさしく光陰矢の如しです。

お手伝いの仕事内容は、早くいえば観光会社の仕事で、結構パソコンを使う機会が多く、お陰で私の加齢を遅くする「良薬」になったのではと思います。

当時は会員数は多くて 35 名ほど、月例会参加者数は大体 30 名で、時々 26 名になり赤字となりました。でも毎回の会計整理は、鉛筆なめなめできるくらいの小額で簡単に済みました。

しかし、会計担当となりますと別な役目が出てきます。月例会の採算が赤字になりはしないかとか、会の残金は幾らあるかとか、会社経営のように「金を心配する生活」が始まり、それが最後まで続きました。

勝手に「会費を安く、楽しい会に」を自分の心の中の“会のモットー”として持ってきましたが、時には想定外の費用が突発（例えば、松阪城に向かって走行中のバスの中で追加会費をお願いする）失敗もありました。

費用節減とともに会員数が多くなったので計画に落ち度がないようにしなければならず、下見・文章作成・印刷・連絡網立ち上げ・事故防止などのノウハウを蓄積してきたと思います。特に資料は簡単に作成できず、また外部から講師を招いたらえらいことです。その他、バス会社・弁当屋・保険会社の選定など、信用できる相手との関係もできたかと思っています。

収入は会員数が除々に増加し、最近では月例会参加者数はいつも採算点を超えるようになり、会の財政も安定してきました。よって年間スケジュールも、日帰りバスツアー2回・一泊ツアーを1回組み込めるようになり、関東平野や遠方の城址はほぼ洩れなく探訪できるようになりました。これは第一に会の皆さまのご協力あつてのことと確信しています。率直にいつて私の第二の人生で、こんな楽しくて有意義な“思い出作り”ができると全く思っていませんでした。

しかし、いつの間にか「末期高齢者」になり、また視力が衰えてきましたので、去る7月例会を以ってお世話係りから身を引いて、若い方をお願いすることにしました。お手伝い中はご満足いただけなかった点が多々あったと思いますが、ご容赦願ひ女房ともども皆さまに心より感謝申し上げます。

20周年記念に寄せての感想文を書くべきところ、併せて私たちのあいさつも述べさせていただきます。今後皆さまのご健勝をお祈りし、会のますますの発展を祈ります。

笑顔いっぱいでお手伝い

菅原 満利子

運営委員としてお手伝いさせていただくようになり、もう5年が経ちました。

この5年間の活動は、バラエティーに富んでいて、城・城跡のみならず神社仏閣・サッポロビール工場・警視庁・笛田醤油・飴工房・世界遺産の富岡製糸場などを訪問、見学しました。諸先生方の積極的な意欲・努力のお陰でさまざまなことを知り、世界が広がったような気がいたします。

中でも印象深かったのは、2013年12月6日の皇居と警視庁の見学でした。事前に住所・氏名・誕生日の提出の条件があり、その作業に手間取りましたが、その甲斐があって当日、偶然にも両陛下のインドからのご帰国を桜田門でお迎えすることができました。思わず大声で「お帰りなさい〜い」と叫ぶと、両陛下は私たちに笑顔で手を振ってくださり感激いたしました。

2014年半ばに唐津旅行に行った際、夫や仲間を説き伏せ名護屋城跡を見学しました。想像を遥かに超える壮大な城跡でした。此処彼処で大森先生や山岸先生、保科先生はどんな資料を作られ、どのようにしてご説明をなさるのだろうと思い巡らしながら見学いたしました。名護屋城は1591年に秀吉が朝鮮半島・中国大陸出兵の拠点として築いた城で、当時は五層七階の天守閣・櫓・書院・数寄屋などがそびえ、能舞台や茶室を備え雄大な美観は大坂城と並び称されたそうです。1598年秀吉の死後、城は解体され大手門は伊達政宗が仙台（青葉）城へ移築し、他のほとんどは唐津城へ移築したそうです。

城跡の大手口から登城坂を登り、東出丸→三の丸→本丸大手門→本丸へ上がりました。見晴らしの良い本丸の広さは東西130m、南北125mで、今は何もありませんが、西北の隅に天守があったそうです。安土桃山時代の貴重な技術を示す石垣（野面積み）はたくさん残っていました。途中、崩れた石垣が何ヵ所もありましたが、これは「島原の乱」の時にキリシタンが立て籠もるのを防ぐためにわざと壊したそうです。遠方ゆえに、この会での見学はとても無理だと思い、残念でなりません。

会計担当の田辺さんご夫婦が7月いっぱいでご引退なさいました。バス研修・一泊研修時は宿、切符、弁当など極め細かく手配してくださり、また、私の集金ミスなどもおらかに許してくださり、温かいお人柄と優しい口調でずいぶんと助けていただきました。長い間お疲れさまでございました。

私はしばらくは笑顔いっぱいでお手伝いさせていただきたいと思います。どうぞよろしくご指導くださいますようお願いいたします。

大森先生のことなど

遠藤 正彦

私が「城を歩く会」に参加するようになって、もう10年になるだろうか。

ある日、すでに会員だった徳政さん、大室さんとゴルフに出かけ、そのときこの会に誘われた。城にはほとんど興味のなかった私だが、ひやかし半分で顔を出してみた。そこで、たちまちこの会のとりこになった。なぜかそこに大森先生がいたからだ。

目の前に立って説明しているその人は、私がいままで出会ったことのないような人だった。真面目なのだがどこかとぼけている。アカデミックだがユーモアがあり素朴でもある。

城への情熱は半端でない。亡き私の父（先生だった）とも、ほとんどそっくりとっていい風貌、雰囲気だ。

先生は、20代のころから、全国の城の発掘など、城ひと筋で生きてこられた方だ。私はそれまで、その道ひと筋という方と、親しく接する機会がなかった。そうした私に、先生はじつに魅力的で新鮮であったのだ。

こうして私は、先生と会うために、せつせと「城を歩く会」に出かけるようになった。そうして、先生の「見えるモノは見ない、見えないモノを見る」などという言葉に、そうだそうだと拍手をしていた。

先生の思い出といえば、なぜか胸があま酸っぱくなったりする。先生の資料は、小項目に一行しゃれみたいなのが付いていたりしたが、これを考えている先生の顔を思い浮かべると楽しかった。出発の時点で、ときどき宿題を出されたりしたが、その時先生の“いじめっ子”みたいな顔も忘れられない。

しかしなによりも、一泊旅行、二次会での先生は、ほんとうに楽しそうだった。お酒をおいしそうに飲まれ、お好きな「黒田節」を熱唱され、お決まりの「古城」を全員で合唱し……。城ひと筋の先生のような人が、こうした席の中心に座っているのは実にいいものだ、と私はいつも思っていた。

そして、日常生活ではあまり能力のなさそうな？先生を一貫して支えてこられたのは、誰が見てもモト子夫人だ。社交ダンスをなされ、ワインがお好きな夫人は、先生とちょっと肌合いがちがう素敵な方。でも、これほど息の合ったご夫婦をあまり見たことがない。「城を歩く会」でも先生のいるところモト子夫人あり、2人で1人。飲まれると「モト子なしには生きていけない」と堂々とおっしゃる先生に、いつもあっけに取られなが

らも感動していた。

「城を歩く会」をつくり、支えてこられたのは先生だが、陰の功労者はモト子夫人、と言ってもいいのではないだろうか。

「城を歩く会」も20年を迎えた。大森先生がつくり育ててこられたこの会の良さは、大世帯であるにもかかわらず手作りの雰囲気があること、そこからくる家族的な素朴さ、といったものではないだろうか。こうした良さを残していけるよう、すこしでも力になれば、と思っている。

思いも掛けないご縁

大高 純子

2000年に入会し、国宝、重文、復元、模疑、廃城など、さまざまな形態の城に案内していただきました。

特に廃城の見学は、木々の生い茂る中の崩落し苔むした石垣に、栄枯盛衰の日々を偲び、思いを馳せるのは、城歩きの醍醐味だと思います。

先日、わが家の菩提寺に新しい住職が就任、自坊は「榊原家」の代々の奥方の菩提寺です。榊原家は、館林→白河→姫路→村上→姫路→高田と移封され、幕末には一部の藩士が会津戦争にも参戦しています。姫路から高田に移ったのは、藩主が吉原の花魁高尾を三千両で身請けしたのが原因ですが、この高尾の墓もあるのです。そして、偶然にも私は榊原家の村上以外の四城を見学していたのです。

この会で勉強したことが話題になり、歴史を学ぶ楽しさを実感しています。これからも皆さまに歴史だけでなくさまざまなことを教えていただきたいと思います。

参加できることを誇りとして

大室 賀一

大森名誉会長が 700 以上のお城を歩かれた実績と経験を活かされて、城を歩く会を立ち上げてから 20 年の成人式を迎えられ、会員の 1 人として素晴らしい会に、入会させていただいたことを感謝申し上げます。

私が素晴らしい「城を歩く会」に参加して、毎月定例会で先生方の詳しい資料をいただき、現地で親切丁寧な説明を受け、毎回定例会が待ち遠しく楽しみに、出席させていただいておりました。入会当初より先輩会員の皆さまから、青山三井クラブで 10 周年記念行事が盛大に行われたと、羨ましい話を何回も聞かされておりました。

平成 9 年 8 月に 15 周年記念行事が、虎ノ門電気ビル会議室で記念講演、同レストラン立山でお祝いの宴が開催され、はじめて晴れがましい記念の会合に多くの先輩皆さまと一緒に出席させていただく機会に恵まれ、私もやっと会の一員になれたと、当時のことが鮮明に思い出されます。大森名誉会長から 15 年の歩みを伺い、あれから早 5 年の月日が経過し、現在も参加できることを誇りに思っております。他の同様の会に出席しても、これだけ内容が充実し、参加者の勤勉で熱心な会は、私の知る限りないと思っております。

大森先生の現地説明で、城とは敵に攻め込まれた防御拠点とともに攻撃拠点で、食糧武器備蓄場所で君主の住居でもあり、政治や情報の拠点でもあり、攻め込まれにくいために中世は山城が多く、小高い場所に造られた平山城、城の縄張りは誠に重要で、堀・空堀・土塁や塀で囲んだり柵形を作ったりし、城内各郭に行く道も直線ではなく工夫がされ、城郭を観察するには両目で見ずに、片目をつぶって見ると、さらによく見え理解できると再三ご指摘を受けて、見えずに両目をつぶって歩きつまずいた先輩もおり、城跡は伝承だけでなく、遺構があり文献でははっきり残っていることだと伺ったことも、最近のこのように思い出されます。

東アジアの南北に伸びた小さな列島日本、それでも各地の豪族が、豊かな生活を求め敵地へ支配拡大を求め、戦いを繰広げ土地を奪い、指揮官の権威を拡大していき、戦国時代の後半からポルトガルから火縄銃が伝来されたことにより、防御拠点の城造りも対応が変化し、国内が安定した江戸時代のお城は平城で水堀、石垣を配し、見事な天守閣を作り権威の象徴として、築城されるようになったが、現存天守閣は 12 の城しか残ってなく貴重な存在であります。今後大切に保存をして後世に残してゆかねばなりません。

世界の各国でも各地に原住民が住み、争いが行われながら統一され、16 世紀にはヨーロッパの国々が、海外に進出して植民地政策に乗り出し、東南アジアを初め世界各国に植民地化をし、された国民は大変な苦勞があったことでしょう。そしてさらなる大戦を

経て、積極的な植民地政策も終わり、世界各国が独立統一され、米国とソ連の台頭で冷戦時代が続き、冷戦後の近代世界平和を、だれもが期待して願っておりますが、21世紀に入った現在も地球上では、領土・民族・宗教・資源・貧富格差などで、各地域で紛争が起っており悲しいことです。

わが国民族は大和魂で公私を明確にし、だれもが強い意志を持ち力強く一生懸命に働く姿と、相手方へ温かく愛情深く優しさや思い遣りがDNAに受け継がれて、長い封建時代の中で、武士道という精神が定着されたといわれます。世界人口は今後も増加が予想され、現在70億人、国連加盟国193カ国、世界の言語は6000と推定され、話す言葉は違いますが地球上で生きている同じ人間同士、各国の国益や欲望だけが最優先されずに、争いのない世界平和を願いたいものです。

日本は治安も良く世界で一番安全な国と、いわれた時期もありましたが、最近では毎日事件事故が多発し、人の大切な命が簡単に失われる報道も後を絶たず、誠に残念でなりません。明治維新の立役者は各藩の武士でありました。近代維新のために努力された大和魂武士道精神を、国民全員が再度思い起こし再認識し、困っている人たちは「ほっとけない」モラルの高い日本人、唯一原爆被爆国のわが国民全員が、今こそ声を上げて戦争の悲惨さを世界に訴え、国会議員は愛する国造りを行うとともに、真の世界平和のためにリーダーシップを取って貢献できるような、大仕事を期待したいと思います。

近年わが国の梅雨は各地域に集中豪雨をもたらし、河川の氾濫洪水や土砂災害など被害が毎年発生し、つい最近も広島市北部で大規模な災害が発生いたしました。世界的にもゲリラ豪雨・ハリケーンや干ばつに見舞われる国々も多くあり、陸地の3倍もあるといわれる、海洋でも海流の蛇行や海水温度上昇で、陸海地球上で生態系の変化が起こっているといわれ、異常気象温暖化は自然環境破壊が原因ともいわれ、既に何年も経過しております。世界の日本を含めた多くの先進国が、より豊かな生活を求めて、発展途上国領土の開発を、積極的に無計画で行ったことも原因の一つともいわれ、最早地球規模で考えていかなければなりません。

本年は第22回冬季ソチオリンピックが開催され、日本選手の大活躍で勇気と希望と感動をもらいました。ワールドカップ・ブラジル大会開催は、大変盛り上がりましたが、日本は残念にも予選で敗退し誠に残念でした。サッカー王国地元ブラジル準決勝で、ドイツに衝撃的な大敗を喫し、開催国のプレッシャーがあったのでしょうか。国の代表チーム選手が母国の声援を受けて戦うスポーツは、勝者も敗者も技と力を精一杯ぶつけ出しきり、終了後は美しい汗と涙で、勝者も敗者もお互いの健闘を称え合い何時も感動させられるシーンです。

スポーツを通して如何なる差別を伴うこともなく、友情と連帯とフェアプレーの精神を持って相互理解を行い、より良い世界を作ることに貢献するのが、オリンピックの精神であり、スポーツ交流を通して世界平和の実現は確実にでき、スポーツ交流からも

大いに期待したい。世界平和や地球上の温暖化・生態系変化などの問題は、多くのだれもが願い望んでおりますが、思うほど簡単に解決できず、奇跡に近いくらい難しいことです。人それぞれ考えや思いはありますが、何を行うにも自分の健康が一番です。

わが国は少子高齢化が進み、人口減少が指摘されております。医療技術の向上で寿命は延び高齢者数は確実に増加します。六代目三遊亭圓窓師匠は、高齢者が一番の健康法は、落語を聞いて内容を理解し大いに笑うことであり、会話することだといっております。圓窓師匠は各地域で高齢者などを集めて落語を教える勉強会を開催し、多くの高齢者が集り落語を覚えて人前で話す、はつらつとした高齢者が増加していると聴きます。

高齢者は「生涯学習」でなく「笑涯学習」と指摘しております。ある地域では「教育」は「今日行く」場所を予定し、必ずそこに出掛ける。行った場所で自分の意志を言葉に出して相手に伝え、そして相手の方の話を伺い常に楽しい会話を行い、一日楽しく過ごして家に戻る。このことを毎日繰り返し実施することが健康の秘訣で、「今日何処へ行く」が合言葉で挨拶です。

人生は毎年年齢を重ねていきます。体力の衰えは止めることはできませんが、自分の考えや意志やケアの努力を行うことで、急激な衰えを軽減することができるといわれ、いろいろな健康法があると思いますが、健康なくして何もできません。自分に合ったできる健康法を毎日欠かさず継続して行うことが一番です。

城を歩く会定例会に参加し、素晴らしい仲間に出会い、先生から学ぶことは心身ともに最高の健康法だと思います。会員の皆さまとご一緒にお互い健康で生き生き元気に、さらなる25周年を目指して頑張りたく、今後ともよろしくお願い申し上げます。

富岡製糸場の思い出したことども

八谷 敦子

この会で今年6月に群馬県の富岡製糸場を見学する機会に恵まれた。ほどなく世界遺産にも登録されると聞いていたので興味をもって訪ねた。母の実家も養蚕業をしていたので久しぶりにお蚕様のことを思い出していた。

富岡製糸場の開業は今から140年前（明治5年）に絹糸の輸出を目指し、国をあげての事業であつたと聞く。当時ヨーロッパの製糸産業は壊滅状態であつたらしい。日本にとってはチャンス到来、全国展開で養蚕に乗り出していったという。そこで群馬県の富岡の地が選ばれて工場が建てられた。フランスから技術者11名に高給できてもらっている。建築、機械、仕事にと先進国の文化、技術を学ばせてもらった。正に文明開花だったと思う。製糸工場も女工さんたちの宿舎も明るい建物であつた。特に宿舎は白と水色のペンキが塗られ、手すりの付いた外廊下の風情は、ヨーロッパの息のするような超モダン建築であつた。今回、内部の見学ができなかったのは真に残念でならないが、ここでの生活は女工さんにとっても結構幸せだったのではと思う。

同じ明治5年に、長野県の諏訪の岡谷にも製糸工場が建てられている。官営の模範工場の一つとして造られ、目覚まし発展をとげたと聞く。工場の機械に関しては、群馬の富岡はフラン式、長野の岡谷ではイタリア式が導入されている。岡谷は製品をアメリカに輸出していたという。

ところが、模範工場であつたはずの岡谷に、なぜ、あの悲しい話があるのだろうか、と考えてしまう。『岡谷女工哀史—あゝ野麦峠』、小説や映画化もされて、多くの一般の人たちにもこの悲しい話しが知られるようになったが、これでは富岡工場と比べると天と地ほどの感があるように思えてならない。富岡が特別なのか、岡谷が特別なのか、他にも製糸工場は幾つもあつたはずだが、それらはどうだったのだろうか。

私は強制疎開のために小学一年半から中学一年までの六年間を、東京から南信州の天竜川添いの村へ、母の実家の二階へ家族と一緒に移り住むことになった。当時の村のほとんどの畑は桑が植えられており、どこの家でも蚕を飼っていた。母の実家でも春蚕（はるご）、夏蚕、秋蚕の年3回、たくさんの蚕を飼っていた。だが、母の実家は「蚕の種屋（たねや）」であつた。種屋から各家に蚕を渡し育ててもらうから、種屋はそれなりに力を持っていたようだ。種屋は多分曾祖父の代からだと思われるが、曾祖父も祖父も絹の着物以外着ず、木綿の着物には袖を通さなかった人だったと聞いている。

当時、祖父はまだ健在であつた。一つ屋根の下で生活をしていても、子供の私は祖父には親しく近づくことができなかつた。背の高い口髭の似合うハンサムな人だったが、近寄り難い人だった。今になって思うことは、道楽にまかせて趣味をたくさん持ってい

た祖父だったらしいので、出会いができていたらと大変残念に思う。

「蚕の種屋」とは、紙に産みつけられた小さな小さな卵を幼虫にかえらせて、その幼虫を各家に渡し育ててもらふ仕事である。幼虫の蚕は非常にデリケートで一歩間違えれば全滅しかねない。雑菌や温度、温度の変化に弱く、細心の注意が必要となる。全国のどこの地域でもそうだと思うが、養蚕の家は必ず「お蚕様」と呼ぶ。呼び捨てにはしない。それほど大切なものなのだと思う。蚕はすなわちお金だからなのだろうと思う。

この家は土蔵造りになっているので密封性がある。蚕の幼子を育てるために普段は座敷として使われている部屋二つの畳を上げ、部屋の中を和紙で隈なく目張りをしてしまう。それから、おじ・おば夫婦は顔を覆い、ホルマリンで消毒をする。部屋の外にいても目がチカチカして涙が出てくる。ずい分すごい消毒なのだと子供心に思った。年月が流れて、夫婦はともに50代でガンで亡くなった。あの強い消毒のせいに違いないとお婆の娘と話すことがある。

蚕も成長してくると二階の蚕室に移る。蚕の桑を食べる音がシャク、シャクとうるさいほどだ。細長い顔をしている蚕の頭をチョンとたたくと、一瞬、つるりとした丸い頭になる。それが面白くて頭をたたいてやった。蚕はいい迷惑だったと思う。大人になった蚕はメスとオスに選別される。そのために大勢の女衆たちがやってくる。両手に一匹ずつ蚕を持ち内側にひっくり返して見分ける。左右の手がまるで機械のように素早く動く。傍で見ていてすごいなーと思い、見とれた。種屋なのでメスは大切なのだ、普通の家では選別は必要ないのではと思う。白い体の蚕が次第に黄色っぽく透き通ってくると、「まゆ」の準備に入り「まゆ」になる。

硬くなった「まゆ」が部屋いっぱい小山のように積まれると、これから「まゆ」の選別となる。子供たちも駆り出されて手伝われる。「猫の手も借りたい」時である。両の手に一つずつ「まゆ」を持って耳元で交互に振る。するとカサカサと音がする。音のするのは中で生きていること、音無しは死んでいる。音がしているのは選別されたメスのまゆであるから大切なのだ。音無しは絹糸用としてまわされる。そして元気な「まゆ」は出荷される。

蚕も成長してくるとたくさんの桑が必要となる。一家総出で桑取りに追われる忙しい忙しい日が続く。何しろ生きもの相手の養蚕の仕事である。重労働であった。だが、子供たちにとってこの桑の実（この地では「ツナミ」と呼ぶ）はうれしい食べ物であった。真夏になると2cmほどの細長い実が赤から次第に黒に近い紫色になってくる。甘くておいしい、そして沢山なっている。どこの畑に入ってもだれにも何もいわれない。大手を振って食べられる。これを食べると口のまわり、口の中まで紫色に染まってしまう。口を拭いても落ちない。子供たちはすごい顔になっているお互いを見て、笑いころげたものだった。そんな懐かしい桑の畑も今はリンゴやカキの木に変わり、蚕の姿もなくなった。ナイロンの出現のために。

蚕と並行するようにこの地では番傘作りも盛んで、多くの家で作られていた。石垣にいっぱい干された傘は花が咲いたようにきれいだった。それも洋傘に押され、あっという間に消えていった。ナイロンに押された蚕と同じように。

富岡製糸場見学から昔の田舎の生活を懐かしく思い出してしまった。貧しいとも感ぜずに幸せな田舎の暮らしだったことに感謝したい。今この村からの出身者の会が「東京ふる里会」として一年置きに開催されている。ご縁が切れずに役員のお仲間に入れていただき、お手伝いをさせてもらっている。

余談になりますが、最近、堀端近くの東京会館に出掛けた折のこと、一階の喫茶室の前に赤と白のボケの花がいっぱい大きく活けられていた。近づいてみるとそれは蚕の「まゆ」で作られていた。手造りの作品で何万個もの花が咲いていた。作品の傍に置かれている「まゆ」を見たら普通の大きさの半分くらいしかなく、小さくてほんとうに可愛い。「ひめまゆ」というらしい。今、こんな「まゆ」も造られていることに驚いてしまった。一つだけ頂戴して私はフィルムケースの中に入れて大切にしている。

城を歩く会 20 周年記念誌に寄せて

近久 芳彦

「城を歩く会」が来年発足して 20 周年を迎えることに際し、会のメンバーの一員として、会の創始者であられる大森先生、これまで会を支えてこられた幹部役員の方々、現役の役員の方々にお祝いを申し上げますと同時に、熱いボランティア精神で会を導いてこられた熱意に対して厚くお礼申し上げます次第です。

私がこの会に参加したのは 13、14 年前でした。この会の創成期の幹部役員の方々がおられた時期で、当時の役員でメンバーとて今なお在籍されている方は数名になりました。今ではメンバーも当時から比べてかなり増えて新幹部役員のもと今日の盛隆を迎えることになり、誠にご同慶の至りです。会社のような利益共同社会ではないが、歴史を趣味として共有する親睦共同体ではあります。その運営に当たっては大森先生はじめ幹部役員の方々も実務、財務・・・その他でイロイロとご苦勞されていることも漏れ聞いておりました。

この会が 20 周年という長く続きましたのも幹部役員とそれを支えるボランティア・メンバーの熱意とご尽力によるもので、これがある限り代替わりする幹部役員のもと、これから先 30 年、40 年、50 年… 100 年…と続くことは可能でしょうし、そうであってほしいものです。

この会が分裂せず長続きする理由を私なりに考えますと、

1. 先ず、創始者の大森先生の会への熱意と忍耐です。企業の創業者と同じく、事を始めるには核になる人の熱意がないと人は集りません。そしてそれを維持する忍耐です。大森先生にはこれらがあったからこそ今日の盛隆の礎ができたのだと思います。
2. 歴史を城という切り口をコンセプトにして、単に建造物の城そのものに留まらず、そこから時代、社会、人間模様、事件、建造物、公共事業と・・・山岸先生、保科先生、他の講師の方々が多様な角度からアプローチして歴史に彩りを加えて説明されている。中・高校の無味乾燥の受験歴史講義とは雲泥の差があります。
3. 会則がなく、メンバーは ”In and Out”、行事の参加も全く”自由”である。とかく、この種の会は、幹部役員が会則だ、アータ、コウダと色々な制約を設けたがる傾向になるがこの会にはそれが全くなく、気軽に参加できるのが何とも居心地がよいのです。
4. 費用が安く楽しいこと。朝日、読売・・・新聞社主催、その他のイベント会社の歴史案内講座では1回 1万円は掛かるでしょう。ボランティア講師のおかげで歴史を学び、かつメンバーと知り合いになり雑談、飲み会、旅行と楽しみがあるのですから、参加者がふえるのは当然です。

この活動はボランティア・メンバーの皆さまと幹部役員兼講師の普段の努力と奉仕の精神があって成り立つものでして、20周年の節目に当たり21周年に向けてわれわれ一般メンバーは常に感謝の気持ちを持って会の行事に参加するべきものだと思います。

役員幹部の皆様そして、ボランティア活動をされている皆様、今後ともよろしく会をお導きお願い申し上げます。

片目をつぶっても・・・

佐藤 源治

城を歩く会 20周年おめでとうございます。

元大森会長が中心になり発足し、現在の山岸会長に引き継がれ20年になり本当に素晴らしい会だと思います。私は入会してまだ8年です。ただ健康のためにと軽い気持ちで参加しましたが、歴史を学び、ただ城を見て歩くだけでなく、空堀りや石垣の跡だったり、多少なりと片目をつぶって昔を考えることもできるようになりました。そして今ではNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』も毎週楽しみになるほどになりました。これもみな、城を歩く会のおかげだと感謝しています。それともう一つ会員の皆さんの元気な顔を拝見するのが楽しみです。

これからも30周年に向かって運営委員会の方々に頑張っていただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。

20周年記念に寄せて

今村 升二

「城を歩く会」が平成6年に発足以来、今年で20周年を迎えるにあたって心からお祝いを申し上げます。このような会が20年も続くということは全く珍しいことだと皆さん思っていることでしょう。私も、平成7年6月に横浜の小机城見学が第1回目で、以来今年で足掛け20年となりよくもまあ続いたものだと感心しております。大勢の方々と交流を重ねながら、国宝4城を含め数えきれないほどの城を見て歩きました。思い起こせばすべて走馬灯のごとくよみがえってきます。

小雨のそぼ降るある日のことです。急な坂道をドンドン登って行く後を、例によって最後尾になりながらついて行った時のこと、急に息切れがし目まいさえ感じ一瞬立ち止ってしまいました。やはり若い人たちとは同行できないのではないか、もう退会した方がよいのではないか、など考えたこともあつた。

長い間には、一人去り二人辞め、さらには亡くなられた方もあり（数えてみればもう13人ぐらい）自分より古い人はもう2～3人くらいになってしまった。寂しい限りである。

今年は創立20周年記念行事として10月には関西方面（大坂城、姫路城他）への一泊見学会が行われた。姫路城は平成の大修理を終えて見応えがあつが、大天守の見学ができなかったのが誠に残念である。大坂城はともかくとして竹田城はぜひとも見学したいと思っていた。「天空の城」と宣伝され全国屈指の山城遺構が実際に見られたのだ。最近では体力の衰えと併せて眼の支障が甚だしくて、皆さまと行動をともにできるか、いささか心配ではあるが20周年記念として頑張っていきたい。

まだまだ見学していない城は多数あるが、当会がいつまでも続きどんどん踏破していかれんことを祈念するとともに、役員の皆様方には常々お世話になり厚く感謝申し上げます。

城を歩く会と私

中川 幸子

城を歩く会の存在を知ったのは平成7年のことです。古文書勉強会の仲間が世田谷区の広報紙を見て江戸城見学会に参加し、「今までなにげなく目にしていた城というものが違って見えてきたよ」といった言葉に6～7人が興味を持ち、4月20日の「片倉城・滝山城見学会」に参加することになりました。いずれも後北条氏時代の城だそうで、世田谷にもその城跡があり、鷲草伝説が語られています。

しかし、現在はこのような所に城などと呼べる建造物があったなどとは、とても想像しにくくなっています。片倉城は後北条式築城の特色がよく表れているということですから「行って見て来なければ！」というヤジウマ根性いっぱい仲間がワイワイとハイキングに行く気分で参加したのが本音でした。

大森先生の説明で「櫓台」「帯郭」「物見台」「土塁」「空堀」「横矢」「馬出」「虎口」の城の用語を耳にするのも新鮮でした。出入口である虎口にも「食い違い虎口」「枡形虎口」と二種類の防備がある戦のための建造物が城だったのかと、山の中の城跡を目にして、今までの松の緑に映える天守閣や櫓のある美しくも威厳のある姿を持つのが城だというイメージが崩れました。戦乱の世の城とは戦う設備だけの建造物であつたのです。古城跡は荒々しく冷え冷えとして寂しい。芭蕉が俳句で「・・・つわもの共の夢の跡」と吟じた光景も場所は違いますが、このような感覚を味わったのでしょうか。

城を歩く会は発展しつつ20年を迎えようとしています。定例会に集る人々の顔も大分替わりました。私どもヤジウマ参加の仲間も半分はすでに異世界に移住してしまい、残りも足が・・・腰が・・・とのことで気がつけば私一人の参加で幾年過ぎたのでしょうか。けれども次々と多くの人と出会い、親しくしていただいて城についての知識を学ぶとともに、人生の知恵、暮らしのヒントなど学ばせていただきました。まだまだ多くの人々との出会いがあるでしょう。まずは健康に注意して足腰をきたえ？定例会に参加できますよう、準備に励み、ずっと会員でありたいと願っています。

私の城歩き

山崎 桂子

「城を歩く会」創立 20 周年おめでとうございます。敬愛する大森先生ご夫妻、慈愛溢れる山岸先生、含蓄溢れる保科先生、誠意溢れる榎本先生の多年にわたるご指導と幹事の皆様のお世話に心より感謝し、お礼申し上げます。会員もいや増し溢れる現状は嬉しい限りです。さらなるご発展を願っております。

○成人式迎えし城を歩く会 学び若やぎ集う幸い

当会に入会したのは 2000 年、折しも露のとうも頭をもたげる 3 月、関宿城でした。利根川と江戸川の分岐点の湿地に模擬の天守がヌボツとつっ立ち枯れ葦の穂波が春風に揺れていた。にもかかわらず黄昏迫る頃、城の磁力に引き寄せられた私が居た。わずかに残る空堀・土塁、古地図を頼りに城の在り様を掘り起し、歴史、文化に分け入る。いわば謎解きの妙味が私を捉えた。

ほどなくして、城とは軍事拠点であるが、その多くは戦いの果てに散った無念の城だと知る。いつしか、金のチャラブレスレットを数珠にかえ、般若心経、お賽銭の三点セットを懐中する。寺育ち DNA の宿命か。城跡に祀る神社・仏閣には必ず手を合わせる。その際、お願いごとなぞ厚かましい。ただ「大変でしたね」と滅びし荒魂（あらたま）を鎮めるのが私流の正しい城の歩き方だ。

勝った時は良い。負けた時はどうするか。三十六計逃げるに如かず。畢竟（ひっきょう）、退路に注目する。「どーだー。高麗門だー。大した門だろうがー」スポットを浴び、威風堂々豪語する。すると城の片隅から「埋門（うずみもん）をお忘れじゃーござんせんかー」野太い声が聞こえてくる。地味で武骨で埃っぽい。ダサイ度指数がきわめて高い。なれど敗走する兵をなだれ逃し、まるで魔法のように門の姿を土中に消される使命を担っている。その機能性は異彩を放つ。初めての埋門の一種に出会ったのは姫路城の「る」の門。以後、津城、名古屋城、松坂城に跡を認められた。いずれも役目ゆえ人目を忍んでしっかと鎮座している。健気でいじらしい。

○掘割で落武者見送る埋門 疾（と）く疾（と）く逃げよ長らえよ （津城）

関城の本丸跡を遠望する田畑のなかにポッカリと口を開けた杭道があった。食い入るように見ても奥は闇。これは攻める側の金掘り攻めの穴とされている。ミステリアスで想像力を刺激する。上田城の太郎山麓や藩主居住跡へ抜ける真田井戸、大多喜城の日本一の大井戸も一説には海まで通じているという。これらの遺構を目にするたびにいよいよ進退窮まった人々の様が閉じた臉の裏に流れ行く。過酷な時代を生きる厳しさと人生

の悲哀を切迫感を持って私に語りかける。

○武士（もののふ）の悲史を留めし城山路 雪間に覗く片栗の花 （春日山城上杉景勝、景虎に寄せて）

○三浦氏の滅びし岬に佇めば 海舞う鳶我を慰む （新井城）

○ほお白の声澄み透る城の谷 潰れし石仏我に語れり （武蔵松山城）

○今の世の 幸踏みしめ登る城 陽だまり土塁に犬ふぐり咲く （杉山城）

お城潰けで思う。戦争は嫌だ。決断迫られたその時に領主は智慧の限りを絞り最善の決断だと思ったに違いない。その決断の是非は時を越えた今だから俯瞰して見えるのだ。翻って現実に戻ればわが身の決断とて忸怩たる思いがある。一身上の都合はあるわ、さりとして **all or nothing** は避けたいしと懊悩する。ましてや国事を与かる指導者は、歴史を教訓としつつ、多角的な議論、鋭い洞察力で未来が穏やかな世への道しるべとなる決断を願ってやまない。埋門と同様に歴史の中に埋められてしまった数多（あまた）の声なき無念の魂に報いるのは不戦しかないのだから。

創立20周年に寄せて

平塚 興子

「城を歩く会」6年になります。歴史に関しては大河ドラマ映画の筋を追う程度しか興味がありませんでした。会に参加させていただくたびに“訪ね、見て、知る”喜びです。

見学会は充実した1日となり、帰宅してゆっくり資料を読み返してまた知る楽しさを味わっております。先生方の講義・資料・体験した知識が歴史関係のTV、読書、旅行の際にどこかで繋がり想像し、新たに感動しています。

主人の実家近く、近江坂本には“おそば、お花見、紅葉”とたびたび出かけておりましたが、今まで気にならなかった石積みの美しさが見えてきました。今のような動力のない時代には穴太にいた石工たちは「自分の精神を積む石に打ち込んでいく」「石が楽に永久的に坐っているような姿勢を石と相談してきめていく」。真摯な気持で仕事と向き合った人々、置かれた状況の中でどのように生き抜いてきたのか……。今は逢うことのできない人たちに想いを馳せております。

「城を歩く会」、ますます魅力的です。思うように参加できない現在ですが、お誘いくださった菅原満利子様、先生方、幹事さんに感謝いたします。

歴史に想いを馳せることの喜び

平松 邦子

城を歩く会が20周年を迎えられたこと、本当に素晴らしいことだと思います。

前大森会長、現会長、諸先生、運営委員の方々のご苦勞と、会員の皆様の参加のたまものと心より感謝し、感動しております。

お城の歴史とはと考えた時、文字からみると“土”篇に“成”のつくりで、土により築かれた防衛設備なのだろうと思っています。日本書紀に6世紀末、物部氏が稲城を築いて蘇我氏を防いだと記されているそうです。文字から見ると稲穂を積みあげた畝だったのでしょう。

古代西日本や瀬戸内海には、朝鮮式山城が多く築かれたようです。子供のころ、遠足で行った記憶にある「筑紫大野城」は、大陸からの侵攻に備え「大宰府」の前面に築かれたわが国最大の朝鮮式山城であったことを知りました。できれば備中にある「鬼ノ城」にも行ってみたいものだと思います。

「中世」になると平時は館、戦時には山城に立てこもるようになっていたのでしょうか、「春日山城」を思い出します。

近世のお城は技術も進んで高い石垣、広く深い堀、堅牢な城門、美しい天守。お城の歴史にはそれだけでも興味が尽きませんが、そこに人間ドラマがあったことを思うと、土塁、空堀、苔むした石積み一つ一つにも、歴史が秘められているのでしょう。悲話があり、伝説、謎とロマンがあふれ、城を訪ねる旅の旅情をつのらせてもらえます。

いつまで城を歩く会に参加させていただけることか分かりませんが、現実の生活をほんの少し忘れさせてもらい歴史に想いを馳せることができる喜びを幸せに思い、この会に心より感謝したいと思っています。

私感

伊藤 澄子

大森先生が創立された「城を歩く会」が20周年を迎えたそうで、歴史を勉強するこの会にも20年という立派な歴史ができたことになります。これもひとえに大森先生、奥様、山岸先生、講師、幹事の方々のお陰でございます。安い会費にもかかわらず、先生方は充実した講義や資料を提供して下さいます。また、幹事様方は暑い中、寒い中、早くから要所に立ち会員を誘導して下さいます。先生方や幹事様方の私欲を排した善意と奉仕の精神性の上に成り立っている稀有な会です。運営に携わった方々に心から感謝をし、お礼を申し上げます。

西暦645年の「大化」から今の「平成」に至るまで、20年以上続いた元号の数は11時代しかなく、20年続くことの難しさを歴史が語っています。当会の20年は貴い歳月と善意の積み重ねの結果です。「城を歩く会」のさらなる発展を願っております。

歩きました

- ① 本所の吉良上野介邸から赤穂浪士が向かった高輪泉岳寺まで
- ② 川崎宿から日本橋までの旧東海道
- ③ 箱根関所から箱根湯本までの旧東海道
- ④ 奈良から柳生の里までの柳生街道を歩いた。

どの行程も時間がかかり先人たちの健脚と大変さを実感した。泥るみ道を草鞋ばきで日暮れまでに人里に辿り着かねばならない気忙しさと不安。徳川家康が街道、宿場を整備する以前も以後も、身分の高い人以外は野宿が多かったと想像される。

伊勢松阪歴史学芸委員の話では、「昔は、伊勢神宮参りの前後には金銭を使い果たし、松阪の橋の下で野宿をする人が多かった。そこで近隣の人々が食べ物を振舞った」とのことである。

徳川家康

- ① 三方ヶ原の戦いで家康は武田信玄に負け、浜松城へ逃げ帰った。浜松城近くの犀が崖で武田軍に夜襲をかけた。それ以来、その地に武田軍の亡霊が出たり、疫病が流行ったり、害虫が出たので家康は困り、岡崎から僧侶を呼び7日7晩念仏を唱えてもらったと治まったと伝わっている。
- ② 武田の残党を八王子千人同心として活用した。
- ③ 武田信玄の娘を家康の娘の教育係として活用した。
- ④ 武田勝頼が甲斐の田野で追い詰められて自害し、武田家が滅亡した。その田野に家康は弔いのために景德院を建立した。

⑤ 小田原後北条の残党を行徳の製塩に従事させ活用した。

これらは家康が戦の後に敵方に行なったことの例である。恐らく徳川家安泰のためと崇りを恐れ、敵の霊を慰め供養するためと考えられる。冷酷、短気、辛抱強い面もあつた多面体の家康を理解するうえで、敵方への処遇の仕方は参考になる。

家康は信心深い武将である。比叡山延暦寺、京都・知恩院、岡崎・大樹寺、行徳・徳願寺、川越・喜多院、江戸・浅草寺、増上寺、伝通院、その他の寺を大事にした。

家康が戦場にまで持って行った阿弥陀如来（現在、芝増上寺に黒本尊として安置）は、懐に入る大きさと思い実際に拝観すると、身の丈約 80 cm の携行するには大きい仏であった。戦場でも念持仏とともにありたかったのは、不安や恐れを表れである。家康一人の念持仏ではなく、戦場に赴いた家臣たちとともに手を合わせることができるよう陣所に安置し、戦勝祈願や弔いをしたのであろう。

黒本尊の由来：彫ったのは平安中期に活躍し、「往生要集」を著した恵心僧都源信（天台宗僧侶、942年～1017年）と伝えられている。彫刻を依頼したのは清和源氏の満仲朝臣。その後、受け継いだのは源頼光→源頼義→源義家→源義朝→平治の乱で勝者となった平清盛→常盤御前（義経の母）→源義経→三河国の矢作村の長者に義経が預けた→明眼寺（岡崎）→徳川家康→芝・増上寺へ安置され今に伝わっていると記録に残っている。戦火をくぐり現存していることは貴重な。

東海道新幹線

平成 26 年 3 月末、皇居、江戸城のある東京駅から東海道新幹線に乗った。日本で初めの鉄道、新橋・品川・横浜間や、旧東海道とほぼ並行して走行する。品川宿→川崎宿→近くに鎌倉→小田原城→石垣山城→駿府城→浜松城→名古屋城（伊勢神宮、犬山城、岐阜城へ至る）→関ヶ原古戦場→近くに長浜城→佐和山城→彦根城→安土城→平安京（伏見城、平城京、飛鳥へ至る）→大坂城。これらの重要な地を猛スピードで通過してゆく。満開の桜や雪化粧の富士を賞でるよりも、歴史絵巻が展開する車窓となった。幾層にも重なる歴史の断層の上を最新の時を刻んで新幹線がひた走る。その最新の時を私たちは生きている。

20 年以上続いた元号

天平（奈良時代）、延暦（平安時代）、延喜（平安時代）、正平（南北朝時代）、応永（室町時代）、天文（室町時代）、寛永（江戸時代）、享保（江戸時代）、明治時代、昭和時代、平成時代。

「城を歩く会」に想うこと

杉本 信治

本会の20周年おめでとうございます。これもひとえに幹事、世話人さんのきめ細かな心遣いのお陰と感謝しております。

故田隅龍二先輩の紹介で入会させていただいてから早いもので10年以上の月日が経ち、在籍年数ではもはや“古株”の部類に入りつつあります。どちらかというとな飽きやすいタイプな者がこれほど長居できているのは、この会に何か特別の魅力があるのではと考えております。

それはこの会には、厳しい掟、束縛などまったくなく、心身ともリラックスできる雰囲気があるからでしょうか（ただし、今回この原稿を書くにあたり、役員の遠藤さんから命令「脅迫？」を受け、初めての経験をいたしました）。

研修会も自分の都合に合わせて参加したり、しなかったり自由気儘にさせていただけるので、在籍年数とは逆に出席率はグッと低く、まったくわがままで不真面目な会員であると自認しております（とはいっても、どなたからもお叱りを受けないのが大変嬉しい）。ただ研修後の“夕暮れの集い”への出席率は100パーセントを超えており、昼間とは別の貴重な勉強をさせていただき、これが最大の楽しみ、魅力になっております。

最近世の中では『城』に対する関心が高まり、いわゆる『城ブーム』が起きているようで、特に若い女性たちが“城ガール”と称して闊歩してるようです。

20年前、まさに今日のブームを予見されていたと思われる大森前会長他この会の創立者の方々の「先見の明」には頭が下がる思いです。

城は敵からの防御の拠点として創られた構築物と当時の政治や情報収集の場所であると言われていました。戦国時代の武将たちの『夢』の結晶である雄大な「城」を通じて歴史が放つそれぞれの文化、世界観、生活様式、人間模様などに思いを巡らすのも興味のあるところですよ。

この会のメンバーの皆さんも年齢的には不足はない方々とお見受けしますが、身も心も若々しく精気に満ちており、かくいうわが身も“傘寿”が近くに見えるようになり、いつまでもこの会にお世話になることができるか分かりませんが、足腰の立つうちは皆さになるべくご迷惑をかけないよう、末席を汚させていただきたいと思っています。

最後に、この会がほどほどの品位とゆとりのある【大人の会】として末永く続いていくことを切望しております。

司馬遼太郎『街道を行く』に魅せられて

細田 眞司

司馬遼太郎氏のエッセーは氏の小説と同様、あるいはそれ以上に私の愛読書である。『歴史を紀行する』『街道を行く』は国内の転勤が多かった私にとっては、勤務地周辺の逍遥に欠かせない案内書だった。「人間を理解する際に、出身地の風土的概念から帰納するほどこっけいなことはない」と氏は記しているが、相手の出身地を肴に飲むビールは美味しい。

初めての赴任地に転勤する人には参考に前記の著書を紹介した。新任地で立派に職務を果たせるのは、その土地を愛し、その人と親しむことである。それには当地の歴史と風土を理解し、会得する必要がある。当会の催しにも当然活用している。

『街道を行く』では、氏は海外にも足を延ばしている。『南蛮のみち』には15世紀にわが国で布教し、後に聖人に列せられたフランシスコ・ザヴィエルの生地、ザヴィエル城を訪問した。スペインの国家統一（1479年）により、城を領有していたスペインとフランスの国境の小さなナバラ王国はフランスの応援を求めたが滅ぼされた。

息子がスペインに駐在しており、通常の観光コースでは訪れることのできないこの城を、息子の車で訪れることができた。司馬氏の該博な知識を楽しく、記憶をたどりながら旅した。美しい風景と城の造りと人との交わりを氏の著書から引用する。

この城は、市民が日常生活を営む都市城郭ではない。純粹に戦闘用につくられた孤立した要塞。日本の城やヨーロッパの城は戦闘よりも平和の象徴というより、城は市民生活と調和せねば生きてゆけない。この城は、たけだけしいばかりに戦闘的である。

氏は城の造りを建築図面ふうに述べている。

塔は3つあり、四角い主塔が中央に天守閣然としてそびえ、両端に隅櫓、周りに対する死角がない。本丸は2層で各層の上辺が胸壁で狭間が凹凸し、要所要所に石落としが突起している。隅櫓は本丸と組み合って連結しつつ、百人以上の戦闘員が収容できる外壁のところどころに、タテ矩形の窓が穿たれている。窓は外側に鉄格子のはまった二重窓。ほかに外壁の基部のあたりに、ヨコ矩形の窓、鉄砲、弩弓の狭間がある。右の櫓の部分は日本流にいえば二の丸である。本丸と二の丸の基部の半ばは、今一重の城壁がぐるりととりまいている。日本風にいえば曲輪であり、三の丸と考えてよいが、日本の城郭と比較して、狭い空間である。姫路城を仮の基準として比較しているが、むしろザヴィエル城が基準である。ザヴィエル城の比較では姫路城では巨大すぎて彦根城が適当である。氏は日本の近世城郭は南蛮築城術の影響があり、南蛮人との会話で設計図（なわばり）などの教示を願う会話を氏は創作している。

密着して同じ石材により、聖堂が組み上げられている。氏の一行は、この聖堂に住んでいる修道士に城内を秘密の部屋まで案内してもらう。日本人の訪問者なら「ザヴィエルさんがおよろこびだろうという気持ちがわくわくと揮発しているみたい」と描写している。氏は1982年、私は1997年に訪問、城門の入口でその修道士と会った。修道士も日本人と判るのであろうか、私どもにこやかに来られ、話はもちろんできないが、顔を合わせ、何となく判りあえた気分であった。正に氏の著書を読し、氏を尊敬していた功德と感激し、感謝した。

私は中国と台湾に1991年と2001年に駐在でなく、出張で仕事をしていた。中国の交渉では「日中友好」が頭言葉にあれば、今回の出張は実りが無いのが予感された。

台湾では、私より年配の経営層はわれわれよりも日本の諺を知り、日本語も堪能である。台湾の旧制中学では日本人の教師に殴られたが、差別はなく、日本人の学生も平等に殴られていたと懐かしそうに話を聞いた。交渉も順調、その後の飲み会も楽しく美味しい食事宴会となった。

中国の反対により、当時、台湾の航空会社は成田空港の発着が禁止されていた。羽田空港の専用建物での離発着、通関入出国事務が台湾航空のみで迅速、交通の便がよく、利用者は便利、私もよく利用した。

『街道をゆく』に「台湾紀行」があり、「海の城」の項がある。台南市（台湾最古の都市）の旧跡に「赤崁楼」中国風2階建ての大建築で17世紀にオランダ人が建設、1661年、鄭成功がオランダ人を駆逐し、政治の中心となった。鄭成功（母親は日本人）は尊崇され、彫像、肖像画が飾られていた。発掘された城壁は赤レンガでできている。そのレンガの石材は石灰、砂糖、餅米が混ぜられて非常に固い。

私は残念ながら行かなかったが、氏は海の方の「案平古堡」オランダの砦跡に赴いている。城壁は断崖にないこの地に、人工の断崖としてつくられ、材料は赤レンガで城壁はごく小さい、と氏は記している。

氏は1993年1月と4月、1994年3月に訪台している。氏の目を通じた台湾の現在を江戸、明治時代の日本、植民統治との関係を詳述している。統治時代に日本が、国家の実力以上に台湾経営に尽くしたことは認めている。むろん植民地支配が国家悪の最たるもの・・・と氏は記しているが、プラス面を評価している。

氏は李登輝総統と1993年1月に会い、肝胆相照らし、1994年には李登輝の対談のための訪台である。1989年の天安門事件により中国の民主化後退、台湾は李登輝の指導の下、民主化の道を進んでいた。氏は対談のまえがきに「運よく台湾は、世界でもっとも教養が高く、且つ名利の欲の薄い元首をもつことができた」と記している。氏の読者をはじめ、私を含めて、多くの人々に台湾のよきイメージが形成された。若い研究者は「李

登輝自身が『親日』ではなく、対日外交の一環であり、李登輝の日本向けの発言は日本人の共感と理解を求めるために、活用可能な資源を動員し、日本のなかに『親日台湾』のイメージを意図して作りあげていくプロセスでもあった」と記している。結果的には指摘の通りとなったが、氏は歴史上の多くの人々と著作を通して対面し、人間への洞察力は超一級であり、人間観察力が鋭い人である。李登輝に魅了されたのは、共通の歴史的体験と人間的魅力と将来の国家意識が共通していたからである。

1963年3月、台湾で初めての総裁直接選挙が実施され、中国の軍事的圧力のなかで、李登輝54%の得票率で圧倒的な勝利、独立主張候補を加えると75%超が台湾の主権を明確に支持した。氏は1996年2月に死去されたので、残念ながら、民主化のスタートを観ることはかなわなかった。

大陸中国の将来については現在、多くの意見、議論がなされている。氏の意見を紹介して拙文を終わらせたい。

「国家には適正なサイズがある。北京ひとつの政府だけでコントロールするのは無理であり、粗雑な国内帝国主義的になる」

「天下は公のものだという思想がない。自浄能力をどこに求めるか、大中華帝国の積りでいたら必ず腐敗する」

<参考文献>

- ・『街道をゆく』22 「南蛮のみちⅠ」 司馬遼太郎著 朝日文芸文庫 1988年刊
- ・『街道をゆく』40 「台湾紀行」 司馬遼太郎著 朝日文芸文庫 1988年刊
- ・『日中関係史Ⅲ社会文化』清水 麗著「台湾総選挙の衝撃」(1996年) 東京大学出版会 2012年刊
- ・司馬遼太郎のあし音 中央公論 9月臨時増刊 1996年
- ・司馬遼太郎の世界 文藝春秋 5月臨時増刊 1996年
- ・司馬遼太郎の手紙「街道をゆく」の友人たちへ 週刊朝日増刊号 1999年

リーダーの資質と責任の取り方

徳政 義方

2013年の10月お城の会で福島に行った時、会津の住民が戊辰戦争後100年もたつのに、今でも長州（山口県）を快く思わないとの話を聞き、はたして長州を恨むことが正しいことか、自分ながら歴史を調べてみました。

会津藩松平容保は天保6年（1836）高須藩主松平義建の六男として生まれ弘化3年（1846年）10歳の時叔父の会津藩8代藩主容敬の養子になった。文久2年（1862年）京都守護職に就任した。

慶応3年（1867年）15代将軍徳川慶喜が大政奉還し江戸幕府が消滅して、京都守護職も廃止されたにもかかわらず鳥羽伏見の戦いが勃発した。

大政奉還した徳川慶喜は朝廷を表に立て実質徳川慶喜が国を支配しようとした試みを薩摩、長州軍が反対をして鳥羽伏見戦争が勃発したのだ。幕府軍15,000、薩摩・長州軍5,000で圧倒的に優位のはずの幕府軍の総大将の徳川慶喜は大坂城に避難し副大将であるべき松平容保も同道する有様で幕府軍の士気は著しく落ちた上に有能な参謀もないため、幕府軍は狭い街道に縦隊突破を図るのみで重火器では優れていた薩摩軍に大敗を喫した。

その責任を家老の神保長輝に負わせ自害させ、容保と慶喜は船で江戸城に逃げている。江戸城に逃げた慶喜は朝敵として追討令が正式に下り、薩摩・長州軍は新政府軍として東征を開始した。江戸城は慶応4年（1868）4月11日に新政府軍に明け渡された。

容保は自らも恭順の姿勢を示すため会津に2月22日戻った。既にその時は新政府から会津藩討伐令が出されており、東北諸藩はこの問題を苦慮して会津藩放免の嘆願を行う一方、奥羽越列藩同盟を結成して結束を強めた。会津藩は新政府軍からの通達に対して罪を認めなく、謝罪も拒否する回答書を示したことにより悲劇の東北戊辰戦争に突入することになった。この戦争の経緯と悲惨な内容については山岸先生、保科先生の資料に十分書かれているので割愛させていただく。この悲惨な結果になった戦争を避けることはできなかったのか検証してみたい。

1. 京都守護職を文久2年（1862）に拝命された時、家老の西郷頼母は大反対したが天皇と徳川幕府に忠実無比の容保は新撰組を使い尊皇攘夷を掲げる薩摩、長州を徹底的に取り締めたのは深い憎しみをかけた。1865年会津と江戸の会津藩幹部が容保に「藩主引退と京都からの引揚げ」を進言したが容保は断固これを拒絶した。
2. 徳川慶喜の思惑に振り回され鳥羽伏見戦争に突入したが、優秀な参謀もないため兵力では圧倒的に優位なのに大敗した。

3. 保科先生も書かれておられるが、東北戊辰戦争が起こる前に東北諸藩の会津救命の嘆願書を受けて総督府の実権を握っていた世良修蔵の強硬な会津藩への降伏条件「容保の斬首、嫡子の監禁、開城という無条件降伏」に対し、新政府軍並びに朝廷に対して政治的な裏交渉ができる人物がいなかったのか、戦略のまずさであった。実際、新政府軍は会津戦争で1ヵ月の籠城で降伏したのに、容保を斬首も自害もさせていない。
(なぜ世良修蔵は強固に主張したのか。世良は木戸孝允の部下で、1864年蛤御門の変で木戸孝允の盟友久坂玄瑞をはじめ多くの同志を失った木戸は会津藩を異常に恨み、部下の世良に会津を徹底的に滅亡するまでと指示していた)。
4. 今まで見た城の中でも会津若松城は堅固で、山岸先生が説明しているように本丸帯曲輪側に鉢巻石垣、芝土居上に石垣を回し、廊下橋周辺は石垣、基部は濠底まで達し、岩盤の上に根石を置いている。水際からの高さ、19mという会津若松城最大の石垣、直線およそ100mの急勾配、先端反りの扇の勾配となっている。これだけの堅牢な城で1ヵ月籠城して悲惨な敗退となった。歴史上に堅牢な城でも籠城して勝つことは優秀な参謀がいて敵方を籠絡して裏切り者を出すか、優秀な援軍が来なければ兵糧攻めにあい、必ず負ける。降伏の時は備中高松城清水宗治のように、豊臣秀吉、黒田官兵衛に藩主は責任を取り自害するので領民を助けてほしいと申し入れて多くの領民が救われた。
5. 会津の藩政はひどいもので藩士を優遇し農民には過酷な年貢の取立てを行った結果、敗北した会津藩の武士たちは敗走の際、農民に襲われている。また領民が徒党を組んで竹槍で退路を拒んだなどの出来事が記録に残されている。
6. 松平容保は会津戦争で負けた慶応4年(1868)12月7日に鳥取藩に預り処分。明治4年(1871)3月14日陸奥斗南藩に預り替えとなる。明治13年(1880)日光東照宮宮司になる。明治26年(1893)62歳で亡くなる。

会津戦争で白虎隊をはじめ婦女子、家臣、領民3,000人を死亡させた藩主としての責任の取り方はこれでよかったのだろうか。

松平容保は会津藩主としてどのような人物だったのか。よくいえば誠実、真面目、忠誠心厚く朝廷孝明天皇と徳川幕府に忠誠一途であった。果たして大勢の家来と領民のことを考えた場合、広い視野での「聞く、調べる、尋ねる」が弱く幹部意見を聞いたり、視点を変えた意見や反対意見を検討して意思決定する姿勢に著しく欠けていた専制主君であった。

前にも述べたように尊皇攘夷の薩摩・長州藩にひどく恨まれたのは京都守護職時代の取締りのあり方が問題であった。幕末当時京都という、最もレーダー的情報収集に適した都にいて千数百人の藩士を駐在させ、京都御所警備という朝廷の実態研究に適した場所にしながら情報音痴であったため、自藩についても、誰が味方であり参謀として適したのが誰か、また敵、朝廷、幕府についても、国内外情勢についてあまりにも知らなすぎた。

現代の会津の人たちが正しい歴史認識に立ち返り、リーダーの資質でない人がリーダーになった時に悲劇が起こり責任の取り方を間違えると、さらに悲惨な事態になる例だと思う。戦争で殺した敵を恨むのではなく何で戦争に突入したのか、被害を最小限に食い止めるのがリーダーの役目であり責任だと思う。

現代でもどこかの国が歴史認識を自分の都合のよいように解釈して揉めていることは嘆かわしいことだ。

最後に自分は長州、会津とも利害関係はありません。

城を歩く会創立 20 周年に寄せて

多村 勝彦

10年ほど前、初めて土浦城見学へ飛び込みで参加させていただき、多くの人たちがわずかに残る土塁や太鼓櫓などについて、大森会長や山岸講師の説明を熱心に聞き入る姿に感心し、専門用語や難解な事柄に翻弄されながら、いつの間にか自分ものめりこんでゆきました。

あれから数多く案内していただき、その都度、無類の感動と衝撃を味わせていただきましたが、中でも春日山城は訪ねたかった筆頭でした。加越能三国の守護職畠山氏の七尾城を墜した上杉謙信の空気に触れながら、壮大で急峻な城内を登ると護摩堂跡に「霜満軍営秋気清・・・」の碑文があり、独り厳粛な気分を暫し浸りました。故郷七尾では敵将の凱戦歌のためかあまり表には出ませんが、時の権力者が覇権を制した心情を見事に歌い上げており、好きな詩文の一節です。

私はわずかな見学数ですが、著名な城跡や都内に残る数少ない史跡、そして入口すらはっきりしない城跡など、兵どもが夢の後を見ると飽きることなく、道端の小石にも愛着を感じ楽しんでいきます。

百聞は一見に如かず、いつまでも傘下させていただきたくこの会が永遠に続くことを願っています。

小海線沿線の城跡

細田 篤志郎

小海線は小淵沢と小諸を結び、2両連結の列車が八ヶ岳を望む高原を走り、シーズンにはハイキング、登山、スキー、観光、避暑などに向かう人たちが利用します。この沿線には数多くの城跡や館跡がありますが、小諸城を除きあまり訪れる人がいないようです。城を歩く会入会后、それまで何気なく通り過ぎていた場所で知ったいくつかの小海線沿線の城跡をご紹介します。

まず、釣りやボート遊びの避暑客が集まる標高 1123m の松原湖にある松原城跡です。湖の遊歩道を歩くと山の麓に比較的新しい松原城跡の表示板が立っています。それによりますと、延徳元年（1489年）武田信昌が佐久に侵入し、村上氏と争いを始めた戦国時代中期（1450年ころ）に、この地域の小領主だった松原氏が村上・武田両陣営に対し身を潜めた山城だったのだらうとのこと。

比高は 90m 以上あり南側の松原湖に接し北側は深く落ち込み、この城を攻めるには尾根をたどるしかない専守防衛の城です。主郭・二の郭・三の郭と空堀という中世の特徴を備え尾根最高地点は見張り台として使われ、主郭から僅かながら生活用品が出土しています（小海町文化財調査委員会）。

表示板のある場所から急な細い山道を登ると犬走りや堀切り、土塁があり狭い主郭には松原城跡の柱が立っています。道は比較的整備されていて変化に富んだ散策コースとして楽しめます。明るい青空のもと、八ヶ岳が美しく望める松原湖の目の前の小山が、戦国時代に身を潜める城であったとは驚きでした。

小海線は甲州から信州佐久に通じる佐久甲州街道と信濃川上を源流とする千曲川沿いを走っています。小海線の海瀬から余地峠への道は上州に向かっていますが、武田軍がこれらの道を使い信州・上州への侵攻を行いました。当然千曲川の水運も兵糧の運搬を活用したことでしょう。さらに終点駅のある小諸からは上田を経て北国街道と松本街道に通じています。従って多くの城跡が沿線に存在するのはうなずけるところです。

次に八千穂駅近くにある蟻城をご紹介します。

八千穂駅裏から踏切を越え蛇行する急な坂道を登っていきまると桜の名所として地元民には知られる東電水力発電所の調整池があります。その前に聳える 1047m の山頂に蟻城があります。調整池の畔に蟻城の説明板と地形図がたっています。

これによりますと、木曾義仲が樋口氏をこの地に派遣し、西上州武士団の糾合を図るとともに、義仲と志を異にしていた甲斐源氏の動静を監視していた。ここは、佐久平の末端で依田城に近く南は千曲川を遡り甲斐に通じ東は十石余地峠を越えて西関東への近

路であり、西は大石峠を挟んで茅野に近接している。蟻城はこれらの交通路を眼下に置き、守備に堅い稀にみる広大な山城で、馬場、腰巻、羽場、杭の内、矢つぼ、蟻戸城など城下の施設の地名が今も残っている。

説明坂のある細い道を辿り小さな集落を過ぎ上へ上へと進みますと、城跡への道に着きます。そこからは舗装された狭い林道をのぼりようやく頂上到着です。頂上には蟻城跡の碑が立っていて北は佐久平から南は野辺山山頂が見渡せ、佐久郡第一の眺望と称されています。

本郭をめぐり三段の郭と大掘り切りが残っています。対岸のやや南に武田信玄の宿营地があったとされ、永禄4年(1561)北条氏康を支援すべく上州侵攻軍は千曲川を渡り高岩駅調整池付近に今も信玄道の名が残っています。北条義仲ゆかりの城が信玄により甲信を結ぶ狼煙台として活用されたようです。

武田軍は甲府を本拠として信濃・関東・駿河等へ侵攻するにあたり本拠地と前進基地間での連絡手段として狼煙による連絡網を確立しました。佐久の前進基地前山城から甲府に至る狼煙台は花岡城、蟻城、大石川狼煙台、根小屋狼煙台など千曲川沿いの高所を経て信州峠に出て塩川沿い葦崎に至るか、野辺山から大門峠を経て佐久甲州道沿いに葦崎から甲府に至ったとされています。(木内寛、井出正義他「佐久の城」より)

そこで先に狼煙台の一つに挙げた花岡城を訪ねます。八千穂駅からの道は判り難く海瀬駅からアクセスする方が良いでしょう。

海瀬駅から山側に出て畑の間の広い舗装道路を延々と行き新しい住宅が立ち並んだ先に花岡遺跡公園の看板が立っています。

花岡城は狼煙台として長く地域で伝承されていたのですが、1994年の発掘調査で頂上に城館跡が確認され忠実に見直すことになり、もともと土豪が築いた城館を武田氏が佐久侵攻時、監視砦や狼煙台として利用したとしています。標高880m、比高70mですので、すぐに望楼のある頂上に着きます。

この頂上が本郭で数段の郭と東西に幾つかの堀切を備えた単純な砦のような城跡です。しかし望楼に上がると素晴らしい眺望で物見台と狼煙台としては大変有効だったと思えます。南側には蟻城、西側には大石川狼煙台、北側には田口城などを望めます。なお、城の麓の西の台地から地下3mの堅杭と高さ2m広さ6畳の地下壕からなる六基の地下式杭が発見され緊急避難場所として使用されたと考えられています。松原城と同様に脆弱な土豪領主の生き残り策なのでしょう。

海瀬から余地峠に向かい、十国峠と余地峠の街道が合流する交通の要衝に位置する勝見城を訪ねることにしました。余地入口にある交番で勝見城へのアクセスルートをたず

たずねましたが、地元の人にも判らないとのことで断念しました。後で交番の裏山が城跡とわかりました。

資料によると勝見城は花岡城を本拠にしていた友野氏が、要衝の地であり花岡城の水が乏しかったことで築いたとされています。花岡氏はその後、武田氏に降り武田勝頼に属して討ち死にしたとされています。

標高 990m 比高 190m と山並みは険しく南側は巨岩が累々と続く大岩壁で要害の地形となっています。城址は東西 1 キロ余りの細長い岩山上に中世城砦の遺構が残るとのこと。実地調査した城愛好家のブログを読みますと相当過酷な城歩きとなるようです。

最後に紹介する城址、内山城へは小海線中込駅から内山峠への道、愛称コスモス街道を進みます。秋にはコスモスが咲き誇り観光客が群馬県側からもきます。この道は佐久地方と上野をつなぐ重要な交通路、下仁田から富岡に通じる富岡街道です。

街道から外れて集落の細い道を上り真言宗円城寺に至ります。寺の裏手が内山城となりますが、急峻な崖となっていて寺から直接城に行けません。参詣道の途中に見落としそうな内山城への古い標識が立っていて、それに導かれて暫く行きますが藪が大変濃く到達できませんでした。

再び、実地探査できず資料での紹介となります。

天文 15 年 (1546) 5 月、信玄は佐久方面に向け甲州を出発し大井貞清が守る内山城の攻撃を開始、水の手を奪う作戦で 7 日間の戦闘の末占領した。以後武田氏は内山城を拠点に西上野に侵攻した。(中田正光「戦国武田の城」)

内山城は標高 910m 比高 190m の山城で周囲は断崖に囲まれ道も急坂です。本丸、二の丸、三の丸があり本丸奥には二段の腰曲輪がつき三の丸から東西に伸びる尾根に何本かの堀切りがあるとのこと。また井戸の遺構も残り武田氏にとり佐久支配の重要拠点であったことを伺わせます。

先に挙げた書籍、「佐久の城」総説によれば、佐久地方の館は鎌倉時代までは戦闘により居住者の権威を誇示する意味合いが強かったようです。しかし鎌倉時代が終わり守護・地頭の権威が後退し、地侍の力が台頭し各地で小競り合いが展開されるようになると、地侍は館と城をセットにした城館強化の必要を迫られます。

文明 16 年 (1484) 北信の村上氏が岩村田に本拠を置く大井荘の地頭大井宗家を急襲し滅亡させます。以後、佐久郡は村上氏と甲斐から侵入した武田氏の抗争の場となりますが、武田氏が勝利し、群小の地頭は武田軍傘下に組み込まれてしまいます。その結果、山城を中心とする武田流の築城術が普及します。武田流の築城とは地形・土地の広狭に応じて郭・堀切・土塁・腰曲輪・縦堀・枡形などを組み合わせ、城全体の構成は連郭・複郭など複雑化し周辺に枝城や砦を多数配して本城を囲んだものと記述されています。

佐久の城址は、地侍の専守防衛型城と武田の監視・連絡・攻撃型の城が多いようです。

この小文を書くにあたり「戦国時代の名も無き信州の城をメインにとり立てた記録」を掲載している「らんまる攻城戦記」のブログも参考にさせていただきましたのですが、このブロガーは佐久地方だけで94の場所を訪ねています。大変多くの城跡や館跡が小海線沿線に存在していることを示しています。訪ねる価値のある城跡が沢山ある地域いえます。

ただし僅かな経験からですが、小海線沿線の城跡は整備されていないものが多く、雑草が生い茂らない春先か積雪のない初冬に、狭い道をものもしないナビ付軽自動車アプローチし、ハイキングの装備でアタックすることがベストでしょう。

「城を歩く会」で城に関する緻密な資料をもとに現地・現物で説明していただき、当時の姿や人の活動のイメージが膨らみ城や街道への興味が深まりました。小海線沿線は大学時代からハイキングなどでよく出かけた地域でしたが、城を歩く会のお陰で城跡探索の楽しみが増えることになりました。

「城を歩く会」の知性・熱意・誠実さに溢れた幹部の方々と、気持ち良く接していただける会員の方々に感謝します。

出会い

吉田 国良

自らの力で歩いてみんなに迷惑をおかけしないで「城を歩く会」の見学会にお伴、参加しみんなに健やかにお会いする喜びを永久に願いつつ、ご機嫌よう。

「また」ね!! と「また」会えると思い、「また」が来ると思っています・・・が、「また」が来ないこともある・・・。

死は怖い。もっと怖いのは、みんなに会えなくなることだと。

私の住む町ー練馬・石神井川

松田 光敏

私が「城を歩く会」に入会させていただいたのは、2009年12月14日です。「新規入会希望許可願」を保科氏から当時の大森会長・田辺運営委員宛に提出していただき、入会の「承諾」がありましたとのメールが送られてきた日です。今もそのメールの写しを保存してあります。以来数々の城跡に案内していただき、また城に関するセミナーにも参加して、大変有意義なセカンドライフを過ごしています。

さて、このたび「城を歩く会 20周年」にあたり記念誌を発行する企画で、各自自由テーマで投稿するよう指示がありました。いろいろと考えた結果、自分の住んでいる町・練馬がどのような歴史があったのか、そして城が存在していたのかと思い、調べだした次第です。

練馬に城があり、しかもそれは会員の皆さんと平成25年2月例会で訪れた「石神井城」です。その時の講師が榎本氏で、城主（豊島一族）・築城の時期・城郭、そして終焉に至るまで詳細に調べていただいています。同じ日に親城の「豊島城」については山岸氏が詳細な資料に基づいてお話しをしていただきました。以下、当地の位置関係などを紹介していきます。

石神井城の防備として、南側を石神井川、北側を三宝寺池、西側を空堀と土塁で、東側は堀で固められていたとか。小生はその石神井川の上流にある武蔵関公園の南側に住んでいます。今回はその石神井川について調べました。

石神井川の源流は小金井公園内の池（湧水）とされています。近くの小学校の建設時（昭和49年）に旧石器時代の鈴木遺跡（小平市鈴木町）が発掘されて、当時使用していたと思われる石器類が発見され、石神井川の清流で生活していたと想像されています。

さらに川を下って現・西東京市（旧保谷市東伏見）に「下野谷遺跡」が発掘されました。旧石器時代の石器製作跡が見つかったのです。ここでは住居が広場を囲んで輪の形に並び、ムラが複数存在していたと考えられています（西東京市教育委員会資料）。当時周囲には栗の木が茂り、その実を食べたり、食べにくる動物や川の魚をとって生活していたとか。現在眼下に早大グラウンドがあり、野球・サッカー・アメフト・ホッケーなどの練習風景が見られます。

そこから100mほど下ると武蔵関公園と富士見池に到達します。富士見池は15年ほど前までは湧水が豊富でしたが、現在都でゲリラ降雨に備えて石神井川の貯水池として池の底をコンクリートで固めてしまいました。

石神井川は公園に沿って流れ、3kmほど下ったところが石神井公園に行きつきます。隣接する「三宝寺池」があり、ここに「石神井城」があったのです。川はあちこち蛇行しながら練馬区・板橋区・北区を経て隅田川に合流します。全長 25.2km、一級河川です。現在の川幅は上流で 5~6m、中流で 8~10m、コンクリートで固められています。昔は生活水路、現在は 1 時間に 50 ミリの豪雨に耐えるように拡幅工事が進んでいます。

練馬区は現東京都 23 区のひとつと皆さんご存知ですが、一番最後に設立された区であるのご存知でしょうか。昭和 22 年までは板橋区に所属しており、住民票を取りに行くのに半日以上もかかって大変不便だったので、早くから独立の機運がありながら実現できず、練馬出身の議員たちが独立の議案を提案してようやく実現したそうです。

練馬といえば「練馬大根」が有名でしたが、今は契約農家が 10 軒ほどに減少し、主として漬物に加工して販売をしております。

また、「練馬」の由来は諸説あり、「練馬」といって土器をつくるのに適した粘土が豊富で、材料の土を練るのに最適だったという説、昔馬泥棒が盗んだ馬を集めて「訓練」をしたところからとか、8 世紀ごろ武蔵と下総を結ぶ官道に「乗沼（のりぬま）駅」という宿場駅が訛ってネリマと変化をした説があります（練馬区報 ねりまの今昔）。

練馬区は板橋区から独立した時の人口は 10 万人余、現在では 70 万人を超えています。交通の要として、南北を関越道の大泉 J C から 8 号環状線をトンネル化して東名道の瀬田につながる案が検討されています。東西には青梅街道が走っています。これからはどのように発展していくのでしょうか？

梅木 宗広

皆さんが利用している山手線は、正確には環状線ではありません。品川駅を起点に、渋谷駅・新宿駅・池袋駅を經由して北区の田端駅を結ぶ全長 20.6km の鉄道路線（幹線）の名称です。

残りの田端―上野―秋葉原―東京―品川ですが、田端―東京は東北本線（東北線・宇都宮線）、東京―品川は東海道本線（東海道線）ということになっています。

ただ、せっかく路線が一周しているのに正式名称で呼んでも混乱するので、通称として全区間を「山手線（やまのてせん）」と呼んで環状運転をしています。

駅名には地名・地形や人名、伝説など諸説あります。J R 山手線の 29 の駅名の語源について、皇居・江戸城の前にある「東京駅」から内回りでめぐってみましょう。

- ・ 東京 当時建設した駅で一番皇居（江戸城）の近くにあり、日本を代表する駅として命名されました。工事中は中央停車場と呼称していたが 1914 年 12 月 18 日に完成し「東京駅」となりました。東京の名は明治時代に天皇陛下が移り住まれる際に、東の京都という意味で名づけられました。
- ・ 神田 付近に平将門の子孫神田氏が住んでいたからとの説と、伊勢神宮に奉納するための稲を作る田んぼがあったことから「神の田」→「神田」になったなどの説があります。
- ・ 秋葉原 明治 2 年の大火後に設置された火除地の神社が秋葉原権現を祀ると解されたことに由来する。神社の周りの広場が「あきばがはら」とか「あきばっばら」と呼ばれていたそうです。その呼び名が駅名になりました。今でも地元では「あきはばら」ではなく「あきばはら」が正しいという人もいるようです。
- ・ 御徒町 三代将軍家光のころから置かれた警護役だった御徒士（おかち）組の屋敷があったことから地名（御徒町）がつき、その地名から駅名がつけられました。
- ・ 上野 野原の上にある小台地につけられた地名で、駅名もそこからとったとされています。また、寛永 2 年（1625 年）に天海僧正が江戸城鎮護と国家の安穩長久を祈願して寛永寺を建立。門前町が開かれました。（寛永寺の命名は江戸寛永年間に創建されたことに因みます）このころから、藤堂家の所

領である上野に地形が似ていたため、寛永寺付近の一带を「上野」と呼ぶようになったといわれています。しかし、すでに永禄年間（1558～70年）に上野の地名がありました。いろいろ諸説がありますが、上野の地が小高いおかで上が草の生い茂る野原であったためとする説が最も有力です。

- ・ 鶯谷 諸説ありますが、江戸時代に谷中の霊梅院近くにウグイスがいたため、あるいは、谷であるこの辺りを流れていた川がウグイスの名所だったからともいわれています。
- ・ 日暮里 もともとは「新堀」として室町時代の文献に登場します。この地が高台で眺めがよく「日が暮れるまでいても飽きない里」ということから「日暮らしの里」となり、明治時代以降「日暮里」となりました。
- ・ 西日暮里 1971年（昭和46年）開業の山手線で最も新しい駅。日暮里の西側にできたので、西日暮里と名付けられました。
- ・ 田端 この辺りは水田地帯で、田んぼの端に集落があったため、地名も駅名も「田端」とつきました。
- ・ 駒込 駒込の由来は東征途上の日本武尊（やまとたけるのみこと）が味方の軍勢の人・馬などがその場所いっぱい集るのを見て「駒込みたり」といったという説。野原に野生の駒（＝馬）が沢山群がっているさまからという説など諸説あります。
- ・ 巢鴨 大きな池があり、鴨が群れ棲んでいたことから「洲鴨（すがも）」という説もありますが、石神井川に臨んでいるがゆえの「洲処面（すがも）」の意味であるとの説が通説
- ・ 大塚 大きな塚があったことに由来しますが、その塚は室町時代の武将・太田道灌が築いた物見塚（戦場で敵を探るために使う高く盛った塚）とする。また、豪族の大きな塚（古墳）があったことが地名の由来など諸説あります。
- ・ 池袋 この地の東北に水田があり、その辺りが窪地になっていて、地形が袋のようになっていたという説。この地に大小無数の池があった説。池より亀が袋を背負って出てきた説。袋池と呼ぶ袋の形をした大きな池があった説などさまざま。昔から多くの池があったからという説も。袋のつく地名の場所は、水辺にのぞむ所であったことだけは共通しています。
- ・ 目白 ①この地で白い名馬を産したという説。②徳川家光が鷹狩の際に「目黒」

に対して呼ぶようになったという説。③江戸開府のときに慈眼大師が五色不動を造立した際、白い目の不動像が置かれたためなどの説があります。JR山手線の駅名にもなっている「目黒」と「目白」はありますが、都内にはほかに「目青」「目赤」「目黄」の三色があり、五色あわせて五色不動と呼ばれています。現在は「目黒不動」目黒区下目黒の滝泉寺・「目白不動」豊島区高田の金乗院・「目青不動」世田谷区太子堂の教学院・「目赤不動」文京区本駒込の南谷寺・「目黄不動」台東区三ノ輪の永久寺にそれぞれあります。そもそも五色不動は、江戸の鎮護と天下泰平を祈願して三代将軍家光が五つの不動尊を割り当てたそうです。これらは江戸城を中心に、周囲を五つの方角に配置されていましたが、配置の基準になったのが江戸が成立する以前からあった目黒不動です。つまり目黒不動がほかの四つの不動尊の場所を決めたわけで、目黒がなければ目白もありませんでした。

- ・ **高田馬場** 高田馬場は高田君（たかだのきみ）と馬場が名づけの由来。高田君とは家康の息子、越後高田藩主松平忠輝の母で茶阿局（あちやのつぼね）のことです。慶長年間（1596～1615年）に高田君が開いた遊覧地を、寛永13年（1636年）に馬場（流鏝馬<やぶさめ>や馬の調連・あるいは弓射<くみうち>など旗本たちの稽古場のこと）とした地。また、忠臣蔵で有名な赤穂浪士の一人、堀部安兵衛が仇討ちを行った場として知られている高田馬場からつけたとされています。
- ・ **新大久保** 久保はくぼんだ土地の意。先に中央線・大久保駅があり、その後に開設したので「新」がついた。「大久保」の地名の由来には4つの説があります。①小田原北条の家臣に大久保姓の者がいて、この地を領したため。②大きな窪地があったため。③この地にある永福寺の山号大窪山からとった。④江戸幕府が居住させた同心に大久保某がいた。
- ・ **新宿** 甲州街道は、日本橋と高井戸の間が四里もあるのに駅がないところから、元禄11年（1698年）に、その中間地点に「新しく宿場」を設けたのが由来。当時は内藤家の屋敷があったため「内藤新宿」と呼ばれました。
- ・ **代々木** 明治神宮の森一帯の地に当たるが、この地にサイカチの木が多く村人が代々その生産にあたったことによるという説。また、この地に彦根藩井伊家の屋敷があり、代々続くモミの老木がありこの老木から出た地名だとの説もありますが、駅名の由来は定かではありません。
- ・ **原宿** 鎌倉から奥州へ通じる鎌倉街道沿いにあった村で、宿駅が置かれていたことが地名の由来。このあたりはかつて千駄ヶ原と呼ばれ、そこの宿場町だったから。千駄ヶ原の「原」と宿場町の「宿」で「原宿」となりました。

- ・ 渋谷 塩入の場所があったため鎌倉時代には「塩谷（しおや）」と呼ばれていました。その後、渋谷氏が居住したことから現在の地名になったとする説が有力です。今は昔、平安・室町時代には渋谷氏が金王八幡付近（渋谷三丁目付近）に渋谷城を築き一帯を支配していました。平安末期から大永4年（1524年）北条綱氏と戦って滅亡するまで居城にしていたそうです。城は東渋谷丘陵の西斜面に位置し、青山道、鎌倉道に面して中世交通の要衝。渋谷氏の始祖は紀伊徳川家の家臣となり続きました。また、この辺に流れる川の水が赤さび色の“シブ色”だったことから「渋谷」になった説。金渋つまり砂鉄のとれる谷川という意味の地名をとり「渋谷」になったなどの諸説があります。
- ・ 恵比寿 渋谷区恵比寿は江戸時代、下渋谷村・三田村と呼ばれており、渋谷川と三田用水に挟まれる農村で大名の下屋敷が点在していました。恵比寿の名前は恵比寿信仰にちなんで命名されたエビスビールを製造するサッポロビール恵比寿工場があったことに由来します。明治20年（1887年）に設立された日本麦酒醸造株式会社（現・サッポロビール）のために開設した駅をビールの商標から「恵比寿」と名付けられました。恵比寿駅はもともとビール発送用の貨物駅でした。昭和3年（1928年）に地名も恵比寿に変更。ちなみに商品名のエビスと恵比寿ガーデンプレイスのローマ字表記は「YEBISU」ですが、地名と駅名の表記は「EBISU」です。
- ・ 目黒 当地に所在する目黒不動の称号をそのまま村名とした説。毛色または目色が黒い馬の名前から起ったという説。馬の牧場の周囲のあぜ道を意味する馬畔（めくろ）の意味という説。目黒牧によるという牧場の説などがありますが、いずれも定かではありません。駅の建設予定地は目黒川沿いでしたが、農民の強い反対にあいやむなく今の場所に。そのため目黒駅の所在地は品川区です。
- ・ 五反田 元は江戸時代に「五たんだ」として出現した地名です。このあたりは目黒川の谷が東西に流れ、谷周辺の水田の一区画が丁度5反（約5000平）だったためにつけられたというのが有力な説です。一般に知られるようになったのは明治44年（1911年）。星製薬工場が建設され山手線の五反田駅が開業したことがきっかけでした。
- ・ 大崎 大崎という地名が使われたのは江戸時代からといわれています。地名は秩父から続く尾崎であることに由来し、これが転訛して大崎となった説と、過去に東京湾に大きな崎（岬）が突き出していたという説が知られていますが、駅名は荏原郡大崎村がルーツだといわれます。
- ・ 品川 1872年（明治5年）に開業した東京で一番古い駅。目黒川の古名が品川

と呼ばれていたとする説。また、領主品川氏にちなむという説。さらに鎧の威（おどし）に用いる品皮（しながわ）を染めだした地という説など諸説ありますが、目黒川をかって品川と称した説が有力です。

- ・田町 JR田町駅三田口周辺一帯に広がっていたかつての町名が由来。江戸時代に田畑から町屋へ開発がすすんだことからつけられました。田んぼにある町屋で「田町」という説です。
- ・浜松町 江戸時代の初めは、増上寺代官の奥住久右衛門が名主役を勤めていたため「久右衛門町」と称していたが、元禄9年（1699年）に、遠江国浜松出身の権兵衛が名主となったことから「浜松町」と呼ばれるようになり、その地名から駅名がつけられました。
- ・新橋 江戸湾の埋立てできた汐留川に日本橋通りの南端に新しく架けた橋の名前です。数寄屋御門橋を芝口門といていたので、こちらの橋は「芝口新橋」といったが、当時の江戸っ子が短く「新橋」と呼んだのが定着しました。
- ・有楽町 慶長年間（1596～1615）に織田信長の実弟である茶人織田長益（有楽斎）の邸宅跡地で「有楽原」と呼ばれ、後に「有楽町」になったという説が一般的です。

「城を歩く会」20周年おめでとうございます。

私は松田光敏さんの紹介で、平成23年（2011）2月の例会（小田原城見学）で入会し、まだ4年未満の若輩ですが、自慢は入会以来1回も欠席していないことで出席率100%です。この会のよいところはスケジュールが3～6ヵ月先までわかることで、例会を優先に自分のスケジュールが組めることです。

出席率100%がいつまで続くかわかりませんが、目標は大きくこの会の25周年におき記録更新を目指して頑張ります。

最後に会長はじめ講師の先生方ならびに世話役の方の会運営についてのご努力、ご苦勞に対して感謝とお礼を申し上げます。さらに会員の皆さまには今後とも長くお付き合いのほどよろしくお願い申し上げます。

「城を歩く会」創立 20 周年記念に寄せて

松永 卓生

「城を歩く会」の会員という、今の私のライフスタイルの中で一番カッコイイ分野であり地域の自治会仲間たちから大変羨望されています。

毎回、会長初め各運営委員の方々のご苦勞を賜り、その都度いただく立派な案内説明文書はアカデミックでしかも大変判り易く、その説明を聞きながら元気な会員の方々と未知な分野を歩くと、自然に生き甲斐を感じます。改めて会の皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。

私は本会に入る前は、お城と言えば天守閣や城壁のある大坂城、姫路城、熊本城などの観光ルートにある立派な美しい城しか頭にありませんでした。それが本会に入って 180 度ひっくり返り、今さらお城の壮大さを思い知らされました。そしてお城に関する新鮮な専門用語も少し学ぶことができました。例えば、次の用語です。大構え、惣構え、曲輪、本丸、二の丸、三の丸、土塁、虎口、馬出し、空堀、堀障子、堀切、大堀切、下堀切、堅堀切、石敷遺構、野面積みなど、これらの意味するところも勉強していきたいと考えています。

私は後期高齢ですが会員になって 7 年程度です。もっと早く会員になっていれば良かったと思います。

これからも毎月の本会の開催にはできるだけ参加して、これからの生活の中での生き甲斐としていきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いします。改めまして 20 周年記念おめでとうございます。

「城を歩く会」によせて

桜庭 昭夫

早いもので、私が「城を歩く会」に入って、間もなく丸4年が経とうとしています。

当初、驚くことばかりでした。

まず、会員の多さにです。特に女性が多く、こんなにも大勢の方が城に興味を持っているのかとびっくりしました。

次に役員の方々の献身的な働きにです。いつも頭が下がる思いがしました。

そして私自身の無知にです。城について、あきれるほど何もしらなかったからです。

しかしなんといっても、いちばんの驚きは講師の先生方の城に寄せる愛情の深さにです。城への造詣の深さは言うまでもありませんが、もう城が好きで好きでたまらないという思いがお話をしている時の表情から伝わってきます。

いつも限られた時間の中で、恐らく話したいことの半分も言えないではないでしょうか。各先生の歯がゆさ、無念さが思われてなりません。

いつか例会の特別編を設け、各先生の最もこだわっている分野について思う存分お話していただけたらなあと思います。

会のますますの発展を心から願っています。

天守がなくともお城

友野 彰二

田辺ご夫妻に誘われて入会したのは3年前の11月、紅葉真っ只中の鎌倉を歩いた。鎌倉城を守る7つの切り通しの一つである亀ヶ谷坂、亀もひっくり返るといふ急坂を歩いたのだが、どこが城なのかよくわからなかった。

横浜の磯子に住んでいた頃、鎌倉へはよく足を運び、鶴岡八幡宮、大銀杏、紫陽花、牡丹などを楽しんだりしていたが、お城の舞台と意識したことはなかった。40名を超える参加者があり、私より年配と思われる方々の元気ぶりにびっくりしたことを覚えています。

平成24年4月の一泊旅行「信越の城巡り」に参加した。松本城の天守、高田城の三重櫓、上田城の西櫓などイメージ通りの城も見学できたが、感激したのは上杉謙信が居城とした春日山城である。典型的な山城で、城の姿はないが本丸、二の丸、三の丸や屋敷跡、大井戸、土塁、空堀など戦国時代の遺構がよく残っており、残雪のある山道を自分の足で歩いてみて要害堅固な名城であることを実感した。

関東管領として「義」に生きた上杉謙信の生涯と重ね合わせると、遠い戦国時代が偲ばれ、まさに城は歴史だと思う。年号が覚えられなくて歴史を苦手としてきたが、今は城を歩きながら遠い昔を想うことを楽しんでいる。

平成25年2月、確か練馬城のこと。
豊島園の入り口から、本丸があったとされるウォータースライダー付近を覗いた後、向山庭園を回り込むように豊島園南側の住宅地を歩いたが、その住宅地の地形を見ながら、案内役の先生は空堀や土塁の位置を指し示したのです。

私には単にうねった地形にしか見えないのだが、先生には今は住宅地になっている外郭の東西に天然の浸食谷を利用した空堀があるように見えるらしい。まるで鎌倉時代にタイムスリップしているかのようである。

私は就職して約30年間、兵庫県加古川市に住まい、3人の子供たちは播州弁で育ちましたが、わが家にとって城といえば姫路城、車で30分の距離にあり、わが家の庭のような存在でした。

当時、竹田城は話題に上ることもなく存在を全く知りませんでした。いつのまにか天空の城として話題を集めるようになり、近々、これらの城を巡る一泊旅行が企画されていますが、とても楽しみにしております。元気の続く限り、城を歩きたいと思っています。

城、歌舞伎、鎌倉・・・

清水 守

昨年5月の「行徳の会」から（昨秋からは妻も）参加させていただいています清水です。

近世以降の城郭、その天守の華麗な姿、それを取り巻く櫓、城門、堀、石垣の美しさに惹かれ、全国の城郭を訪ねてきました。国宝、重要指定の12天守のうち未踏破は宇和島城、丸岡城となりました。

そんな私にとって、中世の城跡はなじみがなく、魅力を感じませんでした。しかし、今年3月の例会で訪ねた埼玉県比企郡の中世の山城、館跡、丁寧な説明をうかがいながら、空堀の雄大さ、廓や虎口の巧妙な配置などに驚くと同時に、よくぞ今日まで「兵どもが夢のあと」が保存されたものだ、と感心し中世の城跡の魅力に開眼させられました。

職場が鎌倉であった私にとって、「比企」といえば、「比企一族の乱」「比企ヶ谷（ひきがやつ）」を連想します。これまでに埼玉県に「比企」という地名があることを知りませんでした。この例会に参加して初めて比企氏が武蔵国の比企を拠点とする豪族で草創期の鎌倉幕府の有力御家人であったと合点しました。比企ヶ谷一帯は、今は鎌倉駅東口に近い閑静な住宅地ですが、嘆かわしいことに、住居表示によって「大町一丁目」となり、行政上の地名としては残っていません。頼家の妻の実家で北条氏の陰謀により滅ぼされた比企一族の菩提を弔った寺、妙本寺、その境内に「比企ヶ谷幼稚園」があり、かろうじて歴史的地名がうかがわれます。なお、この幼稚園園舎は夢殿のような風情のある古い建物です。

比企郡の三つの城跡の由来の解説の中で「扇ヶ谷上杉氏」「山の内上杉氏」の抗争がたびたび話題になっていました。「扇ヶ谷」も「山の内」も幸い鎌倉の行政上の地名として残っていて、位置的にも隣り合っています。両地をつなぐ山道が「鎌倉七切通し」の一つ「亀ヶ谷坂切通し」で、散策にも適した、静かで趣深い坂道です。

長年、歌舞伎を観つづけてきた私にとって、「扇ヶ谷（おおぎがやつ）」といえば、浄瑠璃・歌舞伎狂言「仮名手本忠臣蔵」四段目 扇ヶ谷塩治判官（えんやはんがん）館 切腹の場をおもいだします。もちろん、幕府の文芸、言論統制を免れんと史実をカモフラージュするため「太平記の世界」、鎌倉が舞台となっているので館の跡など探してもありません。判官切腹の後、館表門 城門明け渡し場で、独りになった大星由良之助が万感こみあげ後ろを振り返れば、館の表門が涙にかすみ、その場にひれ伏します。このとき、大道具の表門が徐々に後ろに引いてゆく、舞台装置も芝居をするという歌舞伎らしい演出がみられます。

城の解説の中で扇ヶ谷定正の名前がでてきましたが、彼も歌舞伎狂言「南総里見八犬伝」に登場します。白塗りの大悪人、いわゆる「国崩し」の役柄で、大詰めで山台に乗り、大見得を切ります。なぜ悪人キャラクターに設定されたのでしょうか。執事である太田道灌を暗殺したことがひびいているのでしょうか。両上杉氏のながく続いた抗争も、扇ヶ谷氏が定正の死後小田原北条氏に滅ぼされることで終わり、山内氏も弱体化し、家臣筋の長尾謙信に上杉家を継承され、何度も存亡の危機を乗り越え、江戸時代を経て、明治を迎え、伯爵家として存続したことは感慨深いものがあります。

また、この狂言の中に「行徳入江の場」があります。前の場「古我館芳流閣の場」で格闘した犬塚信乃、犬飼現八が芳流閣から転落し、流され、行徳入江にたどり着き、八犬士であることを知る場面です。

昨年5月の例会で行徳に赴いた際、保科さんの解説で行徳が塩の産地で、家康の関東入府のおり、最初に着手した土木事業が塩を運ぶため小名木川を開削したことだ、と教わりました。小名木川は江戸時代後半に埋め立てでできたのかな、という漠然とした理解をしていたので眼から鱗でした。行徳の町を歩きながら、この地の塩焚きの家に生まれ、親戚をたより上京、七代目松本幸四郎に奉公し、のちに御曹司の十一代目市川団十郎と結ばれ、昨年急逝した十二代目団十郎の母となった十一代目団十郎夫人のことをしきりにおもいだしました。

その詳しい事情は、宮尾登美子著『きのね』（新潮文庫）をおよみください。

比企郡で訪れた最後の城、菅谷館、ここもよく往時の縄張りが保存されているのに感心しましたが、さらに印象的だったのが、ここに住んだという畠山重忠の銅像があることでした。彼は清廉潔白な人柄で武勇の誉れ高く、「坂東武者の鏡」とされた、と伝えられていますが、現代まで銅像が建てられるほど地元でもいまだに慕われているのにはおどろきました。

歌舞伎に登場する重忠で有名なのは、「壇浦兜軍記」阿古屋の琴責めの段と「ひらかな盛衰記」でしょう。

恋人、景清の行方を遊君阿古屋に尋問する重忠、阿古屋に琴、三味線、胡弓を弾かせ、その音色から、嘘はついていないと温情のあるさばきをする裁判官役として描かれています。主役は阿古屋ですが、白塗りの二枚目向きの役で、仁左衛門などがはまり役です。阿古屋は三つの楽器が弾きこなせなくてはならないので、めったに上演されない。幸い、私は歌右衛門と玉三郎の舞台（戦後はこの二人しか演じることができない）をみえています。

「ひらかな盛衰記」三段目、逆櫓（さかろ）の場で敵将 樋口次郎兼光（木曾義仲四天王の一人）を情けで説得し捕える役です。これも幕切れに出てきていいところをとる、

もうけ役です。伝説どおりの人柄が浄瑠璃、歌舞伎にも反映しているようです。

鎌倉のメインストリート若宮大路の海岸まであと 200 メートルほどにある一の鳥居（江戸時代初期 石造 国指定重文）の足元の歩道に約3メートルの立派な宝きょう印塔があります。六郎塚と呼ばれ、畠山重忠の息子 六郎重保の墓といわれています。鎌倉で「牧の方」事件の争いのさ中、咳をしてうつむいたところを打ち取られたと言われています。それがどういうわけか、咳鎮めの神様として信仰され、「ろくろうさま」と地元で大事にされています。

重保が登場する狂言があります。新歌舞伎の名作、真山青果作「頼朝の死」、頼朝の不慮の死の真相をめぐる話です。恋人である侍女の寝所に忍ぶ頼朝を夜勤番の重保が曲者と思い、斬る、出家を望む重保、理由を明かせと迫る源 頼家、青果一流の迫力あるセリフの応酬、素晴らしい芝居です。青果の「お浜御殿」など「元禄忠臣蔵」シリーズや「慶喜命乞い」「將軍江戸を去る」などの「江戸城総攻め」シリーズはよく上演されますが、この芝居は最近めったに上演されないようです。45 年前、私は、2013 年急逝した十二代目団十郎の海老蔵襲名公演の中でこの芝居をみることができました。頼家は三代目市川寿海（市川雷蔵の父）、重保は五代目中村富十郎、政子が二代目中村雁治郎という豪華配役で、その舞台の迫力をいまだ忘れることができません。10 年か 20 年に一度ぐらいの上演なので皆様お見逃しなく。

今秋訪れる予定の大坂城、大坂城落城を題材にした狂言があります。新歌舞伎の古典、坪内逍遙作「杵手鳥狐城落月」（ほととぎすこじょうのらくげつ）です。これも歌右衛門の十八番で、上演回数は少ないのですが、幸い二度観ています。クライマックスは繻蔵（ほしいぐら）の場、発狂した淀君の姿、秀頼の嘆き、滅びの美しさが余すことなく描かれています。

浄瑠璃、歌舞伎狂言では「近江源氏先陣館」八段目（盛綱陣屋の場）と「鎌倉三大記」です。信長・秀吉以降の歴史と江戸期現代を舞台にかけるのは幕府の御法度であるため、鎌倉時代初期の近江、坂本を舞台に、真田兄弟、兄の信之は佐々木盛綱、弟の幸村（信繁）は佐々木高綱、家康は北条時政、千姫は時姫と置き換えられています。兄弟が敵味方に分かれ争う中、稀代の知将 高綱は討ち死にと見せかけ、兄はそれを見破るが、切腹して父高綱の死を証明しようとする甥（高綱の息子 小四郎）の健気さにうたれ、偽首を見逃し、時政を欺くのですが・・・複雑で技巧的な作品ですが、子役の活躍もあり、肉親の情に訴えかけるところがあり、涙なしには観られません。

私が訪れた城

1. 函館 五稜郭 復元された函館奉行所をみることができました。
2. 青森県弘前城 春と秋に訪れました。往時の大規模な縄張りがほぼ完全に残っているのが素晴らしい。これから 10 年ほど大改修で天守も含め完全な姿が見えなくなるそうです。

3. 会津若松城 昨秋の例会は参加できませんでしたが二度訪れています。復元された藩校「日新館」が印象的でした。
4. 埼玉県忍城 「のぼうの城」です。
5. 埼玉県川越城 40年ぶりに再訪しました。
6. 江戸城 弘前城もそうですが東国の城は石垣でなく土塁が魅力ですね。特に三宅坂からの景観が好きです。
7. 小田原城。
8. 静岡県駿府城 復元させた東大手門と櫓が見事。
9. 静岡県掛川城 幕末期の建造ではありますが、本丸御殿が貴重。
10. 浜松城
11. 長野県松本城
12. 長野県上田城 学生時代、城内の市民会館で演奏会に出たことがあります。
13. 名古屋城 戦災で失われた城郭は岡山城、広島城はじめいくつもありますが、名古屋城ほどその焼失を惜しまれるものはありません。天守造営最盛期の最大の天守、層塔式天守としては均整がとれた姿で見事な本丸御殿まで備えていました。天守に匹敵する大きさの御深井櫓や探幽の描いた本丸御殿襖絵などが焼失を脱がれたのがせめてもの慰めです。三度目に訪問した際、復元工事中的本丸御殿内部をヘルメットしながら見学できました。
14. 犬山城
15. 富山県高岡城
16. 金沢城 二度訪れていますが、復元された菱櫓と五十間櫓の姿はまだ観ていません。
17. 滋賀県彦根城 38年前訪れた際、中堀の中の庭園「玄宮園」内の屋敷「八景亭」に泊まりました。多分、今は宿泊できないとおもいます。
18. 滋賀県長浜城
19. 二条城 何度も訪れていますが、二の丸御殿が素晴らしい。
20. 和歌山城
21. 姫路城 何度も訪れましたが、今秋大修理後の姿を観るのが楽しみです。
22. 大阪城 何度も訪れているが、平成8年の「平成大改修後」の姿を観ることができた。中井家の「本丸図」があるので、是非「本丸御殿」を復元してほしい。
23. 岡山城 二度おとずれました。天守の姿が好きです。
24. 備前松山城 まさに「天空の城」です。
25. 広島県福山城 復興天守は新幹線ホームからも見えますが、是非降りて伏見櫓と筋鉄御門（すじがねごもん）も観てください。
26. 広島城 復元された太鼓櫓などを観れました。
27. 松江城 この城がなぜ国宝指定されないのか、理解できない。望楼型の天守の古さ、姿の美しさ、残っているのが奇跡とおもう。
28. 丸亀城 石垣の迫力に感心。
29. 徳島城 復元された鷲の門を観る。
30. 高知城 この城もなぜ国宝指定されないのか不思議です。再建とはいえかなり

古い望楼型の美しい天守と貴重な本丸御殿、追手門、詰門、黒鉄門、多門櫓などの建築群が素晴らしい景観です。

- 3 1. 伊予松山城 ロケーション、縄張りも素晴らしいお城で、天守も連立式で貴重ですが、その姿が美しくないのがたまにきず。要するに不格好なのです。江戸後期・幕末の建築、五重塔などにも共通していますが、上層への逶減がほとんどなく、軒出も浅く、硬直化した造形で残念です。松山市の関係者がいらっしゃいましたらごめんなさい。
- 3 2. 今治城 海水を導いた堀が雄大でした。
- 3 3. 福岡城
- 3 4. 佐賀城 鯨の門のほか復元された広大な本丸御殿を観ました。さすが大藩、鍋島家の城、よく残された雄大なお堀、巨大な天守台に感心。
- 3 5. 熊本城 二度訪れましたが、宇土櫓と石垣が素晴らしい。宇土櫓はその古さ、天守に匹敵する構造、美しさから国宝に指定されるべきです。復元された本丸御殿と飯田丸五階櫓はまだ観ていません。

信長の安土城に始まり、それから50年ほどの、驚くほどの短期間に最盛期を迎えた近世の城郭、もはや中世の城のように単なる軍事拠点ではなく、その地方の統治、行政、文化芸術の象徴にまで昇華したその姿がわれわれの世代まで引き継がれたのはまさに奇跡であり、日本が世界に誇る宝です。

近年各地で、天守、櫓などが残された絵図や古写真をもとに伝統工法で往時の姿を忠実に復元されているのは喜ばしいことで、町おこしにもいい影響があるはずです。今後これらの成果を訪ね歩きたいとおもっています。

また、八王子城、鉢形城、金山城などの戦国・中世の城跡も訪ねていきたいと思えます。講師の方の丁寧な説明を伺いながら名城を巡る贅沢さ、会員である有難さを楽しみ感じています。これからもよろしく願いいたします。

城の四季

坂内 八重子

城を歩く会 20周年おめでとうございます。
皆様の優しさにひかれてお伴をさせていただいています。

折々の心のスケッチを句にしてみました。

(上田城にて)

天守なき 古城の桜 大手門

(鎌倉にて)

草いきれ もののふ越えし 石切り場

(二本松霞ヶ城にて)

山城の 石垣険し 菊人形

(石神井城にて)

誰が為の 武蔵野土塁 冬木立

(11月の江戸城にて)

石垣の くさびのままに 紅葉映ゆ

小春日に 石垣語る 城めぐり

枯れすすき 石垣たかく 陰に入る

枯れ芝生 人の集まる お昼時

それぞれに 冬日の当たる 野積石

本丸は 冬の光を 集めたり

城を歩く会のますますのご発展を祈念します。

「城を歩く会」創立 20 周年に寄せて

松本 竹代

私が「城を歩く会」に参加させていただき 1 年になりました。

メンバーの梅木さん、松田さんにお誘いを受けて 2013 年の 9 月から参加させていただいたのですが、漠然と城に興味があったものの小説で城が出てきて読むくらいの知識でしかなく、この会に参加させていただき現存する形ある城だけでなく、史蹟や城址などに多くの歴史の背景があることを知り、新たな発見とともに勉強させていただいています。毎回の参加を楽しみに 1 年が過ぎました。

また、驚きましたのは先生方が用意してくださる資料の多さと歩数計のカウントでした。先生方は資料作成から事前の下見、こんなに充実した素晴らしい会は他にはないと思ひ、本当に感謝いたしております。

2013 年 9 月は「安宅丸」乗船や台場、11 月の名越切り通しや鎌倉アカデミア、12 月の皇居参観、2014 年 2 月勉強会の大坂城、3 月の武蔵野比企地方、4 月の川越城と小江戸巡り、6 月の小島陣屋と楽山園や世界遺産に先駆けて富岡製糸場見学、9 月六義園など一つひとつの貴重な資料を見ながら思い出しています。

10 月の竹田城は残念ながら行けませんでしたので、写真を眺めては想像を重ね、これからは皆様とご一緒に楽しい会にしていきたいと思っております。

20 周年おめでとうございました。

編集のあとで ふたつの力

「十年ひと昔」とはいいますが、「二十年ふた昔」という言葉はありません。世の移り変わりの速さを表現するには、10年をひと区切りとすれば事が足りる。20年までは必要ないということでありましょう。10年も経てば、時世は変わるのだと。

「城を歩く会」が活動をはじめてから「ふた昔」が経過しました。社会人の同好者の集まりが、ここまで続くのはきわめて稀有なことといわれています。この間の当会と会員さんたちの記憶を記録して遺そうと、「20周年記念誌」を編集して発刊することとしました。

こうした記念誌作成の主目的は、本誌に寄せられた回顧文や思い出談を読ませていただくことにより、十分に果たされているように感じます。会員さん方は、それぞれのすばらしい知性と感性によって、経験と知識を豊かに蓄積しておられます。

加えて、編集の作業を行っている間に知らされたことがあります。会員の皆さまからいただいた、自発的なご協力の心の篤さです。

貴重な文章を寄稿して下さった皆さま、原資料探しのため奔走して下さった諸姉、ご自宅のコピー機を駆使してカラー写真ページを制作していただいた委員さんたち、手間のかかる製本の事前作業にかかわって下さった会員さん方、終始、アドバイスや励ましの言葉をかけて下さった方々。こうした会員さんたちがおられなかったら、本誌の編集工程は大幅に遅延していたことでしょう。なかでも、梅木宗弘さんには、原稿の入力作業において全面的なご尽力をいただきました。誌上で厚くお礼申し上げます。

当会はこれから21年目に向かつての第一歩を踏み出します。本誌編集に際して示された、会員皆さま方の豊潤な知の力と、力強い結束の力、このふたつの力が、今後の「城を歩く会」を動かすエネルギーとなることはまちがいないように感じるのです。

2015年1月

「20周年記念誌」編集委員会

「城を歩く会」20周年記念誌

『訪ね、見て、知る』

2015年1月17日発行

2015年4月1日第2刷

企画・編集 20周年記念誌編集委員会

発行「城を歩く会」(限定版)

DVDBY 塚原 茂

訪ね、見て、知る

「城を歩く会」20周年記念誌



1994~2015

